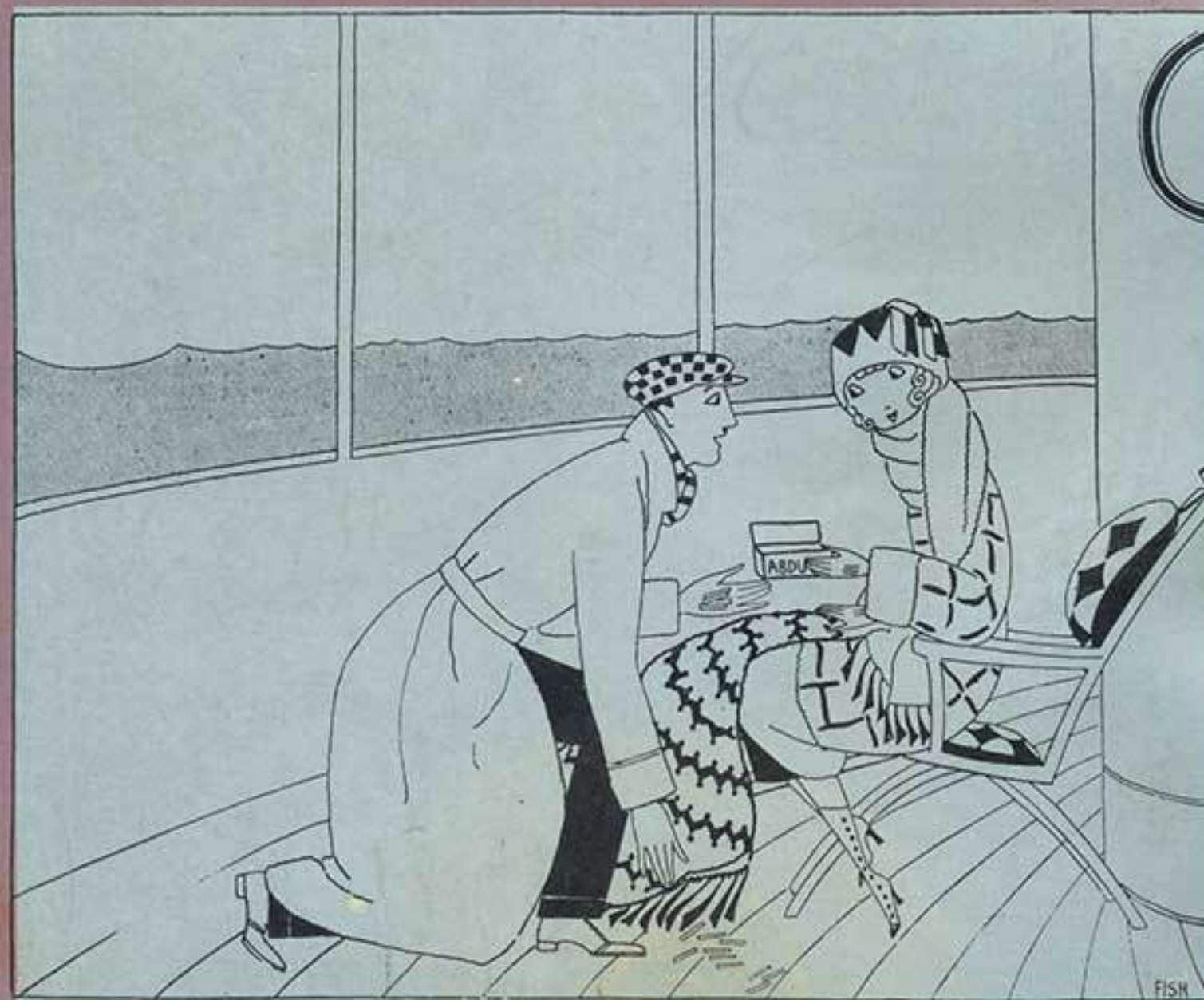


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

12月号



1963・12

昭和三十一年十一月二十日印刷 昭和三十一年十一月一日発行 頁数(第十七卷第十二号毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日国鉄大局特別取扱承認 第一二二二号

奇譚クラス

12月号

定価 二五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



今月の新版

代理部分譲品案内

新人、遠藤百合子の巻

今回、特に遠藤百合子さんの御希望により次の通り、分譲品として発表しました。グラビアにない迫真的で身近な彼女の数々のポーズを手にとってご覧下さい。

全裸緊縛姿態開陳

略号 (ゆり)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

汚れを知らぬ美しい百合子の全裸の姿態が乳房もゆがむ、きびしい細目に、くねくねとしなをつくって、曲りくねる。グラビアに出せなかった百合子さんの良さを、マニヤの方だけに見て頂きたいと願うばかり。

鼻をいたぶる

略号 (ゆは)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

この写真は、いじめられる鼻を中心として余りにも刻明に、はつきりと顔が出てしまうので、口絵には出さないでという百合子さんの願いで、特に分譲品としました。

白晒六尺禪

略号 (しは)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

真白い六尺禪を語るだしに、きりりと、いなせに締めた姿。可愛いお顔、くびれたウエスト、正面の六尺禪姿、恥らいに、身をくねらし、両手を挙げたポーズの数々。

白晒六尺禪

略号 (しろ)

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

双丘の間にぐっと喰い込んだ晒木綿、禪覺にとっては、まことに魅惑的な六尺禪のバックスタイルを、ぐいとはかりお尻を持ち上げて、たっぷり見て頂けるフォト。

黒フンドシの女

略号 (くま)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

前袋も前を僅かに覆うばかりのきりぎりきにきゅっと締め上げた黒フンドシの魅力。女のフンドシは黒に限るといわれる方へのプレゼント。百合子の美しいポーズでどうぞ。

黒フンドシの女

略号 (くろ)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

黒シユスのフンドシが尻の割目に捻じるように喰込んで、むっくりと二つの双丘が右に左に盛り上がり、くねる。肌が白いだけに細い黒フンドシの間に、くねり出す奇妙なコントラストが、黒フンマニヤの目を奪う。

相撲禪締め込む

略号 (すい)

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

雲霧の白の相撲フンドシを、正式に締め込

浣腸をする女

略号 (ゆか)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

百合子さんに浣腸器を持たしたら、彼女はぱっと顔を真赤に染めて、「あら、こんな大きなので浣腸しますの」と、あとは声もなかった。若い女の人の口から、直接、浣腸とか猿ぐつわという言葉を聞くと、妙になまめかしい。結局、彼女は初めから終りまで、浣腸については恥しがり通しだった。

バンドを脱ぐ女

略号 (ゆお)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

月経帯の替ゴムの生ゴムのむちむちした感触を楽しみながら、ゴムもあらわにバンドを脱いでゆく百合子さん。その中で、ゴムのよく見えたのはばかり三葉選びました。

月経帯のまま縛り

略号 (ゆす)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

後手の高小手に縛られて、今は両手の自由のきかない百合子さんは、黒の月経帯をはかされて、蒲団の上にかかるがされる。起き上ろうとして身体を起せば、思わず両足が開いて、月経帯がすっかり見えてしまう。

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選 大手札印画紙 (9×13cm) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E1	全裸の悦虚プレイ (愛川)
E2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E5	豊胸と豊胸しぼり (愛川)
E6	捨身の後手観念像 (大塚)
E7	足から眺めた裸身 (水本)
E8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E9	ハリツケられた娘 (大塚)
E10	強烈後手高小手 (愛川)
E11	責め抜かれた疲勞 (梨花)
E12	逆エビにもだえる (大塚)
E13	拘禁された美因女 (大塚)
E14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E15	海老責に泣く足首 (大塚)
E16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E20	ベッドにもだえる (関谷)
E21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E22	放置された海老責 (東浦)
E23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E24	ローソクで責める (大塚)
E25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E28	嚴重な高小手縛 (東浦)
E29	女体の全部を晒す (愛川)
E30	激しいムチ打の果 (関谷)
E31	若肌も縛にくびれ (東浦)
E32	投げ出した脚線美 (絹川)
E33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E34	セーラー服の哀歎 (梨花)
E35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E36	仰向けの囚人の女 (梨花)
E37	制服の女学生縛り (梨花)
E38	悦虚にむせぶ若妻 (関谷)

E39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E40	乳房に加える金具 (大塚)
E41	鼻責めにあえる顔 (大塚)
E42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E44	激しいエビ責苦悶 (大塚)
E45	敷布の上のびて (絹川)
E46	鼻いじめのアップ (梨花)
E47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E49	椅子に晒された女 (大塚)
E50	膝そうじをされる (大塚)
E51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E52	火のついた煙草責 (四方)
E53	踏みつけられた胸 (梨花)
E54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E55	手足猪り吊りの美態 (絹川)
E56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E57	締めた観念全裸像 (水本)
E58	縄にもだえぬ姿 (絹川)
E59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E60	女奴隷美しく悶 (絹川)
E61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E63	亀甲型の雁字揃目 (大塚)
E64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E65	野外的後手宙吊り (梨花)
E66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E67	室内の後手宙吊り (梨花)
E68	雨装束の悦虚姿態 (梨花)
E69	乳房いじめ路つけ (大塚)

E70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E71	乳首ブライヤ挟み (竹本)
E72	野外的逆さ吊り責 (梨花)
E73	梯子責にあう美女 (梨花)
E74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E75	娘十六縛り加減 (花坂)
E76	踏みにじられた顔 (大塚)
E77	逆エビに反る足先 (大塚)
E78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E80	豊胸を誇る正面像 (大塚)
E81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E82	むしられる下着 (大塚)
E83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E89	令嬢後手高小手 (絹川)
E90	胸部乳房強調緊縛 (東浦)
E91	責衣にくるまれて (東浦)
E92	全裸逆エビ責め (水本)
E93	ローソク乳首責め (梨花)
E94	全裸後手縛り悶晒 (関谷)
E95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E99	豆しばりの猿轡 (絹川)
E100	強烈縛り脛いじめ (東浦)

浣腸責絵画

女体浣腸図絵

原画原寸大複写

一、女学生

略号「かき1」

虐。セーラー服の可憐な少女、嗜すためだといつて、太いガラス製。浣腸器で無理矢理に浣腸される。少女は、今や治療という域を超えて、激しい浣腸責めを加えられることになるのだ。

二、看護婦

略号「かき2」

美しい見習看護婦が若き医師
の実験台となつて、部屋の柱に
で浣腸を施される。抱えさせられ、
両手を縛られて、左足は挙げて壁に
右足は柱に、真白く可愛いヒツチ
を晒したまま、強烈な浣腸液を
ガラス製浣腸器によつて、次々と
注入されるのである。

三、ヒマシ油

略号「かき3」

女が飲み込んだ。今は最後の手段だと
 数度にわたる浣腸によつて来
 女が飲んだ。今は最後の手段だと
 数度にわたる浣腸によつて来

B4判
各一枚
二〇〇円

口としたヒマシ油を浣腸器の先
へとりつけたゴムの管によつて
注ぎ込む。嘔吐を催しそうにな
る油剤は、彼女の意志に反して
腹の中へ流れ込んでゆく。

四、空氣ポンプ

略号「かき4」

清純な乙女が捕われの身とな
 中、空気がポンプから空気を強
 注、入されようとしてゐる。自
 車のタイヤに空気を入るその
 ポンプは、強い力で乙女の腸内
 にシュツシュツと激しい勢で空
 気を送り込む。やがて腹部は張
 りきるばかりに膨満することだ
 ろう。

五、逆吊り浣腸

略号「かき5」

るこの入負人丁女りのれ、
八このを庄は度体のの、
等酷を行のの目。ポ両手
身いおのの、の。ーズと
の仕おう腹、の、高口足
の仕お部、の、さ管首
娘打ちとに恐、の、でを
に耐する。対の浣待受け釣
え口強して腸器入下り
よう開制的。耐。口を強
うけてな。え。開。制。な
す。注。て。け。な。注。て。

六、大の字浣腸

略号—かき6

を二
入本
し字
て通
ゆめ大
。の
。棒
。に
。に
。縛
。手
。上
。上
。げ
。げ
。ら
。ら
。足

七、強制洗腸

略号「かき7」

す、これからお前の腹の中を
うと、若き女は処置の黒いレ
ザーの上に坐らせ、両足首は
高々と天井から下った縄に釣ら

絵画
妊婦の媚態

四馬孝·画

略号「にん3」

A.5 判感光紙極鮮明焼付

一、診察を受ける妊婦

産み月近くなった若き妊婦、
全裸となって医師の前に立って
全身の精密な触診を受ける羞ら
いのポーズ。

二、シャワーを浴びる

大きな腹部、大きな臀部、全裸となって立ったまま、シヤワ

れた。イルリガートルから流れてくる薬液は、彼女の口から腹の中へ注ぎ込まれる。胃と腸に充滿した液体は、洗面器の中へ吐き出させられ、再び注入されるのである。

八、リスリン浣腸

略号「かき8」

三日間の排便を禁止させられ、た女の腹部は、ぷっくりと大きくふくらみ、革のベルトで胸から脚を縛られ、片足を宙に吊らせて、恥しいリズリン浣腸を拒む術とてない。溜りに溜った彼女の便は、激しい勢いで体外に噴出するものも、今や時間の問題となつた。ああ、その目ざましい光景よ。

―を浴びる臨月の妊婦の見事な
姿態。

三、入浴を終えて

久方ぶりの人浴にさっぱりしたグラマーの妊婦、大きなお腹をかかえて、全裸で脱衣場の鏡に美しい全身を写しているポーズ。

第一グラビヤ

荒縄と黒革フンドシ 大塚啓子
 高小手、強烈な小手しぼり 梨花悠紀子
 猿ぐつわ(三種) 絹川文代
 鉄の足枷とくさり 桜井葉子
 乳房自慢豊満しぼり 大塚啓子
 黒髪のひきまわし 大塚啓子
 女体切腹シリーズ(第二回) 大塚啓子

巻頭口絵

アイデア画 美女と刺青 栗原伸画
 責画 輸送函の女 四馬孝画
 責画 裸像彫刻製作 四馬孝画
 女相撲 お座敷娘相撲 雪崎京人提供
 マソ画 社長室の番号夫人 四馬孝画
 女体切腹 女忍者の切腹 四馬孝画
 緊縛画 齒列検査 四馬孝画

第二グラビヤ

全面無防備の女体 長野良子
 麗しの縛られポーズ 長野良子
 水滴責め 新井マリ子
 凝視と放心の点景 新井マリ子
 両足棒縛り 新井マリ子
 黒い触手 新井マリ子
 黒色バンド着用しぼり 遠藤百合子

懸賞「告白」入選作品

男のサドと女の愛

糸島 博 (34)

十三人の女死刑囚(絞首刑篇)

佐出 須登 (40)

マソヒスチック・ストーリー・シリーズ

屈従への過程

来島 世郎 (51)

「奇譚三十九夜」物語(第三十夜)

辻村 隆 (56)

〆浣腸体験〃 驅虫記

栗瀬 長 (73)

白百合抄(悦庵絵灯籠二)

万田 不仁 (76)

(女相撲研究) 女相撲史一考

岡平 吉夫 (83)

連載小説 花と蛇

(第七回) 団 鬼六 (88)

奇クサロン

〇被虐モデル志願者：塚本鉄三(97) 〇先月号の読後感と奇クへの所感：佐渡耕作(98) 〇「倒錯」したセックスと「正常」なるセックス：原勝彦(100) 〇継子いじめとお灸責め：昼行燈生(101) 〇女体各部のフェティッシュ：森中悦夫(101) 〇夫婦の「お仕置」プレイ：益原駿夫(102) 〇女の生首：前川成雄(103) 〇女斗美としての「女相撲」と「女子プロレス」：(104) 〇私の身体特徴：三木敬子(105) 〇アブノーマルな絵：森洋三(106) 〇私は赤ちゃんになりたい：白川晴夫(107) 〇最近の邦画の縛りシーン：東山映史(108) 〇浣腸見たり聴いたりプレイしたり：阿久津猛(109) 〇ブレインゲ・マソヒストの資格について：大倉安雄(110) 〇離婚した婦人が割腹：神崎太郎(111) 〇ガン作マニヤのノート：芳野眉美(112)

風俗回想記 〆劣氏の美人踊子責め〃

越原 秀美 (113)

分譲写真のアイデア 連続Mフォト

長門 弘 (122)

さもの・さもの物語

牧 高志 (124)

切腹体験記 切腹への憧憬

津田亜紀子 (132)

浣腸マニヤ 白昼夢

滝 次郎 (136)

サジスチック・ストーリー・シリーズ

初子のこと 大中 忠 (141)

マニヤ通信 願いの叶った百合子嬢へ

中田あきら (146)

ナルシスの発見

羽村 京子 (148)

続・風の町から(山辺まゆみの告白)

山辺まゆみ (156)

〔告白〕肥満体婦人に憧れる

戸井 隆三 (162)

ふたたび悦庵の旅へ 火の国

幌泉 里子 (164)

当代女武勇列伝

諸岡 堅雄 (172)

御子柴マリの場合



四馬 孝画

女体浣腸羞恥場面図絵決定版

第一集

A5判感光紙極鮮明焼付

四枚一組 五〇〇円 略号(かん1)

第二集

A5判感光紙極鮮明焼付

四枚一組 五〇〇円 略号(かん2)

〔第一集〕

四枚一組

一、保健室の女学生

体操の最中に急に腹痛を訴えた美しい女学生、早速保健室に伴われて、保健医の手によって三十Cの浣腸器でグリセリンの浣腸を施される。セーラー服のスカートをまくり上げてズロースをずらし、真白なお尻を医師の目の前に突き出して受ける浣腸……

二、オシメカバーと浣腸

保健婦のおばさんが手にした浣腸器から、情容赦もなく浣腸液を注入されたお嬢さんは、ぷっくりと可愛いお臍をのぞかせておむつを当てられ、ピンクの美しいカバーを穿かせられるのである。恥しげに、便意を耐えているお嬢さんの可憐な表情……

三、便秘の新妻と浣腸

もう一週間も用便に行かないという二十才の新妻、ベッドにうつ

伏せになって、信頼する夫から施されるグリセリン浣腸。真紅のパンツをずり下げて、肉づきの白い真白な臀部を突き出して、懸命に力んでいる美しい顔。夫は挿入便器を今まさに排泄しようとする新妻のお尻へ当てる……

四、セーラー服と若き医師

面長の大人びた顔立の美しい女学生の患者とたった二人きりで診察室の中で、エネマシリンジによる浣腸を実施する青年医師。消化不良による軽い腹痛であったが、彼はこの美貌の女学生に対しが、浣腸をやってみたくて仕方がない。シリンジの嘴管を注入するのであった。

〔第二集〕

四枚一組

一、お友達にされる浣腸

外出先から帰るなり、急に腹痛を訴えるBGのお友達を自分の

部屋に連れ込んで、パンティを膝頭まで脱がせて、二〇Cの浣腸器で浣腸する短大生。シユミーズを胸までまくりあげて、浣腸の羞恥と腹痛を戦う美しくもいたましい嗜虐的なポーズと表情……

二、秘結は美容の敵

舞台を終った美しい踊子、美容のため毎晩行う浣腸を、今日もアパートの近くの診療所の医師に施してもらったのであった。踊りできたえたムチムチとした肉づきのよいお尻をすっかりむき出しに、医師の前に差し出せば、太いエネマの嘴管が迫ってくる……

三、病院での浣腸

「さあ、お浣腸をしましょうね」

四馬孝画……素晴らしい女学生の浣腸シーン

女学生の浣腸

A5判感光紙極鮮明焼付
二枚一組 三〇〇円略号(せか2)

浣腸マニヤの正統派が多年の念願であった「女学生の浣腸」の絵面化が、ここに四馬孝氏の麗筆によって完成しました。

一、花恥しきセーラー服の乙女が、黒レザー張りの処置台の上に真白い尻を高々と掲げて仰臥させられ、医師と看護婦の二人から浣腸される光景。
二、診察室の一隅で学校帰りの

看護婦の制服がよく似合う若い看護婦が手に五〇Cの大きな浣腸器を持って近寄ってきた。腸器をいたことながら、自分が浣腸されていると思うと、羞恥と驚きと顔が真赤になった。それでも、カートを下し、ズロースをめぐつて、ベッドの黒革の上で白いお尻をむき出しにするのだった。

四、若妻エネマの浣腸

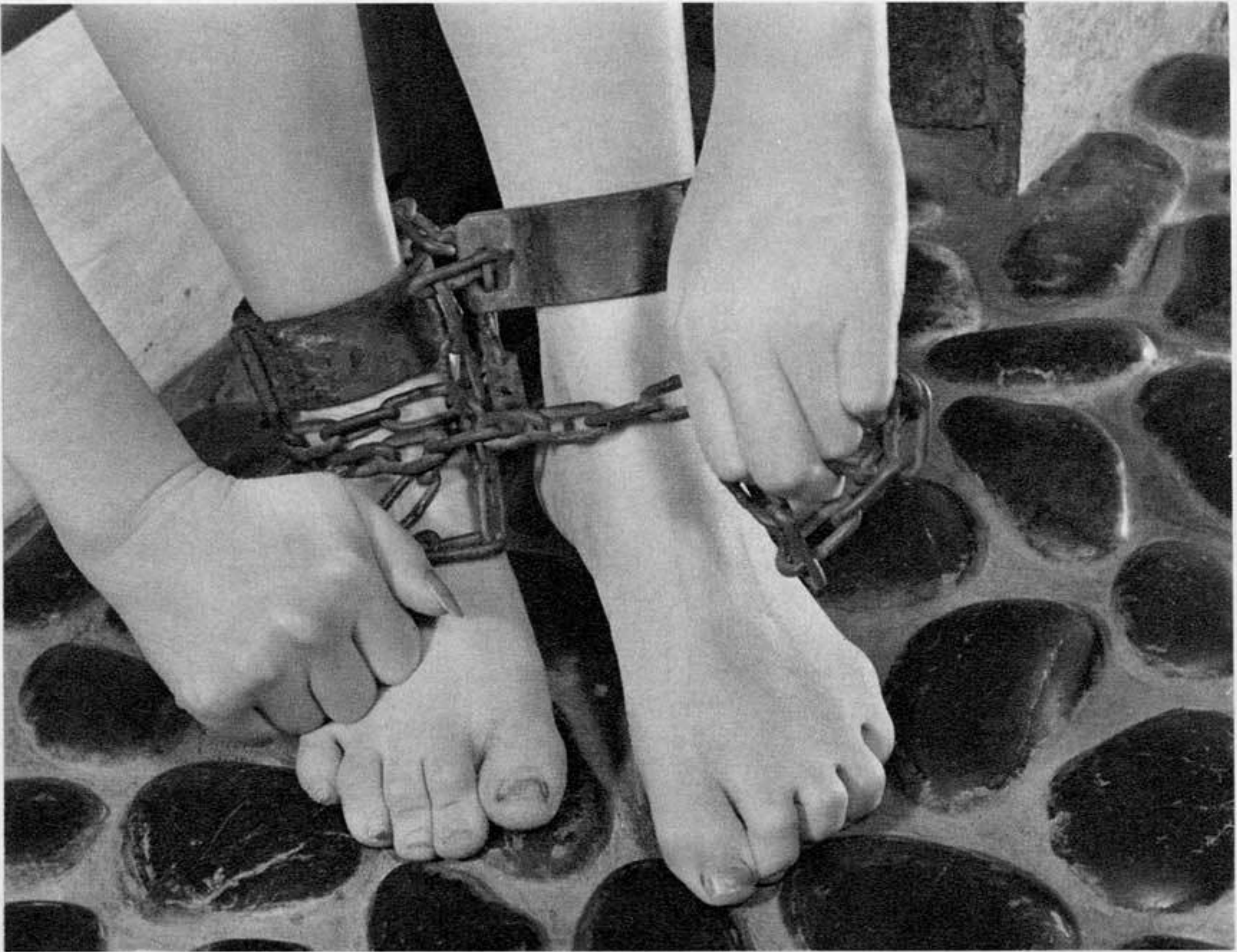
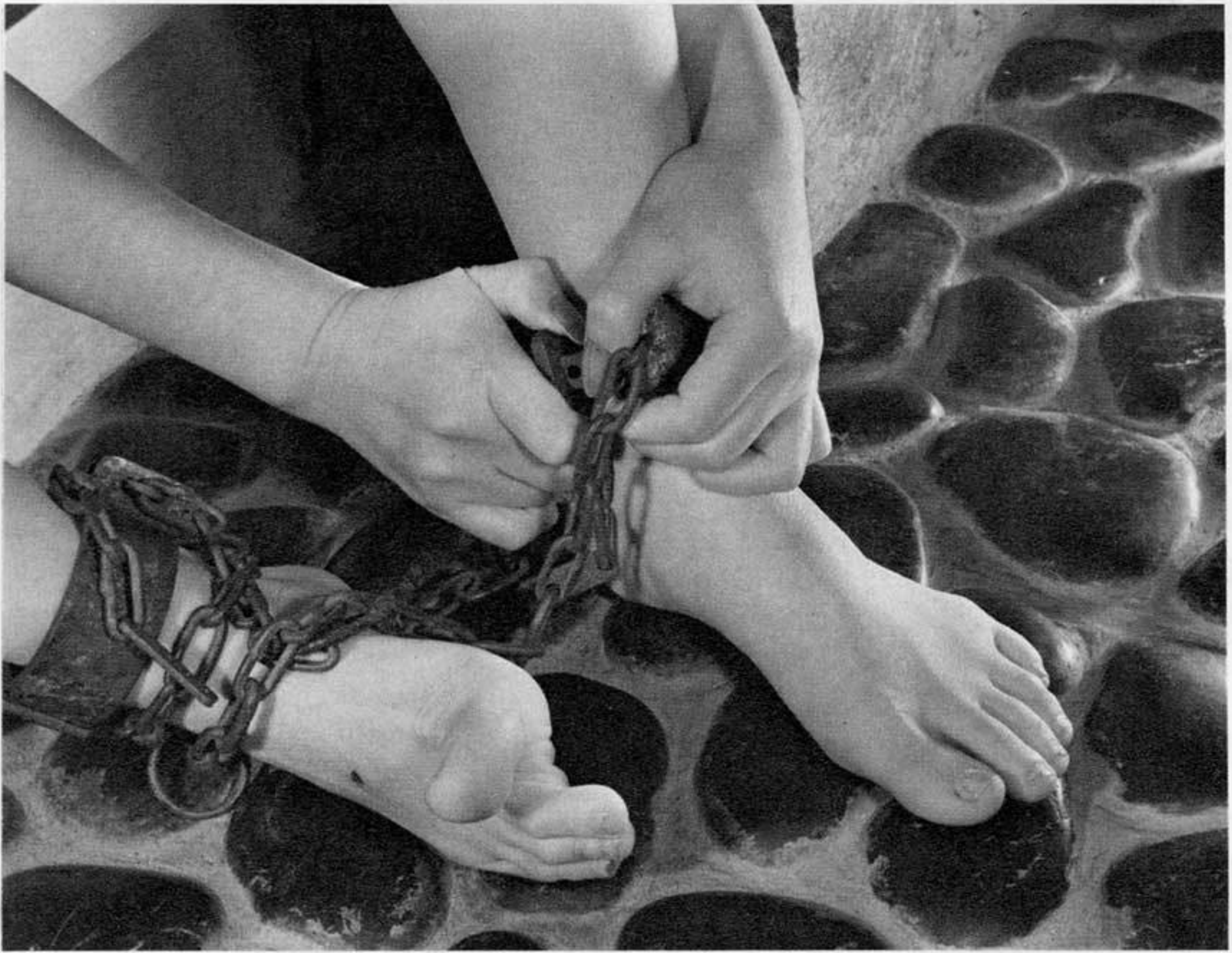
原因不明の発熱で寝ていた新妻が恥かしそうに腹痛を訴えるのでよく聞けば便秘というのだ。早速愛用のエネマシリンジを持ち出した。洗面器になみなみと妻の腹の中へ注入されてゆくのだ……













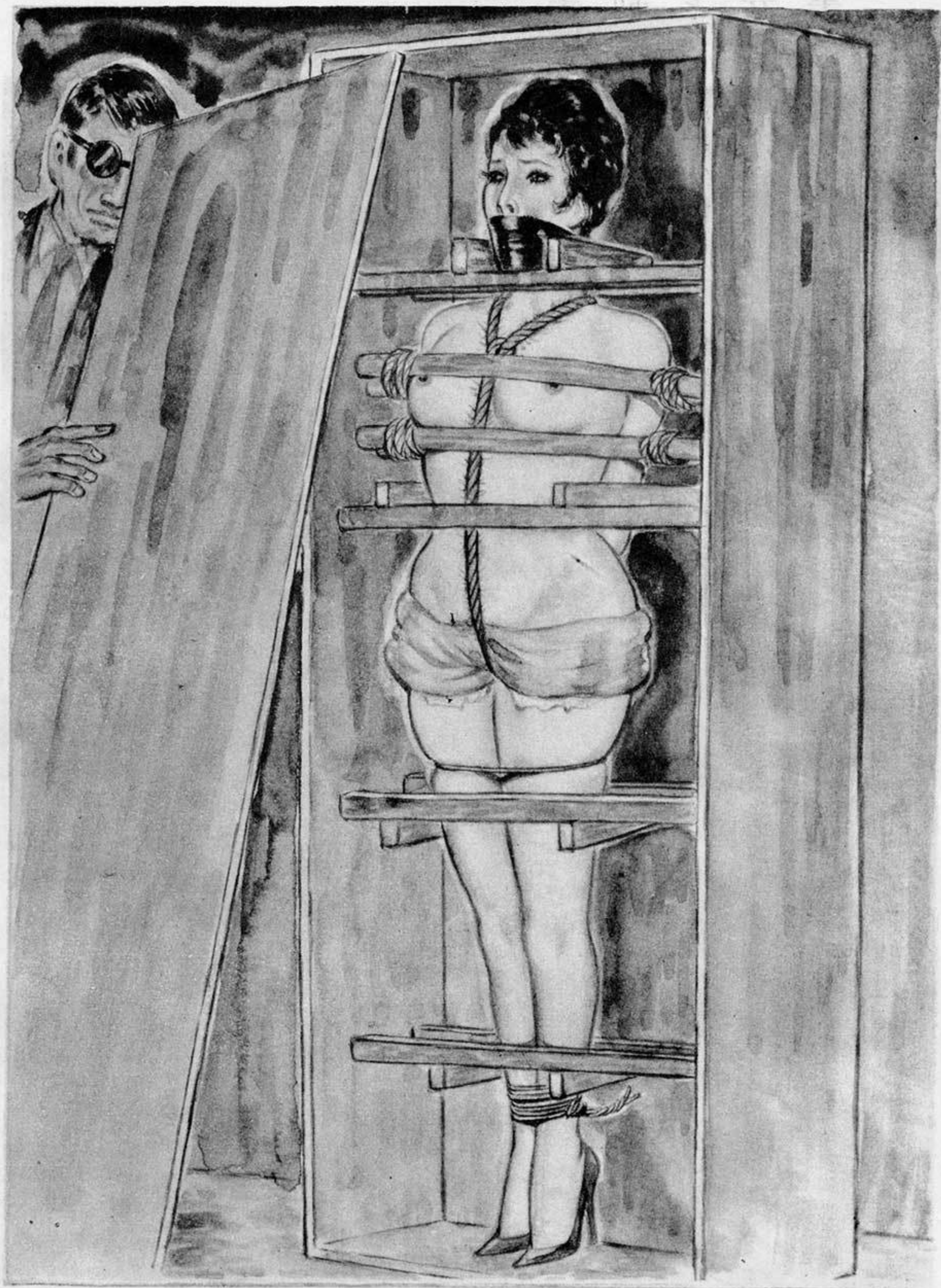




美女と刺青

栗原伸画

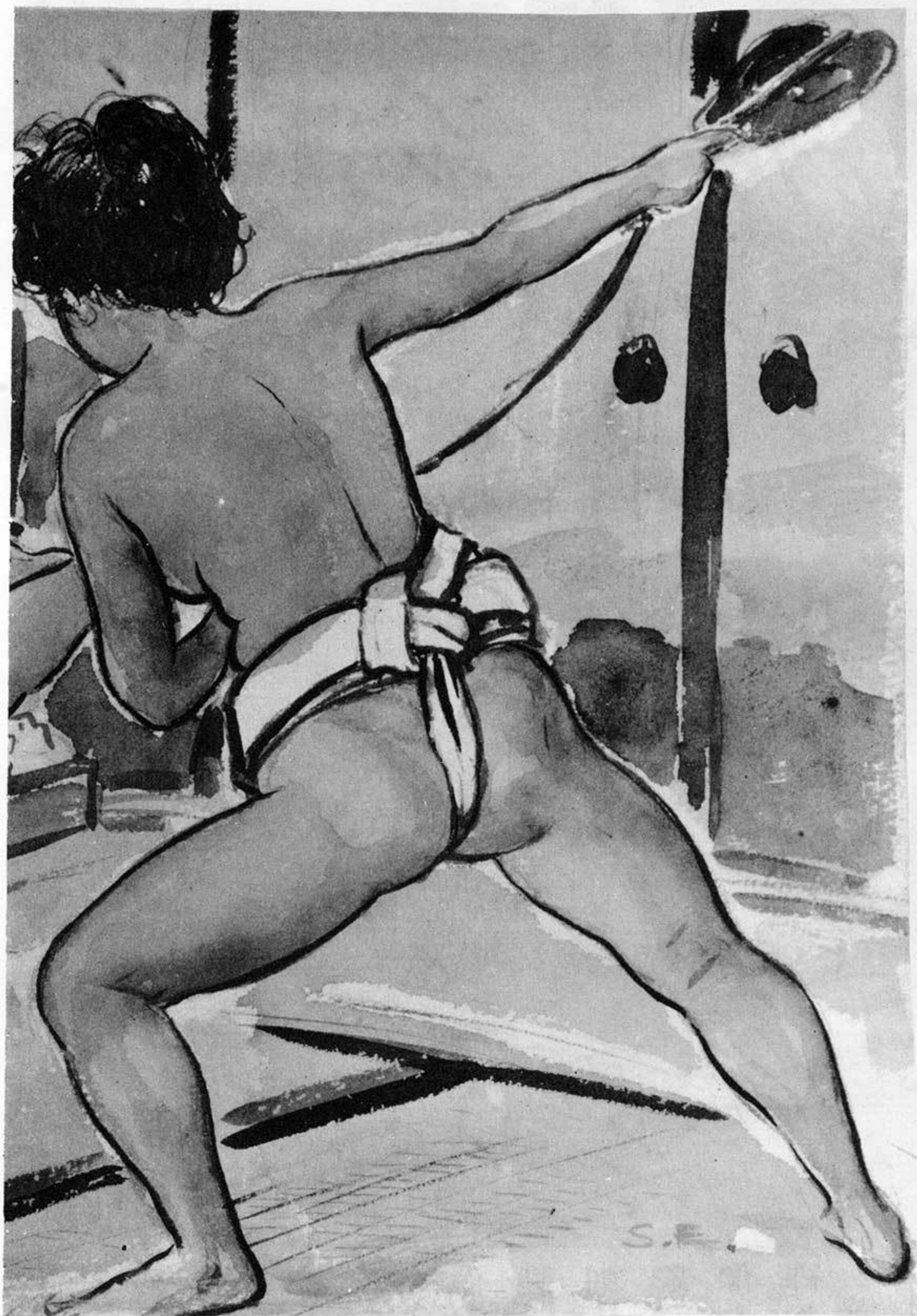




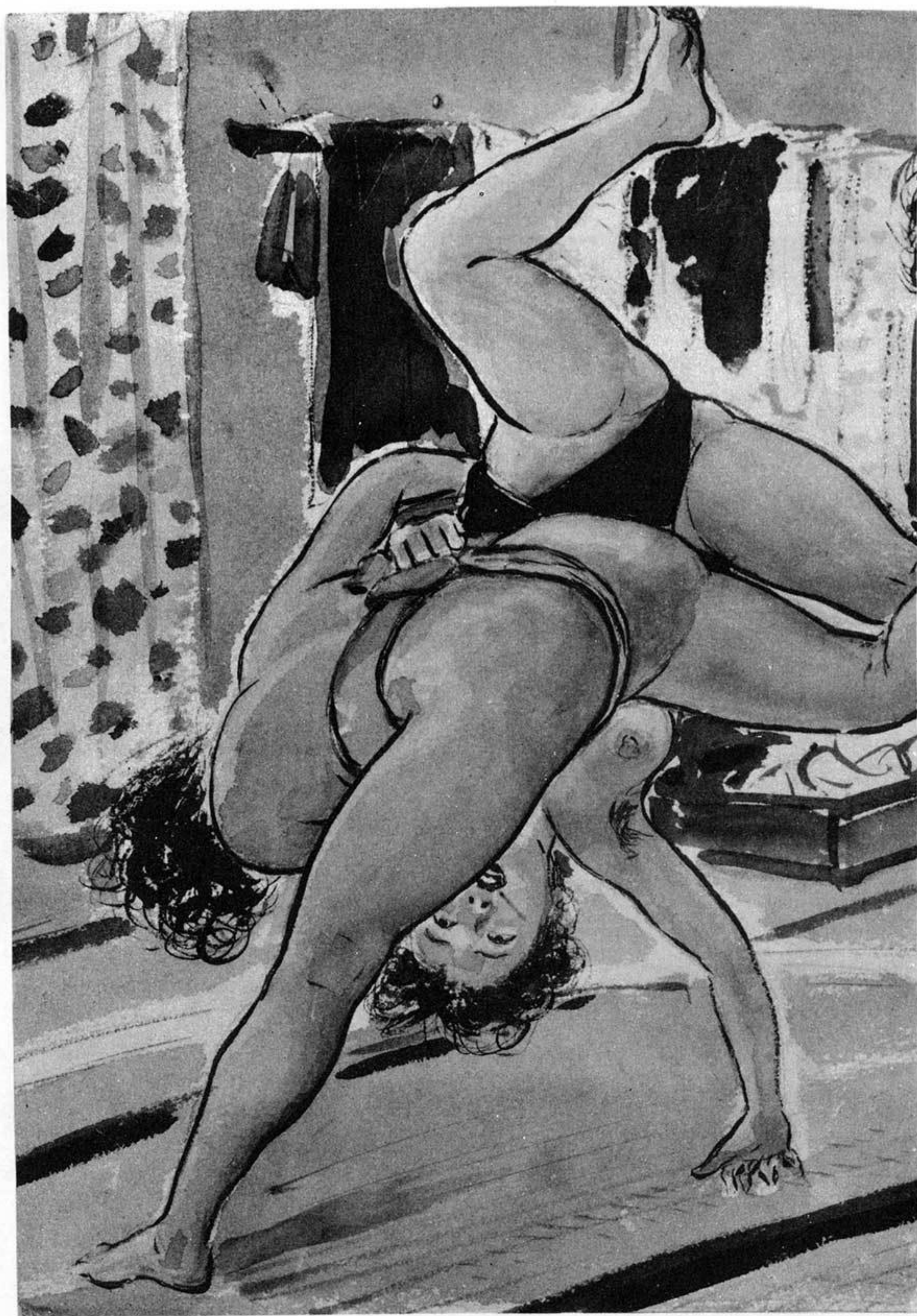
輸送函の女



裸像彫刻製作



お座敷娘相撲



夫人号の室長社

画孝馬四



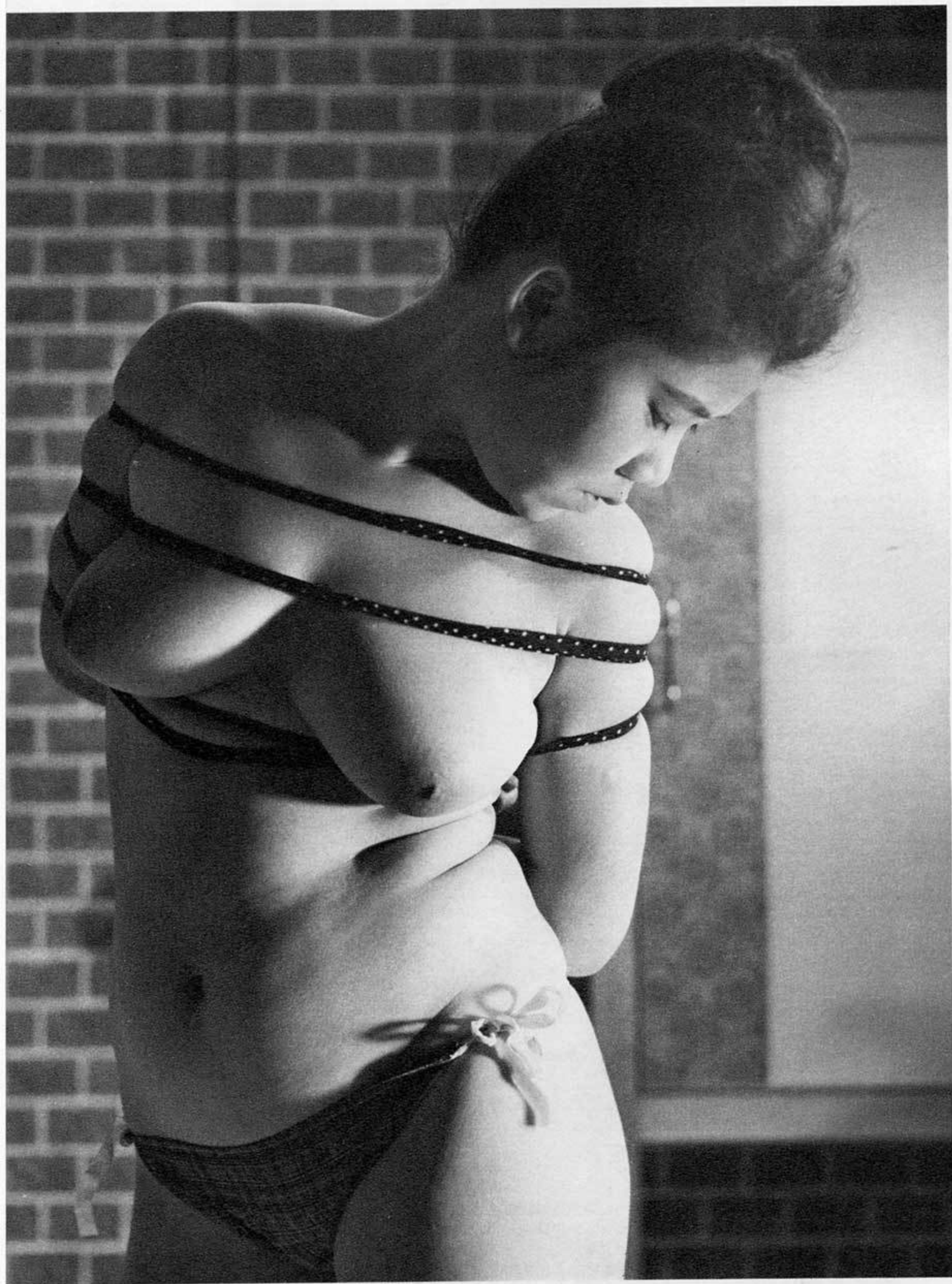
女体切腹

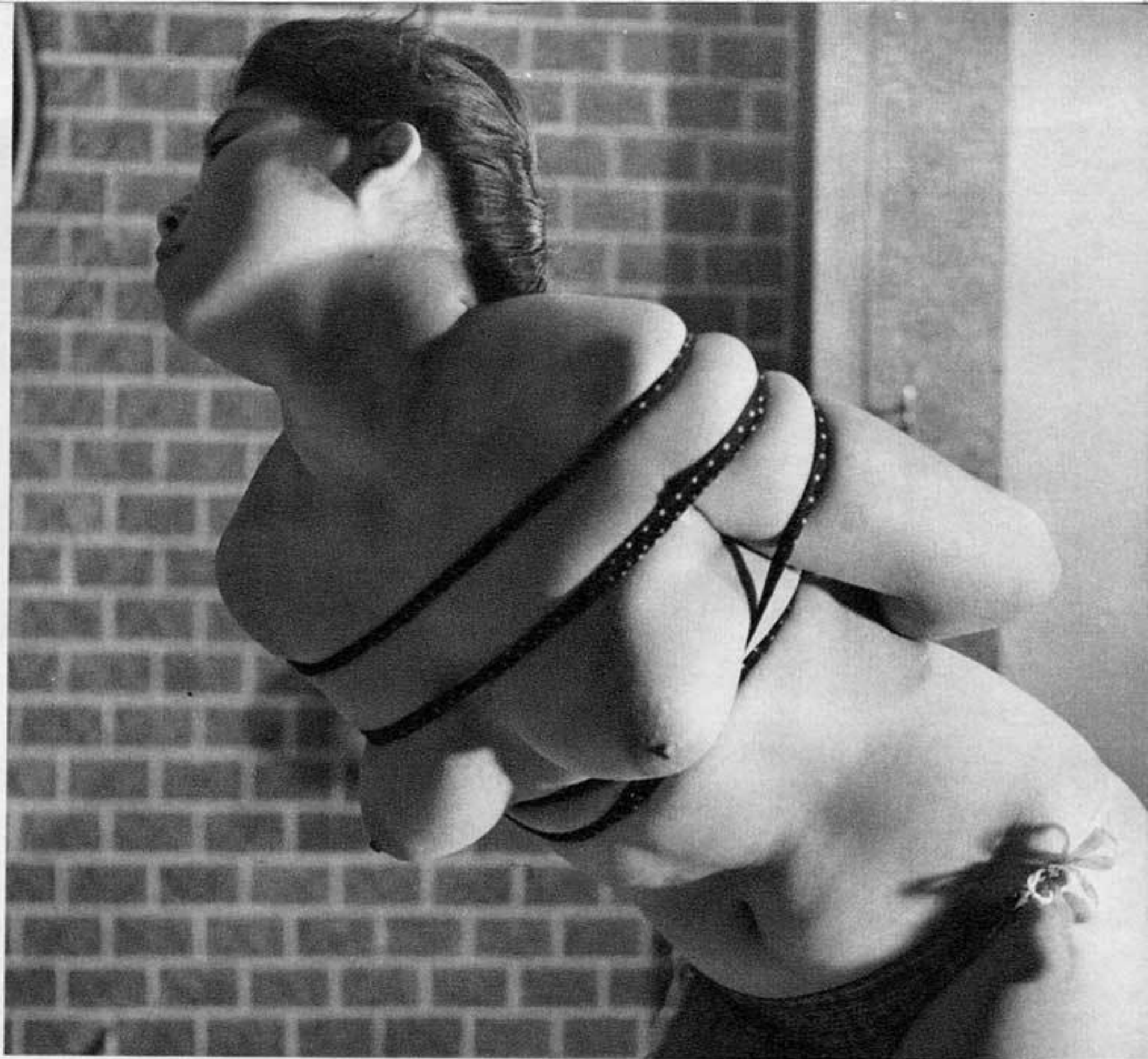
女忍者の切腹

四馬孝画

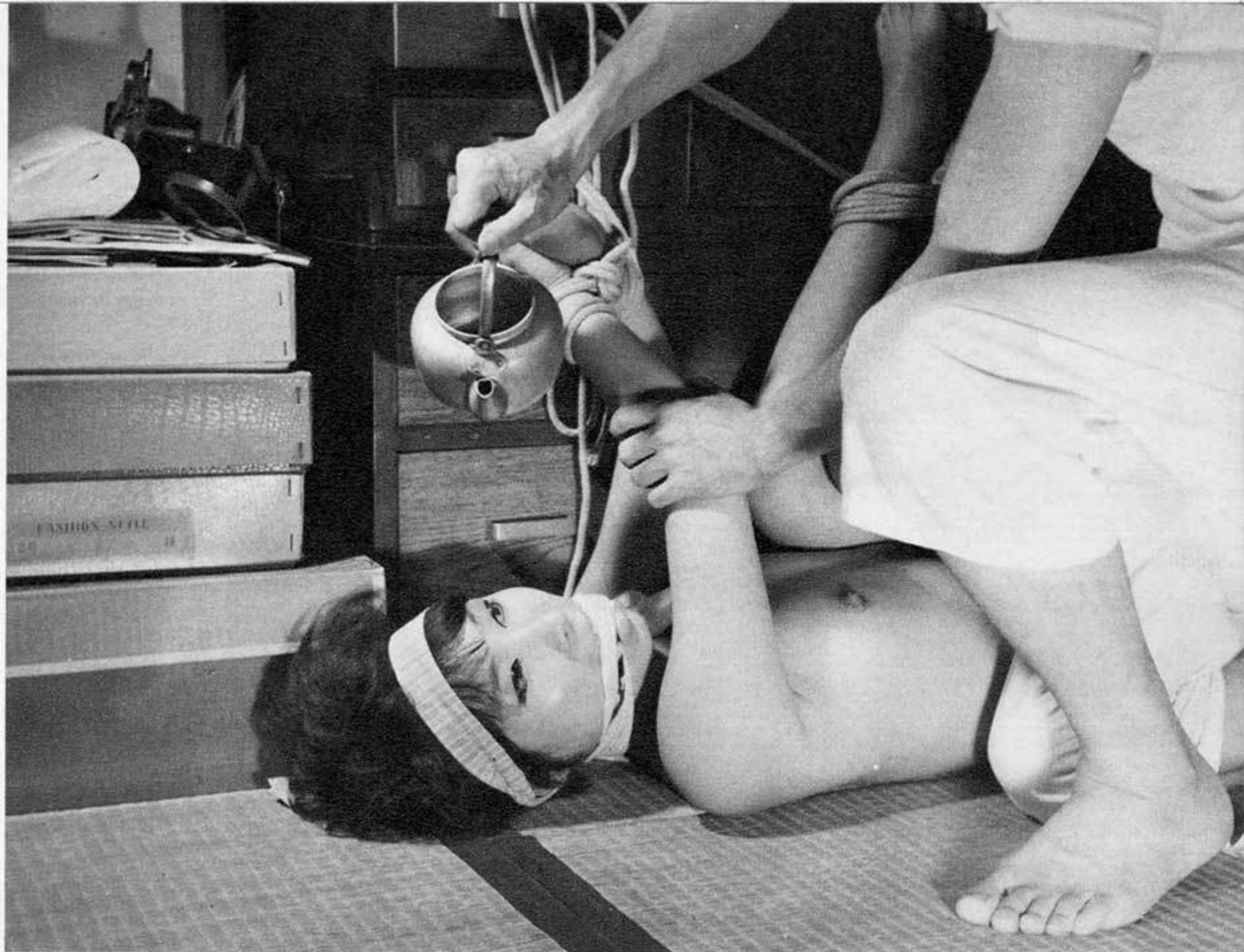




















〔新しい風俗文献研究誌〕

奇 譚 ク ラ ブ

1963年 12月号

(第17巻 第13号 通刊 第184号)



唐辛子賣めの図

「懸賞告白」入選作品

男のサドと女の愛

糸 島 博

K誌愛読者の皆様、お元気ですか。

今年は記録的な雨が続いた後は、また猛暑の連続で大変です。

まあ暑さしのぎに、ビールでも飲みながら軽い気持で私の告白でも読んで下さい。

文章のまずさから読みにくい点や、のろけめいた点などはかんべんして下さい。

幸福とは何か、と哲学的ですが。

人によっては、その言葉の取り方や意味に違いはあるでしょう。

でもS愛好者にとって美女を自由自在に緊

縛することができたら、これ以上の幸福は求められないと思います。

でもこのようなことを夢めている人は多くいても、現実には望みを達している人は少いと思います。いかに今日が残酷ばかりでも、どうしても変な目で見られがちのSです。

しかし、そんなことでくじけていては幸福はやってきません。

自分の手で幸福を作らねばなりません。

私は大阪で昭和六年に生まれ、中流家庭で何不自由なく育ち、現在金物卸を営んでいる

楽道家ですが、今日の私程の幸福な男もないかもしれません。

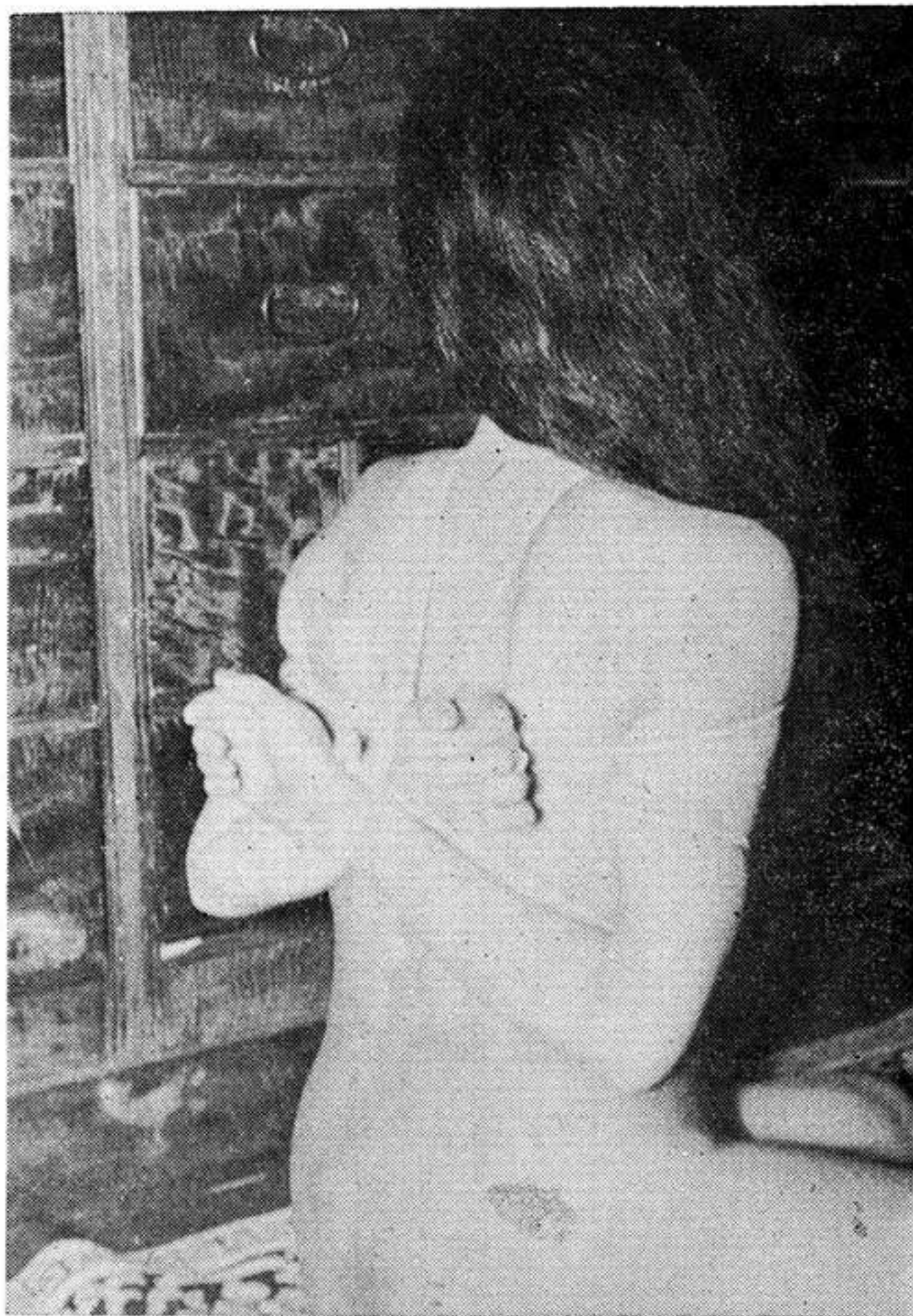
私の今日まで歩いてきた幸福の道を幼稚な文章で書いてみました。

これからの一行一行がすべて真実です。

裏付をするために内緒で恵美子の緊縛写真の一部を出しました。

私は恵美子の寝ている間にペンをとりました。知られると必ず反対されるからです。

それと後に書く実和子のことも書けなくなるからです。



私が恵美子を初めて縛ってから約四年にもなりますが、今でも恵美子はMにはなりません。K誌だって一度も目をとうそうともしません。裸になる事も縛られることも嫌がりません。

しかし私への愛情のために恵美子自身が自分と斗っているものであり、私のいうがままに辛抱して従っているのです。

恵美子がK誌を読まないという自信があればこそ、私は写真も出せるのであり、また浮気のこと書けるのであって本当に幸福な男であるといえます。

昭和二十八年に私と恵美子は本屋で初めて知りあいました。

その頃、私は高校を卒業したばかりの紅顔の青年であり、恵美子は長身で黒い長髪を三

つあみにして大きなひとみがくりと

していた美少女でした。

約五

年間の

恋愛期

間を経

て昭和

三十三

年一月

に結婚をしました。

恋愛中にも私には幾人かの女性関係がありました。彼女が、彼女がじつと最後の勝利は自分にと静かに私に付いてきたような、どちらかといえは古風な性質の日本趣味でした。それでいてすぐ勝気なところもありました。

長身で少しやせ気味だった彼女は、着物がとてもよくにあいました。

私は女性の着物姿が大好きで、今でも恵美子や実和子にも、着物以外では外出させません。

映画好きの彼女、それも邦画の時代劇しかみなかったの私にとっては好都合でした。なぜなら、時代劇には縛られる場面や責めのシーンがよくあるからです。

映画をみて帰り路は必ず家まで歩いて帰りました。話題には事欠かなかったから駅の二つや三つ位はすぐでした。

女性の大半は、強い男性とか英雄にあこがれる、すなわち、いじめられたいという欲望の形が変化して表面化したものであるという予備知識から、新人女優と大女優とは縛り方が違うとか、軽い本題に入って話している間に家の近くまで来ていることがありました。

その年の一月に式をあげて、十二月には長女が生まれたために、私のSも恵美子には知らぬままに、人もうらやむような甘くて平和な日々が続きました。

結婚をしてから二年も過ぎ子供も手がかからぬようになった夏、私はいよいよ多年の計画の夢を実行することにしました。

さてとなると、どういう線で行けばいいだろうか、はたして恵美子が、私というSの心理を理解してくれるであろうか、不安でした。私は自信を持って進む事にしました。

私は恵美子とかけをして、そのかけに恵美子が負けて、その代償に縛ってやろうと思いついたのです。

その日の朝、私達夫婦はかけをしました。恵美子は知らないが、かけは初めから私に勝つように細工してあったので、夜には一応私がかけて勝ったことになりました。

今夜の恵美子は赤いしぼりの長じゅばんを着て私の前に座っていました。

思えば長い年月だった私の欲望が、今夜達せられようとしている、その時の嬉しさはペンでは書き表わすことができません。

恵美子は不安な顔をしているのです。

「貴男が勝ったわね、貴男の望みは何なの。」

恵美子は最初から貴男のものよ、何をしてもいいのよ」

私はしばらくだまっていました。

「あら、恵美子は気付いていたのよ。貴男が本箱にK誌をしまっているのに。でも私は嫌いだから、それから見ないけれど、始め何かしらとページをめくったときは本当に驚いたのよ。貴男って悪い人ね。でも私は貴男が好きだし、貴男の妻ですもの、貴男の喜ぶことなら、何んでも辛抱しますわ。けれど、本心はちよっぴり恐いの」

と横目でにらむのです。

私はだまって腰紐を握って恵美子の後にまわり、手をぐっと後にまわして両手首を縛り別の腰紐で乳の上下を縛り、それへ手首を縛った紐を連結させた高手小手縛りにしました。

恵美子は上気した顔を、うつむき気味にうらめしそうな目で、私をじっと見つめています。

幸福への第一歩を踏み出したのだ。

私は大声で叫びたいような感動にかられました。それから何かとるに足らぬ不都合を理由に、お仕置として恵美子を縛ったりしました。

冬の寒い日に裸にして縛ったために、風邪を引いて、二、三日熱を出して床についたこともありました。

腰紐がやがてロープに変わりました。後で書く実和子に絹のサテン水玉模様の布地で十米程の別製の紐を作らしてからは、もっぱらそれを愛用しています。

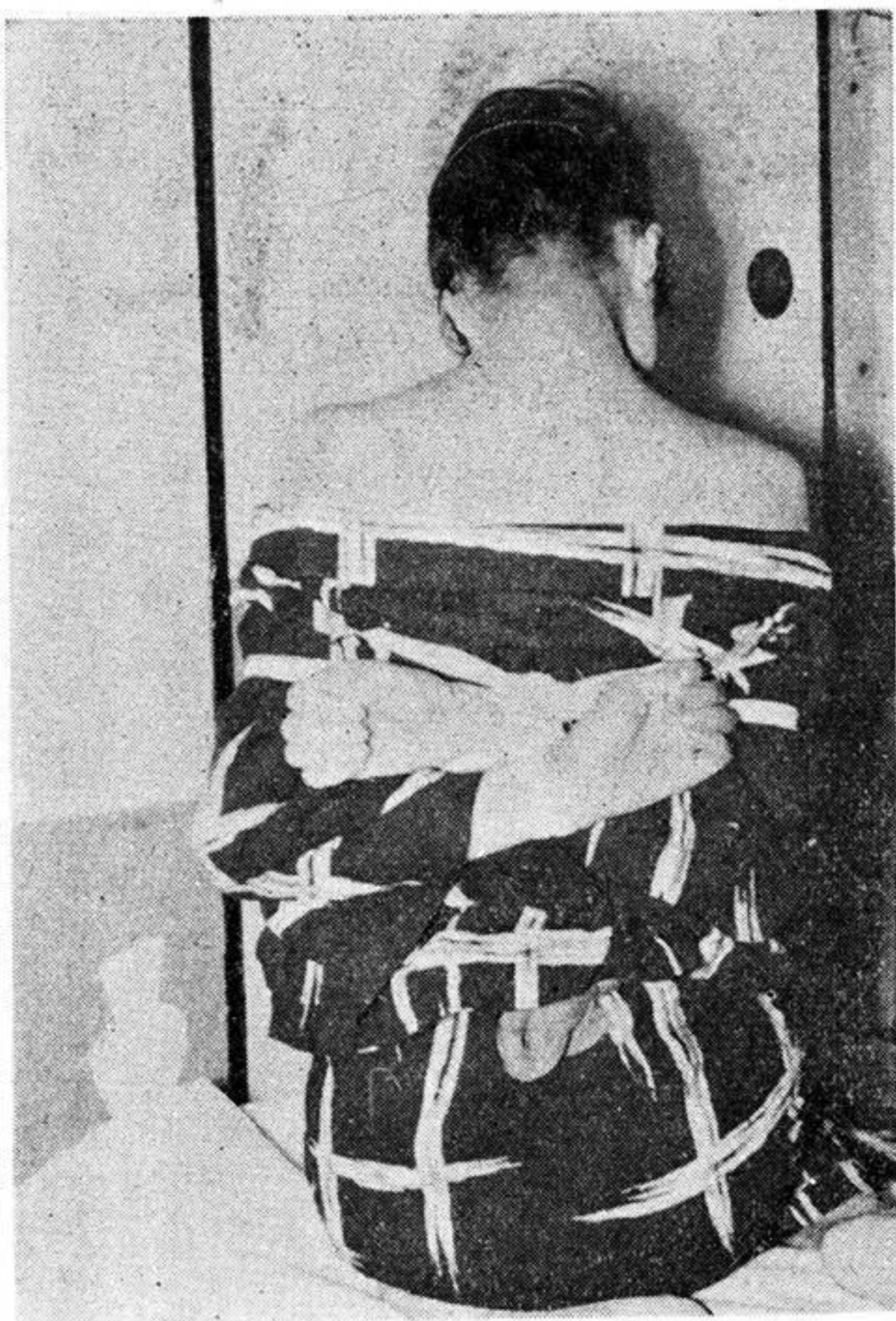
結んだりほいたりする時にする絹ずれの音は、私の心を満してくれるのです。

恵美子は踊りを習っていたゆえか、体は柔軟で後手首を高々と首まで吊り上げても、少々の事では弱音は出しませんでした。

お産の時でも助産婦さんも驚いていましたが、その辛抱強い事には感心する程で、被縛者としては理想的でした。でも股間縛りにされるのが一番恥しかったです。

こんなこともありました。恵美子を全裸にして床柱を背にロープで厳しく縛り、口にはさるぐつわをして私は外へ出ました。

果物を買ってすぐに帰るつもりが、友人につかまり話をしている間に約一時間程たちました。その間に子供が目をさまして泣いて困ったわ、と恵美子に苦情をいわれた夜もありました。子供が幼いからいいようなものの、冷汗をかいだ一夜でした。



また、裸にして縛り終ったところへ妹が遊びにきて、あわてて寝床に恵美子をかくして妹を追い返した日もありました。

縛ったまま疲れから二人とも寝入ってしまった、夜中に手がしびれて辛抱でできなくなった妻に、ひどいわお願いだから今夜はかんにんして、と、起された夜もありました。

『そうしている中に、昭和三十七年八月に長男が生まれました。』

生まれる前後半年程は、縛りはお休みとしましたが、以後今日までまた縛っています。お産二月前の股間縛りなどは普段にはできない事でした。

私達の子供二人はいつも八時過ぎになると寝る習慣をつけましたので、時々夜は向いの家へ帰る母親に留守居をさせて夜のドライブに出ます。

この間も途中で車を止めて用意してあった

紐で恵美子を手首のみの後手縛りにしてドライブをししました。

あまりきつく縛ったので家に帰った時には手首は紫色に変わっていました。

赤信号

で止っている時でも、横の車からは見えないのですが、何だか見られているような気がして青信号に変わるのが待遠しかったことを覚えております。その時の恵美子のMでもない気持は、どうだったのだろうか、考えさせられます。

今度は一度、全裸にして高手小手股間縛りにした上に浴衣でも着せてドライブをしてみようかと思っています。

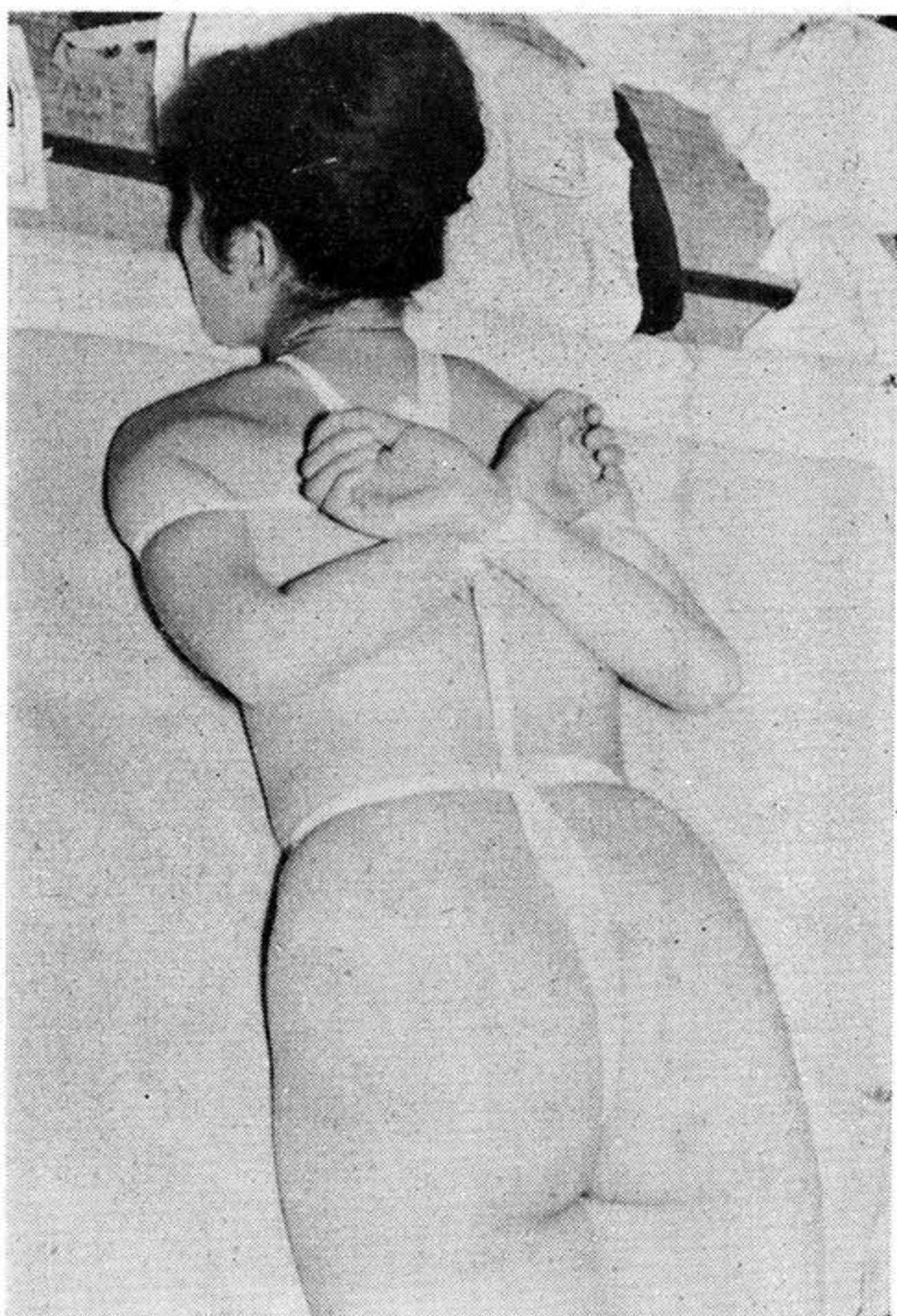
Sとしてのだいたい味が充分に味わえるだろうと楽しみにしています。

今年になって恵美子の縛った姿をカメラでとることを思い立ちましたが、全裸姿をみられるのを非常に恥しがったので、なかなかうんとはいわなかったけれど、私の一声と怒ったような顔をみて泣きだしそうになりながら承知をしました。現在まで五回にわたりとりました。

カメラのファインダーから見える高手小手縛りにされたり、股間縛りや海老縛りにされた恵美子が、体をくねらせている姿は何ともいえぬ美しさです。

また裸より体に少し何か着ている時の緊縛も乙な姿です。

私はいかにSを好み愛しているといっても



私達夫

婦は知ってからだ
と十年に
もなりま
すが、け
んたい期
もなけれ
ば、けん
か一つ、
した事も
ありませ
ん。

お互の
理解と協
力と愛情

夫婦生活は健全です。

だから過敏にならないようにと縛りはしても責めることはしないことにしています。これからも責めはやらないつもりです。しかし緊縛に関しては、きびしくきつくやるつもりです。Mでもない恵美子がただひたすらに、私への愛情のために痛さをこらえ辛抱して私に協力してくれるいじらしい気持を大切に大事にしてやりたいからです。

もさる事ながら、時たまの縛りが気分転換に役立っていると思います。

毎夜でも縛りたい欲望に私はかられますが私は自分の欲望のみを満足させていては、長年の夫婦生活のバランスがくずれて破局をまねくかもしれないと自覚していますので、家では土曜日を私の自由の夜としています。

時々何かの理由をつけては自由の夜を増し
てはいますけれど、誰かが夫婦はネンド細工

だといいましたが、作りようによって角にも丸にもなります。友人もうらやむような美人で夫に忠実であり、しとやかな妻と子供二人の円満家庭を持ちながら、私はちょっとした偶然から浮気をする事になり、またその相手の彼女も縛ることになったのだから、私は幸福な男であり罪深い男でもあります。

女は男にほれると犯罪でさえもやすやすと犯すといわれますが、その女の心理は恵美子でも感じられましたが、これから書く実和子では痛切に感じさせられました。

私は結婚するまでは、よくダンスをしましたが結婚以後は遠のいていました。

学生時代から野球をやっていたので、私は近くの他会社の野球部に籍だけを入れていました。

昭和三十六年のクリスマス、私は野球部の忘年会を兼ねたクリスマスパーティーで南のキャバレーに久し振りに遊びに行ったのです。

その時に本番について踊ったのが、実和子だったのです。

彼女は私より年上で水商売に入って十年にもなり、四五百人のホステスの中で毎月十五位前後をランクされているベテランだったの

です。しかし店で男嫌いで通っていました。その実和子が私に一目ぼれをしたのです。それから私も半信半疑で時々店へ遊びに行くようになりました。

店へ行ってもできるだけ金を使わさないようにと気を配り、私が着物が好きだということを知ってから、ドレスでも着ていた時は、あわてて更衣室へ着物と着換えに行く始末で、その変りように同僚から笑われても一向に意に介しない風でした。

そうしている間に年もあけ三月に彼女の父親が亡くなりました。

その葬儀の費用を私がだまって出してやったのがきっかけとなり、どちらから話しかけることもなく自然に実和子の面倒を見ることになり、今まで一日として休んだことがなかった店を日曜日を定休日にするようになりました。

今年の正月に伊豆へ行った時です。

実和子には、私と恵美子が今日まで夫婦げんか一つもせず、けんたい期もなくいつまでも新婚時代の甘さを持ち続けているのを非常にうらやましました。

なぜならば、以前に実和子は結婚に失敗しているからです。

だから実和子も恵美子だけには負けまいとして、私に対しては涙ぐましい努力をしてくれました。

実和子の今までの経験からして、その円満な夫婦生活の理由が何であるかが分らなかったようです。それは勿論、恵美子の努力の賜ではありますが、一つには縛ることができるといことが、私の気持をやわらげ、怒りを静めるのに大きな効果があると説明しても、実和子には納得できませんでした。

しかし理由はどうあれ、恵美子だけには負けまいとする勝気な実和子は、その夜、「恵美子さんにできることが、私にできないことはないのだから、私も同じようにして貴男の愛情がほしい」と、せがんできました。願ってもない機会です。

そこで私は実和子に全裸になることを命じました。実和子は水商売に身を置きながら、裸になったり体をさわられるのを大変恥しがりました。

けれどその夜の実和子は違っていました。だまって着物を脱いで私の前に目をつむって座りました。

最初から厳しく縛ると驚くだろうから、軽

く縛ろうかと私は一寸ためらいましたが、「ええ、ままよ、紐には不自由しないから、初めから股間縛りにしてやれ」と実和子を縛り出しました。

私のなすがままに縛られていた実和子も肌に紐がくいこむと、「あっ」と声を出しました。「恵美子さんも、このように縛るの」と聞くから私は「うん」とうなずきました。

「貴男は悪趣味ね、でも幸福な人だわ、縛られたら痛いけれど、そうすることによって貴男が喜ぶのなら、恵美子さんに負けないように辛抱するから、いつまでも私を離さないでね。けれども、女って敏感よ、絶対に恵美子さんに気付かれないようにしてね、私はそれが一番恐ろしいのよ。」

自分は何て幸福な男であろうかと、つくづく感じられた一夜でした。

それから実和子は月二回位縛って楽しんでいきます。

いつかは、写真をとってやろうと考えながら、部屋のカーテンを作る時に残った布地で紐を使わせて、この紐で恵美子を縛ってやるのだと私がいった時、そんな事したら実和子に罰が当たると泣いて止めました。強引に家へ持って帰り、もっぱら愛用しています。

大変読みにくい文章を、長々と書き綴りましたが、最後にS愛好者の皆様、何事にも自信と愛情を持って進まれることが、幸福への最短距離だと私は思います。

また、私にご連絡下さるのでしたら、日本橋筋二丁目市電停留所を西に入った左側に喫茶クレセントがあります。TEL 03 2737 毎日必ず二度は立寄り一杯のコーヒーを楽

しんでいる常連ですから、糸島とお尋ね下さるかご伝言下されば結構です。同好の友と大いに語りたいたいと思いつつ、ペンを置くことにします。

十三人の女死刑囚

その二（絞首刑篇）

佐 出 須 登

1

「……以上の理由をもって被告クロチルドに対し、絞首による死刑を宣告し、明朝八時これを執行する」

わたしはぼんやりと宣告を聞いていた。その後も裁判長は何か続けていたが、わたしにとってもう必要のないことだった。

刑吏に両脇をとられ独房へ帰る途中、多くの目がそがれる。彼等がどう思っているのかわたしにはよくわかっている。わたしが死

刑の判決を受けたのは、これが始めてではない、誰も信じないだろうが五度目なのだ。今さら驚くものか。かえって彼等の方が緊張しているのを見たらおかしくなってきた。

わたしはひとり独房に坐っている。果して今夜が、二十六年の生涯の最後の夜となるのか、遠くかすかにトントン、トントンという音が聞えてくる。絞首台を作る音だ。広場ではもう見物人が集まっているかもしれない。戦

争は終わったし、平和な東部のこの町では死刑というのは珍らしい。まして女とあれば。さぞ話題となっているだろう。

絞首刑、絞首台、首を絞めるロープ、やっぱりわたしの宿命なのだろうか。

2

わたしが始めて絞首刑の判決を受けたのは六年前の一八六二年のことだった。前年から始った南北戦争で南軍は次第に苦戦に追いやり、当局は兵士集めに力をそそいでいた。

徴兵に対する反対もあり、人心は荒く死刑が激増した。わたしの罪は愛人と共謀して、その妻を殺したのだから、これは平和な時でも死刑になったろう。わたしも判決に不服はない。彼がわたしを見捨てて逃げたことはくやしいが。

独房は六つだが女死刑囚は十三人もおり、わたしの部屋は三人が入っていた。その一人ジャクリーヌという若い女性は、酔った兵士から身を守るため相手を殺してしまったもので、当然正当防衛で無罪とされていたのに、相手が軍人だったため、死刑を宣せられたのだ。明朝の執行を前にし、彼女は部屋の隅で静かに祈りをささげていた。処女を守り通したのがせめてものことだろう。

朝がくる。刑吏がジャクリーヌの腕をとってつれだす。わたしもあとに続いた。同室のよしみで執行に立ち合うのだ。ここは新式の降架型というのか、十三階段でなく床から下におちるものを採用していた。わたしは下の暗い部屋に入る。上方に四角の切りこみが見えた、この上にジャクリーヌが立っているのだ。頸にロープをかけられて。

合図と共に切りこみがぱっとひらき、十七

才の処女の身体が落下してきた。同時にライトが灯される。独房の仲間もこの「ボタン」という音をきいて清純だった彼女が処刑されたのを知るだろう。

首にかけたロープは一瞬蛇のようにおどってピンとはり、彼女の身体はキリキリと激しくまわりその反動で今度は逆にまわる。その動きがとまって始めて顔が正面に固定した。

ロープはすでに白く、柔かい頸すじに強く喰いこんでいた。唇がピクピクとふるえている。苦悶はかなりひどいらしい、息づまるなか二分、三分と経過する。

ジャクリーヌの全身に、激しいふるいがきた。生と死のすさまじい争い、美しい身体が弓の様にそっている。苦悶のため、まだ誰にも吸われたことのない、みずみずしい乳房がころがりだした。七分、八分、やがてすべてが静かになる。

十一分五十秒、確実な死が宣せられたが、まだ五分間は吊るしておくのだという。比較的早く絶命した方だった。わたしはじっと死体をつめていた。五分後、まず脚が床につき、身体は抱きかかえられながら横たえられた。このあとは検死室へ送られて、明らかに女性であること、本人であること、確実に絶

命したことの確認をうけるのだ。

ジャクリーヌの死体は、生れたままの姿にもどされて、タイルの上におかれていた。腕を伏せたようなかたくて、まるいふたつの乳房、胸からふくらとした下腹部へのカーブすこしのゆるみもない大股、長い脚はすらりとのびている。美しい顔にはもう苦しみのあとはなく、長い黒髪が肩のあたりをおおっている。ただ、かわいい喉に無惨な、赤黒い絞めあとがついていて、両耳の下で消えていた。どうしても消えることのない絞めあとは一体何をもの語るのだろう。

こうしてジャクリーヌは十七才の若さで、哀れ殺人者という汚名のもとに絞首台で死んだ。

3

ジャクリーヌが処刑されてから三日目に、わたしは所長に呼ばれた。おそらく、執行の申し渡しだろうと思ったが、そうではなかった。

「クロチルド、お前は南軍のため働らく気はないか？ スパイになるのだ。二年間無事でしたら放免してやる。但し発見されたら死刑はまぬがれないが。それともこの申し出をこ



とわって明朝絞首刑になるかね？」
 一も二もない。十二時間後に確実に死ぬよ
 り少しでも生きのびた方がよい。わたしを含
 め、九人が死刑とひきかえにスパイを承知し

た。ことわったのはデボラ、エレオノラ、シ
 ルビアの三人で、いずれもジャクリヌ同様
 の不合理な判決を受けたものだった。彼女ら
 のプライドが許さなかったのだろうか。

わたし達三人は逆手をつ
 かって白昼堂々と馬車でのりこんだのが成功
 したらしい。ショーが解散になったので、こ
 の町に職を求めにきたといったら、ある大き
 な店の主人がわたしを採用してくれた。彼が

その晩、わたしたちは独
 房へ帰されていたが、明け
 方近くなって「ボタン」と
 いう音を三度にわたって耳
 にした。
 この三人は永久に帰って
 こなかった。

4

わたし達は即製の訓練を
 うけてから二、三人づつに
 別れ、目的地におくられ
 た。スパイに対してはどこ
 でも敏感になっている。他
 国からきたものは常に警戒
 され、少しでもあやしい言
 動があればたちまちひった
 てられる。正式の裁判でも
 簡単に死刑が宣告される上
 に、リンチというのがある
 から恐ろしい。

わたし達三人は逆手をつ

五年も前から潜入している本物のスパイとわかったのは、ずっとあとのことだった。

二週目に、ミレーヌという二十二、三才の女が処刑された。彼女は群衆の前に引きだされたが、ブラジャーとパンティしか身につけていない。しかもこの二つは、「武士のなさけ」として許されたものだ。泣きわめきながら両脇をとられ十三階段をのぼる。この時、あまりあばれたのでブラジャーがぬげてしまった。それにかまわず刑吏は頂上でロープを首にかけて、実に無造作につきおとした。ロープがピンとはり、身体がはげしくおどった時、パンティがずりおちて右の足首にひっかかった。彼女の最後の意識でこれがわかったらしく、苦悶のなかに恥じらいの表情があらわれる。だがどうすることもできず死んでいった。涙が一滴、その頬にのこっていた。

次に同じ年頃のアンという女が絞首台にある。死刑が好きだ、などというのはいないがそれでも普通の絞首刑なら、という気はあったろう。アンの場合、衣類の着用は許された。しかし両脚をくさりでしぼり、その間に巨大な鉄丸を四つもつけられたのだ。普通は

十六キロ、女性の場合は八キロのが二個というのに、三十キロ以上はあるだろう。しかもおまけのように、後にまわした手首に二個結ばれた。これこそ女性用のものだった。ロープも太い針金の輪が使われている。彼女の体重をあわせると、二〇〇キロ以上の重量がかわい顔にかかるのだ。おそらく一気に「キュッ」と絞まってすぐに死ぬだろうが、想像もしてない方法に、普通の絞首刑ならおとなしく受けたかも知れぬ彼女が、恐怖の叫びをあげたのも当然だろう。

「ガタン」台がおちる。「ギャツ」悲鳴があがったがすぐに絶えた。不気味な音と共に「ぱっ」と血しぶきがとびちり、彼女の胴体が轟音をたてておもりと共に落下、その上をちぎれた首がころがっていた。刑吏がその首を拾い、さしあげていう。

「もう検死の必要はない」と、無造作に胴体の方に投げすてた。

わたしは暗い気持で店に帰った。すでに死刑が宣告され、執行をまっていた時とは又異なり、毎日びくびくしながら過すのは辛いことだった。それでもスパイとしての仕事は、わたしの身体を使えば情報がいくらでも集っ

た。果して二年間無事でいられるだろうか。

一年が経過した。この間死刑になった女は三十二人、リンチされた女は十九人、大体週に一人の割合で女性の死刑がある。同志ではザビーネがリンチにあった。長いロープを首にまき、その両端を十人位でつな引の様にひっぱったのだ。柔かい頸骨はたちまち砕け、あつてなく死体となったのだが、首がちぎれてしまいうまで許されなかった。

又キャサリンは裁判の結果、正式の死刑だった。衣服の着用も許され、足のおもりも普通のものだったのは好運といえよう。彼女は従容として絞首台をのぼり、ロープを自分で頸にまきつけ、自分で踏板をけって二十五才の生涯をとってしまった。

5

わたしが突然捕ったのは二年の約束にもう少しという時だった。主人はとくに逃げている。あとでわかったのだが、彼は自分が危い時は、わたしを犠牲にするように命じられていた。もはや絶望である。

わたしは後手に縛られ、馬にのせられる。リンチになるのだ。前方の木からロープが下っており、さっと首にかけられた。馬にむち

をあてられたら、二十二才でこの世から去るのだ。見物人はワイワイと声をあげている。

この時、将校が馬をとばしてきた。リンチは黙認されていたが、店の主人が捕ったためわたしの証言が必要となったのだ。おかげで少しだけ生命がのびた。だが、どうせ死刑はまぬかれぬのだから、わたしはすべてを認めた。

判決は極めてあっさりしたものだ。

「被告クロチルド、銃殺刑」

ただこれだけである。銃殺とは意外だった。スパイは軍人でも絞首刑なのに。苦痛は短いだろうが身体は穴だらけになってしまふ。わたしは自分の乳房や腹をおさえた。やはり女性の死刑なら、絞首刑が一番ふさわしいのではないか。

6

夜があけると、わたしは砦の隅の柱に縛られた。ほかに若い女が両脇に二人いる。十二人の射撃隊員がそろい、まず端の一人に狙いをつけた。「ドドーン」とただ一斉射でバタリ、実に簡単なものである。

次はわたしの番、突然近くに警報の銃声がひびき、「処刑中止」という声がする。インデアンの襲撃だった。こうなっては南軍も北

軍もないわけだ。

「運の良い女だ、早く逃げる。首をとられるぞ」

隊長はこういつてくれたが、縛りっぱなしでは逃げられない。早くも近くに矢がとんでくる。土人は多勢らしい、目の前を右往左往する軍人や住民、一人の女が喉に矢をうけ、ぱったりわたしの前にたおれた。もがきもせずに死んでしまう。一方町の方は火事がおこり黒煙がいちめんにたちこめていた。

わたしの前で、テリーという女が組伏せられ、必死になって相手の短刀をもつ手をおさえ、首をかかれるのを防いでいたが、もう一人が槍で彼女の下腹を二度まで突き刺す。まもなく彼女の首は胴体をはなれた。

同じく銃殺されるはずだった、もう一人はとみると、哀れ四本の矢をうけて息絶えていた。両の乳房に一本づつ、腹部の中央に一本、その直下に一本と、ちょうどYの字を画くようになっていた。

こうして町は全滅した。わたしの前にも女性の首なし死体が三つころがっている。一人の土人がやってきて、両脇の死体から首をとり、わたしのいましめをほどく。今度はイン

デアンの捕虜となるのだ。

捕われの女は十四人だった。隣の町も襲われたのか、仲間のピアやフランソアーズの顔も見える。インデアンは髪の毛をとるというのは知っていたが、これは何という種属か、若い女性に限って生首をとる風習があるらしい。ちょっと数えただけで二十二個の生首が、槍の先に刺し貫ぬかれ馬上高々と晒らされている。わたし達はそのあとを馬に引きづられるように歩かせられた。

途中崖のところで皆があつまって何かしている。どうやらここで、いけにえをささげる習慣があるらしい。白羽の矢は二十才の美女ピアにあてられた。

ピアはたちまち服をはぎとられ、一糸まとわぬ姿となった。その首に長いロープがまかれ、次いで肩、胸、腹とぐるぐるまいてゆく。手も後にまわしたまままきこまれ、みよしの様な格好となった。その端を崖近くの木の幹にしばり、ピアを抱きあげた。投げおとすのだ。一瞬、目をそらしたすきに彼女の身体は宙にういた。

身体をまきしめたロープが少しづつもとにかえり、それだけピアの身体は谷底へと近ず

いてゆく。最後に大きくもんどりうって、彼女の喉が「ぐっ」と音をたてた。

しかもそれだけでなく、ロープをつたわって一人がおりにゆき、彼女の両肩に両脚をのせてぐるぐるとまわし、更に強く胸をける。やがて再びひきあげられたピアの身体は、首が異常なまでがっくりとたれていた。別の一人が、首をつかんでひとひねり、ふたひねりとうとうネジ切ってしまった。

土人の部落につくと大さわぎだった。これだけの大量では無理もないだろう。とりたての生首をズラリと並らべおどり狂っている。地元出身のロンダという女が

「わたし達は一日に一人づつ殺されるのよ、めいめい違った方法で、絞首や斬首位ならまだよいけど、火あぶりなんかになったらいやね」

といていたが、その彼女が真先に、その晩、火あぶりになって惨酷極まる最期をとげた。死ぬまでかなりの時間がかかった。

翌日はフランソアーズが殺された。彼女は全裸にされ、首にロープをかけ馬でひきづられた。はじめは両手でロープをおさえ、首の

しまるのを防いでいたが、馬についてゆくにはかけ足でなくてはならぬ。しかもその速度は次第に早められるのだ。たるんでいたロープがだんだん張ってくる。

「もうだめよ、見てられないわ」

誰かがつぶやいた時、馬は走りだした。フランソアーズの身体は前に引きたおされ、ずるずる引きづられる。辛くもおきあがったが、又これをくりかえす。猫がねずみをなぶる様に、さんざんたのしんだのち、すごい早さで走りだした。悲鳴はすぐに消える。広場を二度、三度と走りまわるうち、彼女の身体は大きくもんどりうってころがった。首がちぎれてしまったのだ。

二十四才になったミッチイは、五日目に身体全部を水にぬらした皮ひもでぐるぐるまかれた。もう一本は首にかけ木の枝に結ぶ。太陽の光が強くてりつつける。皮ひもが収縮するにしたがって、鉄よりも強い力で雪をあざむく美しい裸体をしめつける。その苦しみは想像以上だった。

一方首にかけられた方も次第に頸に食いこみ、じりじりと身体を吊りあげる。足先が地上をはなれ、身体が宙に浮けば一巻の終りとなる。しかし、彼女にとってこの首にまかれ

たことは救いとなった。これがなかったら、死ぬまでどんなに苦しんだかわからない。

三時間後、彼女の足首は地上を二センチほどはなれ、死体となっていた。首に喰いこんだ皮ひもはどうしてもはなれず、とうとう首を斬ってはずした。胴体の方も同様で死体は哀れにもバラバラにされてしまった。

7

この様に毎日一人づつ殺され、七日目の女は、はりつけに処せられた。いつも刑の終了直後に次の番が指定されるのだが、とうとうわたしらしい。まじない師がわたしの前にきて、かざりのついた木の枝を打ちふる。これが彼等の死刑宣告である。わたしの着物を全部はぎとってしまった、殺すときはいつも全裸にされるのだが、前の日にやっておけば逃走の防止にもなるし、別の女と間違えることもないわけだ。生き残った六人がわたしに寄りそう。何もいわなくとも彼女らの気持はわかってる。

翌日わたしは森の方へつれてゆかれた。そこには二本の木を弓の様にまげ、つなで支えてあった。このつなを切ればもとの様にはねかえるしかけ、これは石でもとばす戦いの道具だろうと思っていた。



驚いたことに、彼等はわたしを押したおすと、まげた二本の木にわたしの脚をそれぞれ一本づつ、せい一ぱいにひろげて結びつけた。これこそ彼等の間でも火あぶりと並ぶ極

刑、股裂きの刑である。わたしの身体は生木を裂くようにピシリと、真二つにされてしまふのだ。こんな目にあう位なら、始めに絞首刑になった方がよかったと、わたしは後悔し

わたしはその後六カ月ばかり無為にすごしていた。戦争も南軍の敗戦は確定的だったし、スパイを続けるわけにもいかない。ある日偶然にも最初の死刑囚仲間のナタリーにば

た。

しかし、どこまで幸運なのだろう。この時討伐軍が到着した。あわてた土人達は、わたしをおいて走り去る。最後の一人が大刀でつなを斬りつけたので、わたしはヒヤリとしたが切れずにすんだ。彼はのこり惜しそうな顔で去っていった。はげしい銃声がひびく。

こうしてわたしは助けだされた。しかし生き残っていたほかの六人は、土人達が行きがけのだちんとばかり、ことごとく首を斬って持ちさっていた。十四人のうち助かったのは、五分おくれたらひどいことになっていたわたし一人だったのだ。

ったり出会った。

「しばらくね、どうしているの」

「あなただからいえるわ、わたしの仕事を手伝わない？」

ナタリーの仕事とは強盗団だった。銀行や駅馬車をおそうのだ。どこに行っても満足な職もなく元死刑囚、元スパイとしては確かにこんなところよりないかもしれぬ。例の仲間のうち、デビーとキムの二人が加わっているという。しかも残りはお互いの話を総合すると、すべて絞首されて生涯を終っている。

「結局、わたし達は絞首台で死ぬ運命なのね、それにはこの仕事が一番よ」

「太く短かくというわけね。賛成するわ」

わたしはこうして強盗団に身を投じた。デビー、キムにも再会した。

強盗団は二百人あまり、女性も十五人ほどいた。隊長は前は南軍の正規中佐で、ゲリラ活動をしていたのだが、彼が戦死してからは完全な強盗と化してしまった。毎月三十人位殺されるが、新加入が同数位あるし、獲物が多いので誰も止めるものはいない。女性軍は留守役のほかに情報係もつとめていた。スパイの経験が役立つわけだ。ナタリーがいう、「わたしが入った時、女性は十七人いたけ

ど、今わたしより古いのは三人しかいないわ。残りは皆殺されてしまったの、あなたもいずれそうなるわ」

「そうでしょうね、わたしも長生きできるとは思っていないわ」

「影がうすいようよ、せいぜい半年位ね、覚悟はできているのでしよう」

「もちろんよ。そんなこといって、あなたこそ明日吊るされない様に用心したら」

この話が事実になるとは！翌日情報をとりにナタリーに続いて町にでたわたしは、黒山のひとだかりに胸さわぎがしたので、とんでいってみると、中央にナタリーの姿があった。

ナタリーは手を後にまわして縛られ、もがくのをかまわず馬にのせられる。リンチにされるのだ。もう助すけようもない。

彼女は裸馬にのせられていったが、ふと前方をみた彼女の顔色が変わった。木の横枝が長くのびているのが目に入ったからである。誰がみても絞首刑に絶好の木、やはりその下でとめられ、用意のロープがさつと投げられる。目の前に先の輪になった部分がちらつき、恐怖の目を大きくみひらく。あごを引いて抵抗したが、髪の毛をぐいとひかれ、首の

まわりにつけられてしまふ。わたしも経験のあるあのゴツゴツしたロープの感じ、女性用の柔かいのはないのだろうか。いよいよむちがふりあげられる。

「ピシリ」馬はさお立ちになった。ナタリーは両脚で馬の腹をしっかりとおさえ、すべりおちるのを防ごうとしたが及ばず、スルリとぬけて足は空しく宙に浮いた。「ワアッ」絶望の悲鳴はすぐに押しつぶされ、「ググッ」という窒息音とかわる。足先はあと五十センチ位で地上に達せず、すべての重みがかよわい頸にかかる。苦しみ、もがき、実に三十分以上もジタバタしてから断末魔の唸れん。その後ナタリーは、冷たくなるまで吊り下ったまま晒らされていた。十七才で絞首刑の判決をうけてから三年後に、結局絞首されてこの世を去ったのだ。

更に一年が経過する。この間に国を二分した戦争は終っていた。当然仕事は少なく、危険は倍加した。そして逆に破滅的事件がおきた。わなにかかり五十人余が全滅したのだ。内報したのかと、この時の情報係六人が疑がわれたが、そのうちにキムが入っていた。キムは長く渡した横木に他の五人と共に、

両手でつかんでぶら下る様に命じられた。別につかみにくいわけではないが、首にはロープがまかれ、その端が頭の真上、ちょうど両手の中央に結ばれている。手をはなしたら絞首刑になるわけで、最後にのこった一人を許すという。

足場がとられ、六人が鉄棒に下がるようにぶら下った。早くも悲鳴があがる。ポーラがつかみそこねてすべりおち、絞首刑になったのだ。更にマリーも風がふいてスカートのまくれ、思わず手をのばしたためあっけなく死んでしまった。必死にがんばる四人の女、疑いを否定しても許されるわけではない。三十分、一時間とたつうち手は次第にかたく、苦しくなってくる。

こうして更に二人がおちて死に、キムとメリーが残った。どちらかが死ねばひとりはお助かる。互に顔を見合わせ、にらみあう。いきなりメリーが足をあげて、キムの下腹をけとばした。あぶなく手を放しそうになり、悲鳴をあげるキム、だがこの拍子にメリーの方の手がすべり、魂まで凍りつくような恐ろしい叫びをあげて、メリーは首を絞められ、まもなく息絶えた。『人を呪わば』というわけ。キムはこれで助かった筈だが、非情の隊長

は、彼女のわきの下をくすぐった。

「ウフフ……キャア！」

これが二十三才のブロンドの美女キムの、この世にのこした最後の声だった。

新しい情報を手にしたデビーがかけつけ、裏切者はメリーだったと告げたとき、キムの身体はまだあたたかだったが、呼吸は全く絶えていた。

その後も景気は悪くなる一方で、仲間はずか三十人、女性はいわたとデビーのほか二人になってしまった。この頃大陸横断鉄道も進みつつあり、現金は鉄道で送られるようになっていた。全力をあげてこれを襲うことになり、二人の女が情報をさぐるため出発する。わたしとデビーは襲撃隊に加った。

計画は十分にたてたのだが、これも完全な失敗だった。襲撃隊は殆ど全滅、わたしとデビーは生命からがらのがれでた。途中先発した二人の女が絞首死体となって晒らされているのを見たが、気にかけるだけの暇はなかった。

わたしには悪魔でもついているらしい、無事にのがれはと一息つく。デビーもまたう

まく逃げてくるのが見えた。わたしはそのあとを敵の一人がつけてくるのを発見し、いそいで合図しようとしたがおそかった。

ひとすじのロープが彼女の喉にさっとまきつき、『はっ』とした時にはもう喉に喰いこんでいた。しかも敵は後向きになると、小柄なデビーを背にかつぐようにした。熊があと足で立って鮭を背おうような格好である。

デビーは首を絞められたまま、手にもった短刀をふりまわしたが、前には誰もいない。目を大きくみひらいたまま、脚をバタバタさせてもがいていたが、やがて短刀がポロリとおち、両手は喉をかきむしる。だがあまりにも完全に喉は絞まり、二十二才、一五〇センチ、四十五キロのデビーは軽々と背おわれたまま次第に血の気を失っていった。

こうして全く抵抗のなくなったのを感じた敵は、デビーの身体をヒョイとかたわらに投げだし、彼女の落した短刀を拾いとった。そして再び息のふきかえすことのないように、デビーの柔かい喉にグサリと刺し通した。たとえ僅かに生命の灯が残っていたとしても、これで完全にふき消されたことだろう。

敵はしばらくしてから、何かをかかえるようにして去っていった。わたしがそのあとに

行ってみると、哀れデビーは完全に止めを刺されていた。即ち、もっと正確にいうと、首がなくなっていた。こうしてわたしは最後の友達も失ってしまった。

9

「被告は強盗団の一人たることを認めた。絞首刑に処す」

わたしは遂に捕えられ、法廷へだされたのだが、結果は予想通りだった。死刑の宣告は土人のを加えることで四度目、いずれも思わぬことから助かっている。

馬にのせられ、首にロープをまかれたとき、銃殺柱に縛られたとき、更に思いだしてもぞっとする股裂き寸前の瞬間など、次々と目に浮んでくる。ナタリーがいったように、やはり絞首刑におちついたわけ、むしろほっとした気持だった。

とはいっても、やはり死ぬのはいやだ。今まで助かってきたのは、わたしに悪魔がついているからで、もう一度助かるかも知れない。今度も助かるなら、魂を売ってもよい。わたしはこう悪魔に呼びかけ、尚も望みをつなぎながら、独房の冷たいベッドで一夜をあかした。

10

広場にはすでに絞首台が出来ている。わたしは十三階段をのぼり、首にロープをまかれたが、まだまだあきらめきれず、助命の使者がこないかと横をみた瞬間、わたしの身体はふわっと宙に浮いた。たちまちロープが強く喉に食いこむ。「ウッ」声はもうでない。

「だめだ。死ぬのか」だがプツンと音がしてロープは切れ、わたしは地上へころがった。後手に縛られているので動けない。刑吏がロープを引っばっておこし、再び十三階段へ。

二度目、「ボタン」と踏板がはずれる。思わず悲鳴をあげてしまう。足にじいんとひどいひびき、身体が前のめりになり、ロープで支えられる。今度は長すぎたのだ。

もう一度くりかえす。三度失敗すれば、いかなる重罪人でも放免になるのだ。「何とか助かりたい」わたしは必死だった。

今度は台の下に立たせて、首にロープをかけ、反対の端を数人でひっぱる。吊り下げるのではなく吊り上げるのだ。これなら確実に死ぬし、苦しむ時間はずっと長くなる。万事休す、太くて切れそうもないロープが頸に食いこんでくる。足が宙に浮けば死ぬのだ。「苦しい、苦しい、もうだめだ」わたしはけんめいにもがいたが、絶望が次第にあきらめとか

わってくる。

「もういい、これだけ生きのびたのだから、それにもう苦しくない……」

突然、わたしは自分の身体がはげしくふるえだしたのを感じた。無意識の異常運動である。「ああ、これが死のけいれんだな、ジャクリーヌも、ナタリーもこうなった」ぼんやりと思う。身体が何か、深く夢の中にでも沈んでゆくよう……。

「どさっ」と身体全体に何かぶつかった。まだ頭のなかがはっきりしない。地獄ではなさそうだ。刑吏の舌打ちの声が聞える。するとわたしは死ななかったのか。最後のけいれんがあまりはげしかったので、ロープの結び目がゆるんだのだ。わたしは再び気を失っていったが、とうとう助命されたのだ。

11

わたしの物語はこれで終る。放免されてからは、さすがに改心して遠くはなれたこの町で、真面目に暮らしていたのだが、とうとう殺人を犯してしまったのだ。だがこれはわたしにとって、明らかな正当防衛なのに、相手が有力者だったため死刑を宣告されたのだ。この町ではわたしの前歴を知らないので、多勢が同情してくれたのだが、それも空しかっ

た。かつてのジャクリーヌのときのように。雄々しく死んでいったかわいいジャクリーヌ、あの時彼女は十七才、わたしも二十才の若さだった。あれから六年。いま彼女は天国で安らかにねむっているだろう。だが、わたしは当然地獄行き……

「クロチルド、時間だよ」

気がついてみると、いつのまにか朝の光がさしこんでいる。もちろん絞首台も……

12

わたしは歩いている。あたりは朝だがすべてがぼやけて見える。わたしの服はきれいに洗濯されていた。今迄の刑の時のように、汚れたままではない。靴も磨かれてあった。死刑になりに行くのではないみたいだ、一度はまっばだかで股裂きになるところだったのに。

十三階段をのぼるのはもう何度目か、何故か足がすくむ。どうしたのだろう、今までよりももっとひどく。

「そんなにかからない、たった数分だ」

刑事がやさしくなぐさめてくれる。もちろん、わたしの前歴を知らぬから、こんなになれるのも当然と思っているわけだ。

五段、六段。このあたりからロープと、そ

の先の輪が見えてくる。八段、九段。前方に黒く見えるのは、どっとおしよせた見物人だ。三年ぶりの死刑でしかも女性、これが公開されるとあっては無理もない。わたしの助命運動もおきたというが、この見物人のうち本当に同情の目で私をみてるのは何人いるか。

頂上に立つや、わたしは両腕をとられぐいと後にまわして縛られる。更に激しい恐怖が身にせまってきた。「そうだ！ 今度は死ぬのだ。今までは死刑にふさわしい罪だったから助かった。今度の不合理な判決で死ぬ。これこそ悪魔のいたずらだ、悪魔がわたしを呼んでいるのだ」わたしはこう直感した。

「いやだ、いやだ、助けて」と思わず悲鳴をあげ、のがれようとしたが刑事がしっかりとおさえつける。だめ、泣いたって、どんなことをしたってもうだめ。

わたしの目に黒い布がかぶせられる。刑事たちはわたしの脚に何か結びつけている。にぶい鉄のひびき、次いで首のまわりに何かかけられる。後からおされるように一歩前へすすむ。うすい板の上ののった。この下には何もなく空間だけのような感じ……

わたしは必死で祈った。神さま、神さま、

わたしを助けて。もう悪魔がついているなど思いません。もう一度だけ助けて下さい。一度だけ奇蹟をあたえて下さい……

13

「ボタン！」 「ウワァッ……」

奇蹟はおこらなかった。

わたしの身体は、急激な勢で奈落の底へ転下していった。身体中の血という血が、頭の方へ集注して行って、目から、耳から、鼻から、一瞬火花が散った。

この一瞬の間に、わたしは二十六年の生涯のことを回想して甘い追憶に浸った。短い人生ではあったが、普通の人の何人分にも相当する数奇に満ちたものだった。わたしは、何百年も生きたのだ、そう考えると、雲の上にふんわりと乗ったような安らぎは、わたしの全身をつつんだ。

下に何の支えもない、わたしの足の拇指はぎゅっと前に反りかえり、のこりの四指は、内側へ曲った。もうこれ以上曲らないという極点へきたとき、激しい疼れんがわたしの全身を襲った。沢山の見物人は、そんなわたしを好奇の目で眺めていた。

マゾヒスチック・ストーリー・シリーズ

屈 従 へ の 過 程

もしくは『どっちをえらぶ?』

来 島 世 郎

1
内職のフクロ張りの手を休めて靖夫はテレビをみつめる。

「酒代ぐらいは自分でかせぎな」

と弘子にいわれてはじめて内職だが、もともと手先は不器用だし、第一男の靖夫には、こんな単調な仕事を何時間も続けるというだけの根はない。しかも一日一生懸命働いてもビールの二本とまでは行かないのだ。

テレビではういういしい女性が、はずかしそうに、それでもうれしそうに男の胸にだか

れている。そうだ、靖夫と弘子の間に、もこんな時期があった。つい二年前の思い出が遠い昔のことのように靖夫の胸にうかんで来る。

◆

その頃、靖夫はP自動車のセールスマンだった。会社でも指おりのセールスマンといわれ、歩合給のおかげで月収は十万をこえるほどであった。やややせぎすではあるが、すらりとして、顔もにがみばしっていた彼は、ひとかどのプレイ・ボーイとして女性たちにさ

わがれたものである。弘子との結婚にしてももとはといえば同じ会社でキー・パンチャーだった彼女の方が「結婚してくれなければ自殺する」というほどに彼にほれぬいて結ばれたものだったのだ。もちろん、靖夫の方でも美貌でグラマーな彼女に不足はなかったのだ。

「だから、プレイボーイながら内気なところがあり、商売女にしか手を出さなかった彼が新婚旅行の温泉ではじめて彼女のはだかを見た時にも、弘子は

「私ふとってるでしょう。六〇キロもあるのよ。ごめんなさいね」

と、はずかしそうにいった、ものだし、靖夫の方は、

「いいいいいよ。ぼくは腰さえしまっていりゃグラマーの方が好きなんだ。一六〇センチをこす女性の美容体重は一〇五ひくだけでいいんだよ。それに、夫婦合せて三十貫が一番うまく行くという説もあるしな」

となぐさめたものである。

もっとも今から考えてみると、弘子には、新婚当時から現在の彼女の状態を思い当らせるような素地はあったようである。勝気で派手な性格は、その当時からだったし、夫婦生活にしても彼がリードしていたのは数カ月にすぎなかった。

それでも、一年前のあのいまわしいことがおこるまではよかった。とにかく、彼女は月十万円かせいで来る彼をダンナサンとしてたてまつっていたし、やさしかった。

2

靖夫は、思い出をふっ切るようにテレビを消したちあがる。弘子がぬぎっぱなしで行った下着の洗濯。それから重い足をひきずって夕飯のおかずを買いに行く。

足。この足が、現在の逆転をもたらしたのだ。



靖夫の不運は実に簡単に、そして一瞬のうちにやって来た。

新車二台をまとめて買ってくれるというお客とキャバレーでさわいだ帰り道、多少よっぱらってはいるけれど大丈夫だと思って運転したのがいけなかった。横道からとび出したバイクをよけそこねて電柱に激突。顔は八針もぬう切傷で「にがみ走ったいい男」がだいたしになっちゃったし、どこにぶつけたか複雑骨折で右足は、とうとうまがらないという、生れもつかない片わものになっちゃったのだ。

自動車のセールスマンがよっぱらって事故をおこしたとあっては、うまくない。おまけに、その車はこれから売ろうというグロリア・デラックスの新品だったから、靖夫が退職金などいっさいなしの引責辞職ですんだのはむしろ会社としては暖い処置であったということになる。こうして新婚一年目で、派手すぎた弘子の切り盛りもあって何のたくわえもなかった靖夫夫婦はたちまち明日の食費にも困る状態に追い込まれてしまったのである。

る。

それでも、その時の弘子はやさしかった。「おこってしまったことは不運とあきらめましょう。わたしが働きますから、あなたは傷がなおるまでゆっくり養生して下さい。新しいつとめ口は、それからゆっくりさがせばいいわ」

涙を浮かべながら、彼をばげましてくれたものである。

女性のとっとり早いつとめ口は水商売だ。弘子はキャバレーにつとめることになった。

3

靖夫は一人でまずい夕食をたべる。「今ごろ弘子は脂ぎった男に、チャホヤ云われて、うれしがってるんだろう。あいつのことだから、自分から男の首にかじりついてヒザの上に馬乗りになっているかもしれない。」——どす黒い嫉妬。もとはといえば男の嫉妬が現在の彼のみじめな状態の大きな原因なのだが。



靖夫は三カ月で退院したが、再就職の方は思わしくなかった。私立大学を出てすぐ自動車販売会社に入った彼は、肉体労働はにが手だったし、中小企業の事務員などかつてのはなやかな収入を考えるとやる気にならない。

もう一度セールスをとも考えたが、顔の傷とびつこというコンプレックスがおおぜいの人間に会うセールスの仕事をもためらわせる。そんなこんなでずるずるしているうちに、靖夫はいつの間にか水商売の妻に養われる男になり下っていた。

だから、最初は「弘子も大変だろう」と思っではじめた家事の手伝いも、いつとはなしに妻におもねる手段となる。男のこのような変化は弘子にもすばやく反応して家事のすべてを靖夫におしつけるばかりでなく、「私が養ってやっているんだ」という態度がだんだん露骨になって来た。帰りも四カ月、五カ月とたつと目だって不規則になる。

なまじプレイ・ボーイとして遊び方を知っていただけに、弘子のこのような変化を見ると靖夫の嫉妬も激しくなった。自分がみじめになればなるほど「弘子にすてられたら……」という気持だけが強くなって来るのである。酒にまぎらしているうちはまだよかったが、しだいにくどく弘子にからむようになった。

最初は、

「ね、おねがい。何もかもあなたのためにしてることよ。目をつむって。」といった弘子も、やがては、

「キャバレーで、指名をたくさんとろうと思えば、それ相当の苦労があることぐらい、あなただって知ってるでしょう。きわどいこともしなきゃなんないのよ。」

というようになり、最後には、

「私に養われてるくせに、うるさいわね。気になるのなら女房に水商売などさせずにすむように自分でかせいでくりゃいいじゃないの。あんたがそんなじゃ私が浮気したくなるのもあたりまえでしょう。」

というようになった。

こうして、夫婦の経済力が逆転してみると、いつの間にか家庭生活のすべてで、靖夫は弘子にリードされるようになってしまった。よっぱらって帰った弘子が靖夫を押し倒すことがあるかと思えば、じゃけんにふり払って背を向けてさっさと眠ってしまうこともある。そんな時にも、靖夫は何となくけおされてしまつて、どうにもできないのであった。もともと体重の上ではノミの夫婦だった二人だが、こうなってみると弘子はますます豊満になるのに対して、靖夫の方は入院以後はヒヨロリとなり、何となく影がうすくなった感じであった。

4

夕飯を終わっても靖夫にはすることがない。

フラリと外に出ては見たものの、内職の金だけでは酒も飲めない。ただ当てもなくほつき歩く。こんなみすばらしい男でもポン引きが寄って来る。ヒモ——彼らも女に養われてる。しかし彼らは暴力で女を絶対的に支配している。女に養われている上に、暴力でまで女に支配されている靖夫はいったい何なのだ。



決定的な敗北は四カ月前だった。それでもその時までには靖夫は、まだまがりなりにもテイ主ヅラをしていたのだ。

その前日、弘子はどうとう帰らなかった。「どんないいわけをするだろうか、どんないいわけでもいい、それを信じよう。」と思って待っていた靖夫に、弘子がいったことは「お前、飲み代がほしいんだらう。かせいで来てやったよ。」

ということばだった。

靖夫は目の前につきつけられた五千円札をひきさくと同時に、弘子のはほをなぐりつけていた。それは彼自身にも制御できない衝動的な動きだった。

しばらくはほをおさえていた弘子は、激し

く目を光らせると、いったものである。

「お前、私をなぐったのね。私に養われていながら、私をなぐったのね。いつまでも甘えてると承知しないわよ。さあかかったいで、いためつけてやる。何だい。チンバのヤセッポチなんか負けるもんかい。」

それからの二人の乱闘はまったくたあいなく、弘子のこ とばどうりになった。靖夫の抵抗はとつきみ合ったまま二・三回ころがったところまで、靖夫のやせ細った胸の上に馬乗りになった弘子は、両腕をヒザの下に組み敷いた後は、「着物がいたむから」とゆっくり帯をとくほどの余裕をみせたのである。それでも靖夫はしぶん必死になって足をバタバタさせたのだが、それも今といった腰ヒモでしぼり上げられてしまった。



結局、この日靖夫が許されたのは、朝帰りの弘子が、その日のつとめをおえて帰って来

た真夜中であつた。よって帰った弘子は縛り上げた靖夫を、さんざんおもちゃにしてからかったあげく、両手をついてあやまらせたのである。

5

そろそろ帰って風呂の準備をする時間である。仕事から帰った妻の体のスミズミまでを洗い、ベッドで腰をもむのも彼のツトメとなった。もっとも数多くのツトメの中では最も楽しいツトメなのだ。

◆

四カ月前のあゝ出来事以来、夫婦の立場はあらゆる面で完全に逆になった。

弘子は気げんがいいといつては靖夫をいじめ、不愉快なことがあつたといつては靖夫をいじめる。

気げんのいい時はまだよかった。

弘子は、ベッドで靖夫を、彼女のこ とばによれば、「おしつぶす」「しめあげる」という責めをしつようにくりかえす。それは苦痛ではあつたが、それでもどこかに甘美な愉悅があつた。気げんの悪い時は、靖夫にとって地獄だつ

た。投げつける、けとばすというのは序の口で、最後には、今では六十五キロになったと豪語するその全体重をかけて靖夫の顔を踏みにしり、胸の上にまたがって失神するほどなぐりつけるのである。

「この顔。このみにくい傷あと」とつぶやきながら。

6

弘子様の御帰館。今日は気げんがいいのか悪いのか。さっそく風呂場へ。靖夫もいつものようにパンツひとつになって従って行く。

ところが今日はいつもとちがっている。「靖夫。今日はイヤな奴とつき合って来たの。」

一歩さがった弘子は、いきなりひざで靖夫のアゴをけりあげる。靖夫はもろくもおお向けにころぶ。弘子は風呂に飛び込む。

「私も残酷な女ね。ほんとうに。私あんたの苦しむのを見ているのが楽しかったの。もちろんあんたをずいぶん責めたわよ。腕力です。ただね、あんなことは、まともな夫婦だつて時にはやってもいいことよ。だけどそれはたいしたことじゃないの。ほんとはね、あんたが嫉妬に苦しんでいるのを見てるのが楽しかったの。それに自分がダメになって行くと

思いながら苦しんでるのを見てるのが楽しかったの。

けどね、私をこんな残酷な女にした責任はあんたにあるのよ。あんたっていくじなしよ。あのけがの後であんたがどんなことでもして自分の力で生きようと思ってたら、私だつてこうならなかった筈よ。私ね、あんたが私に頼ろうとしておべっか使うのがたえられなかったの。そのクセヤキモチは人一倍やくでしよう。私が好きだのに幸福にしてくれようとしな。自分一人で生きるのもこわくなくて私から離れられない。そんなあんたをみると、とことんまでいじめてやれって気にさせられちゃったのよ。私、サジスチンっていうことばだつて、最近まで知らなかった。けどもうダメよ。いちど味わった私にはこの楽しみは捨てられないわ。

ね、私パトロンができたのよ。だからもう一回だけあんたにチャンス与えてあげる。

自分一人で生きてごらんさいな。手切金にパトロンから五十万ぐらいならまきあげたげる。あんた自信なくしてるみたいだけど、女って、たとえ顔に傷アトがあつてもチンバも、一生懸命生きてる男にはほれるものよ。できつといい人が出て来るわ。五十万もとで

して何かやってみなさいよ。

けどね、フフフ……どうしても私と離れてられないっていうなら、それは別よ。犬にしパトロンのたててくれる新しい家につれてってやってもいいわ。下男として使うから、犬よりはつらいかもしれないわね。だけど気が向いたらかわいがってやるわよ。フフ、今度のパトロンっていうのね、変ってるのよ。新しい家の一部屋、レスリング場にするっていうの。ところがね、あんたよりやせっぽちでチビなの。問題になんないじゃない。だからね、美容体操がわりに時々そこでおしつぶしてやったり、しめあげてやるわよ。ね、どっちをえらぶ？」

靖夫はタイルの上で、その声を天女の妙音のように、うっとりとして聞いていた。

弘子の飼犬として彼女のパトロンの家に飼われる自分のみじめな姿を想像することは、現在の彼にとっては快い自虐味があった。生活力のある彼女に従っていたら、食いはぐれだけはあるまい。働くことに意欲を失った彼は、パトロンという痩せたチビ男と自分と一緒になつて弘子からいじめられている場面を空想して恍惚となっていた。

(おわり)

「奇譚三十九夜」物語

第三十夜

辻村 隆

初秋の月が、プロブレメントに澄んだ影を投げかけている、爽やかな宵です。

メンバーは例によって八人——。退屈男達は三々伍々、定刻にはこのクラブに集って、雑談に華が咲きます。

今宵はフォートの持参者はなく、三十夜を記念してショート・ショートの小話を数多くすることをワイン氏が提案いたしました。提案したワイン氏自身、範を垂れるがごとく、グラスを置くと、先ず口を切ったのです。

第六十六話 姫君と便器

望月の欠けたるを知らずという藤原全盛時代——。

猫間中納言清隆はその一門として、いみじくも亦、美貌を誇るプレイボーイであった。

宮仕えの女達で、この中納言の恋の手管に陥落せぬ者としてなく、果ては人妻、娘と、彼のゆく処、光源氏も影薄き有様にて、数年前源氏物語を完成した女官、藤原香子（紫式部）をも流石に呆然たらしめた程である。

併しこの恋の貴公子も、本院の大臣の娘、盛子とて、世上淡雪の君と呼ばれる膈たけたる姫君には、心底からゾッコン惚れ込んでしまった。齢いは明けて十八、その花のかんばせは、絶世の美しさは、洛中洛外は云うに及ばず、雲上にまでも聞えていた。

姫はやんごとなき身を深窓に隠していたが、一たび、この淡雪小

町を垣間みた者は、忽ちに恋の虜となつて、綿々たる艶書を、人づてに送り、大臣の屋敷内から数多の男達の恋文を焼く煙の昇らぬ日とてなき有様だった。

プレイボーイをもって自認する中納言も、何卒して姫をわがものにしようと、幾度となくふみがきを送つて、しきりにモーションをかけたが、ついぞ何のいらえもなく、流石豪の者清隆も焦れに焦れた。

恋は曲者——。色男の面目丸潰れの中納言は、遂には恋の盲目となり果てて、のるかそるかの大ばくちを打つ気で、秋の一夜、本院の局に忍び込んだのである。

こおろぎが、ふるように鳴きすだいていたが、うるしの闇を手探りに、きざはしに近附くと、ハタと一斉に鳴き止んだ。

人々はもう寝静まつてか、辺りは寂として音もない。

中納言は拔足さし足で、やり戸の掛金を外し、姫君の臥床と覺しき辺りまで忍びよった。

そこはかと麝香の忍び香が甘くやるせなく中納言の鼻を擦った。

しとみを音もなく開くと、短けいの下に、淡雪の君は安らかに眠っている。

中納言はもう日頃のプレイボーイ振りは何処へやら、彼はその寝顔の、この世のものとも思えぬ余りの美しさに、膝がガクガクと震え、激しい動悸が高鳴り出した。

気配で姫はフト目覺めた。円らな瞳は黒耀石のように澄んで、あどけなく開いた唇は、濡れたように光っていた。

驚かしてはいけないと、中納言は恭々しく平服して、

——恋しき淡雪の君よ——。心こめたる送り文の度毎なるに、ただ

一度びの御返書だに賜わらず、さりとはむごきお仕打。せめて誠の心、一言ききたさに、恋のめしいとなり果てて夜中推参致しました。色よき御返事賜わりとう御座います——

と怨みのかずかずを綿々とのべて、姫をじっと見やった。

されど姫は女の童などから、猫間中納言のガールハント振りを絶なく間きいていたから、おいそれとは、甘い誘いの手にはのらなかった。

恥をかかすもせんかたなき事と、心早く一計を案じ、価千金の笑みをこぼして、

——かほど迄の思召し、身に余る嬉しきことに存じます。さり乍らやがて女の童も夜の伽に、現われまする故、言い含めて参りますから、暫らくお待ち下されませ——

思い叶った嬉しさで、中納言はゾク／＼して姫を待った。瀬戸の辺りで、戸の開く音がし、やがてサヤ／＼と衣摺れが、奥の局へ消えたが、しかし、それっきり暁の雞の聲が、トキを告げても、姫は戻ってこなかった。色男は完全に、姫にしてやられた。地団駄ふんで齒ざしりしたが時既に遅し——。

恥辱と憤懣に燃え乍ら、中納言はボケのようになって、朝陽の射し始めたきざしに出た。人眼につかぬうち、この間抜けた姿を隠してしまわねば洛中の笑い者になる事は必定——。

彼は無念そうに瀬戸の辺りを振りむい途端、オヤツと思った。

奥の局に通ずる廊の片隅に、香染めの薄ものをフワリと掛けた、円い黒塗りの什器が置かれてあった。

凝然と見つめて、中納言は、それが、やんごとなき、深窓の姫君が用いる便器であることを見てとった。藤原時代——、廁を利用す



るのは男や、下賤の女達であって、女御は申すに及ばず、宮仕えの女官、何々の君と云われるやんごとなき姫君は、粹をこらした便器を使用し、大体、毎朝、女の童などが、薄物、扇子で蔽い乍ら、小

の塊りをつまんで口に運んだ——。何と云う美味……。それは姫の名さながらに、淡雪のように舌の上で解けて、甘く、やわらかく、中納言の舌を甘美にしびれさせた。

川へ洗いに行くのが慣習になっていた。このおまるは正しく姫のもちうるものに違いなかった。中納言の眼はいきいきと輝やいた。彼は素早い身のこなしでおまるを片手に抱えると、脱兎の如く、大臣の家を抜けて走り出した。

おまるの中味を丁寧に包んで送り返し、姫君の顔を赤らめさせようとしたのか。はた又、せめて姫の残香を嗅ぎたかったのか——。

とあれ、我が家に戻った中納言は、一室に閉じこもると、らでんを嵌めこんだ、結構なるおまるの蓋をとった。

プンと鼻をうつ、得も云われぬ丁字の香り——。しみじみと眺めて中納言は溜息をもらした。

おお、姫はこうした、人の忌み嫌うものに迄も、やはりやんごとなくおわしますか……。

猫間中納言は、貪ぼるように鼻をすりつけ、物狂わしく、黄金の物体から、姫の匂いを嗅ぎとり、恋の香りをいとほしんだ。

果ては、おまるの底にたまる液体を、恭々しく汲い上げては旨そうに飲み干した。そしてかたちよく、おまるの中央に盛り上った、黄金色

中納言は生れてこの方、始めて、この様な珍味を賞したように思われた。

その頃——、淡雪小町は女の童も頬を染め合って、笑いころげていた。

夜の闇を狙ったガールハントの、この不屈者をマンマと欺し終せたからである。

すなわち——。尿と見せかけたのは丁字の煮メ汁であり、黄金物体は色似せた羊かんに外ならなかったからである。

この姫君の心憎さ——、げに女の童の口の端の、それからそれへと伝わり、洛中洛外は、ひねもす、猫間中納言の噂でもちきりだった。人呼んで、糞喰い中納言——。

× × ×

ワイン氏の話は終って、ついで、ドクター氏が話を継ぎました。

第六十七話 妊婦の腹切り

曲枝が妊娠六ヶ月になった時、あれ程子供を欲しがっていた内縁の夫の八郎が、突然冷めなくなり出した。彼女が泣いて八郎にその訳を問い訊したが、彼は、

「自分の胸に問え——」

と冷たくいい放って、日頃たしなめ酒を冷やであおり、パイと飛出すと、麻雀屋に二日も三日も居続けして帰ってこなかった。

夫の心变りの原因が、由枝が結婚前に勤めていた玩具工場の、保吉のひどい中傷からであることを由枝は数日後に知った。

思い悩んで、昔の工場友達を訪ねた時、彼女は、保吉が一杯飲屋で酔余から喋っていたということを聞かされた。

由枝は顔面蒼白になって、軽い脳貧血を起した。八郎と結婚して愛し愛され、狭いアパートの一室ながら、優しい蜜のような生活に満足しきって暮らして、口喧嘩一つしたこともない仲だったのに、昔のたった一度のあやまちを、保吉が喋り立て、それを八郎がきいたなら、どういう結果になるであろうか——。純粋な八郎だけに、由枝は彼の怒りが分るような気もし、それとともに、保吉に殺してやりたいような激しい憎しみを覚えた。

工場の創立記念日に、契められてのんだ祝酒が、ほんの僅かだったのに、酒には全然弱い由枝はひどく悪酔いし、それを魂胆ある保吉が介抱し、夢うつつで由枝は彼に抱かれていた。いわば、災難ともいえる過失だった。なお、悪いことに、由枝はその寝乱れの姿を保吉にカメラにとられていた。

保吉はそれをタネに、再三、由枝に迫ったが、由枝は頑として拒み通し、遂に秘密にするという約束で、ボーナス貯金五万円を保吉に渡して、ネガをとり戻し一切口外せぬと堅く約束した筈であったのだが……

五万円を渡した時、由枝は会計部の八郎と淡い恋愛関係にあり、それだけに同工場の保吉の脅迫めいた言葉を恐れて、いわれるままに金を渡したのだった。

八郎は、保吉の酔余の手柄話を友達から知らされた時、冗談半分にきいていたが、由枝の内腿のホクロのことまで、委細を話したという彼に、ハタと疑惑を感じた。由枝を犯した憎い奴というより、酒に酔って易々として、つまらぬ不良じみた保吉に身を委した由枝の方が一層憎かった。由枝は結婚後にも、ついぞ一言もそんな秘密を洩らしたことがない。綺麗な体だと信じて一緒になった八郎だけ

に失望と憤懣は大きかった。腹の子が自分のタネであると心で納得しても、由枝が汚れているようで、生れ出る子供自体まで不潔に思えてくるのだった。

七ヶ月——。すでに目立つ腹を抱えて、由枝は八郎に懸命につくしたが……。

八ヶ月——。八郎の冷めたい眼が、大きく突き出た由枝の腹部に憎々しくささって……。

九ヶ月——。欲求不満の八郎が、他で女をつくったと聞かされた……。

由枝は臨月の迫った大きな腹を抱えて、夜毎狂おしく思い悩んだ。そして——、逆に恐ろしい必死の決意をきめたのである。

不気味そうに保吉が、由枝の前に現われた時、由枝は極度の憎悪をこらえて、努めて優しく笑いかけた。

「ねえ、お手紙にも書いた通り、ヘンな話だけど、一生の思い出に私のこの大きなお腹を写真にとって下さらない？。こんなこと頼めるのは、昔なじみの貴方しかないんだもの——」

媚を含めて、囁やくようにいうと、保吉は忽ちニタニタして、下手の横好きのカメラをとり出して、見せつけがましく擦りながら、
「ああ、いいとも。由ちゃんの見事なポンポンをとらして貰えるなんて、全くカメラ冥利につきるよ。もちろん、裸でだろうね——」

「そうよ——」

むかつきそうになるのを、ぐっとこらえて由枝は無理に笑った。

「でも、誰にも見せないでネ——。アンタだけよ……」

殺し文句に、保吉はゾクゾクしながら、傑作がとれたら、不良仲間には回覧してやろうと考えていた。

仕事日に呼び出したので、保吉は工場をサボって出てきていた。八郎は昨日も帰っていないが、工場へは出ているに違いない。

由枝は保吉を家に招き入れると、酒をすすめた。酒に仕掛けがしであるとは保吉は気付かない。それ程に警戒をゆるめていた。

酒をのむ間、由枝はこれが最後のつもりで、保吉の前で、ゆるゆると着物を脱ぎにかかった。見事に突き出た腹に、保吉は珍らしいものを見るように眼をみはってニタニタしていたが、その眼はトロリとしつつあった。

ヨロヨロと立上って、由枝を抱きかかえようとしたが、彼女はスリと逃げ、

「さ、早く撮ってネ……早く早く。寒くなってくるじゃないの……」

声にせき立てられ、ノロノロと保吉は、カメラをとり出し、ライトバーを出して支度にかかったが、ともすれば、手は動かなくなっていた。そして、カメラを握ったまま前へのめってぐたりとした。

見すまして、由枝は、保吉に近よると、準備しておいた荒縄で、雁字搦目に縛り上げ、柱のところまで引曳っていった。縄々と、暴れても、もがいても解けぬように縛りつけた。声を立てられぬよう、雑巾を口一杯に押し込み、その上からタオルで確かかと縛って、革のバンドで、憎悪を力一杯叩きつけた。軽い昏睡状態よりさめた保吉は、必死にもがいたが、いつしか、保吉のシャツは破れ、皮膚にじかに激しい鞭が当たって、点々と白いシャツを赤く染めていた。カメラをとり上げると、由枝は自分の幸福を踏みじった機械を力任せに投げつけ、レンズの破片が辺りに飛び散った。

由枝の体内に、復讐の血が湧き上り、無抵抗の保吉を虐めるだけ虐めて殺し、自分も死ぬつもりでいた。

由枝が鋭利な西洋カミソリをとり出した時、保吉は恐怖の絶頂にあった。眼をひきつらせ、縛られた全身はおこりのようにガタガタと震えて鳴っていた。由枝の手が、彼のズボンにかかった時、彼は由枝が西洋カミソリで何をしようとしているかを判然とさとり、狂気のように身をよじって、眼で哀願した。

ズボンがずり下げられ、由枝の手がパンツにかかった時、突然の変異が起った。急激なショックと精神的アンバランスが、由枝の体を激しい陣痛へと一氣にかり立てたのである。

保吉の眼前で、彼女は呻き、空を掴み、そして体をかがめ、畳をかきむしってもがき苦しんだ。この状態では病院へも走れなかった。陣痛は絶え間なく彼女に容赦なく襲いかかった。

彼女は転げ回り、いつしか、片手に西洋カミソリが再び握られていた。いずれ死を覚悟していた彼女であったが、生みの苦しみに堪え難く、由枝は苦しみから逃れようと、無我夢中で、カミソリを自分の腹に押し当て、胎動するその辺りめがけて、グサリと腹を真一文字に二十センチばかり、一氣に切り裂いていた。溢れる血汐、どろどろとした血汐の中へ、己れの手を挿し込むと、由枝は両手で腹の子供をとり出し、それと同時に失神してしまった。保吉は唯、痴呆のように縛られたまま目を見開いていた。

異常な物音と騒ぎで隣りのおばさんが、やっと表をこじあげ、飛び込んできて、びっくり仰天——、医師と八郎が直ちにかけつけて、血の海に横たわる由枝の傷口を縫い、子供の臍の緒の処置をした。

しかし柱に縛られた保吉が、真蒼になって、血を全身ににじませているのは、どういうわけか、一同、何とも説明のつけようがなかった。

壊されたカメラ、打擲された保吉、しおれた哀れみを乞う姿に、八郎だけが、薄々、由枝の気持をさとしたようだった。

二、三ヶ月後には、母子ともに奇蹟的に健康をとり戻した。そして、壮然極まりない由枝の涙ながらの告白をきいて、八郎は優しく妻の髪を撫でてやり、数奇な運命を担って産れ出た嬰兒をいとおし気にみつめるのであった。

「こうした妊婦の腹切りが、可能か不可能か、外国のこんな話を締めくくりに喋って終ります。

ドイツはボーデンバッハのビーラの町に住む、三十七才の女性が、妊娠八カ月の末に、突如陣痛が起り、二十四時間続いて、なお、産産はつづき、主人が不在で、やむなく死ぬより外はないと自らカミソリをとり上げ、腹壁から子宮壁へと、層を追って徐々に切り込んで行きました。やがて胎児を自分の手でとり出し、臍帯をきり、最後には胎盤までとり出しましたが、胎児はすでに死んでいました。運よく往診に來た産科医はびっくりして、大急ぎで傷口を縫い、ホータイをしておく、数月間床にいただけで、彼女は間もなく恢復したとのことです。妊婦の切開手術は一般に、帝王切開と呼ばれています、これはドイツ語のカイゼルシュニットの訳語でありまして、切り開くという意味ですが、カイゼルの名を誤訳して帝王としたため、この名がついたそうです。女の一念、世にも凄まじいというお話です——」

ドクター氏はここで打ち切って、隣りのナイロン氏を指さしました。指名されたナイロン氏は、さらばと姿勢を改めます。

第六十八話 妖美人緊縛

衆人環視の前で、昇旭斎天坊はハナコを悠々と縛りだした。こないないショーバイは外にないと彼は思っている。ムッチリした肉付、ドーラン化粧のハナコは、七色のライトを浴びて、素顔とはまた違った、妖艶なセクシムードを醸もし出していた。

細引がまるで生きもののように躍動して、ハナコの全身は残るくまなく、ひしひしと緊縛された。ぐいと二の腕をこじ上げ、後手に高手小手に縛り上げ、首縄から足首まで縄でしめかためられたハナコは、天坊の口上によって、巧みに爪先で回転して、その緊縛された後手の姿を衆人に明示した。観衆はハナコのビキニスタイルの肌を縄目で深々と喰い込ませた緊縛の姿に、ゴクリと唾をのみ、妖しい残酷美に、すでに陶醉している。

天坊はなおも演出効果を高めるため、かぶりつきの客を舞台に押しあげ、ハナコの緊縛が本ものかどうかを、いちいちハナコの肌に客の手を触れさせて確かめさす。

それがすむと、彼はハナコの両眼を漆黒の厚い布できつく結んで眼隠しした。パントマイムの天坊のしぐさよろしく、合図すると、インド舞踊の音楽が流れはじめ、赤黒いドーランにターバン姿で、髭もじやの付髭をした彼の動作にメロディーはよくマッチした。

天井からスルスルと一本の、丈夫なロープがおりてきて、その先に、スパンコールでキラキラと輝やく桃色の大きい袋がロープの先端の鉤に引っかかっていた。

天坊は袋をロープより外し、袋の口を拡げて床におくと、ハナコの腕をとって、ジリジリと小刻み歩きに、袋の中へ誘導した。袋の底に足が安定すると、彼はスルと袋を押し上げて、巧みにハナコを袋へ入れた。袋の口を締め、縄の結び目をセロテープで密着させて、その結び目をロープに掛ける――。

おどろおどろしい打楽器のリズムが、急テンポに変わり、タンバリンの音が、軽やかに響きはじめると、ハナコの入った袋は、スルスルと宙に吊り上っていった。彼女のなまめかしい体の線が、クッキリと袋に浮き上って見え、足許不安定の中で、ハナコのうごめくのが、袋の揺れとともに、観衆にはありありと分った。一樣に視線は空を仰ぎ、袋に注目していた。その時――、黒い円筒が二本の細いロープによってスルスルとおりてくると見ると、宙吊りの袋をスッポリと円筒内に包み込んで、徐々に宇宙の物体は下降を始めた。円筒が床に着き、リズムがスローに変わり、やがて静かにやむと、天坊は金色の杖で、円筒をハタと叩いた。筒は真中からパクリと割れ、そこから、ハナコが艶然とこぼれる媚笑を浮べて現われ出たのである。

不思議や、長々とつながった細引は影かたちなく、ロープの先には、セロテープの跡もそのままに、桃色の袋は、だらりとしおれてぶら下がっているのみであった。

万雷の拍手――観衆は唯、わけもなく、この嗜虐趣味横溢した、昇旭斎天坊新手披露の魔術に喝采を送った。

『妖美人の緊縛』の第一回公演は成功した。

楽屋で天坊は花束に埋もれて、苦しかった試練と、習得の日々を回想していた。ハナコは化粧落しに楽屋風呂へ入った様子だった。

△……儂は心に巢喰っている、潜在的なサジストの血を騒ぎを知った時『妖美人の緊縛』なる演し物を思いついた。

儂はハナコを何十回、いや何百回縛ってきたことだろう。ハナコが換骨脱胎が自由になる時まで、儂は、ある夜は、縛り上げたハナコを擲打ち、ある時は、簡単な縛りすら解けないハナコに齒搔ゆくて、解けるまで、半日も縛ったまま放置していたこともあった……。

縛っている最中に、マスターが来ても、ひいき客が突然訪れても儂は緊縛の手を休めず、むしろこれ見よがしに、裸に近いハナコを彼等の眼前でひしひしと縛り続けていた――。

儂の嗜虐性が爆発した時など、深夜の劇場の、寝静まった舞台の中央で、ハナコと二人っ切りで、袋に入らず、ハナコの後手にじかにロープの鉤を掛け、スイッチを入れて、幾度となく吊り上げ、吊り下げ、あまりの苦しさに悲鳴をあげると、強く猿轡をはめて、夜明けまでも続けたものだ。どうしてもできないと、腹立ちまぎれに、袋を頭からかぶせ、足許で袋の口をしめて、逆さに吊り上げてやったこともあった。どんな苦しい目にあっても、ハナコは易々と服従し、十八才の若さに似ず懸命に芸を覚えこもう、やりとげようと努力していたのは、儂にもひしひしと分っていたよ。

連れ合いに死なれて儂は六年間、やもめ暮しをしたが、若いハナコを弟子として迎え、この『妖美人の緊縛』をけいこするようになつてから、儂は六十二才という自分の年令をいつしか忘れるくらいに愉しかった。儂が考えついたこの魔術のタネはハナコの外誰も知らない。いや、むしろタネは簡単だ。問題は緊縛の訓練と、ハナコのこれに堪え得ることのできる肉体が必要なだけだ。儂はかくハナ

コを緊縛し続けてきたが、自由を奪ったハナコの体に何も求めようとしなかった。全然無抵抗で、体を投げ出しているハナコに、くちづけ一つしようとしなかった。師の道は厳しく、若しハナコの自由を奪って、儂がヘンな振舞をすれば、儂の師としての矜持を失なうと考えて、ピチピチとした、まるで咲きたての姫百合のようなハナコの豊満な肉体に、ともすれば抱きしめたくなる心を必死に押えて、儂は幾度か目をつむり、邪念を払拭して今日まで、綺麗な間柄できたのだ――。

昇旭斎天坊は老いた駄馬だ、碌な手品もできないと、蔭口を叩いている、押田地好の奴に儂はこれで一泡吹かせてくれる――。この魔術を続けていく上においても、儂はあのハナコを、そばに引きつけておかなくはないけない――。そうだ結婚しよう。六十二才と十八才といったって、儂の五体は未だ健全だ。詩人でもっと年長の奴が、若い女と駈落ちしたことだってある。問題はハナコの気持だが、儂の芸に対するいさぎよさに、確かにハナコは儂を尊敬し、時にはいたわりと、愛情にみちあふれた眼で儂を見ていた。愛情の言葉は交さなくとも以心伝心で、儂の愛情が、ハナコにははつきりと汲みとれる筈だ。

世間は騒ぐだろう。ゴシップは書き立てるだろう。マスコミはうるさくつきまとうだろう。それもよし――。儂はハナコなくては生きる望みを失くした男なのだ。緊縛の汗にぬれるハナコ、逆吊りに揺れる豊かなヒップ――懸命に換骨しようともがくハナコ、縄目にくびれた逞ましい乳房――。儂はハナコを死ぬほど愛していたことを、この第一回被露公演の日にやっと気づいたのだ。ハナコ……天坊の瞑想は、そのとき扉を開いて這入ってきた、メッセンジャ

ボーイの出現で破れた。

ボーイは一枚のメモを手渡すと立去った。フアンか、興行主かの連絡でもあろうかと、軽く開いた彼は、文字を眼で追って、卒倒しそうになった。それにはこう書かれてあった。

「御師匠様、長々とお仕込みいただき有難うございました。縛られる愉しみ、これを教えて下さったことは、私の生涯の想い出でございます。私は年を隠しておりましたが、二十一才、そして、も一つタネを明せば、先生のおきライバル、押田地好の新妻でございます



す。密月を擲うって、夫は未熟な私を先生のところへ修業にやらせました。もうお判りでございましょう。夫の地好が貴方様の蔭口をいいふらしましたのも、一つは励まし、一つは仄かな嫉妬からだと思っています。でも先生は紳士でございました。なつかしき、いましめの数々を心に偲び、今宵からは、このいましめの数々を夫に教示して、私は緊縛の愉しみの時間を、夫と充分に夜毎持ちたいと思います。海山のご恩は、先生の『妖美人の緊縛』に勝る、凄惨極まりなき残酷美を發揮した、緊縛大魔術を完成することによって、お礼にかえさせていただく所存でございます。ではいついつまでもお元気で——

ハナコこと 押田花世
昇旭斎天坊大先生 膝下

自らもアマチュア手品に興味をもつ、ナイロン氏の話は終わりました。秋空に月は更に、銀色の輝やき、ひしひしと夜のしじまが、クラブの一室にも忍び寄ります。次のバッテリーはライカ氏——、どんな話が飛び出すことやら、人々は一様にライカ氏を注目しました。

第六十九話 恋の闇取引

バー、クレイジイのマダムは、四十才に手のとどく年令には到底

見えない、若々しい肌の色艶をチラリとこぼして、よく光る黒い瞳を輝やかせ、酔いが快く回ると、こんな話を打明けてくれた。自称サジストが売物の彼女である。私はなじみの店――。

「終戦直後の、あの食糧難の時代は、悪い夢のように蔭張り忘れたつもりだけど、あの頃に、私の嗜虐的な性質が植えつけられたのだと思うと、あの時の記憶は生々しく蘇がえってきて心から消えないの。」

ご多聞に洩れず、私達一家も敗戦直後、ひどい食糧餓饉に陥り、カスリのもんべに、洗いざらしのシャツ一枚で、はたちの若さを包んで、貨物のような電車に押しつぶされそうになりながら、田舎へ買出しに出かけたものよ。お召しや銘仙の着物が、わずか一斗か二斗のお米に化け、タイコ帯でも叩かれて五升にもならず、どんどん減っていく愛著の衣類に、私は身をきられる想いで、それでも生きていくためにはやむをえず、泣き泣きリュックで運んだものだわ。徹底した消費者のタケノコ生活の時代だったわね。

そろそろ衣類もタンスの底をつき、暗胆とした気持ちになっていた時のこと。その日も母の着物や妹の分までかり出して、いつも馴染の百姓家さんへ行ったけど、生憎留守で、ガツカリしながら、隣りの家を訪れたの。村の評判では、随分シマリ屋で、交換条件も仲々カライって話を聞いたけど、背に腹はかえられず、その家を恐る恐る訪れたの。運よくおやじがいたが、若い娘の私をジロリと見て、用件を切り出すと、案外もの分りよく、通り相場で米にかえてくれたのでホッとしたのよ。

おやじは四十前後の働らき盛りの年配だったと思うけど、それが案外親切で、風呂をわかしただころだから、ちょうどいい、入って

いけとすすめてくれるの――。あまり遠慮してもいけないと、再三奨められて、私は久しぶりにのびのびと、その鉄砲風呂に旅の汗を落さしてもらった――。

何ぞはからん、おやじは私の入浴の光景をすっかり覗き見していたのよ。あとで分ったことだけど……。眼の保養のつもりだったんでしょね。風呂から上ると、ふかし芋をご馳走になったりして、大変な親切ぶりに、私はその時ずいぶん感激したものだわ。

女房、子供もあるというのに、変ったおやじでしょう。

帰り際、おやじはニコニコして、今度くる時は葉書でも先にくれれば、また風呂をわかししておくからと、親切氣にいうのよ。もちろん魂胆あったのことだったけど、若い私は凄く感激して帰ったものだわ。その後、買出しの度に、前後四回ほど風呂へ入れてもらったから、都合四回は覗かれていた勘定になるわけ。

怪しいなとカンづいたのは四回目の時のこと、風呂の羽目板の節穴が、なんだか大きくなった感じで、わざとあけたような穴が、気をつけて見るとアチコチにあるの。これは覗かれている――。そう気付いて、湯舟に身を沈めて、静かに耳をすますと、微かながらおやじの息づかいが聞こえる。私は胸がドキドキして湯から上れなくなっちゃった。

ええいと度胸を出して、ザブリと出ると、いきなり、覗いていると目星をつけた羽目板の穴に向って、湯桶で二、三杯、つづけさまに湯をぶっかけてやったの。

あわてふためく音がきこえ、忍び足でバタバタとゾーリの足音が去ったのを見すまして、あわてて飛び出したけど、体がカッカッしちゃって、無性に腹が立ってきたんよ。

——覗いていたんでしょ。男なら男らしく、はっきり白状なさいよ——

私はきめつけてやったわ。おやじは始めシラバクレて、とぼけていたが、私が涙をためて抗議したので、流石に閉口し、米をタダでやるから我慢してくれというのよ。当時としてはいい話で、私は占めたと内心喜んだけど、甘い顔をしちゃ、つけ上ると思ってウンといわなかったの。それどころか、かくかくしかじかだと、村中に触れ回ってやる、買出しの連中にも吹聴する、といってやったわ。ええ、もちろん、そんな恥かしいこといいふらす気は毛頭なかった。自分の恥ですものね。

おやじはすっかり弱った顔になったのよ。案外田舎者だけにウブなところあるのネ。この地方は夜這いなんて、しょっちゅうだからノゾキぐらいには、罪悪感を感じなかったに違いないと思うんだけど、おやじが村の農業委員のところへもってきて、養子で女房に頭の上らなかったのが、こちらのつけめ——

——奥さんにいいつけますわ——と、チラリもらしたら、びっくりした顔になって、気のすむようにしますからっていうじゃないの——。何かうんと困らせてやりたいイタズラ気がムラムラと起って、——いいわ、では私のウマになりなさい。四つ這いになって、私をのせて、座敷中這い回るのよ。へたばったら、鞭でお尻をピシピシ叩いてあげるわ——

こんなことをいう私って、矢張りどこかサジストだったんでしょ。うね。小学生の頃、よく男の子を泣かしたり、いじめたりしたことあったけど、年頃になってこんな気持になるの珍らしいわ。自分でそういって、ハッと自分で赤くなったけど、おやじは妙にニタニタ

と笑って、じっと私の顔を見ると、さも嬉しげに、汚れたズボン、シャツをとり、禪一本になって、日焼けした逞ましい体を曝して、——ハイハイ、ではいわれる通り、どうぞお乗り下さい——って四つ這いになったものよ。

消費者の与えられる弱さから、一転して、私は急に優越感を覚え今までともすればご機嫌をとるようにしていた、このおやじに、今こそうんと無理をいって、虐めてやろうと思ったの——。

馬乗りになってハイトドウドウしていたら、主客は転倒して私は押えつけられていた鬱憤や、たけのこ生活の劣等感が一ぺんに解消して、何か前途がガラリと開けたような、のびのびした解放感をしみじみ感じたわ。戦前、戦中を通じ、女は男に圧迫されつづけ、忍従と屈服に堪えてきたけど、戦後の自由はこんなところからも開けてくるものだったわ。

でも、私をのせて這いまわるおやじの顔が、またとても愉しそうなので、それがシャクにさわって、もっともっと無理をいってやろうと思って、

——私のいうことを、今後、どんなことでもきくわね——

「ハイハイ……」

——私は女王様、お前は私のドレイよ。いい——

「ハイハイ……」

——これからは食糧を私の家まで運ぶのよ——

「ハイハイ……」

何をいってもハイハイである。私はこのおやじが妙に憎めなくなってきた気持分るでしょ——。

約束通り、おやじは、それから、五升、一斗と米や、いもや野

菜類を、五日なり一週間間隔で運んできた。両親はびっくりするやら大喜こびやらでしたが、母は女親だけに、ヒョットとして私とおやじが何か関係あるものと思ってハラハラした様子だったわ。一度母の前で私の權威を見せておかなくてはいけない——。そう考えて、おやじをわざを母の前でボロクソにやってやったこともあるの。オロオロした母の顔が今も臉に浮ぶようだわ。

父も母も共働らきで勤めていたから、私はおやじがくると、妹を遊びに出して、狭い我が家で、おやじを縛ったり、ぶったり、足をなめらせたり、散々にもてあそんでやるの。これが、わざわざ食糧を持参するおやじへの何よりのプレゼントだってことは、女のカンで見抜いていたんだから、私もアプレな娘だったのネ。散々虐められておやじはイソイソと帰って行く、そんな時期が続いて、段々世の中が落付くにつれて、私達一家は、そろそろおやじに依存する必要がなくなってきたの。

それに、両親もおやじとのSMプレイに薄々気付いたのか、おやじを近寄せることに警戒を始めたの。縁談が起ったためよ——。恋愛めいた結婚だったけど、私に子供のなかったのが不幸の原因だったのネ。金田投手と別れた榎本美佐江。雄二と別れた蝶々さんの心境、子なきは去る——。男女同権とはいえ、やはり世間は子供の産めぬ妻は、妻としての資格を充分に認めてもらえないものなのね。

それからの私？ ご覧の通りバーのマダムに納まってしまったわ。面白おかしく暮してやれて気になってネ。離婚後ご乱行の一時期が過ぎて、やっと身がかたまった近頃よ。

パトロンがいるのかって……？ ええ、いるわよ。おやじよ——。

バーをやるっていったら二つ返事で三百万円ポンと投げ出してくれたわ。女房に死なれてあの人もやもめ、私は出戻り。よくできているでしょう。

どう、アンタ、今夜私と遊ばない？ どんな遊びって？ きまってるじゃないの——」

マダムは艶然と笑って、カウンターの下から細身の鞭をとり出すと、一振り二振りしなやかに振った。

「おやじ？ ああ、いいのよ。近頃すっかりモーロクしちゃってネ。部屋の片隅にでも、アンタ雁字搦目に縛り上げて転がしておいて頂戴——。構わないかって？ ホホ、白状しちゃうわ。私が誰かさんとやるSMプレイを、見たいんだって、それがおやじの希望なのよ——。ネエあんた。そうでしょう。ホラ、ご覧なさい——。さあカンバン。女の子もみな帰ったわ。行きましょう。さあアンタ。グズグズしていないで、早くお二階の支度して頂戴——」

客である私とマダムのSMプレイ——それはまた他日話す機会もあるう。バー・クレイジイのマスター、かつての田舎おやじが、私達SMプレイの間、ベッドの枠に、犬のように縛りつけられて、私達のプレイに随喜のよだれを垂らして見上げていたことをつけ加えるのは、最早蛇足であろう。

オリンピックの外人客相手に、サジスチックバー（暴力バーに非ず）として、マダムは専らホステスを、SMプレイヤーに訓練するつもりだと語っていたが、広い大阪に一軒ぐらい、そんなバーのあるのも面白いかも知れない。

ライカ氏の話が終つて、次は進んでステッキ氏が珍らしく自分から語り出したのです。ひとしきり中休みのグラスが回って、紫煙が蒙々とクラブの一室に舞い、快よい酔いが人々に軽い倦怠感を覚えさせます。

第七十話 バカンス島

小孫乙吉老は、突如何の前ぶれもなく、四十年間宮々孜々として築き上げてきた、紡績会社社長の職を息子に譲り、更に親戚縁者一同を驚かせたことは、私有財産の大半を抛うって、瀬戸内海の一孤島をズバリと買いつたことであつた。

何が彼をそうさせたか——。大半はその思い切つたやり方に、小孫老が、その孤島を開発して、今流行のヘルスセンターかなにかをつくる計画と見てとつたのも無理はない。

しかし小孫老の目的は違つていた。彼の目的を知る前に、小孫老が、フト何かの機会に読んだ、外国のトビックを紹介しておこう。

一九三〇年の夏、ペンキ製造で一躍成金となつた、アメリカのセントルイスに住む、パーク・ハノン老は、パリに旅行した時、

『長寿法の実験台となる、若き夫婦急募。大厚遇、生活費一切負担、子供なきこと……云々』

の募集広告を出した。その頃は不景氣だったので、忽ち三百組に及ぶ若い夫妻が応募し、当年六十六才のパークさん自ら、条件に嵌る夫妻を選び、次のことを、彼の避暑地の別荘で実行させようとした。

一、裸体主義であること、つまり、ヌーディストでなければいけない。

二、食物は、オレンジ、アップル、トマト、バナナ、ストロベリー、ココナツに限り、一日十二回食事すること。

三、一日三十分づつ、十二回に分けて、草の上に雑魚寝すること。

四、紫外線に照らされて、四ツ這いになって歩くこと。

その代替報酬として、彼の死後、数百万弗に及ぶ財産を、選ばれた夫婦で等分に分譲するという、有難いような条件であつたが、いかに何でも、裸体で四ツ這いになって歩くことはできないと、選ばれた十組の夫婦は頑強に否定して、この一項は削除された。

かくて、パーク・ハノン氏は、彼等十組の夫婦の生活を充分に観察し、日頃研究した長寿法を心ゆくまで満喫して、四年後、彼が七十才で亡くなった時には、十組の若夫婦からうまれ出た子供十八人が、ワイワイガヤガヤと、地上の小樂園をつくり上げていた。デンマークやスエーデンの裸体クラブ、多陽族のハシリを行った彼等は老人の死後も、ここに別天地をつくつて、裸体生活を続けていた。四年間煩わしい衣類から解放された生活を続けると、今更その要がなくなつて、衣類を纏う気にはなれなかつたらしい。

小孫老は俄然パーク・ハノン氏の行動に共鳴した。狭い日本で、裸体運動を展開しようと思えば、無人の孤島を選ぶより仕方がない。されば老人は、日当りよく、紫外線を存分に吸収できる、しかも風光明媚の瀬戸の海を選んだという次第である。

小島は、島の回りをぐるりと一周しても、五千米に充たないが、島を樹木がとり巻き、中央より稍々右寄りに、海拔六、七十米の高い丘陵もあつて、オリーブの栽培にも適しそうな平地も点々と見られた。

計画は着々と実行に移すのが、小孫老の処世訓である。ヘリによ

って俯瞰撮影も行ない、綿密な設計によって、内海の、比較的深い暗礁の少ない地点を選んで、ヨットハーバーをつくった。

小孫老は、この小島をバカンス島と名付け、次々と資材は運び込まれた。

大新聞に、こんな広告が出たのは、それから間もなくのことである。

「結婚を望む男女求む。男子二十五才、女子二十三才まで。結婚費用一切負担。新婚旅行手当五十万円進呈。委細面談」

人々はこの奇抜な五行広告に目を瞠り、冗談と一笑に付す者、眼の色を変える者等で、面談当日、貸切のS会館は男女併せて四百六十人の応募者でぎっしりつまった。

面接がまた奇妙だった。男は貸与された水泳パンツ一枚、女もまた、会場に準備された、ビキニスタイルの水着に着換えさせられたのである。

紡績会社の社長として、水着は自家製造品でお手のもの。男女一名づつが順序よく小孫老の前に立つ——。第一次審査で男女併せて六十五名が残った。男は男性美と容貌、女は八頭身の女性美と容貌——。勿論これは小孫老の主観による見方で、極言すれば小孫老の好むタイプの男女が残ったわけである。

審査洩れの連中は、各自が身につけた水着と交通費をもらって退散。

小孫老の綿密な計算によれば、男性十名に対し女性二十名の、計三十名が、一年六ヶ月十二日暮して、夫婦になったカップル十組に計五百万円、外れた女性十名には各自二十万円を贈り得るだけの、蓄積資産があった。

第一次審査をパスした男性に、改めて通知が送られ、彼等は一様に左記事項を提示された。

- 一、バカンス島で集団生活をする。
 - 二、島に於ては、裸体でいなければならない。
 - 三、恋愛は自由、但し衆人環視の中で行う。
 - 四、喧嘩口論は両成敗とし、別項の罰則を適用する。
 - 五、女を充分に飼育しうる人物であること。
 - 六、就寝は雑魚寝とし、消灯は行わない。
 - 七、小孫乙吉のボディ・ガードとなり、又命令は絶対服従のこと。
- そして、結婚して島を離れる迄、一人に付毎月五万円を積立てておく——。

小孫乙吉老は、厳選に厳選を重ね、体の各部にわたって精密検査をした上右の誓いを守ると約束した男性十人を選び出した。

次に女性には左記事項を提示した。

- 一、バカンス島で集団生活をする。
 - 二、島内に於ては、裸体でいなければならない。
 - 三、恋愛は自由、但し衆人環視の中で行う。
 - 四、嫉妬、喧嘩は両成敗とし、別項の罰則を適用する。
 - 五、男性に対しては献身的に、且つ奴隸精神をもって如何なることにも忍従しなければならない。
 - 六、就寝は雑魚寝とし、消灯は行わない。
 - 七、小孫乙吉の命令は絶対服従のこと。
- そして結婚して島を離れる迄、一人に付、三万円を毎月積立てておく——

男性に較べ、女性は第二次審査で大分思案する者が多かったが、

しかし好条件に大半は許諾した。

別紙の罰則規程は、全三十六条からなり、それぞれの犯した科によつて細別されているが、ここにそれをかくいとまがない。二、三例を挙げるに止めておこう。

例、第十六条。本島を脱走しようと企てた者は、左記の罰則を適用される。

島ノ中央、せんたあぼーるノテツペンニ逆吊。島ヲ離レル日マデ、首枷及び、貞操帯着用セシム。

例、第十九条。煽動を起し、又はそれに類似の行動をせし者は、左の罰則による。

男ハ窄衣着用セシメ、三日間曝シタルノチ、積立金、手当一切支払ワズシテ島ヨリ追放。女ハ丸坊主トナシ、手枷、足枷を嵌メテ、犬トシテ取扱ウ（期間三十日乃至五十日）

例、第三十条。島内備品、什器その他一切共有なるも、万一、之を私有せんとする者は、左記の通り罰せらる。

卑シキ心ノ穢レヲトリ、泥ヲ吐カサシメルタメ、三日間海水ヲ嚥下セシメ、尚改心ノ色見エザル時ハ、改悔室ニテ、X型整矯機ニ逆サハリツケニナシテ、大量浣腸ニテ洗腸ヲ三日間行ウ。

島はバカンスを愉しむには最適の土地だった。働らかざる者は喰うべからずの時代に、働かずして喰えるのは、この島ぐらいのものである。テレビ、映画小劇場、ボーリングセンター、ベビーゴルフ場、テニスコート、その外一切の電気器具が運び込まれ、この電気設備のため、小孫老は膨大なる費用をつかつて、最寄りのS島より海底電線と電話を引いた。

週に一回、ヨットが食糧を満載して寄港。波打際の倉庫まで運ん

でよくと、ヌーディスト達はヨットが去ってから、それを丘の中腹のバカンス亭まで運ぶ。彼等にとってこれが唯一の仕事かも知れない。

彼等の外に、特に選ばれたヌードコックが三名、日々の食事をなし、雑役に従事する。島は一切洗濯もなければ、煩わしい事務もない。選ばれた二十六人の男女は、夢のようなユートピアで、夢中で毎日を過ごしていればそれでよかった。

罰則の適用は未だ一人もなかった。島では一切名前は呼ばない。小孫老自らの手で、消えないマジックインキ様のもので、男女の背にABCのアルファベットを書き込んである。AからIまでの九名男性はで黒字、JからZまでの十七名は女性で赤字。当初三十人の採用は出帆間際男性一名、女性三名が脱落して、二十六名になり、小孫老は二十六の数から、アルファベットを思い立ったものであった。

小孫老の老軀もちろんヌードであつて、彼はここ数日で、身体全体が若やぎ、活力がみなぎり、もうアスパラギン酸塩のクスリの厄介にならなくてもいい程に張切ってくるように思えた。内海を通るヘリコプターが、時折、とまどつたように上空を旋回して行くのは、全員は完全に外部から遮断され、羞恥のベールは日一日と剥がれて、若い男女はすっかりヌーディストになり切り、よく遊び、よく食い、幸い罰則を適用するような（小孫老いささか期待外れであるが……）者としてなく、和気あいあいのうちに、彼等の間にいつしか恋の華が咲き始めていた。

若い男女の生態を、小孫老は暇さえあれば、皆と交つて、盛んに十六ミリのフィルムで撮りまくっていた。

でき上ったフィルムを小劇場で映写すると、人々はキャッキョッと
 いった笑い転げ、喜んだ。内部の者がみれば、自分等の生活の断片
 に過ぎないフィルムが、外部のみる者にとって、これがいかにヌー
 ディストとしての、重要な記録であり、また得がたいフィルムであ
 るかは、当事者達は案外気がつかない。

夏が過ぎ、秋が素肌につめたく感じられる頃、流石に彼等はこの
 楽しい生活にも少しあきがきたようだった。いかに旨いご馳走も、
 毎日となると鼻につく喻えの通り、青春の群像は、あまりに平和で
 単調で、ユートピア過ぎる環境に、かえって刺激を求めたがった。

しかも、女の数が男の数の倍率を占めるため、恋愛の自由ととも
 に、争奪戦が起り始める。恋はひめごとがいいのであって、点灯な
 しの雑魚寝もまた、小孫老の計画通り、恋のひめごと、闇の睦言に
 は誠に都合悪くできていた。

やがて島で始めての喧嘩が起った。女同志が一人の男を争っての
 掴み合いは、忽ち、小孫老の待望の罰則を適用するところとなり、
 罰則第八条、島風を乱す喧嘩をしたる者は左記の罰則をうける。

四肢ヲ地上ノ杭ニ縛リテ、三十時間放置スル。反省ノ色ナキトキ
 ハ、改悛室ニテ弱電檻、若シクハ棘檻ニ入レテ、改悛ノ情アルマデ
 放サズ。

小孫老は、喧嘩をした、MとSの処置を、彼女達の共通の恋人B
 に命じた。

始めての罰則とて、男女はすべて群がり、彼等の目前で、MとS
 は、地上の杭に四肢を縛られて放置された。蟻や毒虫の攻撃で、S
 は忽ち反省したが、Mは反抗の色を見せた。容赦なく小孫老はMを
 改悛室に押し込め、初使用の、ピカピカ光る弱電檻に、手枷、首枷

をはめてMを放り込んだ。人間一人やっとなんて入れるくらいの檻
 である。弱電のスイッチを入れると、Mは全身をけいれんさせて苦
 しんだ。反抗の色は益々強い。小孫老はサラバと、女に錫製のバタ
 フライをはめさせ、コードを檻とバタフライにつないだ。

三日目にフラフラになってMは許された。暫らくはおとなしい日
 常がつづいた。

しかし、若い男女の反発の血は燃え上る。秋も深くなると、ヌー
 ドは肌につめたく、人々は日だまりを選んで甲羅をほし、戸内にい
 ることが多くなり、じわじわとやり切れぬ鬱憤がハケ口を見つけぬ
 ままに、モヤモヤは立ちこめていた。

深夜、雑魚寝の床にボツボツと歯抜けができて、男女のカップル
 が、ひそかに戸外に忍び出ていくようになった。夜風の肌寒さも、
 熱い抱擁の前では、かえって快よかったに違いない。

Vの腹がかすかに膨れ、乳房が黒ずみ、小孫老は彼女の妊娠を知
 った。

寒い冬ごもり——人々はヌードで炉辺に集まり談笑したが、とも
 すれば空虚が、どこかにポツリと顔を覗かせ、何かの拍子に、人々
 はフト黙り込んで考えこむことがあった。

Vの腹はせり出してきた。とともに、ZとKの二人も異状を訴え
 食物を吐いたりした。

▲ヌーディストの助産婦を一人いれとくのを忘れたわい。いずれこ
 うなることは分ったんじゃが、ウツカリしたわい▽

小孫老は自分のうかつさを自嘲し、急拠人を介して、ヨットで一
 名の若い助産婦を島に送ってもらった。

しかし、こうした間でも、小孫老のせっせとフィルムをとる手は

休まなかった。

冬ごもりの間、喧嘩が三回——、煽動めいた行動が一回あって、これは罰則に照らしてそれぞれ処罰した。

AとFが二人がかりで、女性の中で一番若いTを暴行した時、小孫老は、

第十二条、暴力を以て、集団にて女性を犯した時は、次の罰則を適用する。

第三種（強力）嵌口具ヲ嵌メ、棒手枷、棒足枷ヲ着用シ、立居出来得ヌ様、手足ノ枷ヲ四十センチノ鎖ヲ連結シ、地上ヲ這イテ家畜人トナリテ、被害ヲ与エシ女性ニ奉仕シ、当該女性ノ許シアルマデハ、嵌口具、枷、鎖ヲ外サズ。

若いT女は、Aに好感をもっていたから、これをただちに許したが、Fは許せなかった。

男を虐めるのはこの時とばかり、T女に女性群があれこれと入れ智恵するものだから、FはT女の奴隷のようになって、果ては夜寒の煩わしい時など、人間便器の役まで果さねばならなかった。二週間を過ぎても一向に許す気配はなく、むしろTは女王気取りで、Fに体の掃除までやらし始めたから、他の女達への気がねもあって遂に小孫老が口をきいて、やってFは釈放された。

小孫老はFがTに復讐することを、心秘かに恐れたが、Fに向その気配もなく、むしろその後、Tの御意に召すよう、易々として何くれとなく奉仕しているさまに、ホッと安堵の吐息をついた。

春が来て、雑草は芽ばえ、樹々は蕾をふくらませ、花の開花も間近く、人々はやがて戸外に豊かな肉体をさらす日が近づいた頃——。

或る朝——、小孫乙吉老は眠ったように、自分のベッドの中で死

んでいた。

混乱は忽ち蜂の巣をつついたようになり、ヌーディスト達は、ただわけもなく島内をウロウロした。リーダー格のE、H、I等がとも角も、小孫老のなきがらを死の床に北枕に寝かせ、一同を集めて、枕元の遺書を開いた。

中味は、志の挫折を嘆き、それぞれの彼等の分配金の明細のかき込まれた小切手が三十枚入っていた。二十六人のヌーディストと、三人のコック、一人の助産婦に対してである。

小孫乙吉老はガンを宣告されて、善根に余生を生きるか、したいことをやりとげて、この世をおさらばするか、迷った挙句後者を選んだのであった。

彼の死期は、予定より早かったが、小孫老は、莫大な費用を浪費して、したいことをやりとげた上、往生したのだから本望だろう。

しかし、果して浪費だったろうか——。

バカンス島は今や、内海の小孫ヘルスセンターと生まれ変わり、彼が撮りだめた膨大なヌーディストの赤裸々な記録のフィルムは、やがて、好事家の目から目へと、莫大な利潤を産みながら、輪回のように回り回って行くに違いない。去る者、残る者——ヌーディスト達のその後はどうなったか、あまり知られていない。

「どうも夢のようなお話で……。バカンス島の物語を詳しく語れば一晩中話していても尽きないでしょう。それだけで、優に一冊の物語なのですが、今宵のショート・ショートにふさわしく、ほんの一端をお話してやめておきましょう——」

ステッキ氏の話は終わりました。



浣腸体験記

驅 虫 記

栗

瀬

長

或る土曜の午後、仕事から解放された安易感から、私は例の如く、独り静かに浣腸を楽しんでいた。

私の浣腸は——いや今日はその詳細を語るのはよそう——必ずベッドの上で、而も耐えられるだけ耐える為に必ず排便は差込便器を用いる。

五十CCの水と等分に希釈されたグリセリン液であったが、八分の我慢の末に排泄された半流動体の表面に一条の白い線が——それは長さ一センチ位の細い糸のようなものであった——たしかに生命力をもって蠢いているのを見て仰天したのである。

蟯虫、そうだ、これに違いない。一瞬私は自分の腸の中を想像した。真暗な腸管、ぬめぬめした粘液に覆われた無数の腸壁の襞が、みみずの行動のように蠕動している。その襞、襞の間に鈴なりにぶら下った無数の白い糸、ああそれこそ、私の腸内に巣喰う蟯虫の群なのだ。

何時だったか、風呂場の改造修理で、大工が土台を掘り起した時、風呂の落とし水の流れ口の下に、みみずが数十四、直径十センチ位の毬のように絡み合って巣を作っていた、あの気味の悪さが、今私の腸内に現実に存在するように思えるのだった。

翌日、私は取るものも取りあえず薬局に走った。

「駆虫剤くれないか。」

「おいつつの方で」

「俺だよ。生野菜をよく喰うからね。たまにはね。」(まさか、浣腸したら蟯虫が出たとは恥かしくて言えない)

「予防でしたら、武田のジゲサンがいいと思います。海人草の成分とサントニンで、副作用ありません。」

「空腹時服用か。」

「そうですね、夜お休みになる時のんで戴くとよいですね。」

「下剤はかけなくていいの？(敢えて浣腸とは言わない、いや言えないのだ)」

「毎朝お通じがあれば結構です。便秘してらっしゃるのでしたら下剤が必要ですね。つまり、寄生虫を眠らせるわけですから、早く体外に排泄しなくてはいいけませんから。」

「よく分った、有難う。」

陽が暮れた。早目に、何時もより食事を少量にした私は、少しでも腸内を空にしておこうと、今夜も少し濃い目のグリセリン浣腸をかけた。すっきりした下腹、でもそこに蟯虫

が蠢めいているかと思うと、何か無気味に感ぜられる。

真夜中が待ち遠しい。本を読む。タバコを吸う。好きなインスタントコーヒも、今夜ばかりは節制することにした。いよいよ手持無沙汰だ。そっとジゲサンを取り出してみる。

「光を遮り貯えること」と注意書があり、あわてて机の抽出にしまう。丸に三角の赤いタケダのマークが印象的だ。

やっと十一時、可成り胃のあたりは空になったような感じ、でもまだまだと自分に言い聞かせる。

遠くパトカーのサイレンがなって、もう十二時だ。ようやく空腹を覚える胃袋のあたりをなぞ廻しながら、私はジゲサンの包の封を切った。直径五ミリ位の白い錠剤三粒、これで我が蟯虫が退治できるのだろうか。一気に飲み下す。何だか食道の辺りにつかえているようで、あわててもう一杯水を飲む。

さあ、これで準備は完了だ。あとは寝て明朝を待つばかり。ところが何時になく寝つかれない。心なしか、腹がゴロゴと鳴るようであり、下腹部に淡い痛みすら感ぜられる。冗談じゃない、今のんだばかりなのに、今から腸に達する訳がないではないか。神経のいた

ずらに過ぎないと言いつ聞かせても、いよいよ気持は高ぶるばかり。

うとうととまどろむ頃、私は、変な夢を見た。いや夢とも言えない。何か知らぬが、一面にどろどろした沼のようなあたりに、その水面所狭しとばかり、丁度おたまじゃくしのようなものが、無数に蠢いている気味の悪さ、ハッとして目覚めた私の枕元の時計は、暗闇の中に、青白く二本の夜光塗料の針が二時を指していた。

夜が明けた。ベッドの上で、そっと下腹をなぞてみる。心なしか左下腹が痛いように思えるのが快い。昨夜の浣腸で勿論便意など全然ない。しかし兎も角、早いところ排泄しなければならぬとすれば、勿論浣腸以外にはないか。

一先ず、グリセリン浣腸五十CCを行う。腸内空だけに、可成り我慢できる筈なのだが排泄意向があるだけに、三分位で早くも降参だ。

出るものは、勿論グリセリン液ばかり、僅かに一握りの程の固型物がどろどろと流れ出る。待ちかねたように、私は割り箸を持って便器を覗き込む。

いた。いた。いるではないか、一匹、二匹

白く二条の白線が。おおこれぞ、ジゲサンに参った蟯虫でなくて何んであろう。でも余りに少い。私は憑かれたように、僅かばかりの黄金色の固型物を、割り箸でかきまぜた。もう一匹、二匹、それ以上どうしても発見出来ない。僅か四匹、それは私の想像に比して、余りにも少い数であった。

拍子抜けした私は、思い直してみるのだった。これは浣腸の不完全に違いない。グリセリンの強烈な刺激により、直腸下部しか排泄されなかったのではないか。そうだとそれに違いない。とすれば、イルリガートルによる洗腸がよい。

善は急げとばかり、私はすぐ、化粧石鹼をとかすや、愛用のイルリガートルに千CCを満たすのであった。

千CCは、七百CC位が一番きつい。押し広げられる腸管の鈍痛と、排泄感が入り交った複雑な感触。八百にならんとする頃、ググーツと腸がなって、今まで直腸下部に充満して鈍痛を与えていた石鹼液が、下行結腸の屈曲部を越えて奥深く浸入するのであろう。スーッと鈍痛がとれる。こうなれば千CCまでは楽々と注入される。

白い蟯虫が発見し易いように、今日は極く

薄い、殆ど白濁が感ぜられない程度の石鹼液にしたためか、全然排泄感がない。刺激のない薄い石鹼液程味気ないものはないな等と考へながらも、今日の目的からしてすぐ排泄してみる。

便器の底一面になみなみと進み出た石鹼液の中にも、捜せど捜せど、蟯虫の姿は遂に発見出来なかった。

その日、一日、私は仕事をしながら考えた。駆虫剤をのんだのが夜中の十二時、浣腸排便が朝七時、とすれば、まだ充分薬が下っていないかったのかも知れない。朝七時では、まだ、横行結腸あたりに留っていたかも知れぬ。よし、今夜今一度洗腸してみよう。

帰宅するのも待ち遠しく、今度は、薄い食塩水をエネマシリンジでゆっくりゆっくり注入した。ゆっくりせざるを得ない。ゴム球を押し注入しても、今度は指を離して、食塩水を一方から吸い込まねばならないもの。

エネマ用に愛用する水差し一杯を注入。出てくるものは本当に水ばかり。昨夜からの度重なる浣腸洗腸にて、液中にはほんの申し訳程度に黄金色の条が数条。丹念に点検すれば最早一条の蟯虫すら発見出来なかった。

あまり度重なる浣腸に、肛門がヒリヒリす

るようだ。刺激過多による痔疾の発生を恐れて、私は、そっとオロナイン軟膏を塗っておいた。

これで、私の腸内は駆虫に成功したのだろうか。必ずしもイエスとは言えないと思う。正しくは検便によらねばならないのだが、然るべき所への便を提出する億劫さと、更にそれよりも恥かしさが先に立って、私は、近い将来、またジゲサンを服用して、お茶を濁すのではないかと思われる。

これで私の第一回の駆虫記を終る。駆虫記といっても、これは浣腸記といった方がよいかもしれない。駆虫の目的にこそ寄せた浣腸に重点がおかれているからか、いや、駆虫は一つの方で、浣腸そのものを楽しんでいるのかも知れない。

あの、みみずが巣くっているような気味の悪い蟯虫、それさえも私にとっては、楽しみを与えてくれる、楽しみを正当化してくれる役割を果たしてくれているのかと思うと、文字通り身の内の親愛感をおぼえる。

検便を受ける気持のない私は、虫の有無をたしかめるためにも、第一回に引続き、第二回の駆虫記、いや浣腸記を書くことになるだろう。

白^{しら}百^ゆ合^り抄^{しょう}

……悦虐絵灯籠(二)……

万 田 不 仁

虎之助呵って鎗投捨ていざや
組まんと大手を広げて立向へば
山路も同じく鎗を捨て矢声をか
けて引組んだり。何れも劣らぬ
勇者なれば、金剛力を出し曳や
曳やと組合ひしが……

(絵本太閤記)

夏休みに入ってから三太は一度友達と逗子の海へ泳ぎにいったきりで、あとは毎日日本ばかり読んでいた。亡くなった義父の書齋にあ

る唐詩の書物を二三の注釈本を頼りに時間をかけて読んで、むつかしい漢字の色々な読み方を覚えるのが楽しみだった。彼には一寸術学趣味があり、それが彼を勉強好きの学生にしていた。裏千家茶道教授の看板を出している義母に

「三ちゃん、少し運動したら。せめて散歩ぐらいなさいよ」

と言われても一向に動く様子もなく、時たま庭に水を打つくらい。大人し過ぎて歯痒いみたいだなどと義母は近所の人に言っているらしかった。

郊外の高台のこのあたりではお盆が過ぎると、朝夕蝸が涼やかに鳴いた。曲り階段を踏む足音を聞いたが、三太は永すぎる昼寝のじだらくな姿勢のまま、分厚い漢和辞典を枕に目をつむっていた。

「空巢が入るわよ。昼寝するなら階下でしてよ」

上背のある久子の体がまだ睡い目にいつもより大きく見えた。朝早くテニスに出かけたようだったが、何時戻ったのか、栗色がかつた髪を短か目にカットした久子はクリーム色のショートパンツ姿で、汗と日向臭いにおい

が纏っているような、本の虫の三太には何かむっとする健康さであった。

「いやねエ、こうして夜は鼻になって何時までも何か読んでるんでしょ」

素足の爪先で、三太の蹠をくすぐる。三太はそれでも寝たふりをしていた。顔が自然と綻びてしまうのはとめられない。

「ほうら、もう起きなさい。ネ、泥ちゃんが入ったわよ」

冗談にきまっているが、三太はわざと驚いたふりで、はっきり目を開けた。久子はそんな三太の揃えた両脚を跨いで立って、三太を見下して笑っていた。

「どこにいる？ 泥棒って」

「ここよ」

右手の人差指で、久子は自分の顔をさしている。

「なあんだ、阿呆らしい」

「フッフ、ほんとの泥ちゃんよ。私、盗賊団の女首領」

そう言う、久子は両足を太股に一步ずつ進めたから、三太の胸板の上を跨いだ恰好になった。一瞬、女が魔女のように益々大きく見えた。

「正体もなく睡り込んでいると、ほら、こう

やって寝首を搔かれるわよ」

三太の胸の上にそのまま腰を下し、男を抑えつける形をしかけた。が、

「ああ、よそう、もう子供じゃないから。こんなことレディのすまじき所業、フッフ」

三太の上に乗せた尻をすつとあげて、窓際の藤椅子まで久子はひと跳びに体を移した。

「ハハハハ、でも三ちゃんと前にずいぶんやったわネ。組討ごっこ。また時々しようか。フッフ、ママが見たら吃驚して、おったまげて卒倒しちゃう、フッフ」

久子は藤椅子をきしませて笑った。白い歯と赤い舌が鮮かで何か動物的な生々しい感じだった。起きあがって胡座をかいた三太の目に机の上の花瓶に活けた白い百合の花が微かに揺れていた。昼日中睡り過ぎてしんの重い頭に昔から純潔のシンボルとされ、聖母の花と言われるその花の色は清らかに美しく、三太の心に蘇る淡い悔いと暗い歎びの思いを俄に陰深くするのであった。

☆ ★

三太は親しい友達や近所の奥さんの口から自分と久子に行く行く夫婦になる間柄なのだと言うことを聞かされて、何とも言えぬ恥ずかしさに顔を赤くした。それは小学校の四年

の頃だった。義理の両親はそのことについて何も言いはしなかった。三太は九歳の春、その家に貰われて、ひとつ年上の久子とは実の姉弟のように睦まじく暮らしていた。子供の多い下級軍人の家庭の引締めた生活に較べると、父の親戚のこの家の空気は、物質的にも精神的にもずっとこのびのびして些かだらしない程だった。太った、温厚な漢学者の義父は黙々と都心の高等学校へ講義に通い、自分の時間は専ら、ひっそりと書齋生活に費していた。彼は三太が中学生になった年、碁の打方を教えてくれたが、間もなく高血圧で亡くなってしまった。そして以前からそうだったけれども家は完全に華洒な中年女の義母の城になり、彼女は友達を招いて花札や麻雀に面白おかしく夜を更かすようになった。

久子はバスケットボールやテニスの好きな活発な少女であった。目鼻立のくっきりした母親似の美貌は事に触れて、強い性格を想わせる明暗鮮かな感情を湛えた。彼女は男にしては温順に過ぎる三太と陰陽の道理と言うのか仲々気が合って、いさかいらしいいさかいをしたことはなかった。

久子は庭でよく三太を相手にキャッチボールをした。女にしては速い、きつい球を投込



んだ。夏休みには必ず遠泳の群に加わり、耐久力に富む肉体を誇った。相撲が始まると、しつこく父にせがんで一度は国技館へいった。その上、両親が外出した日に三太に相撲を取ろうと挑戦した。△男おんな▽三太は呆

れながらセーターとズボンの軽やかな身形の久子と何番も取った。その場合三太はいつも相当に相手を苦しめた後にうまく投げられたり、押切られたりした。勝負はだから必ずどちらが勝つか解らぬ大相撲の拳句三太が力尽

た。秋に展覧会へいくと数少ない武者絵の前に佇んで父に促されるまで動こうとしなかった。三太も羽石弘志や山口将吉郎が少年雑誌に描く武者絵が嫌いではなかった。しかし、鎧武者が弓を引いたり、馬上で太刀打をした

きて負ける形ちになった。御機嫌取りにおどけて簡単に負けて、年上の女の歓心を買うことは後めたくて出来なかったが、手強く揉み合ったところで相手を畳の上に投飛ばすことなどどうしても出来ない三太は、そのことに気弱くひとり忸怩とした。久子の部屋の壁に懸かった複製のモナリザの不思議な、皮肉な微笑みを見るたびに三太は自分の卑屈な心情と言うよりもっと複雑な心の仄暗い場所を絵の女に見通されているようなへんな間の悪さを覚えるのであった。

久子は、また三太の愛読する少年雑誌の口絵や挿絵にある武者絵を見るのが好きだった。

りしている光景を描いたものはよかったが、組討をしている場面を描いたものは、それが良く描けてあればある程何故かよその子のように平気で見られなかった。学校の休時間に校庭の一角で、あるいは家の附近の原っぱで少年達が取組み合い、上になり下になりして遂に一方が相手を膝下に組敷く遊びに熱中しているのを見る時も彼は武者絵の組討の光景に感じる気恥ずかしさを内心持余した。

「ねエ、これ誰と誰、誰なのさ？」

組討の絵に見入った久子が聞く。

「山中鹿之助と品川大膳さ」

三太の体が熱くなるような恥ずかしさに久子は気づかない。無関心を装って答えると、もう久子は乱暴に頁を繰って本文を読み出している。そして三太は問われるままに少し面倒臭げに尼子十勇士の話などしたりする。そんな三太だったから久子が事もあろうに女だてらに組討ごっこをしようと言いだした時には文字通り仰天した。相撲でさえ恥ずかしかったのに。好きこそ上手、相撲の手も色々知っていて、うっかりすると態とでなしに手酷く投げられそうになる程段々腕をあげて来ている久子ともしっかりとくく力較べをやるのかと思えば、相撲の際に感じずにはおれなかつ

た内心の屈折、心理の襲深くまどろみ、折々蠢めいている稚い情念が、少年の胸を重くした。それは冬休み中のある日だった。外は氷雨が降り、彼は自分の部屋に閉籠って中学へ進む受験勉強に没頭していた。久子の所謂組討ごっこは、これは初めから一種の芝居だった。例えば山中鹿之助対品川大膳、加藤虎之助対山路将監、長谷川与五左衛門対安馬彦六などの有名な一騎討の模様を教科書や少年雑誌で得た知識に空想を交えて二人で真似ようと言うのであった。彼女はこの遊びを少し前から考えていたらしく、紫の天鵲絨の服に締めた緋のバンドに腰刀の代りに下げるセルロイドのスケールには、そうする為に予め青い長いリボンが結びつけてあった。

二人は互いに廻き合って立ち、講釈師が軍記物を読む時にするような調子で、一段と声を張って先ず名乗りをあげた。

「フフフ、三ちゃんは南陵ばりネ、フフフ、天晴れな武者ぶり」

浮き浮きした久子の軽い揶揄に三太は失笑した。新聞紙をまるめた太刀を揮って二人は切結ぶ。丁丁発止とまでいかぬうちに新聞紙製の太刀は軟かくぐずぐずになってしまう。「やあ、打物業は面倒なり、いざ組申さん」

三太が荒武者気取りで大手を広げる。久子は力足を踏ん張って一気に三太を捩倒そうとあるったけの体力を傾けるが、三太は容易に倒されない。押合い、揉合ううちに次第に久子の息が乱れ、白晳の面に紅がさして来る。曳々と気合をかけながらもすれば自らがっくり膝をつきそうになる。もう暫くすれば久子の脚が縛れる、その際疾い瀬戸際まで追込んでおいて、三太は脆くも仰向けにずでんうと引繰返った。得たりと上に躍りかかる久子。三太がその時分に読んだ少年雑誌の武勇小説の一節に、組討の場面で「馬乗りになんぞ跨がり」と言う文句があり、思わず吹き出したが、そんな荒っぽい表現そのままの威勢のいい乗り方だった。むずと組敷くと直ぐに三太の両腕を左右の膝頭で制するところも組討の挿絵の通り、はっとひと息して勝誇った笑みを隠せぬ上気した顔で三太を見下し、さて徐にバンドから腰刀に擬したセルロイドのスケールをはずして、左手で三太の頭を抑え、首を搔落しにかかる。

「うあッ！ きゃあーッ！」

咄嗟の思い付きで三太は獣じみた悲鳴をあげた。

「ハハハハ、ああ、おもしろい、もう三ちゃ

ん死んだのよ、ハハハハ」

久子は、三太の胸板の上で身を揉んで笑った。服の裾がまわって、黒い絹靴下を止めた赤いガーターが見えた。それから彼女はすくと立ちあがって、

「是れ御覧候え、長谷川与五左衛門組討の勝利かくのごとし」

と、左手に三太の鮮血滴る首級を示す形で見えを切るのであった。

この組討ごっこは久子の氣に入った遊戯となつて、その後三太は屢相手役を勤めさせられた。両親の不在の折でなければ出来ない、遊戯の秘密性が一層お転婆な少女の心をそそるようだった。一方相撲でさえ迎も虚心で出来なかった三太は無輪誰にも知られなくても恥ずかしくて

初めは何か焼糞で相手をしていた。その時その時の扮する武人の名は変わっても彼は常に負ける役しか与えられなかった。それでも彼は結局は、久子の意のままになる人形だったのか、それよりも一種の被虐愛の血が体の中に潜んでいたものか、程なくこの偏倚な架空の

討死に酔ったように次第に演技的な工夫を凝らして久子の秘かな戯れに従うようになっていった。いつ時は久子を奔命に疲れさせる取組み合いから組敷かれてからの跳きぶり、愈首を搔かれる瞬間の念の入った悲鳴、そしてこれが久子を最も喜ばせる、悲鳴と共に身首



所を異にする刹那の敗者の体の動き。その間際までじたばた足掻き、馬乗りになつて久子を跳ね飛ばさんばかりだった五体の力を急に抜いてぐったりする、その変化に彼は最も氣を配った。ぐったりした彼の胸板に跨ったまま見事敵の首級をあげた心算の久子が大人びた含み笑いをする、嬉しそうに仰向いて高い声で笑う、喉が透くように白く、家では好んでかけている碧の

珠の頸飾りがきらめいた。こうして彼女の胸の奥にある嗜虐の芽に三太は忠実な侍童のようにな水をやっていたのかも知れない。二人の隠れ遊びは漸く洗練され、客観すればそれは甚だ頹廢的な翳につつまれていたようでもあった。

二人を夢中にさせた組討ごっこも久子が女学校の三年生になった年の夏で終った。遠くで重苦しく雷が唸り、強い風が庭の青葉を吹き撓めている午下がりが、もうするにしても情性的だった久子が改造社版の文学全集に読み倦んだ物憂い声音で誘った。暑い日で、三太は何時もの演技欲が湧かず、戯れには最初から気が乗らなかつた。あまり汗をかかぬ間に三太は押倒され、ろくに抵抗もせず久子がカルタ模様の浴衣の帯にはさんだ例のセルロイドのスケールで呆気なく息の根を止められた。

「うーん、無念、うーん」

三太は大仰に呻いた。

「何が無念よ。いやな三ちゃん」

三太の腹の上から飛退いて、座敷の真ん中に突立って久子は三太を睨んだ。

「へんな目付きするんじゃない！ ばかよ、ばか！」

突然の久子の憤りに三太は気を呑まれた。

そして忽ち久子の怒りの原因を探って眼を伏せた。頬がみるみる熱くなった。既に組討ごっこなど滅多にしようと言ひ出さなくなっていた久子はこんな他愛ない、それに他人には話せない奇妙な遊戯がうとましかったに違いない。それを物のはずみで蒸返したのだから別に役も決めなかつたし、まして子供っぽい名乗なんどし合わなかつた。自分の常勝に何の疑いも持たぬごとく久子はやがて三太を組敷いた。それも乱暴な仕方でしたので、浴衣の前が開いて腿の付根とピンクの紗の下着が露わになった。三太は直ぐ目をそらせたが、何か硬い革の鞭でびしッと打たれたような痛みを体にした。その頃三太はもうクラスの早熟児に妖しく艶やかな写真を見せられて、胸の詰まるような衝撃を受けていた。黒い重そうな幕を背景に大きく写っている外国婦人の豊満な白い体にガンジーに似た痩せぎすの男が拉がれ、それは人間と言うより墓の潰された恰好に見えた。そのすべすべした写真は直ちに三太の脳裏に久子とする組討ごっこの極った時の二人の姿を連続写真さながら浮きあがらせた。彼は深い憂鬱の底に沈んだ。頭の後に鉛玉を入れられたような憂鬱は、当時

古本屋で何となく求めた水色の表紙の厚い生田春月詩集の読後感にどこか通じるものがあった。大人の男女の世界は醜い、彼はその時は一途にそう思い、少年少女の美しい抒情的世界をひしと愛惜する心に感傷的にさえなつた。久振りに久子に組討ごっこをしようとして誘われたのに、彼が遊びを活気づける技巧のすべてを用いて久子を楽しませる労を惜しんだのは折柄の暑気で物憂かつた所為ばかりではなかつた。彼は打擲もし兼ねない久子の腹立ちの前に唯項垂れていた。

★ ☆

「坐り相撲式ならやってもいいネ」

煙草を一服した後で三太は言った。

「ようし、寝坊助を少しいじめてあげる」

籐椅子をぎしと言わせて久子は立った。膝と膝とを突き合わせて対坐すると、今更ながら乙女盛りの女の、真紅の袖無しに蔽われた胸の隆起、きっちり合わせた腿の肉の盛りあがり目映ゆかった。一、二、三で勢い込んで性急に攻めて来る久子の両手の肘を抑えて防いでいるうちに三太は段々意地悪さがきざして来るのを矯めるのに苦しんだ。久子が彼の腕力に敵し兼ねて度々右に左に横転する。面白いようだ。ショートパンツの久子の形の

良い脚が空しく空を蹴る、口惜しそうな声も何か刺戟的で、征服欲の豊かな男にはこんなことは甚だ魅惑的な戯れなのだろうと彼は考えた。臂力のある彼は切齒して殆ど立ちあがって襲いかかる久子の力を巧に防ぎながらふつと碁会所で知合った文学部の学生に見せて貰った伊藤晴雨や月岡芳年の無惨絵の女の妖美な肢態を頭に描いていた。彼は本当はずつ

と前に二人で熱中して組討ごっこをしている頃にも一遍思うさま反抗して、山路将監になった彼が加藤虎之助を気取る久子を撲伏せて討取ってしまうような二人の間に取極めておいたルールを無視した逆さ事やってのけようかと何度か企んだ。しかし、所詮そんな女責めは彼には縁薄いものであった。女をいたぶるよりも女にいたぶられる方を探る男、彼は自分の隠している性向について近頃自嘲的反省をしてもいた。久子は執拗にむしゃぶりついて来る。曾ての勝利、よしそれが八百長であり、芝居であったとしても多分に優越感を充たしてくれるものであったらしい。もう充分だ、と、三太は久子の勝気な気性を慮った。彼の兵児帯を掴んで久子が我武者羅な捻りをかけたのを機に虚を衝かれたように彼は横転した。すかさず久子はのしかかって、馬

乗りに跨がり、息を弾ませながら早速型のごとく彼の両腕を膝頭でしっかりと扼した。ショートパンツなので露わな左右の太腿の長い夏の日には小麦色に焼けた内側の膚に、うっすらと青い静脈が走っている。右手の拳で少年のように額の汗を拭い、左手は三太の肩について、睫の濃い目をみはって久子は呼吸を整えた。

「ああ、ひどく骨を折らせるのネ。でもやはり私の下になってくれるのネ。三ちゃんって私に従順ネ、これから先もこうだといけれど……でもあんまり素直だと私増長するわよ。さ、みしるしを頂くか。この期に及んで見苦しい悪足掻きはしないものよ、観念なさい！」

久子は少女時代のように勝に驕る目を輝かせて、左手で三太の長髪を掴み、彼の首を邪険に延ばし右手を手刀にして首級をあげる真似をするのだった。

「フッフ、ぎゃーッとか、うーむとか言わないの？ 血がどくどく出るのよ、フッフ」久子は含み笑をして、体重を加えて尚虐げようとする心ぐみか荒々しく身じろぎした。「さっき私を散々転がした罰にこうしてあげる。お陰で腕擦り剥いちちゃったわ」

机の上の花瓶から白百合を三輪取上げて、その大きな花を久子はごしごしと三太の顔にこすりつけ出した。

「う、う、うう」

花の香気に三太は噎せた。浴衣の襟にも花粉がついた。それは至って女らしい、優しく意地悪い処刑であった。庭の樹に蜩が来て鳴き出していた。

(おわり)

「緊縛写真グラフ集」

略号「グラフ」 定価 五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育つはベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいには所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へ誘い込むことでしよう。

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「特別」 定価 五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、湯井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。

女相撲研究

女相撲史一考

岡 平 吉 夫

本誌の存在を知って丁度三年、幸いにも編集部のご好意により満たされぬ女相撲について気の向くままに駄文発表の機会を与えられたことを深く感謝している。またここでは隠れた数多くの女相撲愛好者の便宜のために私の今日まで知り得た資料や情報を正確にお知らせすることも、あながち無駄ではあるまいと思ひ一筆するが、既に本誌には先輩各位が貴重な資料をもとに発表されているものも多く、此等については重複をさけ、単に文献の紹介に止め、未だ発表されていない部分や私は私なりの考え方を披露してみたいと思う。

が、何分にもその道の専門家でもなく、片手間に図書館通いから得た知識が多く、雑把な報告となることを最初にお断りして置く。

文献からみて最古の女相撲に関するものは今を去る千五百年前、日本書記「大泊瀬幼武天皇記」を以ってその創始とみてよい。

時は雄略天皇の代、宮中の中庭で宮人が采女を集め相撲をとらせたとあるから、女相撲も初期においては高貴な宮人の着想として誕生したものであるからそれ程、悪趣味なものとして馬鹿にしたものではなからう。

下って、文学の世界では、西鶴が「男色大

鑑」「好色一代男」に女体の動的美、全裸美を求めてたくみな筆跡を残しているし、人形浄瑠璃の近松も「関八州繫馬」にそれを表現している。また庶民の間では各誌で紹介されている「女と盲の相撲」興行が宝永二年「芸界聞任記」に最も詳しく記載されている外に「浪速見せ物年鑑」明和六年「版撰陽奇観」寛政二年の「玉磨青砥銭」「孝行娘袖日記」にある。が、片や盲人に対し片や淫売上りか安女郎上りの年増女のふざけた取組は珍相撲というより醜惡極りないもののように思われる。

明和八年「世間化物」によれば興行女相撲も全裸の姿を現わし本格的なものとなった。明和年間には江戸時代を通じて女相撲興行の全盛期ともいわれ、大きな一座は六十名からなる女力士を従え堂々と全国を巡業して廻り、かかる大小の女相撲一座を合せば、その女力士数も三百人近くあったとも伝えられる。

そして大きな一座の三役ともなれば二十貫を越す大女が真剣な取組を行い、何等男の相撲に遜色はなかった模様である。各地から集められた大柄の娘達も、これら荒稽古に鍛えられた姉力士からさんざん痛め付けられ眼をみはる力技を取得したといわれるから、当時の興行は素晴しかったものに違いない。

が、大方の女力士は容姿端麗とはいかず余り色気はなかったようだ。

むしろ十名前後の小さな一座が取組の力量よりも、あやしげな立ち合いや取組を行って艶色な人気を呼んだともいわれるから、あるいは好事家にとっては、この見世物娘相撲を楽しんだのかも知れない。

武家の間で有名なものは、ご存知の田沼山城守意知の裸相撲、邸内大広間に天鷲絨の敷物をして縮緬の布に綿を入れ、その上に白布

で縫い取りをつけた土俵を作り、女中達を裸にして相撲を取らせたとあるが、勝負よりもあやしげな姿態をしめした女に褒美を出したとある。ここまでやるならば庭内に本式の土俵を築き美女の激突を眺めるべきではなかったかと秘かに思う。

女相撲の素晴らしさ、楽しさはその柔肌がもみ合ううちに紅潮しやがて土俵下に倒れ、ベツトリと汗まみれとなった白い肌が砂まみれとなった肌の臭い。羞恥を持った表情、そんなものが大きな見せ場となると思うのだが、如何なるものだろうか。

私は江戸時代の文献の中で最も心引かれるものはお末相撲である。

これも紹介されているので再説をさけたいが誤解されている向もあるので概要を述べて置く。

お末というのは江戸大奥の殿中女中の中にあって身分の低い女達をさすのであって、主として肉体労働に従事する女中をいう。

従って、一般には町家、百姓の娘から奉公にあがり、お勝手を中心とした所が彼女達の仕事場になっている。

ご存知とは思いますが大奥は男子禁制の場所であり、大奥に住む身分高き女性達の中には、

ほとんど男性に接する機会はない。たくましく肉体への憧れと力の限り激突する女相撲の取組をみて満されぬ男性への幻想を抱かせたのであろう。

このお末女中相撲は千代田城年中行事の一つに初午祭り、城内の吾妻稲荷の儀式が行われた日に限られていた。踊り催し物が終わった後、お末女中四十余名が対面所御庭先の芝生の上に敷いた薄緑を土俵と定め、脂肪の乗った裸身に割褌を締め込み二布を纏って腰をわずかに包んだとあるから女性だけの集いとしての風情がただよう。四股名にしても絹川、絹衣等御殿女中にふさわしい優雅なもので、呼出行司の女中衆に招かれて取組む様は一段と妖艶な絵巻であったことだろう。

このように江戸時代は上は大奥の庭先から武家屋敷、下は一般庶民の見せ物興行を通じて盛んに行われたが、その扮装も髪は普通の女髪で烏田、丸髪であって腰のものも赤い二布であったが次第に男鬘、角力鬘に結ぶようになり腰には本式の黒の締め込みをするようにならなくなった。女が相撲をとるといっても女髪や赤のふんどしでは趣興が湧かない。女体でありながらそのいで立ちが大相撲と全く異ならないところにいい知れぬなまめかしさ

落語に出てくる「夫婦相撲」の図



が表現できるものと思われる。

明治、大正、昭和となつてからの興行女相撲、いうまでもなくその大御所的存在となつたのは石山氏率いる山形の石山女相撲興行団である。その他に高玉女相撲興行団があるが

この一行の責任者は本間氏とあり石山氏ともあっていずれが正確かは知らない。

戦前、私の知つたものは、女力士も十名前後のもので、ご存知の大井川蓮台渡し、東海道五十三次の力持ちなど、取組以外は変つたものはない。が、やはりこれも戦前故里でお化け屋敷がかつた。友人と何んとなくその小屋に入り、迷路の一ツ目小僧やお岩様の飛び出しに笑いと驚きを抱きながら通りぬけると中央に土俵が築かれ片側に舞台が作られてあった。

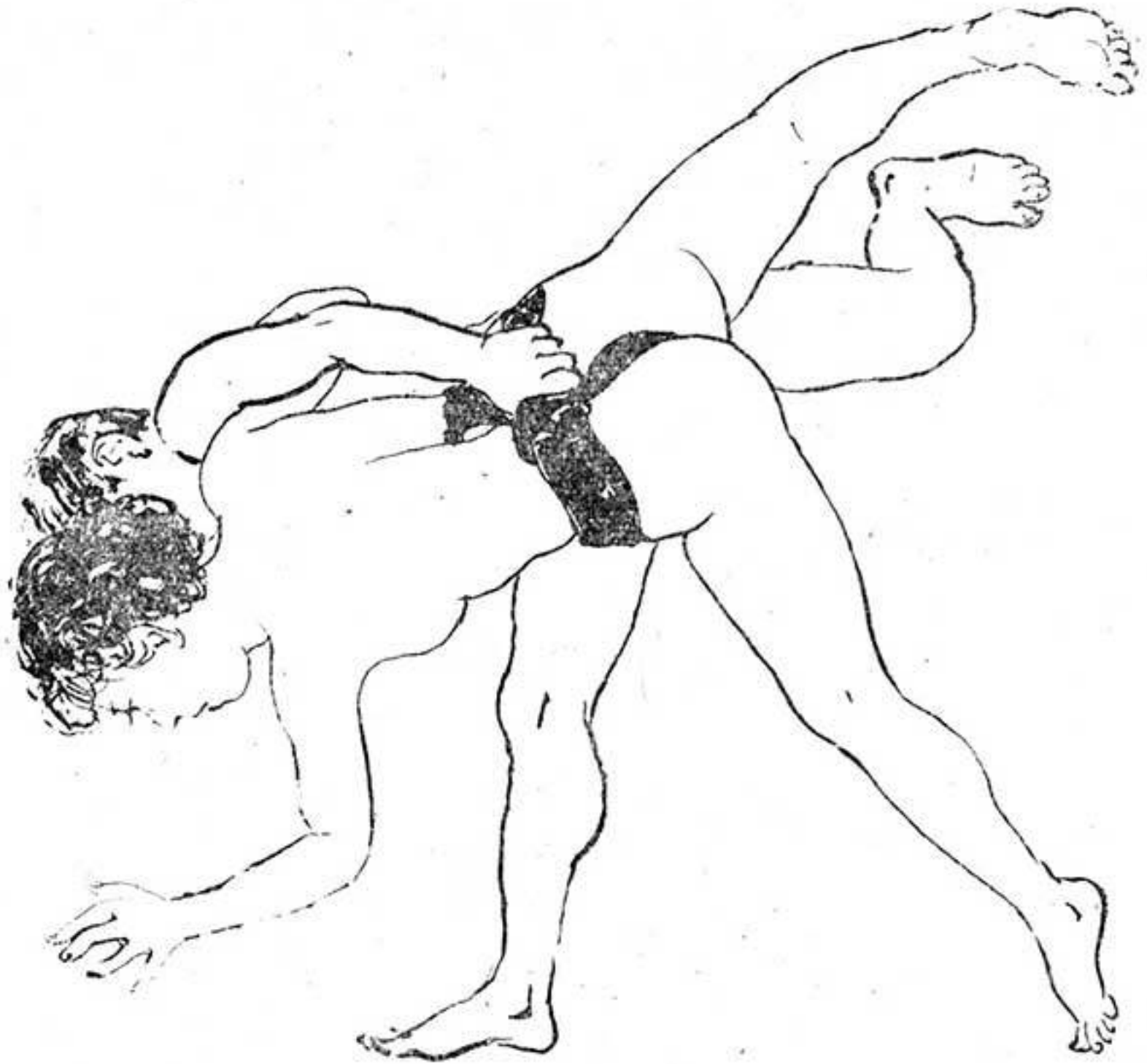
思いがけない女相撲の余興に私も喜んで観戦に及んだが、その時の女力士は比較的美し

く男好きのする若い娘が四、五名もおつた。さて、その時の印象で現在も思い出されるのが舞台姿である。短い印絆纏をまとい角力髷の下から鉢巻をした女力士が勢ぞろいし太鼓、三味線に合わせて民謡を歌いながら踊る。

印絆纏の背面に女力士と染抜いてあり腰のところではばった細帯も手振りが激しくなると、こんもりした胸がのぞけ、白パンツの上に立みつの黒のまわしが太ももの間からチラチラッと現れ、何んともいぬ風情があった。

時折り黄色い掛声で「ヨイシヨ」とか「サドッコイ、ドッコイ」といって股を開き、二人づつ相對して取組む真似をしたりするが土俵上のものとは別な色気というか、エロがあつて楽しませてくれた。興行女相撲も旧態以前とした力持ちの余興を持続させるよりは、こんなエロを感じさせる踊りとか民謡を現代風にアレンジさせることが必要ではないかと思う。このように戦前は必ずといってよい程、何か引付ける芸があつたり取組も激しいものがあり、女力士も好きになれるような娘が二、三人はおつたが、戦後の興行女相撲は全く魅力のない色あせたものばかり、これは私が大人となつたために眼が肥えて、このよ

落語に出てくる「夫婦相撲」の図



うに感じられるかも知れないが、とに角、興行女相撲は戦後急激に質量ともに低下したとみてよい。

大衆文学の面では昭和初期、今東光の「女

るが、「さい投げ」は先年旅行中地方のストリップの寸劇の中に挿入されていてみる機会があったが、実際に落語家によるこれらはなしはきいたことはない。

相撲」、村松梢風の「仇討女相撲」の作品があるが、昭和十六年だったか、故里において女相撲興行を観戦その魅力にとりつかれた頃、単行本「仇討女相撲」を見出し、早速手に入れた。内容は既に雪崎氏が本誌に紹介されたが、私が女相撲の文章を読み耽ったのは、これが最初であった。

落語に現れたものとしての夫婦相撲として「蚊柱」「さい投げ」があ

素人女相撲の起源や発生理由はそれぞれ、その地方の特殊性によって一様ではないが一般に紹介されているものは伊万里市のそれ、長崎、宮崎、福島のものについては私自身既に述べたこともあるし、日本海沿岸の漁村で龍王や恵比須神社に漁運を祈るために「マンなおし」と称し娘や主娘達が夫や親兄弟を海に送ってからの留守に裸相撲を取ることもご存知の通りである。

しかし素人女相撲の発生は信仰との結び付き、特に雨乞いという関係からのものが一般的には起源とされているようである。

民俗学者柳田国男氏が「民俗学四の二」において女相撲がくると雨が降るといふ言伝も所々にあるが、女と雨乞いとの関係はまだ説明出来ない。しかし何か隠された理由があるらしいといっている。学者の立場からすれば根拠となる資料の乏しいところにその理由を断定することはむづかしいことであろう。ここに三、四の実例をあげ表現的理由だけでも掘り出してみよう。

秋田県北秋田郡扇田町あたりで旱の時、女相撲を挙行し男が覗くと追払う（これは民俗信仰のルッキングタブーが男性に対して要求されたものである。その理由は不明）またこ

の地方は興行女相撲が巡業すると雨が降るという。

秋田県鹿角郡毛馬内町近辺では昭和十八年の夏の旱天には女が二十四、五人ずつ一団を作りワラで作った竜や亀をもち腰巻をはずして旗にして歌い踊り狂ったといわれるが、更に禁断の旗守月山神社の坐す山へおし登り女相撲を演じた結果八月から大雨が降ったといわれる（民間伝承誌による）

この場合は中古以後の女人禁制を犯して神の怒りを利用したものらしい。

二年程前に私の友人が秋田地方を旅行するとき、この地方の女相撲の様子を調査するよう依頼した。が、なかなか多忙を極め、その内同北秋田郡比内町だけは立寄りその事実を直接確かめてくれた、が現在比内町の人々はほとんどその慣行を知らずある老人の話によると大正末まで日での年は確かに行われたとの事で、村の鎮守様前に土俵を築き日ぐれとなると村から選抜された娘や主婦達によって取組が行われたが男や子どもが覗けば祈りの効果を失うといわれ厳重な警戒のもとに行われたらしい。が男でその光景をみた者もなく取組んだ婦人達も如何なる行事取組が行われたか洩したことがないので不明との話で

あり、その慣行も昭和に入ってから全く断たれたとも付け加えていた。

これと対照的で男女共同による雨乞の祈願として面白いものは愛媛県北宇和郡御榎村である。旱の時の雨乞いは先ず男女合同で行い、それでも雨が降らない場合は男子がその場を去る。女子だけが再び祈願をし雨乞いの相撲を行う（日本社会民俗辞典）

肥前神崎郡仁比村の鎮守神入龍宮は女相撲がお好きだという伝説がある。この場合は前例とは全く異なり神の好色につけこもうとする一例である。

同村では美女四十名を選抜し神前で雨乞いの祈願の女相撲を奉納したと昭和九年七月十三日東京朝日新聞紙に報道されている（日本民俗辞典）

時間があればその一つ一つを訪ね詳しく史料を調査し、またその中で現在も承継されているか否かも明白にしたい報告したいものと思う。現在もこれらの慣行あるものとして明らかかなものはご存知の伊万里市、長崎式見ではあるが今年に入り出入れのDPに焼増しを依頼したところ、あるお客から福島の人女相撲の取組の焼付を頼まれたといわれ、何とかかその人を探し詳しくその場所様子を知

りたいと思ったが逢うことが出来ず残念でない。

余談になるが昭和二十七年正月、東京新宿伊勢丹右横に山形の興行女相撲がかかったことも既に紹介されているが、同じく伊勢丹左横に当時ストリップ専門のセントラル劇場で「女の初場所」と称するショーを開演していた。勿論ショーであるから取組も型通りのもので迫力はないがとに角一応美女が裸に黒のまわしと下りを付けて取組むのであるから女相撲ファンには見逃せない情景がある。

その中でグラマー嬢が露はらい、太刀持ちを従えて土俵入りを行ったが堂々たるものでこれも印象に残った一コマであった。

次に女子プロレスが全盛の頃、その道場で祝儀を出して稽古まわしを締めさせマット上で二人のレスラーに取組んでもらったことがある。さすがに稽古で錬えただけに髪をふりみだしての押し合い、激突は力技のたくみさ、迫力感においては最高のものであった。労をねぎらい夕食をとにしたが相撲の方がまわしを手にすることが出来るだけプロレスより楽であるとの事であった。が寝技や動きの派手さのない女相撲では商売にならないでしょうと笑っていた。

花 と 蛇

(第七回)

団 鬼 六

(京子の屈伏)

葉桜団のズベ公達が、寄ってたかつて、無理やり飲まそうとする塩水を、京子は必死に首を振り、さけようとするが、京子が、戦慄し、悶えれば悶えるほど、ズベ公達は調子づいて、京子の口を割り開こうとする。

静子夫人を痛めつければ、京子はこちらのいうなりになると見てとった川田は、男達に命じて、静子夫人をうしろ向きにして立たせる。柔軟な夫人の手首は、なめらかな白い背の中頃で、どす黒い麻縄で嚴重に縛り合わされており、たくましく盛り上った尻には、固

くねじった紫の禪がしめあげるように喰いこんでいるのだ。

「へっへへ、浣腸で鍛えただけあって、ますます色っぽいおヒップになったじゃないか。え、奥さん」

川田は笑いながら、青竹を持ち出して来ると、いきなり夫人のヒップに打ち下した。

「あっ」

静子夫人は、ふくよかな肩にまで垂れ下がっている黒髪を激しくゆすりながら悲鳴をあげる。

「手荒な事はしたくねえのだが、この京子がまだ強情をはるのでね。恨むなら、となりの

姐ちゃんを恨みな」

川田は、そういいながら、なおも、青竹を振るって、静子夫人の尻をぶちつづける。手加減をしておっているのだが、夫人の尻は次第に赤くふくれあがって来たようだ。

「やめて、やめて！」

京子が、夫人の悲鳴に耐えられなくなって大声で叫ぶ。

それを待ち受けていたように川田が、ニタリと顔をくずした。

「じゃ、葉桜団のいう通りの事をして見せるというのかい。おめえがうんといわねえかぎり、この奥さんは体中から血がふき出るまで

打ちのめされるんだぜ。命がけで、この奥さんを救い出しに来たおめえだ。それぐらいの事は何でもねえだろう」

川田は、京子の表情を楽しそうに見て、いうのだった。

京子は、たまらなくなつたように顔をあげ柳眉をさか立てるようになつて川田を見た。

「蹴るなり、なぐるなり、お前達の気のすむようにしてくれ。だけど、そ、そんな事だけは——」

負けてなるものかとばかり歯を喰いしばつた表情をしつづけた京子ではあつたが、彼等の残忍さに、声も震えるのだった。

「駄目だね。おめえのような鉄火娘を蹴つたりなぐつたりしたって、効果はねえ。女連中も、おめえの唐手でさんざん痛めつけられたんだ。女連中が望む事をどうしても一旦ここでさけ出さねえと、この場はおさまりがつかねえぜ」

川田は笠にかかつて京子に浴びせるのだ。

京子は、再び、がっくり首を落し、身を震わせている。獣のような連中の中で、素肌の身をさらされているだけでも、気が狂いそうな羞しさであるのに、彼等は更に、死ぬより辛い姿を京子に演じさせ、溜飲を下げようと

いうハラなのだ。

京子のそんな哀れな姿を見ながら、川田は更に静子夫人の尻にムチを当てる。絹をつんざくような夫人の悲鳴に、京子は、うろたえたように、顔をあげて、川田にいった。

「待っておくれ。これ以上、奥さんをぶたないで——」

「そうかい。じゃ、決心がついたというのだな」

川田は、京子のせつばつまつたような表情を、ぞくぞくした気分で見ると、

「そ、そのかわり、奥さんに指一本出さないと、約束しておくれ。奥さんだけは——奥さんだけは——」

京子は、今にも激しく泣き出しそうな表情をして、川田に哀願するのだった。

「わかったよ。おめえがいわれた通りの事をして、ここに在る連中の機嫌を良くすのなら、奥さんの方は、このまま、監禁しておくだけにしようじゃないか」

川田は、そんな事をいいながら、京子に、そういう姿を演じさせたあと、静子夫人を如何にいたぶるかを考えていたのである。とにかく、京子に、万座で赤恥をさらさせて、先程、京子に受けた空手チョップの復讐をしてか

ら、あとの責めをゆっくり楽しむ気だったのだ。

銀子と朱美が、京子の両側に立って、京子の縄にくびられたようにつき出ている形のいい乳房を指でつつく。

「じゃ、これで話はきまつた。京子姐さん、いいね、見せてくれるんだね」

銀子と朱美は、何度も京子に念を押すようにいう。

耳たぶまで朱に染めて、うなだれていた京子は、消え入るように小さくうなずき、急に口惜しさがこみあげて来たのか激しく泣き出すのだった。

銀子と朱美は、手をたたいて喜ぶ。

「おい、みんな、京子姐さん、して見せてくれるんだとよ。この鉄火姐さんが、どんな顔してお始めになるか、とくと拝見さしてもらおうじゃないか」

ズベ公達は、急に活気づいてきた。

「支度にかかろうよ」と銀子がはしやぐようにいい、ブリキ製の便器が持ちこまれてくる。男達は、8ミリ撮影機を持ち来んで、先程、静子夫人の浣腸図を撮影した時と同じように、京子のそんな姿を判明に撮影しようとする準備を始めるのだった。



京子は、血も凍るような恥しさに、激しく首を振る。

「やめてっ、写真をとるのだけは、やめて、やめて！」

狂気したように叫ぶ京子であったが、そんな事に頓着する連中ではない。むしろ、京子

が嫌がれば、それだけ、やりがいがあるというように、ライトの位置やカメラの位置を男達は口笛を吹きながら、計っているのだ。

「奥さんは、こっちへ来て、見物しな」

川田は、静子夫人の縄尻を鎖から外して田代が森田の坐っている所まで引き立てる。

「お願いです。京子さんを助けて下さい。私が悪かったのです」

静子夫人は、田代と森田の間に坐らされると、禪一本の恥しい身も忘れて、左右の二人に哀願するのだった。

「おめえは、あとでたっぷり、可愛がってやる。おめえは、おめえ、京子は京子で、罪のつぐないを、しなくちゃならねえんだよ。ま、はねっかえり姐さんのショウをよく見ておきな」

必死に両足を閉じ合らし、気が狂い出しそうな屈辱に身を悶んでいる京子の前に便器が置かれる。

「おまるを使う前に、男達に気に入られるようお化粧をしてあげよう」

銀子は、含み笑いをしながら、化粧箱を持って来て、京子の顔を念入りに化粧し始めるのだった。朱美が乳液をとかして、京子の顔にぬり、悦子が、櫛を使って、乱れた京子の髪の毛をすきあげ、ヘアローションを吹きかける。銀子は、涙に濡れた京子の眼をガーゼで、ていねいにふいて、眼バリを入れる。

「どう。すばらしい美人になったろ」

銀子は、男達に笑いかけるといっていい

京子に頬紅をつけ、口紅をひくのだった。

「まったくだ。さっきの鬼のような暴れようなんか、嘘のようだぜ」

やくざ達は、均整のとれた京子の肉体と、見違えるように美しく化粧された京子の顔を、つばを飲みこむように見て、いうのだった。

「さて、これでよし、じゃ、京子姐さん、皆様、お待ちかねのようだから、そろそろ始めていただきますようか」

銀子は、京子の白い首筋から、縄に締めあげられている二つの見事な乳房に至るまでに香水をふりかけ、京子の赤らんだ頬を指でつつく。

京子の足もとに置かれてある便器の上へ京子をまたがせようとして、銀子と朱美が、鎖から縄尻を外そうとすると、川田達が笑いがらいった。

「何も、おしとやかにしゃがませる事はあるめえ、相手は男勝りのはねっ返り姐さんじゃないか。」

どっと哄笑がわいた。

「そうだね。その方が面白いわ」

銀子は、縄尻を元通りに鎖につなぎとめて身も世もあらず身悶えしている京子の盛りあがった尻を一発平手でぶって、

「そのまんまするんだよ。ふふふ、足もとおまるに上手に入れなきや駄目だよ」

朱美も、京子の乳首を指でつまみあげたりしながら、

「いいかい。おまるの外へ洩らしたりしちゃ承知しないよ。そのかわり、上手におまるを使ったら、御褒美として、このピンクの褌を力一杯しめてあげるからね」

朱美は、ピンク色の長い布を京子の眼の前に押しつけるようにして声をたてて笑うのだった。

「さあ、始めていただこうじゃないか」

銀子は、京子の足元に置いてある便器をわざと一米ばかり離れた前に置き、

「どう、少し遠すぎるかい。そんな事ないだろう。男なんて、屁とも思わない京子姐さんのことだ、ここまで景気よく飛ばす事が出来るさ」

ズベ公達は、よほど京子に痛みつけられた事に腹を立てているらしく、徹底的に京子を蹴り抜こうというハラらしかった。あまりの屈辱に、京子は、齒を噛み鳴らしながら、激しく泣き出す。

「そうかい。少し、遠すぎるといふのだね。じゃ、このへんなら、とどくだろ」

ズベ公達は、便器を京子の足元に少し近ずけるようにして、京子の顔を一せいにうかがう。

「はっきりおしよ。一体、どのへんに置けばとどかす事が出来るんだい」

朱美が、京子の太腿をつねりあげていうのだった。

「そんな事いったって無理だよ。いくら唐手の名人でも、やっぱり女だ。そんな器用な芸当が出来るわけがねえ」

川田は、ウイスキーをラッパ飲みしながら楽しそうにいう。

京子は、火のように燃えた顔を横に伏せ、この息ずまるような屈辱を全身に耐えているようだった。

「あまりじらさずに、早くさせねえか。社長や親分がお待ちかねだぜ」

川田が銀子にいう。銀子は、便器を京子の足の下へ元通りに置き、

「じゃ、京子姐さん。お願いするわ。ここにいる連中によく見て頂き、大声で笑ってもらいましようね」

銀子は、朱美の方に眼くばせをし二人で、必死に閉じ合わせている京子のすらりとした両肢を左右に開かせようとするのだ。

「な、なにをするの！ やめて——」

京子は悲鳴をあげて、銀子と朱美にさからい、必死に両肢を閉じ合わせようとする。だがズベ公達は、調子に乗って、自由のきかぬ京子の身に蟻のように寄りたかり、京子の足首の一つ一つに縄をかけるや力一杯左右へひっぱり始めたのだ。

「あ——、な、なんてことを——」

京子は、叫び、悶え、そして激しく泣きじやくる。よいしょ、よいしょ、とズベ公達は左右にわかれて、縄を引っ張り始める。京子は、命がけで、両肢に力を入れていたが、遂に彼女達の力に負けて、足を開いていくのだった。

「ああ——」

京子は、真赤になった顔を右へ伏せようとしたり、左へ伏せようとしたり、身も世もあらず悶え抜いている。

ズベ公達は力一杯引いた縄を、それぞれ左右の柱につなぎとめ、京子を人の字の恰好に縛り止めると、

「ふふふ、いいまだだよ。おまるは、ここへ置くからね。ここなら、大丈夫だろ」

便器が、足の間へ置かれた。

「さあ、準備はOKだ。京子姐さん。景気よ

くおッ始めな」

銀子は舌なめずりでもするようにいう。

撮影のためのライトがともされて、映写機が、京子の真正面にすえられる。

ガラガラ酒で濁った男達の眼、ニヤニヤしているズベ公達の口もと、そして、正面にすえられた非情なカメラのレンズ。

京子は、嗚咽しながら、嫌々と真赤な顔を振りつづけるのだった。

「何をもたもたしてるんだよ。何時までも、もったいぶってやがると承知しないよ」

と銀子が舌打ちする。朱美は、底意地の悪い眼つきをして、

「京子姐さん。二階じゃちゃんとお床入りの支度が出来てるんだ。これがすんだら、こつてりと男達に可愛がってもらえるんじゃないか。さ、その男達が眼を皿のようにして、お待ちかねだよ」

銀子にののしられ、朱美にからかわれ、京子は生きた心地もなく身を震わせて泣いているだけだったが、命じた行為をどうしても演じようとしないう京子に業を煮やした銀子が静子夫人にかわりをさせな、と部下のズベ公に命じるに及び、京子は、遂に悲痛な決心をして、涙にうるんだ瞳を上へあげた。

「どう。決心がついたかい」

銀子にいわれて、京子は、すすり泣きしながら、かすかにうなづく。

「おい、皆んな、いよいよ唐手姐さんの素ばらしいショウが始るぜ。」

川田が高笑いしながら叫ぶと、やくざも、ズベ公も、京子の周りを取り囲むようにして坐る。

京子は、すっかり観念したのか、眼を閉じ固く唇を噛んで、悲壮な覚悟を示す顔つきであった。凄惨な美しさである。撮影機が廻転し始めた。京子を眺める連中も息をつめると、急に、京子は、がっくりと首を落し、激しく泣きじやくり出した。一旦は、死ぬ思いで決意したことだが、撮影機の廻転する音が耳に入ると、その勇気がくじけてしまったのだ。

「——あんまりです。あんまりだわ——」

京子は、しゃくりあげるようにいい、身を震わせて泣くのである。

「畜生、ふざけやがって——」

銀子は、カンカンになって、立上ると、京子の頬に二三発平手打ちを喰わす。

「こうなりや意地でも、させてやる」

先程の塩水一杯入ったヤカンが再び持つ

て来られる。

「さあ、こいつを飲むんだ。おかわりはいくらでもあるぜ」

男達がズベ公達に手伝って立上ると、京子の口を無理やり押し開いて、ヤカンの塩水がむしやらの注ぎこむのであった。こうして淫獣に等しい連中に塩水責めに合う京子は、何分かの後には、次第に下腹が膨脹し出し、苦しげにあえぎ出し始めた。

「こうなりや、もうこっちのものだ」

川田は、舌を出している。

「こうまでしてやったんだ。これ以上、強情をはると、今度という今度は、本当に奥さんを痛めつけるぜ」

強情をはろうにも、京子は、どうしようもないところまで追いこまれてしまったのである。下腹を突きあげてくるような激しい尿意の苦しさに、京子は、美しい顔をのけぞらせるようにし、

「いいい——」

と白い歯を見せて、悶えている。

「へへっへへ、今度はいいよ大往生らしいな。遠慮はいらねえ。ゆっくり拝見さしてもらうから、景気よくすましちまいねえ」

川田は、ぞくぞくした気分で京子の頬を指

でつく。

京子は、もう駄目だと限界にきたことを知ると、最後の気力をしぼり出すように、

「お、お願い——奥様、奥様だけは——」

「わかった。奥さんは鬨りものにはしねえ。さ、早くするんだ」

川田がどなると同時に、撮影機は再び廻転し始めた。

「口、口惜しい——」

京子は絞り出すような声を吐き、大きくあえぐように艶やかな白いくびを見せて、顔をのけぞらせた。

「淫獣の餌」

嘲笑と哄笑に地下室の中は異様な空気を充滿させている。

銀子と朱美などは肩を抱き合い、子供のように笑いこけているのだ。

「さあ、皆んな、このお嬢さんの顔をよく見ておやり。可愛い顔しているくせに、唐手チョップは使うし、それに、皆んなの見ている前で立小便をするんだから。」

銀子は、魂も凍るばかりの恥しさに頭を垂れて、すすり泣く京子の髪をわしづかみにして、京子の顔を正面に向ける。

朱美は、便器を手にとってのぞきこみながら、

「ずいぶんと出したわね。だけど、おまるの外へも京子姐さん、相当洩らしちゃったじないの」

京子の顔に再び血がのぼる。

川田は、田代と森田の機嫌をうかがうように、

「どうです。社長も親分も、少しは、腹の虫がおさまったでしょう。見て下せえ。この羞しそうな京子姐さんの顔を——」

川田は、銀子に頭髪をわしづかみにされて顔を無理やり正面に向けられている京子の真赤な頬を小気味良さそうに指でつついて、いうのだった。

「おい、京子。もうこうなっかたらにゃお前も静子夫人と同じよう森田組のために今後しつかり働く事だな。おめえは、人に見せた事のねえとんでもない姿を俺達にはつきり見せたんだ。それにカメラにも、ちゃんとおさまったんだ。もう一切をあきらめて、森田組に面倒を見てもらう事だな」

川田は、引導を渡すようにつけ加えて京子にいう。

京子は、川田のいうよう一切をあきらめた

ように、一言も発せず、ただ、首を横に伏せて、嗚咽をつづけているだけであった。京子の願いは、只一つ早くこの、衆人環視の中から解放される事であつたろう。

だが、獣に等しいやくざとズベ公は、互にふざけ合ったり、羞恥の極にある京子の腕や背中をつねりあげたりしてキヤッキヤツと笑い合ったりして、乱痴気さわぎを始めるのだった。

「さ、京子姐さん。後始末をしてやるぜ」

酒気を帯びて赤ら顔になった森田組のやくざ達が三人あまり、どうしようもない姿で縛りあげられている京子の周囲に迫る。

京子は、泣き腫らした眼をおびえたように見開き、思わず身体を硬化させた。

「そのぐらいにしておきな。あとの楽しみが薄くなるぜ。何もそうあわてなくなつて、明日って日があらなあ。」

川田が笑いながら、男達をなだめるようにして止める。



「まあいいや、そのかわり、あとで、うんといい声で泣かせてやるからな。楽しみにしているよ。」

男達は、未練たらしきいい、ようやく京子の傍から離れる。

かわって、銀子と朱美が、ピンク色の布を持って、京子の傍へ近ずいた。

「さて、禪をしめてあげましょね。きっとよく似合うわよ」

銀子が、京子の腰に朱美と二人して、それ

を力一杯、巻きつけ始めると、悦子が、

「あら、姐さん。もうそれでおしまい？。浣腸はしてやらないの。奥さんの方は何度もしてもらってるのに、不公平じゃない」

と、人を喰ったような真赤な唇をつき出すようにしている。

「あら、そうだったね。じゃ、も一ぺん、禪を解かなくちゃ——」

銀子は、京子の尻の上で固く結んだ禪の紐を解き始める。

死ぬ程の辛い思いをさしたその上に、ズベ公達は、更に京子を浣腸責めにかけていうのだ。京子は、彼女達のあまりの残忍さに気が遠くなりかける。川田が女達にいった。

「今夜は、それぐらいにしておきな。あとは明日にすればいいじゃないか。あわてて、一度に責める事もあるめえ。京子姐さんは、これからもずっと、ここに御滞在なさるんだ」「とかなんとかいって、早く、この京子を女にしたいんだろう」

銀子が、口元を歪めている。

「ふふふ、俺は、気性の強すぎるこの姐ちゃんを、色気たっぷりの可愛い娘に仕上げてやろうとしてるだけだ」

「相変らずうまい口だね。じゃ、明日に必ず

京子の身柄を一旦あたいた達に預らしてもらおうよ。これだけじゃ、まだあたいた達の腹の虫が

治まらないだからね」

「わかったよ」

川田は、ズベ公達に返事すると、今度は、

森田組の若い連中に、

「今夜のところは、この女、俺に任しておくんなさい。明日から、お前さん方で、どうぞ好き勝手に料理して下さいえ」といい出す。

「おっと、そいつは、ちよっと虫が良すぎやしねえか」

やくざ達は、眼をつりあげ出した。ズベ公達に、ピンクの禪をしめさせられて、身も世もあらず、身をくねらせている京子の耳に川田と森田組の恐しくも、また浅ましいやりとりが入ってくる。京子は、もう流す涙も枯れたようなだれつづけていた。

これだけのいい体をした女を今夜一人占めにするのは、けしからんとやくざ達が口をとがらすのももっともだが、親分の森田が、「てめえ達、今夜のところは、川田の顔を立てろ。これだけの大きい仕事を持って来た男じゃねえか。ここは、俺に免じて、川田に譲るんだ。そんな事より、明日から、仕事にか

かるんだからな、準備の方、手ぬかりなくやらなきや駄目だぞ」

親分に、そう頭ごなしにいわれると、やくざ達も一言もなく、結局、自分達の欲望を満たすのは明日にのばされてしまう。

「しかし、てめえも、なかなか色にかけては悪党だな。静子夫人をものにし、その上、京子まで、しゃぶるってのは欲の深い野郎だ」森田があきれたようにいうと、川田は、顔をくずして、

「へっへ、と、いいますのもね、この京子っていうのはねっかえり姐さん。気性はきついですが、どうも、俺の見た眼じゃ、生娘のようなんです。よってたかって、無茶をしてやりや可愛そうだ。今夜は、俺が、たっぷりと楽しませてやり、そうすりや、京子姐さん、明日には、見違えるように成長して、森田組の兄さん連を喜ばせるに違えありません」

「うめえ事をいいやがる」

森田は声をたてて笑う。

京子は、たまらなくなったように眉を震わせて、すすりあげ始めた。

「じゃ、そろそろ、お二階の方へ参りましようか」

川田は、静子夫人の縄尻をひいて、立上ら

せると、

「奥さんの方は、社長がおんぶしてやって下さい。京子の方は、わっしがおんぶして、お二階へ運ぶ事にします」

田代は、ニヤニヤして、羞恥に頬を染め、引き立たてられている静子夫人の前へ身をかめる。

「社長がおんぶして、花嫁を寢室に運んで下さるそう。さ、遠慮せず、乗っかん」

森田は、夫人のふくよかな乳白色の肩に手をかけて、田代の背に押しつけるのだった。

「どっこいしよと、案外重たいもんだな」

田代は、背に静子夫人を乗つけると、よろよろと立上る。柔かい白い餅のような夫人の二つの尻たばをうしろへまわした両手で押し上げるようにし、その感触を楽しむように田代はそのへんを歩き廻るのだ。

京子は、それを見ると、憤怒のこもった瞳を近づいて来た川田に向け、

「や、約束が違うじゃないか。奥様には何もしないといったのは嘘なのかい！」

川田は、ただせせら笑うだけである。

「いっとくがね。俺達は根っからの悪党さ。てめえとの約束を破るぐれえ屁とも思っちゃいねえ。それより、どうだい。ピンクの褌を

しめてもらった心持は？」

京子は「畜生、畜生」と狂ったように悶え始めた。

「じたばたすんねえ。おめえは、俺の今夜の花嫁なんだぜ。さ。おんぶしてやろう。」

葉桜団のズベ公達が、京子の縄尻を鎖から外すと、みんなで担ぎあげるようにし、背を向けてしやがんだ川田の背中へ京子の身を押しつけるのだった。

憎みてもあまりある川田の背へ遂に京子は乗つけられ、おんぶされた形となる。

「おっと、そんなに暴れると、おっこととしてしまうじゃないか」

川田は、背の上で悶え抜く京子に笑いがらいい、

「じゃ、社長、参りましょう」

と田代にいいながら、先に階段をあがって行く。田代もニヤニヤとして、そのあとへ続く。その田代の背には、紫の褌をしめた静子夫人が、緊縛姿のままおぶされている。ゆで卵の白味のような光沢のある肌を持つ静子夫人は、もう一切をあきらめたよう、田代のがっしりした肩に顔を埋めるようにして、すすり上げていた。

(つづく)

M写真・シリーズ 決定版

足の味覚

大手札

略号(そは)
三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫

犬の生態

大手札

略号(そろ)
三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫

長靴は悶ゆ

大手札

略号(そに)
四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

灰皿の男

大手札

略号(そほ)
四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

股責の地獄

大手札

略号(まそ)
四枚一組 五〇〇円
大塚啓子、高田 一

足舐の構図

大手札

略号(そへ)
四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三

縛りの過程

大手札

略号(そと)
四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

使役の凌辱

大手札

略号(そち)
四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

なぶり者

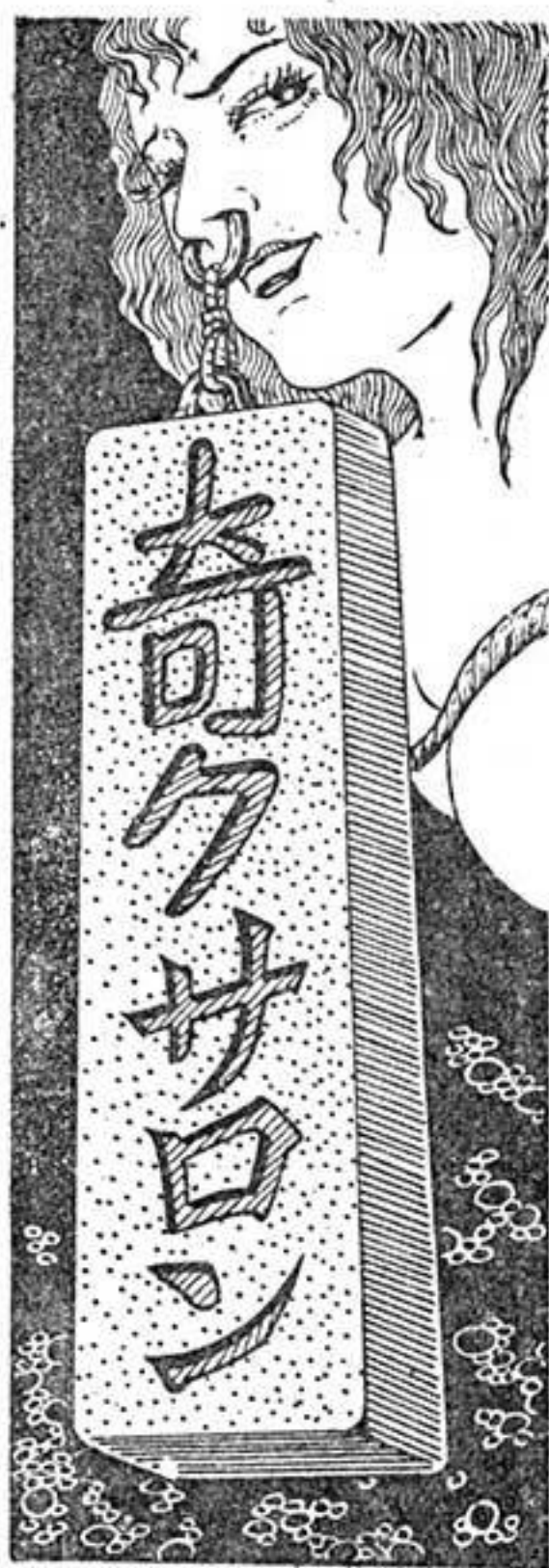
大手札

略号(そり)
五枚一組 五〇〇円
絹川文代、高田 一

おいしい足

大手札

略号(そぬ)
四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三



編集部から私の方へ回してもらった被縛モデル志願の通信の中で一通変ったものがあるので、ご紹介してみたい。たしか、何月号かの読者通信にも、載ったことがあるのではないかと思うが、それがいつの間にかやら、私が返事を書く破目になり、それがきっかけとなって、次々と手紙を貰い、今やその仕末に困っているという有様なのである。

「先ずは彼女の年令が今年満二十才というのだから、少々トウが立ちすぎている。勿論最初に彼女からも、二十才という年令で果してモデルとして勤まるかどうかと問合せてきたが、それに対しでは、実際に若く見えるようならその位の年令でも構わないと返事をしておいた。一応最近の写真を送ってみてくれといったら、最近

のはないから、といった数年前の娘時代の写真を送ってきた。これでは一寸写真判定はできない。

次は、子供こそないが、一度結婚した身であること。彼女からの便りによると、なんでも恋愛結婚した相手というのが大酒飲みの遊び好きで、パチンコばかりしていて働かないので、協議離婚したとのことである。この間の夫婦生活で彼女は夫からMに仕込まれたということである。

夫と別れてからは、母と同居して働きに出て、現在に至っているのだが、本誌を見るにつけ、自分のM性格が抜け難いを知り、な

んとか、被虐モデルとして使ってもらいたいというのである。数回とり交した通信によって知り得た彼女の希望条件というのは、凡そ左記の通りである。M女性を求めるS男性の通信も少くないのであるが、どうです、そういった方は一肌ぬいでみませんか。

記

一、アパート程度でよいから住居を提供してほしいこと。

二、女一人の生活できるだけの十分な月々の費用を負担してほしいこと。

三、故郷に残した母のもとへ送金するため月々二万円の支出を見込んでほしいこと。

四、被縛はもともと好んでいるものであるから、如何ような厳しいものでも耐える自信があること。

五、一匹の奴隷として全身全霊を捧げて奉仕する覚悟であること。

総合して大体以上のようなことになるのだが、彼女の希望としては、口絵グラビヤに掲載されるモデルになりたいということなので

私のところへお鉢がまわってきたわけである。

しかし、私にしたって、緊縛フットばかりを撮っているわけではないので、お抱えのモデルを養っておく程の余裕はない。彼女の方では、私の返事一つで、今にも上阪してきそうな意気込みで、もう母の許しも得て荷物の準備もしてあるというのだ。

どなたか、この訓練された被虐女を縛ってみようという方はないだろうか。差し当り旅費だけでも送ってやれば、彼女は早速とび出してくるのだ。グラビヤの口絵に使うのではなかったら、二十才という年令も、あながち不服とするに当たらないのじゃないか。

私からの色よい返事を待ちこがれているだろう彼女に対して、私はノーという手紙を書くのが、大いに気がかりになっている。手紙の文面からすれば、彼女は前夫からは、相当訓練され仕込まれたようだ。その点飼育済みの家畜なのだから、プレイ・オンリーにはもってこいだろう。

今日も又、彼女は私からの色よい返事を待ちこがれていることだろう。

被虐モデル志願者

塚本鉄三



感想

先月号の読後感と

奇クへの所感

佐渡耕作

十一月号拝見しました。充実した内容嬉しんでいます。私は二十三才、七年前、貴誌を古本屋で見つけて以来の読者です。

私はSですので表紙は現在のもので、一時の四馬孝氏のものが好きです。目次の上段の絵は仕上げを丁寧に美しくして下さい。

第一グラビア、髪型を変えた大塚さんは美しく表情も、これまでとは一変して良い。その意味で、「……あえぐ」は新しい彼女を期待されるもの。「……もだえる四態」も良く、初め三葉は嫌がる女体を無理矢理カメラに晒し、四葉目はついにグッタリとなった女をさらに苛めつけようとしていると想像できるのも、表情の良さからです。

絹川さんの「片足……」はマンネ

リです。彼女にはかならず鼻と口を覆う猿轡をかませて下さい。縛り方は乳房の上下に一本ずつ縄が体に埋まり込むまで強く縛り後手にして下さい。一葉目は脚線美の素晴しさです。

新人遠藤さん、は初歩の縛り、これからの成長を待ちます。

梨花さんは、奇ク初まって以来の秀れたモデルであり、他誌にも見られない素晴らしい人です。最大の讃辞を惜しみません。その美貌と美しい肢体は、どの様に責めても素晴らしいものですが、やはり裸に剥ぐべきでしょう。着衣の責めは小柄な彼女を貧弱に見せます。彼女の好む吊り責めも着衣ですと、美しさが失われ残酷だけとなります。私が貴誌に望むのは、第一に美、第二に残酷です。これだ

けのモデルをまれにしる美をなくして写すのはカメラの責任です。Sとして上段の笑いの表情は嫌です。しかしその他は何一つ文句がありません。

「可愛い牝馬」正に題名通りです。S的な雰囲気があり素晴らしいものです。しかし、これは出発前でしょう。欲をいえは、もうすでに長く歩かされ、背はムチで打たれ涙を流し肌は汗に輝き、まだ先は遠いといった場面にしてほしかったのです。

Mの二態、興味はありませんがさすが四馬孝氏です。美があります。以前のM画は醜くかった。二人共苛めてやりたい美しい女性です。「女賊捕物帖」切腹マニヤでない私には、これだけではつまみません。乳房や二の腕を槍で刺さ

KK通信コーナー

〔写真部だより〕

○臨時増刊の特集号で、長野良子、新井マリ子、五月亜紀子の三人の新しいモデル嬢が、本誌のモデル陣営に加わりました。その他にも、目下照会中の方が二、三ありますので、都合つき次第、撮影の予定です。

○妊婦モデルの件、二十三才になる若妻の読者の方、予定日が刻々と近づき、今やはちきれそうなお腹になっているのですが写真部員の手が足りず、いらいらしながら日が経ってゆくばかりです。どなたか腕に自信のある方、臨時に応援してくれませんか。産み月十一月。

○先月号でのこの欄で書きましたDPE引受の件、その後一件のご照会もありませんので忙しくもあり一応中止いたします。

○尚、出張撮影、特写の件も一旦中止いたします。可能になりましたら、又この欄にてお呼びかけいたします。

○モデル志願者の方は、とにかくご照会しておいて下さい。今すぐ撮れなくとも、予約してお

れ、太腿にはサス又が喰い込み、更に髪の毛には栗のイガを棒の先につけたようなもので、かきまわされているといった状態にしてほしかった。「浣腸とオシメ」もマニヤではありませんので……。「お嬢さん相撲……」美しい絵だといつも思っております。しかしマニヤではないので……。このあと……」マンネリです。せめて以前のように気の利いた説明がありましたら。最近では四馬氏の絵に説明がなくなりましたね、淋しくなりました。

第二グラビヤ大塚さん。素晴らしいノゴムの猿ぐつわ、ポーズのとおり方、縛り方、パンティの位置文句なしです。次の四態も美しい。特に最初の右肩のこうした表情（？）がたまりません。次の表情、乳房のくびれが良い。私はこうした女体が純のように光る美しさに心奪われます。正直いって今まで大塚さんを余り高く評価していませんでした。然し今月号の素晴らしい梨花さんに迫るものがあります。来月号から又楽しみます。梨花さんの二態、美しいです。下段は腰の物をもっとずらして、脚の美しさを見せて下さい。残念なことには肌の輝きがありません。

「ローソク台……」は今一つ……。「晒首」は、首の切り口にも血糊を塗ってはどうでしょうか。然しいずれもマニヤではありませんので……。それに美しさがありません。切腹も同様に興味がありません。然し上段のは真に迫っています。新人二人、大いに期待しています。貴誌は常連のモデルとしては梨花さん以外に美人はいませんでした。その意味でこの二人に対する期待は大きいのです。新井さんの美しい瞳と肢体は第二の梨花さんの登場を思わせます。五月さんは整った容貌で、かつての津川さんを思わせます。どうかこの二人を徹底的に責めあげて下さい。十二月号が待ち遠しいと思います。現在貴誌の外に同様のSM誌が数誌ありますが、私は第一に貴誌を挙げます。貴誌には高い香りがあるからです。多分編集者の高い審美眼と強い自制心によるものと思います。今一つの原因は秀れた読者層を掴んでいるからでもあると思います。この両者が今日までの奇クを育ててきたのです。その奇クにも弱点があります。挿絵と一部の記事です。中学生か高校生が書いたような幼稚で自慰的な作品のようなものを読まされ

ると情けなくなります。又、挿絵もひどいものです。せっかくの小説のイメージをこわされるためのみといったものが大半です。秀れたモデル陣を有する奇クのこれからの目標は、良いS作家と四馬孝氏に次ぐ挿絵家の開拓です。今月の奇クの小説でSとして取り上げられるのは「花と蛇」ぐらいなものです。これも作者が途中で変り更に三カ月の登場です。これも挿絵のまずさには怒りが湧きます。もし「花と蛇」が今後も途切れ途切れで出るなら、この作品を読者の希望をとり入れながら進行させてはどうでしょうか。

そうすれば、三カ月に一回の掲載も読者に喜ばれるでしょう。私は京子を徹底的に責めて責めて責めぬいてほしいと思います。体に傷をつけぬなら、操り、水責、電気責、それに鼻輪をつけるのも良いと思います。

奇クサロンの復活、嬉しく思います。この欄をもっとSMードの強いものにして下さい。勝手なことばかり書いたかも知れませんが、最後に一緒に奇クを読むような女性がいたらと思います。

(六三・九・二六)

きたいと思えますので。

〔代理部だより〕

○今回、発売いたしました臨時増刊号、八絵画と写真V文献特集号(定価五〇〇円)の末尾に目下分譲中の代理部分譲品の目録を一括紹介してあります。目録を請求しておられる方には、別に増刷りをして、お送りする予定をしております。

○以前分譲しておりましたもので、この目録や最近号に広告してないものについては、分譲打ちりのものが数多くありますので、在庫の有無につきご照会頂ければ幸いです。最近号に広告したものは全部在庫しております。

〔編集部だより〕

○直接編集者を訪問したり、電話には原稿の採否を問合せたりされる方がよくございますが、面識のある方以外からの電話は一切受付けておりません故、悪しからずご諒願います。

○住所氏名職業年令などを明記の上、事前に文書にてご連絡下さった方には、時間に余裕のある限りつとめてお逢いすることにしておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

論評

「倒錯」したセックスと

「正常」なるセックス

原 勝彦

血の逆流するような戦慄、そのような感覚に、久しぶりにお目にかかったので、一寸かっこう悪く不安な気持を押しきって、お便りを差し上げることになった。まともなエロティシズムを受け入れなくなる程に慣れきった精神のひずみにつけ込んできた乳白色の顔廃は、自分をとらえてはなさない。

この感覚は何に由来するのであろう。少し、それらの感覚を論理化したので以下に記してみたいと思う。

1

「倒錯」という言葉を使用する時は当然、その対象として「正常なもの」を思い浮べるであろう。「倒錯したセックス」に対するものは何であろう。「正常なるセックス」であろうか。「正常なるセックス」というのは、生殖機能に對して、性欲の中心的関心事項が注がれているというだけの話である。

「人間の尊厳」というのが、他の動物と明確に区別される点にあるとするなら、セックスの面においても下等動物なみの「生殖」中心主義から脱皮すべきではなからうか。いやすでに脱皮しつつある。経済的、保健的により、避妊（生殖のストップ）と注意しつつ、人々は、その性生活を送っている。だが、まだ不十分だ。その最大関心事項が子宮に向っているからだ。未来におけるセックスについては後にゆずるとしても少くとも現在、俗にいう「倒錯性欲」（この言葉は嫌いだが）が、俗にいう「ノーマルな性欲」の分野に

侵入を開始している。

この意味から、この本はいろいろな興味を持たせてくれる。サディズム、マゾヒズム、フェティシズム、肛門性欲、同性愛……。

これらは多く、一般の人々の潜在意識の中で眠り呆けている。個人個人で、これらは、いろいろな割合濃度で混合されている。そのため、いろいろな形態をとる。

2

今までのが概して皮膚感覚的であつたとすれば、それだけで理解できない観察性ないしは想像性の性欲が登場しなければならぬ。

例えば浣腸責めをされる人の受ける屈辱を考へることによってセックスを満足させる人間、彼は皮膚も粘膜も刺戟しない、ただ、その脳髓と、それに従属する神経のみを刺戟する。そして間接的に皮フ感覚を満足させる。

「出歯亀」方式のセックスであり彼自身の中では、サドとマゾが行ったり来たりしている。そういう「第3人称セックス」それが今後のセックスを語る上で重要な鍵になるのではないかと思う。

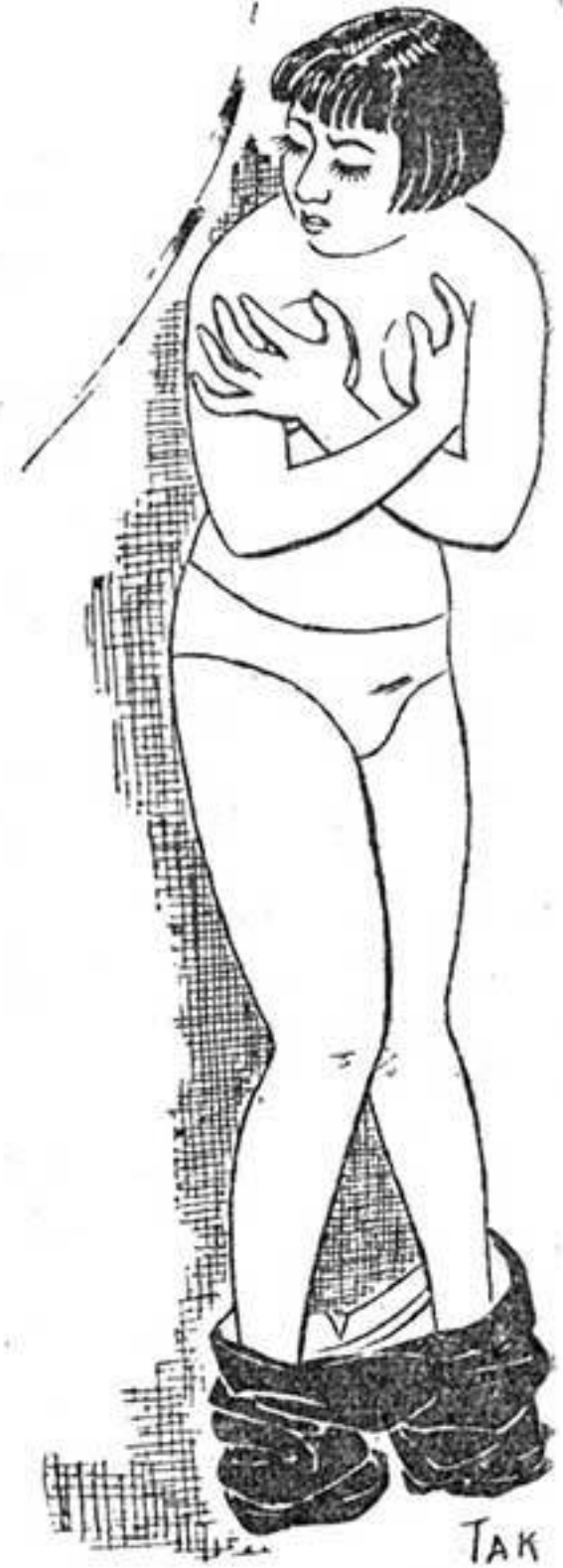
従来のセックス劇の登場人物は二人であつた。（もちろん、男二人女一人などという組合せはあつたにせよ、多くは、その瞬間には男一人女一人であり、他の一人はその時とは無関係に自分の番を待っているピエロでしかない）

一人称と二人称の対話、それがセックスであつた。ここに三人称の沈黙の対話によって、セックスは三人以上の不特定多数の、時間における同一性を獲得することができるのである。

このように「反セックス」のセックスが「超セックス」と極限的に転化していく時、人間の存在という哲学的課題に對し、何らかの指針を与えるものと思う。

【女】の
フンドシ
M・M生

久しぶりに会った旧友に、「この頃の景気はどうだい？」と訊ねたら、その答に「女のフンドシさ」といったそのときは訳がわからなかったのだが、家へ帰って家内に話したら顔を赤らめながら「それは喰い込むばかりって意味じゃございません」と教えてくれた。女のフンドシとはよくいったものだ。



△新聞記事より▽

継子いじめとお灸責め

昼行灯生

おキユウで殺す?

私は「お灸責め」に少なからず興味を持っております。まだ私が小学校一年の頃、近所に住む継子である六、七才の女の子を継母とその母親(継祖母)が二人がかりで押えつけ、お灸をすえて折檻するのをよく見にいたために、興味を持つようになったのだと思います。

【大津】四日午後零時三十分ごろ滋賀県草津市東元町料理店経営小川とみ子(二七)の養女淑子ちゃん(四つ)の死因がおかしいと同町山田進二医師が草津署に届け出た。同署の調べによると、とみ子と淑子ちゃんは同家六畳の間で寝ていたが、同朝四時ごろ淑子ちゃんがむずかかって泣きやまないのので両手足を腰ヒモで縛ったうえ、腰と腹の二カ所に直径四ミリ大のキユウをすえ、夏ぶとんをかぶせておいたところ、朝九時頃とみ子が

目をさますと死んでいたという。同署ではとみ子を過失致死の疑いで調べている。とみ子は実子がなく二年ほど前同市内の実弟から養女として淑子ちゃんをもらったが近所の話では、とみ子のせっかんがひどく生傷の絶間がなかったという。

これをみると、余り幼い子に灸はすえられないということになりそうだ。と私は考えたのですが、皆さんは如何ですか。継子いじめにしろ、お灸責めの場合、近所の人達も案外無関心のようにも見受けられる。その点、前記の継子が寒中に水責めにあわされた時と捧で打たれている時には、近所の人が止めに入っている。しかし、お灸をすえられ終る迄の継子が泣きさけぶ悲鳴から推量すると、矢張りお灸めが時間的にも苦しさの点からも最高の様に思われる。お灸責めの体験談、その他お灸に関する事、続々と発表して下さい。

女体各部のフェテッシュ

森中悦夫

若い女性は、「番茶も出花」といわれる位、その身体のだこの部分をとってみても、男性である我々の目から見れば美しいものである。女性の身体各部のフェテッシュの中で先ず最も多いのが、顔面フェチである。美貌の女性を求めるのは、常識的といってもよい。事実「本よければ末も又よし」という諺にもある通り、顔の美しい女は、凡そ手足、乳房、臀部、お臍にしたって恰好のよいことは多い。例外はいつの場合だってあ

るが。顔面の中でまず挙げられるのが鼻である。耳、目というのもあるがこれは少い。足(脚、脛、指)に比して腕は少い。二の腕の狂崇もあるが、足の方がずっと多い。臍はご存じの通り。腋窩は女性の急所といって尊ぶ人もある。体毛はうなずける。本誌の読者の中で、万人の納得ゆく説明を加えて自己フェテッシュを告白してもらえたら文献としての価値もあるのだが。



〈或る緊縛マニヤの通信〉

夫婦の「お仕置」プレイ

益原 駿夫

十一月号を買い求め、頁をめくる手も、もどかしく早速読者通信欄を拝見しました。載っている載っている。十月号に始めて投書しました。早速載せて頂きまして有難うございました。今後益々貴誌の発展を願い、又貴誌を愛読してゆく事を誓っております。

妻と共に見る時は妻を緊縛して見るのも、一寸変ってよいものです。私達は緊縛プレイを共によく行いますが、私達は「お仕置」と呼んでおります。プレイです。お仕置の方法を少し述べますと、先ず第一に鞭打ちです。鞭とい

ましても、残酷な鞭ではなくて洗濯挟みに使うプラスチックのク

皮バントを細く切って作ったものです。全裸の肌に全身打ちますとやはり全身が赤くなり所々みみず脹れができません。

かよわい女のやわ肌も鞭にて鍛えますと、初め頃より見れば相当耐えられる様になりました。特に乳房、ヒップ、背中をよく打ちます。打つ姿勢は緊縛、吊り責（両手を吊り足は床についている）等を併用して行います。

このプレイは美容のために大変よいものです。といいますのは、鞭打つ事により全身の肌がむっちりとしまり何ともいえない絹のよう

なすべすべとした肌となります。若い女性には全身美容としての鞭責め、及び後で述べます水責めをおすすめする次第です。

次は乳首のクリップ責め、乳首の細責め、剣山責め、水責め等を行います。乳首のクリップ責めは洗濯挟みに使うプラスチックのク

リップを使用し、そのままではスプリングが強すぎますので、適当に弱くして使います。それでも未婚の女性では一寸耐えられないと存じます。

現在の所、大体限度は、二十分程度です。耐えに耐えた後クリップを外した乳首は、触れさせない位痛んでおりますが、一晚経ちますと元通りに治ります。

乳首の紐責めは、細い紐で両方の乳首を縛り両方の紐同志を引張ってくりくります。丁度乳首は真中に両方の紐を背中引張ってくくっても同じ効果になります。

ローソク責めはローソクの蠟を肌にたらし責めます。背中、ウエスト、ヒップ、内股、乳房、二の腕の内側、お腹等へ合計十五乃至二十滴程たらしめます。ローソク責めは手足を緊縛固定して行います。苦悶のため動きますので蠟が所定の位置に落ちないからです。

ローソク責めの最後の課題は、乳首へのローソク責めですが、そこまではいっておりません。

剣山責めは生花に使用する剣山を使って全身を責めます。これは手荒くしては駄目で、じわっと力を加えて責めてゆきますと、場所

「女の生首」

前川成雄



幻想に生きる

前田文子

当年二十一才、高校卒業後某市の商工会議所に勤務、痩せ形ですが病氣したことなし。現実

ばなれした幻想に楽しみを求めている理想派。良妻賢母の自信なし。友人をもとむ。

場所がよく耐えられる場所と、そうでない場所とがあるものです。水責めは元々全身美容のために妻自らがやっているもので、毎日入浴の際、冷水をかけて美容と責めの効果をねらっております。夏より始めまして勿論真冬も続行させてゆきます。

責めといえば大変酷いようですが、絶体、身体に傷をつけるような事は致しませんし、又私も好みません。この外にも変ったアイデアによるお仕置もあります。次の機会に発表させて戴きます。責める時は情容赦なく責めますが、責めた後はよく苦痛に耐えた妻をいとおしみ、優しく労わります。妻は元々マゾではありませんでしたが、奇クを愛読する様になりました、色々とプレイを施している

中によくマゾとして成長してまいりました。然しまだ関谷夫人とかモデル諸嬢の皆様の足もとにも及ばないと存じます。これからも、まだまだ鍛えてゆくつもりです。次に厚かましい考えとは存じますが、もし愛読者の女性の方で緊縛をご希望の方がございましたら一度プレイをして差し上げたく存じております。勿論妻も同意して

おります。私は一流大会社の平凡な社員です。秘密を守り、絶対身体に傷つけたり汚したりは致しません。

近くにご在住の未婚の方、是非貴女のお便りをお待ちし、プレイのできる日を楽しみにしております。住所は編集部の方へお問合せ下されば結構と存じます。誌上匿名(女性緊縛一ファン生)

女斗美としての

「女相撲」と「女子プロレス」

私は昭和三十二年頃、ふとした事から奇クに接し、その内容を見るに及んで大きなショックを受けました。それは「女斗美」の一文です。土俵四股平氏の「女斗美短歌」でした。

終戦後、各種のカストリ雑誌がハンランし、その中にも女相撲の記事があり、今でも二、三おぼえております。「女斗美」という言葉をおぼえたのも、この頃です。私は書籍商を営んでいる家に同居しておりましたので、各種のカストリ雑誌に目を通す機会に恵まれていたわけです。当時、OK、獺奇、千一夜、妖奇、りべらる、等々の雑誌の中に女斗美に關した小説が多かったのを覚えております。

併し女相撲について知ったのはもっと前で、昭和十二、三年頃と思います。雑誌はたしかキングだ

ったと思います。「仇討女相撲」という題でした。併しもっと前にも考えてみれば、女相撲に接する機会があり、又接していたのかも知れません。残念ながら物心ついてからこの方、女相撲そのものを見た事はないのです。浅草で見たという人もありますが、運の良い人だと思えます。

アメリカから女子のプロレスが来た時、日本にも女子のプロレスが組織され、それ自体興業もし又映画にもなっておりますが、やはり相撲の比ではありません。

プロレスはやはりプロレスとしてのショーでしかありません。我々が見る男子職業力士の、あの大相撲を女子に実現してもらいたいという望みから見れば、プロレスはみつともない見世物でしかありません。

数年前、浅草のたしかロック座

だったと思いますが、女相撲をショーとして見せているという事を週刊誌で見たので、早速その夜出かけたのですが、すでに演し物が変って女子プロレスになっていました。一日早ければ見られたのに残念でなりません。

この様に女相撲が我々の眼からかくれていった事には色々な理由がある事でしょうが、とに角、興行的に成り立たないという事が最大の理由だと思えます。岡平氏もこの点指摘しておられますが今から女相撲の組織を作るといっても、興業的に観せられるようになるまで一年位の準備は必要でしょうしその間、女力士をつなぎとめておくだけの手当、その他資材を考えると容易な事ではない筈です。



併し、これをなんとか実現したい、なんとか見たいと思う人は読者通信にもある通り非常な数だと思います。編集部の方々は大変だと思ひますが、女斗美同好会を結成し、この音頭をとって頂けません



三木敬子嬢

私の身体特徴

三木敬子

身長一七三釐、体重五六キロ、本誌のモデルとして出演したことあり、職業はファッション・モデルのフリー。余り有名でなし。

か、月会費千円位で年一回か二回東京又は大阪で興行することになれば、なんとか可能になるのではないのでしょうか。

他の人々は知りませんが、私をふくんだ多くの人は、いわゆるサラリーマンであろうと思います。自分の時間は、日曜ぐらいしかない

いのです。やはり奇ク編集部の方をお願いするより仕方のない事ではないのでしょうか。

とにかく、同好会の名簿位作れないものでしょうか、一つお考え願いたいと思います。

東京都 Y・M生

十一月号所載の△告白▽

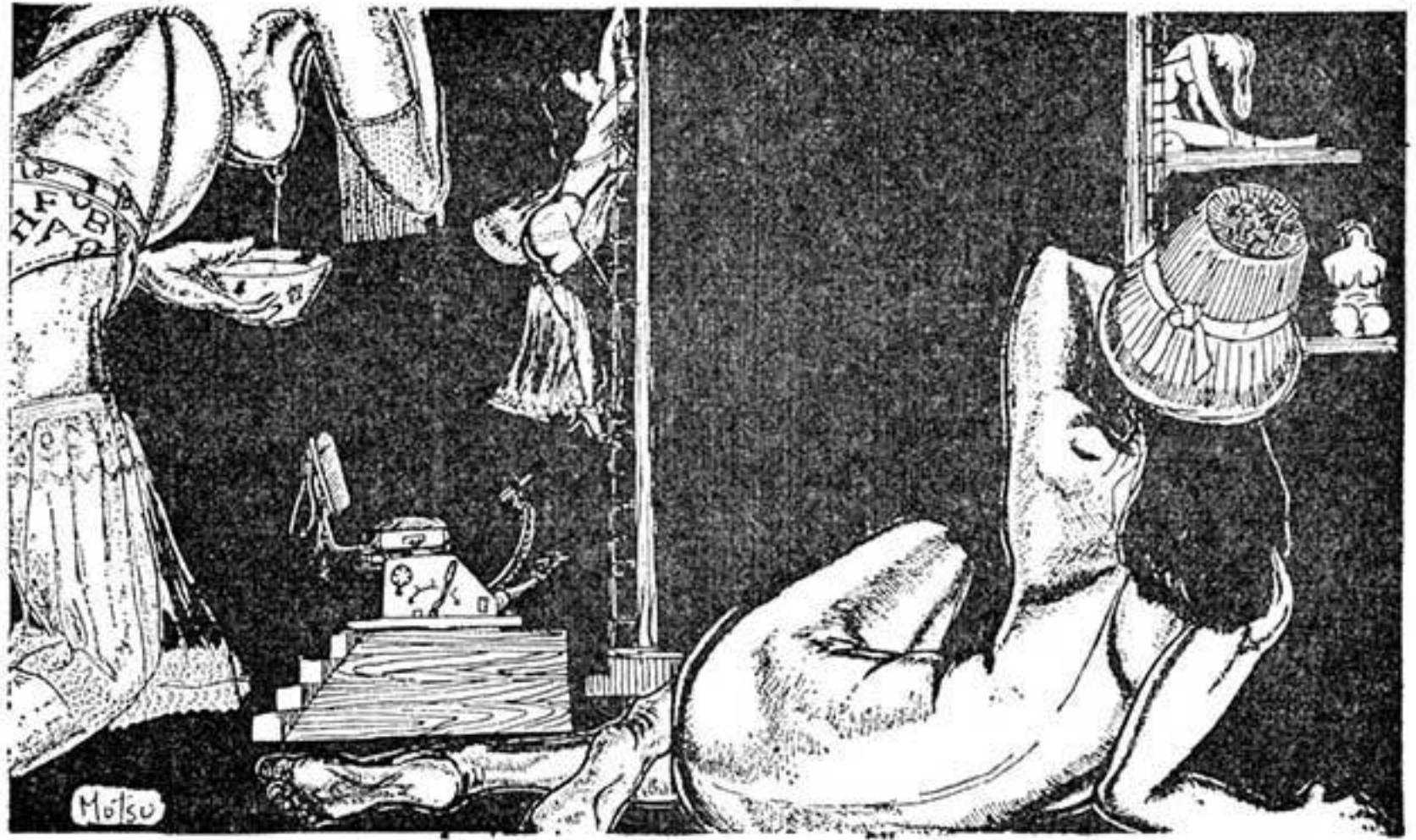
「倒錯日記抄」補遺

久保征一郎

Gパンをはき防具をつけたグレン隊の高校生の硬派不良を警官が道場で根性をたたき込むといった形で責めている所。「そら、そら、そら」と面垂れを踏んで責めている。「うーむ」と面金の中から、悲鳴を上げる少年。

この少年はカミナリ族で革ジャンパー、Gパンスタイルで道場へ連れて来られるが、学校で初段の剣道部員なので警官に立ち向うが、このように惨敗し、責めさいなまれるといったプレイである。如何ですかこうした趣向は？





僕は友達二人と旅行に行く事にした。ひまばかりあって、金がないので、金が掛らなくて、なるべく面白く、というより長くいるという質より量的な旅行であった。持参金は、一週間の食費と往復

の汽車賃にあて、三千円を用意し福島、山形、秋田の各県を回る予定で出発した。まず第一日は福島の須賀川で降り、街を出て山村に入りクタクタになって学校を探し、そこに泊

アブノーマルな絵

(第三話)

〔体験〕

森 洋 三

めてもらうことになった。

夏とはいえ、東北の夜は寒いくらいだ。毛布をかぶって、床の上のゴザに寝たのはよいが、背中が痛くなったり、肩が凝ったり、仲々寝つかれるものではない。

しかしながら、うとうとしだしこれで眠りに落ちるなど感じて安心した時に、すぐ側にボソボソとした話声が聞え出した。この教室のすぐそばらしい。中ではなく外は確かだ。

僕の眼はさえてきた。友達は軽いいびきを立ててねいている。そのうち、外の人間が男女であることが声ではっきりし、僕の目は益々さえた。僕は興味を起し、その話声を聞く為に窓際に寄った。「おらア、ユイちゃんが好きだ、あんなタロウの事忘れろ」と、想像していたように恋愛であった。声からして若い二人と思われる。「おらだって、アンタが好きさ、なんで、おら……」と、あとは少し聞きとれない。そのうち、二人の息の様なものが、かすかに音として感じられたので、僕はおっかなびっくり、中腰になり、外を見た。校庭を照らす灯が二つと月の明りで案外明るかったが、二人がどこにいるのかわからない。その

うち、

「な、いいだろう、好きだ、好きだ、一緒にいって東京さ行こう」と云う男の声が真下からした。残念ながら姿は見えなかった。

二日目、三日目、と何もなかったが、四日目の秋田へ行った時、面白い事があった。僕等は駅や寺などで泊めてもらったが、今日は民家ののき下を借りようという事になって、ある農家へ行った。三度断られ、四度目に縁側で良かったらという事で、暖いふとんの上に寝る事が出来た。

疲れて深い眠りに落ちていたが急に腹が痛くなり、その苦痛で僕は目を覚ました。空はもう明るくなっていったが、外へ出ると冬のように寒かった。僕は腹をおさえながら、フラフラする頭で便所を探した。便所は納屋の隣にあった。

僕は便所の入口を探すために納屋の中へ入った。僕は目を見はった。戸は開け放たれ、モンペ姿の女が、モンペをずりおろそうとしていた時であった。その娘かと思った。後姿から見れば若い女であった。女は僕の入って来たのを知らず、尻をまるだしにしてしやがみ込んだ。僕は、こういう光景は度々あるものではないと、ま

もに見ていた。終った女は雑誌を破き尻をふきだした。

僕は見つかるのを怖れ、腹の痛さを忘れ外へ出た。すぐに女は出て来、モンペをずり上げながら、僕と視線が合い、何故か、小走り

【フェチ通信】

私は赤ちゃんになりたい

△可愛い花模様の夢△

白川 晴 夫 (山形)

四、製作

先ず買入れてきた新しいオムツ布地、オシメカバー、ピンクのネル地を部屋一面にひろげてみました。ああ、今まで私の心を苦しめた。ああ、今まで私の心を苦しめた。夢にまでえがいた赤ちゃん用品、今、自分のものになって、心はおどる思いで一ぱいです。

最初に先ずオシメ布地をひろげ赤ちゃん用より少し長い位にしてハサミで切りました。手ががたがたふるえて切りにくい位です。そしてミシンで縫ったのです。

次にオムツカバー。これは子供の二枚です。で股上部で双方とも切り二枚つぎました。そしてホッ

に家の中へ入ってしまった。(非道い所は木戸のない便所だってあるそうだ)

時計は五時半を指し、庭は、この家の人々の活動に鳴り出した。

クは全部はずし新しく買ったスナップボタンにつけかえました。一度腰に当てましたが、大丈夫なようです。

そこで最後にベビー服、前より本などで知った通りつくり、出来上ったのは夜の八時すぎで、まるまる七時間程、唯、オシメ、オシメカバー、ベビー服にとりくんでいたわけです。

五、使用

ああ、遂に夢にまで見た可愛い花模様のオムツやオムツカバー。そして赤ちゃん服を着衣する時がきたのです。

最初にオシメをT字型にしまし

た。股当オシメはピンクの大柄花のもの、そして巻きオシメは雪花模様のもの、目で見るとその甘さ、ああ、私今オシメにくるまれていたのです。可愛いオシメに、そして、今その上を可愛いピンクのオムツカバーで、くるんでいるのです。五、六才用のオムツカバーも三枚ついたので、結構ぴったりにオシメをくるんでいます。

最後に赤ちゃん服を着ました。

私はやっと赤ちゃんになれたのです。

六、赤ちゃんの世界へ

私はオムツ、オムツカバー、ベビー服を着衣して鏡を見ました。鏡の中にはヒゲ面の変な赤ちゃんがいます。鏡の前に坐り、両足をひろげてみました。股の方はオシ

メとオシメカバーがかもしだす甘い色あいです。ピンクのカバーのすき間から少しはだけている青い雪花模様のオムツ。

ああ、私は可愛い赤ちゃんになれたのです。一人でハイハイ、一人で赤ちゃんの様に、アア、アアと云いながら、ころげまわります。

やがて時計も午前二時を指します。私も赤ちゃん姿のまま、ゆっくり今宵こそ、本当に赤ちゃんになった夢をみて寝ます。

七、後記

オムツ、オシメカバー、マニヤの皆々様、大変つまらない告白文ですが悪しからず。又の機会に体験を寄せたいと思います。皆々様の御批判等いただければ幸いです。

奇クサロン原稿募集

「奇クサロン」の頁を変化があつて、楽しい皆さまの共通の広場として開放し、活用して頂くため原稿を募ります。文章でも、写真でも、絵でも、なんでも結構です。十六頁の全誌面を挙げて、皆さまによる皆さまのサロンとしての役目を果たしてください。

「奇クサロン」の頁を変化があつて、楽しい皆さまの共通の広場として開放し、活用して頂くため原稿を募ります。文章でも、写真でも、絵でも、なんでも結構です。十六頁の全誌面を挙げて、皆さまによる皆さまのサロンとしての役目を果たしてください。

【映画通信】

最近の邦画の縛りシーン

—「悪名波止場」簀の巻—

東山映史



最近の邦画界には、時代劇、現代劇を問わず残酷ムードにのって縛りシーンがよく見られる。大映では、勝新太郎のヒットシリーズ「悪名波止場」宇津井健の「黒の商標」二本立で、どちらにも縛りシーンがあり、美女の縛り映画二本立というところ。とくに、勝の「悪名波止場」は勝の朝吉親分の

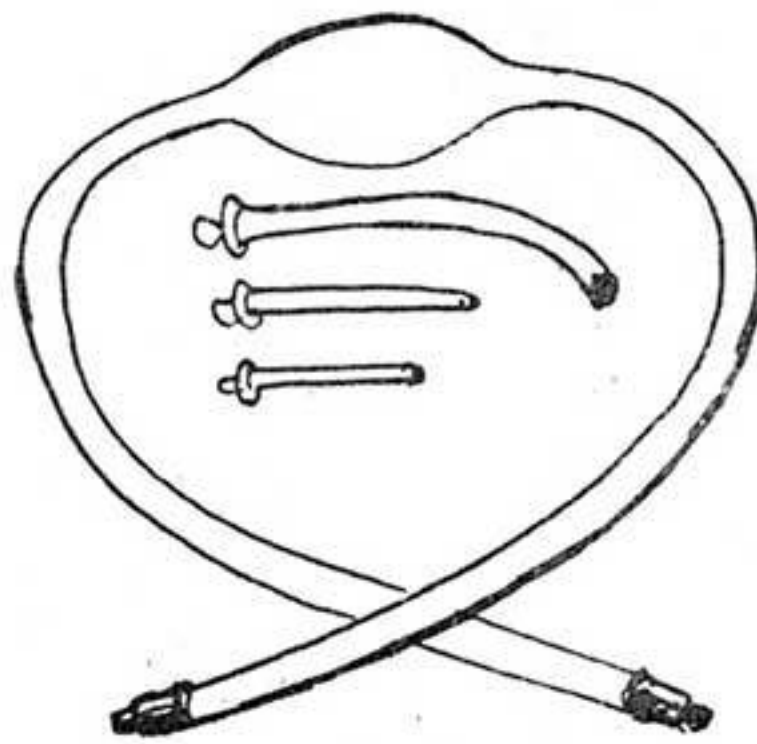
と滝瑛子子のナイアクラブのホステス悦子が仲よく簀巻きにあうというドギツイシーン。悪者に捕えられた、子を入質として、勝も捕えられ事務所へ連行される。ノウスリープの赤い洋服を着た瑛子はむき出しの腕の上から荒縄で三重位縛り上げられている。隣りには仲よく勝も着物の上から縛り上げ

られている。そして海へ仲よく簀巻きにしてほりこんでやる。心中死体と思われるだろうとボスはほざく。後手に緊縛されている。そして二人は連縛されたまま、和船の上に乗せられ沖へこぎ出されそして海中へザンブリコ、縛られたまままで、海中でもがくシーンが長く続く、そして女船の女たちに救われ、水を吐かされる、やくざのイカサマバクチの簀巻はあったが現代劇の男女連縛の簀巻は珍しい。また、ヤクの運びをこわった紺野ユカがヒモの水原弘に荒縄でピシピシ打たれ折檻のために死ぬというシーンもある。「悪の商標」は産業スパイ映画だと思った、スリラー作品、ラストで高松英郎のために捕えられた藤田由紀子が、細引で二重三重に縛りあげられ、ライトバンの自動車の中に閉じ込められる。そしてその中でガスのため殺されようとする。さきごろ大阪で起ったアパートの女をライトバン日本製のカンオケの中にとじこめガスで殺した殺しからヒントを得たものらしい。

縛られた藤田が走る車の中でコロサれるシーンが迫力があり、起き直ったかと思うとゴロゴロ転がった大きな目を恐怖に見張るシーンは楽しませた。東映の大友柳太郎の「命を賭ける三人」では、新国劇の娘役高倉典江が石田三成の遺児雪姫に扮し捕えられる。一緒に捕えられた大友の室戸修理之介が新刀の試し斬りのために縛られたまま引き出される時、縛られた身体でのび上り「修理之介さま」と叫ぶところは気分を出していた。画面の石田方で破れた浪人達に「落人圀所」と書いた竹矢来の中に縛られたまま断首の刑を待っているが、男女別にわけられた数十人が背後手に縛られて地面に坐っているが、雨中のシーンもあり、ワンサ連中だろうが、しんどい仕事だ。松竹の岡田茉莉子の「カルメン」のほんやく「真赤な恋の物語」では吉田輝男の吊り責め、根上淳のモーターボートによる股割きの私刑などすごい所を井上梅次監督は見せた。ただ、吉田輝男をしたう柳あけみが捕えられ、白状せよと髪の毛をつかまれ、ライトの火を顔につきつけられるがやはり、イスに緊縛する方がすごみが出ただろう。しかし、半裸にむかれ、万才型につられた吉田を岡田茉莉子がムチ打ちするシーンはマゾ男性にとってはこたえられなかっただろう。

『浣腸』

……



見たり

聴いたり

プレイしたり

阿久津 猛

一、見たり

昔の言葉で〇号夫人と云うべき三十二才の未亡人T子と、デートの数も十指に余るある日の事。いつもなら私から誘うデートも今日は彼女から電話があり、歌の文句ではないが、有楽町駅前にてデート。

ホテルのロビーも夢の様にかりそめの恋も甘酸っぱくなりし頃、彼はルームのトイレを使用中。中から声あり、何事かと尋ねたら、目をつぶって手を貸してくれと云

う。何故か訳もわからず目をつぶると手に持たされたのが例の大人用イチジク、手ぐさりでは、どうにもならず、ドチラか見えなければ羞しさも半減と彼女が目をつぶる。

私はすっかり手伝わされた、云うよりも最後の最後まで拝見に及び、マニヤの私は夢が正夢になった。彼女から聴くところに依るとお腹の具合が悪いわけではなく、ニキビや脂肪肥りに、又、ヤモメ暮しには一番これがよろしいそう。後日イチジクでなく硝子製で

洗腸を約束した事は云うまでもない。

二、聴たり

サロンSの代理マダムK子と店のデザインについて話した。つれづれの事、K子の妹さんの嫁ぎ先のある日の後日談。

S子のダーリンは表裏の両方がお好きとか。始めはS子も大分とまどったが、最近では喜びに満たされている由。マニヤの言葉でアヌス責にいろいろと工夫しているそう。ダーリンの出張の際など羽村京子さんの手法を行っているようだ。KKファンでもなさそうなので、今度S子に会ったら秘蔵のKK一冊プレゼントしなければならぬ様な気になった。

三、プレイしたり

パートナーのない私、自身で行うシングルプレイばかり。持っている器具は硝子浣腸器100、50、30ccの三本とエネマシリンジ及び手製のイルリガートル二〇〇cc。硝子器の30、50ccは自己の手で操作できるが、100ccとなると手が届かず、床に器具の頭を京けて、腰を下げるか、上向に寝て足の力カトで圧入する。

イルリガートルを用いる時は腹部の力を抜いて自然に落差で注入する。入水量が見える。責められる腸内のふくらみは、苦しさの中に楽しさがあり自己の限界が分り胸までくる様な感じで思わず目を伏せる。

水道利用の高圧注入は水圧を低くして行えばイルリガートルより責苦は強い。エネマは高圧注入と同様で入水量がわかれるが、自身でエネマを圧縮しなければならず不便。

注入液についてはグリセリン。石鹸水は一般用で、我慢する時の楽しさで、プレイの第一段階である。多量注入には温水及び冷水にて腹腔の膨満感に満足し、清涼飲料水等は責苦より腸内にて吸収される量測で精神的プレイ。

次に忘れてならないものに空気があり、これは腹部に痛みを感じながら放出の際笛等を鳴らしたら面白い。最後に酒類普段たしなまな酔と、ビールの場合は多量に注入された満足感で、そのまま睡眠しても、全部吸収されてしまう。オキシウル等は十倍に薄めても口中消毒のようににはゆかず、まずは敬遠が無難。

プレイング・マゾヒストの

資格について

大倉 安雄 (東京)

小生、今年四月まで関西に居り大倉安雄名にて二、三回このサロンにて感想を述べさせて頂いた二十六才になる独身のサラリーマンマゾヒストです。今回転任により東京に参り相変らず奇クの世話になっていきます。唯残念な事は、東京に於いては奇クのパックナンバー入手が殆ど不可能な事で、それだけ毎月の発売日が待ち遠しくてならない次第です。

奇クに於けるマゾ的ページは、月々によって多かったり、少かったり、我々マゾヒストは一喜一憂している訳ですが、潜在的愛読者は少くともサド傾向と同數位居るのではないかと考えていますので編集者の皆様におかれては、今後共よろしく御配慮の程御願ひ申し上げます。

さて東京でのマゾ探究は巨大都市だけに大いに期待をもって来たのですが、どうもきっかけがなく満たされない生活が続いております。目下可能性のチャンスに備えて唯ひたすら女性に対する奉仕技術を研究中ですが、その具体的例を紹介すると次の如くです。

一、脚全体の手法。これは奉仕の初歩的技術ですが、女性自身、週刊女性、主婦の友等の雑誌を切り抜き研究しております。又疲れをほぐすマッサージ法も同様ですが、殊にヒールの高いものを御使用の婦人に対しては必要欠くべからざるものでしょう。

二、靴の手法。
三、洗濯技術。御婦人の場合、デリーケートなものが多いので、つかみ洗いの法はぜひ習得しなければなりません。勿論洗剤の選択も必要でしょう。又、アイロンの使い方も欠くべからざる事です。

四、皮革製品の手入れ。
五、家具、床の掃除法。

六、精神及び忍耐強化訓練。前述の五項目より増して必要なのは、この訓練と考えています。御主人の御意のままに道具及び奴隷として奉仕出来るか否かは、実にこれ次第と信じています。目下行っている方法としては、熱湯入浴訓練、ロック忍耐、逆立忍耐及びトルコ風呂での抑制訓練等にはげんでいます。

小生の自己訓練は以上のような所ですが、その他マニキュア、ペディキュア、美容術等の技術習得も必要と考えています。これらを習得する事が世の女神様に首輪をはめて預く基本的な資格であり、マゾヒストにとって、先ず行わねばならぬ事でありましょう。これを習得した上で必要な事は、次の事だと思っています。

1、サイズの合った首輪、足輪、手錠、男性貞操帯、靴、皮紐、サルグッワを少くとも二種類以上揃えること。
2、自己の肉体的な破傷を早急にいやす体合った薬品の準備。

3、自己の経済範囲での最大限の貯金を行い、女神様の経済的負担を可能な限り軽減する事。

以上の他、首輪なきマゾヒストにとって、どうしても訓練不可能な事として、イ、鞭打の忍耐、口足なめ技術、ハ、全ゆる自己の状態での神酒、コット拝受意欲保持ニ、御主人の望む体位(乗馬、ヒザより上に頭をたえず上げないで仕事をする事等)が挙げられるわけですが、これらはマゾヒストが最も夢想することでありながら、最も出来得ない事でもあり、結局前記精神力の問題と考えています。又、これらはむしろ女神様の飼育としての楽しみでもあり、首輪なきマゾヒストとしては、あまり探求すべきではないでしょう。

○ 勝手な事を述べましたが、結局マゾヒストたるもの、単なる夢想的欲望のみの発露は、これエゴイスト以外の何ものでもなく、奴隷犬、道具としての被使用を願望するならば、それぞれの能力を備える様自己を向上させるべきだと考えています。又、性欲のアブとしてのマゾというのは夢想では差支えないとしても、実際隷従する場合むしろ抑制すべき性質のものだ



という簡単な事を再認識すべきでしょう。

そういう意味で小生自身、皆様におすすめたのは、キリスト教の聖書です。これは唯、神というもののみに対して精神を全てささげ、唯祈りがあがめる事によって客観的苦痛が全て喜び、及び恵みに昇華する訳です。この道に入る事によって、本来のキリスト信仰とは別として、その精神を完全に理解できたならば、その人は「最も費消し易い実際のマゾ素質を有する男」という事になります。

何故なら女神様に首輪をはめて戴いたその時に、イエス・キリストと女神様を即座に頭の中で切り換えればよいわけだからです。
最後に私事ながら、東京在住の女性の方に小生を費消して頂きたく伏して御願い申し上げる次第です。毎週月、水、金曜日、電(二四一)五〇〇〇(神田の喫茶店)に午後三時半から四時半まで、大倉保雄指名にて御電話拝すれば飛んで参る所存です。
それでは又、自己訓練方法の推移を報告させて頂く予定です。

「レポート」……………神崎太一郎……………

「離婚した婦人が割腹」

本誌では「切腹」ということは常時取りあげられて、せめても我々マニアを慰めているが現実の切腹は終戦を境として最近少ない傾向にある。しかし時として新聞紙上などに登場するようだ。男性のは我々もすでに何回も接したが女性のはこれより少ない。しかし今回女性の切腹の報道があったのでさっそくマニア諸氏にお知らせしたいと思う。

朝日新聞西部版九月十五日夕刊の三面紙上であったが、長崎県は島原で三十一才になる若い婦人が、出刃庖丁で割腹を果たした。紙面をそのまま拝借したい。

【島原】 十四日午後八時半ごろ島原市三会洗接、農業江口キクノさん(七〇)方で娘の古川ミユキさん(三一)が、出刃庖丁で左腹四力所と首を切り苦しんでいるのを、うめき声に目をさましたキクノさんが見つつけ市

内の病院で手当てしたが、十五日午前一時半出血多量で死んだ。

島原署の調べではミユキさんは去る三十五年六月結婚したが家人との折合いが悪くノイローゼ気味で昨年九月実家に帰り、先月八日調停離婚した。遺書はなく、発作的に自殺したらしい。

○ これなぞ嫁いだ先の人間関係がままならず離婚した痛手の原因とのことで自殺では比較的多い例である。致命傷は出血多量であることから、とどめを完全に出来なかったらしい、左腹に四力所の傷というのは刃が深く入りすぎて充分右脇へ引き回す氣力に欠けたと見える。それにしてもこの場合事前の冷静さがあつたらと惜しまれる。だが切腹という伝統の作法を用いたこの婦人はとりもなおさず立派と言えるだろう。

ガン作・マニヤのノート

(私のバーでの会話)

芳野眉美

A ガム

口からガムを吐き出すと、彼女はハイヒールでそのガムを踏んづけた。ハイヒールの底にガムが付着した。彼女は足をあげて、ベンチに腰をかけているAの顔にハイヒールを近づけた。

「このガムがたべられる?」

昼過ぎのH公園の花壇のベンチである。菊が盛りだった。

「たべたら三千円あげるわ」

Aはハイヒールを手でおさえてガムを取ろうとした。

「口でよ」

と彼女が怒ったような声でいった。Aの唇がハイヒールの底にへばりついた。周囲のベンチのアベックなど気にはいなかった。Aが彼女のハイヒールに接吻した瞬間、Aはハイヒールで顔をけとばされていた。が、Aはガムを飲み込んでいた。

「三千円は」と私。

「いただきます」とA。

「それで」

「彼女にハイヒールをプレゼントしました。古いのはよくがもらいました。記念です」

Aは嬉しそうに私にいった。

B 三対一

「なじみの女の子を、ホテルに誘ったら、一人じゃいやだというから」とB。

「どういうこと、それ」と私。

「俺もわからなかったけれど、いやなら友達でも連れてくるんだなといったら」

「連れて来た?」

「まさかと思ったけど、三人」

「へえ」

「三人で一万五千円ちょうだい」

「あげたの」

「いや、三千円まけてくれた」

「それで」

「女のいきつけのホテルに行ったよ」

「あっさりしているな」

「四人で入浴したら、タイルに赤いものが流れているんだ」

「——」

「中の一人がMになったらいいんだな」

「ははあ」

「話を聞いたなら、よくあることらしいんだ。三人共Mは別々で、誰か一人はいつもMだ」

「まさか」

「そのMの女が中心になってお湯を流しながらアタックしてきた」

C マスク

「三対一かすさまじいな」

Cが「オール読物」を買って来た。最初にめくったのが、最後のページの「オール横丁」である。

中心部だけをキレイにくり抜いていくパンティ泥の記事があった。

「盗んでいって、あとでゆっくり切り抜けば発見される危険も少ないのに」

と投稿者は心配している。

切り抜かれたパンティを持っている女性の絵が書いてある。

「中心部を何に使うと思う」

とCが嬉しそうにいった。

「ばくなら、マスクのガーゼにするな」

短歌

欲夜

西田留奈男

ストリート・ガール寄り来て媚示し小暗きとある旅館に誘う

臥せるなりいきなり女の鼻摘まみ口を封じて手足縛りぬ

驚きと不安と好奇入りまじる眼差しをもて我を見つめき

柔かき上向きな鼻撫でさすり摘まみねじ上げ押し上げ弄ぶ

恥らいと怒りと恨みこめし眼を冷やかに見つ鼻をいたぶる

豚の如伸びたる形の鼻穴をぬめぬめしたる舌で舐めいる

アンモニヤ液の充分しみわたる綿押し上げし鼻穴に挿す

悪臭に吐き気もよほし苦悶する面を見つめつ冷やかに笑む

逃げまくる鼻をじわじわ責めいたぶ此の楽しさはえもや云われん

風俗回想記

△劣氏の美人踊り子責▽

越 原 秀 美

額に汗が滲み出る。その度に大きな手拭で無造作に拭く私。勿論、窓は開け放しだが今日は風がない様だ。この部屋は四階なのだから、外から入る風は、私の身体を冷やしてくれる自然の冷房装置なのだが、今日の風は生暖い。空を見上げると今にも泣き出しそうな空模様。大粒の夕立でも降れば、いいのにと
思う。今流行の階段式の棚を三畳の間に取付け、棚の一番上に仕事の資料類を置き、次の段に雑誌、あるいは新聞、週刊紙の切抜を整

頓し、三番目の段に時計を置いてある。その時計が午前十時を指していた。今日は御得意先の店より、調査部の男が来るはずなのだ。その者とM百貨店に出向き、下着類の売れ行きについて調査する事になっていた。私はもう何時来てもいいように外出着を着て待機している。
十時十五分少し過ぎだったか、七、三に髪をわけた、一見紳士風の男が訪れた。甲氏。私は甲氏と部屋を出た。やはり外の方が、部

屋の中より空気はよかった。劣氏はあまり外へ出たがらない方だが、仕事のためならば、いたしかたなかった。

劣氏はネクタイなどしめた事はない、然し今日は少し勝手が違う。洗濯屋から持って来たての白カッターを着用し、斜縞のネクタイをしめ、白ぼい上衣を着ている。車の中は蒸暑く、額に汗が滲んでいた。

三十分後、目的のM百貨店に着き、甲氏と劣氏は交差点を渡る。特価品の大売り出しが

あるのか、店内は、かなりの人が混雑していた。劣氏は甲氏と、エスカレータに乗り三階へ行った。三階、女性下着類の売っているところだ。ここに陳列された中に、劣氏の作ったパンティもある事だ。勿論作ったというのはデザインの事だが。私は隅で腕組みをして立ちお客達の買い物を見ていた。

甲氏を見ると劣氏より三十米位離れたところで、手帳を出し何かメモしている。確かに客は女の方が多かった。その時、私はフト、パンティ売り場のところで売り子と話している一人の若い女を見てしまった。その女は美しい顔立をしていた。背も高くそして薄青のブラウスの胸を突上げる降起。劣氏は一瞬見てしまったのだ……その女が横にいる年配の女の買い物籠の中から何かを抜き取ったところを……。それは確かに早かった。女がパンティを持った。その少し前、時間にして三秒位だろう。その早さは私は見破ったわけだ。女は何喰わぬ顔でパンティを買って、売り子から紙包を受け取り、お金を払っていた。度胸のいい女だと劣氏は思った。

女は、売り場から離れ、私と目と目が合った。然し驚く素振は見せなかった。頬を割り少し微笑した様子だった。劣氏はその娘の後

姿を見送っていた。それにしても私より背が高く、美人だし胸の隆起といい腰から脚にかけての脚線美も見事なものだ。確かに女の身体から、体臭がムンムンとする様であった。私は暫らくその女から目を離す事が出来なかった。そして足もその女に魅せられたのか、自然に歩き出した。スリを目の前で目撃しながら、大声も出せなかった、劣氏。自分でも変な気持であった。下着の調査に来たのが、妙なガールハントになったわけだ。私の脳裏にはあの女性の顔が一生離れないのではないかと私自身心の中で思っていた。それ程魅力のある女性だった。

この日はついに下着の調査は夕方七時、百貨店の地下食堂で甲氏と食事をともにして、その日は終わった。

翌日、私は朝早く目がさめた。起きて自慢の時計を見ると六時を指していた。私はすぐ床を離れ顔を洗った。そして窓を開け、朝の空気を胸一杯吸い大きく背伸びした。外は雨だ。遠くで雷が鳴っていた。昨日と較べて今日は少し涼しい。

八時過ぎだった。ドアをノックする者があった。丁度私は大きな紙に鉛筆で、原寸の大きさのパンティのデザインを描いていた。何

処に飾をつけようか考えていた時だ。鉛筆を捨て、ドアの方へ歩み寄る。

「どうぞ」と劣氏が声をかけると、ドアが開き顔の長い鼻の下に髭をはやした五十才前後の男の顔があらわれた。男はその鼻の下のチヨビ髭から見て、何処かの会社の社長タイプといった風貌。

男は頭を一寸下げ、劣氏に名刺を出した。劣氏は、名刺を受け取り目を落す。「OKS ミュージック経営者、梅巻五郎兵衛」と書き込んであった。OKS ミュージックというのは大阪の中心街にあるヌード劇場なのだ。劣氏も一、二回行った事がある。「何か、御用でも」劣氏は梅巻五郎兵衛を部屋に上ってもらって聞いた。

「確か下着のデザインの劣様では？」

梅巻はそういつて部屋を見渡す。

「そうですか」

梅巻は机の上の鉛筆で描きかけの、パンティの絵を見て、鼻の下の髭を摩する。

「実は、舞台用のパンティの事で、今日お伺いしたのです」

「私のデザインですか」

「ハイ、御承知と思いますが、私どもはお客様商売でございましょう、然しこの頃は客の

入りも減りましてね」

「梅巻さん、口上は抜きでズバリ話して下さい」

「私どものダンサーは、いずれもアルバイトで、人妻連中が多く、本当のダンサーというのと五、六名です。然し今度数名若い娘を入れましたので、出し物も今までのと違う物を用意致します」

「はつきりいって下さい」

「実は、劣様のデザインが気に入り、一度拝見したく今日参った次第です。どうでしょうか」

劣氏はタバコを吸い、空に向けて煙を出す。

「いいでしょう」

劣氏は立ち上り、棚の一番上の段から一冊の厚いスクラップ帖を取り出し、梅巻の前に置く。劣氏のデザインのブックだ。百二十におよぶ、今まで劣氏の考えたデザインが飾ってあった。梅巻氏は普通のパンティには目も向けず、舞台用パンティのところを見る。中から五つばかり集めて、その中から三種類のパンティを決めた。

一つは中央を覆うラビットの毛が巧みにマッチして、強烈な感触とムードを誘う魅力的

なパンティ。

一つはハート型に垂らしたりリアンが肌に心地よく触れてそのリズムミカルな感触が、セクシムードを高める効果をはたしているパンティ。

一つはフランスへ輸出された事のある、フランスのストリッパーが好んで使用する。ハリバタ鳥の羽根とダイヤ兎の毛とビーズを素材にしているパンティ。鳥の羽根、ビーズ刺しゅう、兎の毛、ナイロン、リリアンの四種を要所に特殊なノリではりつける様になっている。

梅巻五郎兵衛はこの三つを選んだ。そしてお礼に劣氏は、OKSミュージックの招待券を三枚もらった。品物は劣氏より直接、パンティを作っている、見かけは毛糸工場だが、その会社では劣氏よりデザインを受け、直接作っている工場でもあった。劣氏は三種類のパンティを六十造るのだ。工場長は早速製作にかかった。二日までに三種類のパンティを六十造るのだ。前に製造したことのある品物なのだからすぐに造れる。

それから五日後、劣氏はまた新しいパンティのデザインを発見した。そして今日一日ゆつくりショーでも見てこようと、アパートを

出た。OKSミュージック劇場は劣氏の住んでいるところから、市バスで三駅……時間にして十三分前後。曾根崎警察前下車、暫らく道路沿いの道を行くと、映画館が密集している。その中でも表向きはコンクリートで建てた大きい劇場。そこがOKSミュージックである。入場料は比較的高い。しかし劇場内はかなりの人が入っていた。劇場の中は傾斜になっていた。一番後ろでもよく見える様になっていた。

私は一番前の席に坐った。出し物は三部あり、一部は裸女の踊りで、三人の裸女が舞台に出て踊るのだ。勿論裸といってもスパコンイルはちゃんとつけているのだが、乳房は女達が踊る度にチラチラ見える。汗などは出ないよく冷房のきいた劇場だ。二部は強烈にパUNCHのきいた物で、一人が舞台の中央に出て踊り、五人の女が音楽に合わせて脱ぐという寸法だ。いずれも私のデザインのパンティを着用していた。五人の女は、若く美しい娘ばかりであった。客達は大喜びだった。

三部はこの劇場で初めて出し物を変えた物だそう。和服の美しい人妻タイプの女が一人出てきて、舞台上手から来た男二人によって乱暴されるといった物語式の劇だ。さすが



に観客は静まりかえり、美しい和服の女の縛られた姿を見詰めていた。和服の襟元は乱

れ、裾ははだけ、白い脚が見える。その間女の悲鳴が長く糸を引く。三部はかなり長い時

間をかけている。私は案外、ふるくさい物をやるんだなアと思いつつ見ていたが、席を離れた。然しお客達は私の動く方なぞ目にも止めていない。熱心に舞台を見詰めている。劣氏は楽屋裏に足を運んだ。狭い廊下に厚化粧した女が二人話し込んでいた。二人の女は私を見て、話しかけてきた。

「お客さん、何処へ行くんだね、便所なら反対の方だよ」

「梅巻さんに逢いたいんだが」

「梅巻さんて、社長さんのこと？」

「そう」

ここでは、梅巻氏は社長と呼ばれているらしい。女は白い脚線美を見せ

「どなたです」

「劣、といえば判りますよ」

「劣さんね、一寸まってね」

と一人が駈ける様に奥へ行く。その時丁度女が立っていたところの黒い幕の向う側から確かに、女の呻き声が聞えて来た。私は耳をすました。呻き声からさっして女である事は間違いない。劣氏は立っている女に聞いて見た。

「誰か病気？」

女は不思議そうにしている劣氏を見て、少

し微笑して

「ええ、踊り子よ、馬鹿な娘よ」

と呟やきタバコを取り出す。劣氏はライターを出し、女のタバコにつけてやる。そこへ梅巻五郎兵衛がきた。

「劣さん、今日おいで下さったのですか、私に御用でも」

「いいや別にないんだが、出し物替えたんだって、観客が唸っていたよ」

「評判はどうです？」

「いい方だよ、あの三部の出し物、あれをこれから多くするんだなア」

「そうですかねー」

この間中、私の耳に女の呻き声が入って来ているのだ。劣氏は何気なく聞いて見た。

「ところで、この人から聞いたんだが、誰か呻いているね」

「フン、洋子の奴が、ここを退団したいんだって」

「それで折檻か」

「当り前ですよ、あれには三十万円の金がかかってますんでさア」

劣氏は梅巻に早速その女を拝見させてくれと頼んだ。梅巻はすぐに劣氏を部屋の中へ入れた。部屋に入って劣氏は驚いた。目に入っ

たのは、ショートパンツ一枚で乳房なんか露出した若い女が、手を背中に回わされ、縛られ、柱に立たされているのであった。傍で若い男が竹の棒を握り、女の胸、腹を突つき回わしていた。女の肩や脇腹のところに、皮膚が破れ赤く血が滲んでいた。白い肌と赤く痛々しい傷のコンポジションが印象的だった。

然し娘の肌は艶々していた。長い黒髪を乱して首を垂れている娘、それにしても、その姿態から出る不思議な美しさ、汗が音もなく女の白い肌を滑る。若い男は垂れ下がる娘の髪を掴み顔を上げさせた。男は女の髪を束にして、赤い紐で髪をバックにして縛った。女の白い顔、その眼は涙で濡れていた。唇は嚙み責苦を耐えていたのだ。

男は劣氏と梅巻氏を見て微笑した。そして部屋の隅に置いてあるバケツからシャクで水を汲み、女の顔にぶっかける。女はヒーと息を吸い込む。

「気がついたかね」

男はシャクをバケツに投げ入れ、呟やく。女は静かに目を開ける。長い睫に水が溜っている。男は女の頬を軽く平手で叩く。

「さア、今度はマッサージしてやる」

と気味悪くいって、両手を一杯開け女の顔

に近づける。女は首を左右に振り、イヤイヤをする。男の両手は女の両頬に接近しガッシと掴んだ。こうなれば女はもう動く事も出来ないのだ。女の顔は柱に後頭部を当て、然もまだ逃げ様と必死だ。男の両手はまるで精密な機械の様に緩つくりと動く。

何の事はない、女の顔の按摩なのだ。洋子はその美しい顔を今、男の手によって按摩されているのである。洋子は眼を閉じたが、男の手によって臉を無理矢理開けられ、白眼をむく。洋子の美しい顔は男の手によって百面相を描いている。

「川本、マッサージはそれ位でよい。劣さんこの女を丸坊主にしたら、この劇場から退団する事を諦めるかも知れんが……劣さん、何かいい手がないかねエ」

梅巻氏がいう。劣氏は洋子の顔をじいっと見つめていた。

「梅巻さん、私がこの人をこの劇場から退団しない様に話して見ましようか」

「洋子を？」

「実は、私も女を責める事は、興味があります。特にこの様な若い女には……」

梅巻氏は川本を見て

「そうですか、それじゃ、洋子を劣さんに預

けましょう。然し、傷物になさっちゃこまりますが、でもお気に入りなら妻になさっても御自由に、三十万さえ払って頂ければね」

と梅巻氏は微笑する。

「でも、洋子を劇場から運び出せますか」

「簡単です。川本、運転手はいるか」

「事務所の方にはいましたよ、連絡して来ましょうか」

「頼む」

梅巻は川本にそういつて劣氏を見た。梅巻は洋子の顔に両眼、口と三カ所にサロンパスで張り、その上から手拭いで猿轡を噛まし、ショート・パンツだけの洋子の身体にレインコートを着せ、劇場の裏口へ運んだ。勿論、手は高手小手に縛ってある。車まで川本と運転手が洋子を運んでくれた。劣氏はとんだところで小鳥が舞い込んだものと苦笑した。

イタリヤ映画『甘い生活』これは三時間近い大作だった。小説家を志望してローマに出て来たマルチエロ（マルチエロ・マストロヤンニ）は落ちぶれて、今は社交界のスキヤンダル専門のトップ屋。ある時、ナイトクラブで大富豪の娘、マッダレーナ（アヌーク・エーメ）と知り合い、夜遅くまで遊びまわり、みだらなアバンチュールを楽しんだ。

翌朝、アパートへ帰えると同棲していた女、エンマ（イボンヌ・フルノオ）が服毒して苦しんでいる。放蕩にふけるマルチエロにあいそをつかしての死だった。一命はとりとめたが、さすがの彼も反省した。然しそれも長続きしなかった。彼は取材のためハリウッドのグラマー女優、シルビア（アニタ・エクバーグ）を飛行場に迎える。こうしてマルチエロは海に近い友人の別荘で、この世のものとは思われない無軌道きわまるパーティが行なわれる。

このシーンのマルチエロがエンマの友人、スタイナー（アラン・キュニイ）の背中に馬乗りになり部屋を這うシーンは迫力があつた。

劣氏は畳に転がる美人の洋子を見つめていた。若い艶のいい肌が劣氏に気がいったのであろう。イヤ、それよりもっと他に理由があったのだ。劣氏は洋子の着ているレインコートを脱がした。そして手拭の猿轡を外し、サロンパスを外す。

その時面白い光景が出来た。サロンパスを外す時、女のウブ毛がつき、痛いのであろう肩を揺する。口がタコの様になった。

劣氏は面白くなり、目も隠すサロンパスに

手をかけた。そして緩っくりと取りかける。

脇が接着し、それより眉毛がサロンパスに吸いつき、ビリ、ビリと鳴る。サロンパスに五、六本の眉毛がついていた。

劣氏はもう一方のサロンパスも取り、洋子を椅子に座らした。

「アッ、ここは何処？」

洋子は目を緩っくりと開け、落着きそうだった。

「僕の家です」

洋子は部屋を見回す。目に飛び込んで来たのは部屋の中央の机の上の描きかけのパンティのデザインだった。

「貴女がOKSの踊り子とはね」

「誰ですの」

「僕は、女性下着のデザインが仕事です。劣ですよ」

「何故、私をここに連れて来たの」

「梅巻氏が可愛がってくれとさ、僕の妻にしてみてもいい」

「まあ……」

「僕が貴女と逢ったのは、二度目ですね、洋子さん」

洋子は顔を上げ劣氏を見る。

「洋子さん貴女は、とらわれの可憐な小鳥で

すよ」

「劣さん、私は貴方と逢ったのは一度もないわ、今日が初めて、でも私の仕事柄、大勢の人を知っているわ、貴方もその一人ね」

「フフッ。僕はそうじゃない。劇場へ行ったのも、今日が初めて」

「でも……」

「覚えがないというんですか？」

劣氏は不気味に笑う。洋子は

「お願いです。帰えして下さい」

「すぐそれをいうね。帰えしてくれて、何処に行くんだね」

「お願いです、劇場は退団しません」

「遅いね、当分僕と生活しましょう。朝は六時起床、食事の仕度をして、洗濯、夜は十時にねる。まア、ゆっくりと眠れるのは、夜中の一時か二時頃だろうね」

「嫌よ、お願い、劣さん」

劣氏は少し怒った様だ。立ち上がると机の置いてあるところに行き、鉛筆二本と女性の靴下止に使用する厚いゴムをもって来て、洋子に見せる。

「洋子、あの時はもうけたなア」

「エッ？」

洋子は劣氏の顔を見る。劣氏は輪ゴムを手

でハジキ、洋子の白い露出した上半身に当てる。

「M百貨店でな、思い出したかなア」

洋子の顔が少し変る。

「あの時、君は僕を見て笑った。サイフには一体いくら入ってたね」

「貴方は……」

洋子も思い出したのか劣氏を見る。

「早い手付だった。その時僕は何もいわなかった。君が可愛い顔をしていたんでな、然し踊り子とは知らなかった」

劣氏は削ってない鉛筆二本を洋子に見せ、

片方の手を束にした髪を掴み、顔を上げさせ鼻の穴に突込む。

「ア……」

洋子は驚き声を上げる。然し二本の鉛筆は洋子の美しい鼻筋の通った鼻の穴に突込まれていた。そして、輪ゴムを鉛筆に通して、ゴムを洋子の頭の後ろまで引く。

「あアア」

洋子は大声で悲鳴を上げた。鼻はブタの様に突き上げられ、無惨な恰好にしていた。さらに口へ画用紙のかたい紙を丸めて、洋子が苦しく開けたところに投げ入れ、手拭を四つ折りにして猿轡を噛した。これで洋子の声は

閉ざされた。劣氏は洋子の身体を抱き、椅子から立たせ、腕の縄を外す。ついでに脚の縄も。そして洋子を四つ這にして、その背に劣氏が乗る。

「さア、洋子、歩くん」

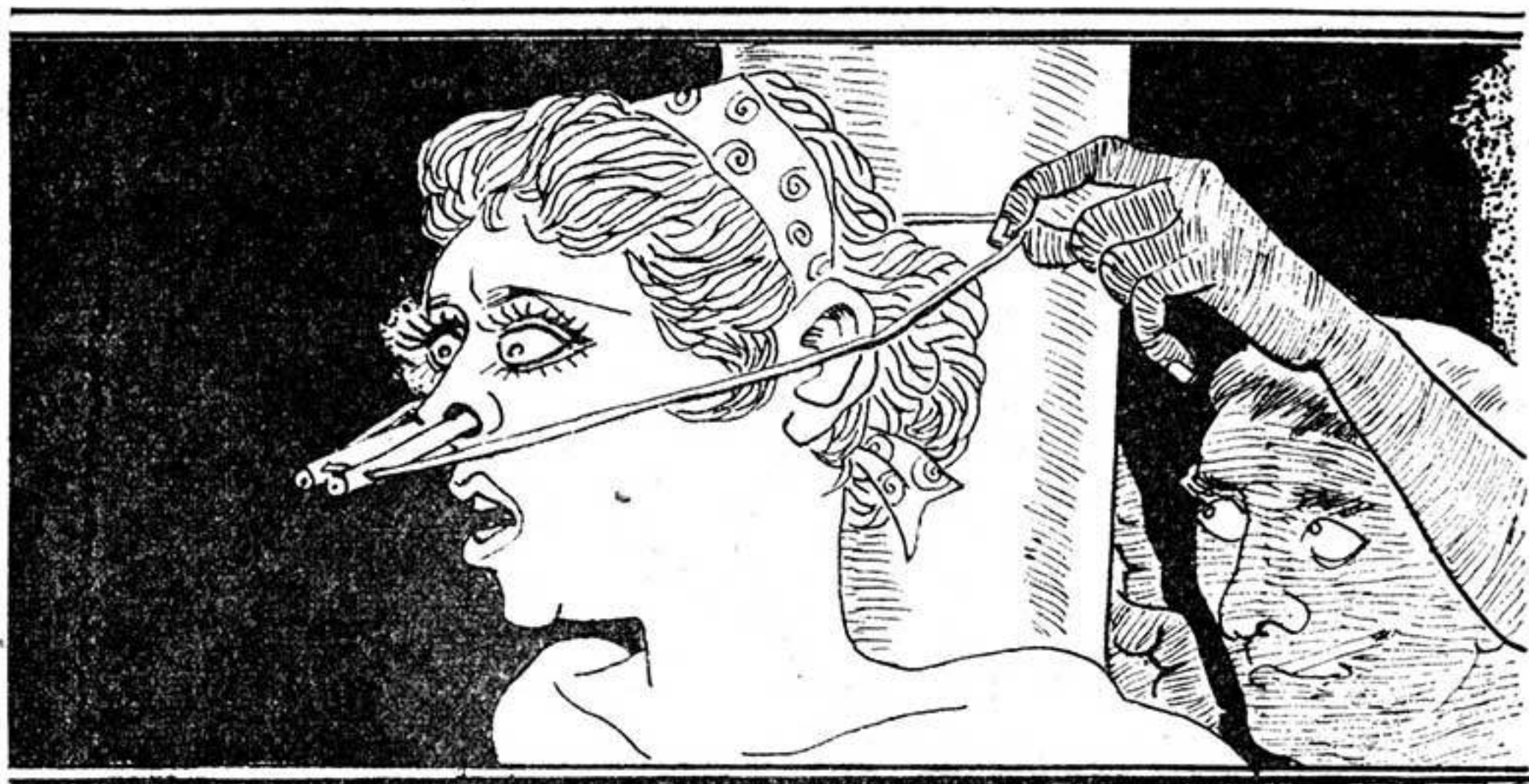
洋子は鼻責、猿轡をされ、今四つん這いになり、背に劣氏を乗せ歩くのだ。劣氏は意地悪く洋子の肉付のよい尻を平手で叩く。洋子は四十二キロ位で、劣氏は六十キロである。洋子は鼻と口をふさがれているので息は出来なく這う歩調も次第に遅れる。

「成程、苦しいのか」

劣氏は呟やくと、鉛筆を取ってやり、厚ゴムを手拭の猿轡の上へ置く。

「さア、これで楽になったろう。後五周だ」

劣氏はまるで馬に乗っている騎手の様に名馬をあやすのだ。それが終ると、洋子は猿轡も外された。そして劣氏は腕を背中にもわし竹の棒を腕の関節の折れ曲る内側の部分に通し手首を脇腹に当て、竹の棒に動かれなく縛った。そして洋子の脚を片方づつ違う縄で縛りつけた。足首のところに縄がかけられた。今度は一米位の机を横に倒し、その机の下にミカン箱二つを台にした。畳から机のところまで（注意、机を横にした上まで）計ると一



メートル三十センチ位の高さになった。

机の下の台と畳までの空間は二十五センチ位、洋子を抱き上げ高さ一メートル三十センチの机の間、三センチのところに馬の様に跨がらせる。勿論洋子の足は畳につかない。劣氏は転がり、洋子の両脚首のところに縄を、空間の二十五センチに通して縛る。その縄にもう一本輪をした縄をくくりつける。さア、これで終り、後はゆっくりと洋子を責める事だ。インスタントの木馬でもある。

「洋子さん、何かいう事は」

洋子の目は涙で濡れて光っていた。まだ二十才前後の洋子、然し今はもう観念している様子。

「何とかいえよ」

劣氏は机の空間の間の輪にした縄を足で強く踏み付ける。

「キャー」

洋子は野獣に似た声を上げる。輪を踏み付けると洋子の脚も下に押しやられる。

「それだけか、他にいう事はないのか」

劣氏は意地悪く洋子の美しい脚線美を摩る。

「許して下さい。これ以上苦しめないで下

さい。劣様の御自由にして下さい」

洋子はもう必死でもあった。こんな目に逢わされるなら、死んだ方がましだとも思った。

「御自由にして下さいか、氣にいった。然しそれを早くいってしまえば、よかったのに遅すぎたよ、梅巻なんか、君を丸坊主にするっていったよ。してやろうか」

洋子は子供の様に頭を振り、

「嫌です」

「嫌か……」

劣氏は机を倒しかける。

「キャー、許して」

洋子は身体を斜めにして悲鳴を上げる。劣氏は面白がって台のミカン箱を取る。ガタンと洋子は前のめりになる。劣氏は倒れかかる。洋子の髪の毛を掴み助ける。そして残った台も取り、劣氏は今度は机を片方もち上げる。洋子の身体は後ろ向きに倒れかかる。と思えばガタンと元にもどし反対をもち上げる。

洋子の脚首の縄が解かれ抱き降される。畳の上に仰向けに転ぶ。洋子の手首が脇腹のところに出て、大腿が白く太く身にぴったりつく。ショートパンツが不思議に思えた。早くいえば似合わないのだ。

「贈り物をやらなくてはね」

劣氏は薄桃色の三角形のナイロンのすきとおったパンティを出してきて、ニヤリと笑った。劣氏は色に弱いらしい。この様に薄い桃色のパンティを特に多く集めている。劣氏自身、家で仕事中は女性のパンティを穿く事もあるのだ。

「さア、そのショートパンツを脱ぐのだ」

「エッ、嫌、嫌」

さすがに洋子も参ったらしい。然し劣氏は本当に脱がせるらしい。洋子は脚を高く上げ抵抗する。劣氏は高く上げた洋子の片方の脚を掴み

「大人しくしろ」

と怒鳴った。然し洋子も必死だ。片方の足で劣氏の顔面を蹴った。劣氏は小さく悲鳴を上げ畳の上に横倒しになった。劣氏は顔を摩りながらゆっくりと起き上がった。腰に巻いた皮バンドを取り、ズボンで脱いだ劣氏は、純白のショートパンツ一枚で、洋子を見た。右手に握ったバンド。手首に一度巻きつけ素

振りする。皮バンドが風を切って鋭い音を出す。洋子は恐怖に顔を曇らせ、劣氏を見上げる。劣氏は力一杯皮バンドを振り上げ洋子めがけて振り下した。

「ウー」と洋子は呻き身体をピンと張る。続いて劣氏は洋子の背や脚に皮バンドを打ちつける。その度に洋子は身を反転させ苦痛の声を吐く。劣氏は洋子の苦痛で歪む顔を見て舌甜摩をした。洋子の背や胸、脚は皮バンドの跡が痛々しかった。洋子はグッタリとして、もう到底抵抗も出来ない位。劣氏はその様な洋子に近かずき、髪を掴んで顔を上げさせ、平手で頬を叩く。

「いい子、大人しかったよ」

劣氏はまるで赤ン坊のオシメを替える様に呟やいた。そして今洋子の穿いていたショート・パンツを洋子の顔に被せる。そして劣氏は洋子を立たせ、くびれたお腹に一本の荒縄を巻き、たて結びにしてあまった縄は胸へ二重程巻かれ、洋子の乳房は無残な形となっていた。荒縄は胸元で結ばれ、また長く残っている。劣氏はまた竹の棒をもって来て、洋子を膝を曲げ折れさせ、中腰の姿勢で竹の棒を膝裏に差し込み、とれない様に荒縄で縛り胸に残った荒縄でその竹の棒の出ているところ

に縛りつける。洋子の恰好は何の事はない。中腰の姿勢なのだ。この姿で歩かせるのである。劣氏はまるで子供をあやす様に、

「一二、一二、サア、早く歩くんだよ」と、手を叩いている。顔を隠されているのだから前方に何があるか判らない。洋子は一、二歩行くと止まり、更に一步あるいては止まる。そうなる劣氏は、洋子の背を押す。洋子は前のめりに倒れる。

「何をしておる、さア、起きろ」と劣氏は足で蹴る。呻きたくても洋子は声が出ない。若い洋子の身体は魅力が一杯だ。然し劣氏は女の図々しさを知っている。勿論、今の洋子には何のうらみもない。然し若い肉体の女には劣氏は我慢出来ないのだ。

洋子のあの胸の隆起、それと顔の美しさ、全身の美しさ、これが洋子の魅力で、劣氏に好かれた事でもあった。パンツを被る洋子の顔は、まるで蒸風呂にでも入っているのと同じで、顔には汗が音を出して流れている事だろう。

百貨店で見た時から、劣氏は洋子みたいな美しい女をほしきままに責めたいと願っていた。だから劣氏は今年来の本望を達したようなものであった。洋子はヨチヨチ歩きで部

屋を何回も歩かされた。次第に歩調が狂ってくる。ショートパンツの中から微かに聞えてくる洋子の息付き、劣氏はその呻きを聞く中また新たな責具を考える。

劣氏は洋子のお尻を蹴り洋子を倒して机を反対に向けた。机の脚四本が上を向いている。その中へ仰向で洋子をねかせ、机とともに縛ってしまう。そして机を元にもどせば、洋子は逆になる。劣氏はもっと面白い事をして遊ぼうと考え、机を反対にして、仰向でじいっ

せ様と思っている。劣氏は、机をもっと立てた。そして洋子の脚を自由にして立たせた。そして机を背にして、部屋を何十回となく歩かせた。そして休むまもなく、机を反対向け洋子を仰向けに寝かせる。そして今度は机の下にミカン箱を置き、洋子の頭を下に、脚は上、机の脚に片方ずつ縛る。

ソクを洋子の足裏へ静かに寄せる。熱くなる脚を上げる、然し一定のところまでしか上がらない。こうして劣氏はさんざん洋子をいじめぬき、洋子もまた劣氏の家畜となり下ったのである。
(おわり)

「後記」 踊り子、洋子嬢は実在の人物であり、洋子嬢は踊り子を退団後、故郷、青森県へ帰りました。責めに関しては作者の創作である事を附記致します。

分譲写真のアイデア

連続 M フォト

長門 弘

私は女性によって縛られ責められる男の写真を見る時、何ともいえず興奮をおぼえるものですが、残念ながら、現在までその数は極めて少数、それも迫力に欠けるものが多いのが物足りません。そこで次のようなアイデアを提供します。シリーズとして十二枚一組ぐらいで出来ないでしょうか。

価格が高くなるようでしたら、写真印刷でも結構です。

世のマゾ男性であれば、必ずや垂涎の的となると思います。もし御計画になる場合、モデル入手難の時はメーカーヤップによって顔の感じをかえることを条件として、大阪まで出向いてもよいと思います。

責め手としては、絹川文代さん、梨花悠紀子さんあたりが適当だと思いますが如何でしょうか。

一、男を捕獲するまで

(条件設定)

女——二十才位の小柄な美しい容貌、柔剣道空手の名手、捕縛術にもすぐれている。洋装、ハンドバッグを持っている。

男——三十五才前後、背広姿。

(ストーリー)

美しい女を見た男、異とも知らないで女の後をつける。淋しい林の中へ誘い込んだ女、わざと隙を見せると、男、女の背後より襲いかかる。女、肘で男の鳩尾を突き上げ、思わず胸を押えて前かがみになった男

の背後にまわって弱腰を蹴りとばし、うつ伏せに倒れるところを馬乗りにながって後手に縛り上げ猿轡目かくしをはめる。

縄尻をとって近くにおいてある自動車まで追い立て、足も縛ってトランクに詰め込む。男は一体どこへ運ばれるのであろうか。

〔第一景〕 淋しい林の中、男、女の背後より襲いかかる。女、肘で男の鳩尾をつきあげる。

〔第二景〕 胸をおさえて前かがみになった男の後から、女、片足で弱腰を蹴りあげている。

〔第三景〕 うつ伏せに倒れた男の背に、女馬乗りにながって右手をねじ上げる。

〔第四景〕 女、左手でハンドバッグより縄の束を取り出し、口で解き、縄尻をくわえて、男の右手首に三巻きまきつける。

〔第五景〕 男の右手首に巻きつけた縄の残りを男の首にかけ、右手でぐっとひきしほす。男、顔をあげてのけぞる。男の顔大写真で背後に女のにっこりした顔も入れる。

〔第六景〕 女、左手で男の左手をねじ上げ右手に持った首にかけてひきしほった縄の余りを手首に三巻きまきつけ、後手高手小手首縄に縛り下げる。

〔第七景〕 女、立ち上り、縄の余りを男の胸に四巻き、片足でふみつけながら締め上げる。女の斜正面から男の全身をうつす。

〔第八景〕 女、縛り上げた男を引きおこして坐らせ、右手で鼻をつまみあげ、思わず開いた口へ左手のストッキングの丸めたものを近づける。男の顔大写真し、女の顔も背後に見えるように。

〔第九景〕 女、男の背後から古ストッキングで猿轡をしめ上げている。男の顔大写真し。

〔第十景〕 女、縛り上げ猿轡、目かくしをはめた男の縄尻をとって引き立てる。斜め背後から手首の縛り具合がわかるように。

〔第十一景〕 乗用車のトランクに男を頭より押し込み、上った両足を縄尻で縛っている女

〔第十二景〕 トランクに詰め終った男の傍でにっこりしている女。トランクの蓋に手をかけている。

二、女によって奴隷化される男

(条件設定)

女——二十才位の小柄な美しい容貌、柔剣道空手の名手、捕縛術にもすぐれている。スポーティな服装。

男——三十五才前後、背広姿後全裸(ストーリー)

捕えた男を自宅へ運んだ女。男を屈服させるために吊り責、鞭打ち等を行い抵抗力を失わす。その後全裸にして再び厳重に縛り上げ奴隷としての誓いをさせた後、仕置の数々を体験させて次第に奴隷に仕込んでいく。

〔第一景〕 地下の奴隷飼育室の中、後手高手小手、股間縛りにされた男、女の手で天井へ吊されてゆく。

〔第二景〕 吊した男の尻を鞭打っている女

〔第三景〕 ぐったりした男に馬乗りにながって衣服をはぎとっている女。男、あお向けにころがっている。

〔第四景〕 全裸にした男をうつ伏せにして馬乗りにながって後手に縛り上げた女

〔第五景〕 後手高手小手に縛り上げた男を坐らせ、その前に腰かけた女、靴でつつきながら奴隷の誓いをさせている。

〔第六景〕 奴隷のつとめを果さぬ場合の仕置をからだで体験させられている男、海老責、女冷然として見下している。

〔第七景〕 男、海老責にされている。女、男の頭を足でふみにじっている。

〔第八景〕 男、尻を上につ折り縛られ、尻に火のついたローソクを立てられている

〔第九景〕 海老縛りに縛った男の足首に縄をまいて吊し、尻を鞭打っている女。

〔第十景〕 男、水責めにされている。女、縛った男の頭を水槽の中へ踏み込んで

〔第十一景〕 男を戸外の木に縛りつけて放置、女、縄のゆるみを調べている。

〔第十二景〕 前手錠、足錠、轡をかまされた男、女の靴で追われながら洗濯している。

きものきもの物語

牧高志



さて……今月のお集まりは珍しいことに
半数も女性の方がご出席という、従いまして
本来の放談会が一躍艶っぽい座談会にもなり
かねまじき……いえ、いえ主旨はあくまで無

責任な話し放し、聴き放しにあるのですから
頃も幸い秋の夜長に便乗して、お互い十二分
にご堪能下さらんことを開幕にあたり特にお
願いする次第であります。……テナことを、

皮切りに申上げるのが回り持ち月当番の私
こと、牧 高志めにござります。故に、い
たずらに覆面忍びの者でもったい振るのも
どうかと思われまますので、ご出席ご発言の
方がたのご職業なりをご披露するのも今流
行の小さな「親切」ではありますまいか。
では一寸申上げておきましょう。ひとまず
ご覧下さいまし。

椿 秀明（御夫妻） 大学古参助教授で
ご専門の皮膚科よりは人情心理学が断然面
白いとおっしゃる先生。令夫人は踊りの名
取でもある。

巴 十吉（御夫妻） 染物店主、それも
副業的な趣味の染物に熱を入れる傍ら自称
世俗的川柳の大家。奥さんは舞台出身の元
女優とのこと。

吉原屋号栄太郎 和洋の中古衣料を主に
扱い、おでん寒酒や……ひさご家の経営も
併せてするという多角経営のあるじ。

美よし野蔭枝 小間物店主、おもに和装
品で帯、伊達巻、裾除からカツラにいたる
用品の一切を商い、赤坂小梅姐さん然として
頗るふとっていらっしゃる。

牧 高志……というような訳で誠に多士済
済のグループであります。で、元はといえば

当初ほんの隣組のよしみでお集り願ったものが、期せずしてこのような同好のよしみと変わり、名実共にとうとう同人会となってしまうましたが、今後ともに何分よろしくご交誼のほど願っておきます。

さて、例によりまして、どこからどなたが何をおっしゃっても一向にかまわないのがこの会の持ち味なんですけど、一応今月のテーマとして採りあげました「長襦袢」を中心にさよう、一つお年の順に吉原屋さんから何か一つ……。

吉原 どうも……学識経験者ばかりおられると真ン中で劈頭からこう申しちゃ、あいつはよっぽど馬鹿如来だなんて悪口いわれるかも知れませんが、永年こんな商売をしていますと、つくづく衣は決して死んではないと感じますね、つまりきものって奴は立派に呼吸をしているんですよ。とはいっても人間様と違って脚がありませんから勝手に歩き回るなんて芸当はできませんけど……少々時期外れですが一つ怪談ばなしを申し上げますようか。

これは残念ながら私の店に起きた話ではないんですが、同僚の一人が懐えながら話してくれたものですから満更つくり話でもなさそうですが……。それは雨のしとしとと降る晩

はまるで判でも押したようにきまって店先きで女のすすり泣く声がするという……ご承知の通り江戸以来この方、いわゆる衣類のショッピングというものは今日のように目まぐるしく変わっても、いったん古着屋と名がつけばいつも店先に商品をぶら下げていなければ商売がなり立ちません。

これも戦前ならいざ知らず昨今の宇宙船でも飛ばうという世の中ですから品数も種類も昔のような訳にはいきません。まあ季節季節に合わせたものを多少先行して質流れの問屋？　さんから回してもらっただけですから、普断着の男女の単衣袷せ物から裾模様のある訪問着、十月の頃ともなれば何んといっても振袖の婚礼衣裳といったきらびやかなものが一様にぶらさがる訳ですけど、その間には申し合わせたように、それこそ目も覚めるような緋色の長襦袢も何枚か交っているのですワ……。

で、その晩宵のうちに何いうことなく床についたのに、夜中廁に行こうと思ってふと耳にはさんだのが例の女のすすり泣くような涙声なんだから毎度のことながら背すじがぞうっとして思わずその場にへなへな……と坐り込んで腰を抜かしてしまったというんです。

長年やっている商売に売込みのセリ合いこそあれ、誰からもうらまれることはこれっぽっちもやってはおらぬし、はて、どうした訳であろうかと思ひなほして恐る恐る襖をあげて店先きの土間を見ると欄間越しに灯がぼうつと照らし出すさきの方に、一目それと判る鹿の子鶴模様の緋縮緬の長襦袢が今にもずり落ちそうに喰み出していた……というんです。おまけに心なしか血のような水滴がポツリポツリとたれているようにも見える。これはあとで夜来の雨が敷居のすき間から浸透してきたものだと言ったんですけど……。いずれにせよ、前夜きちんと衣紋掛けにかけておいた筈の衣類が今にも土間に落ちそうになっているのも腑に落ちないが、確かに女の泣くような声を耳にしたのも事実なんだから、奴さん、早速その緋縮緬の長襦袢なるものの出所を調べてみると、何んと赤坂の某邸からのお払い物と判り、それならばもしやというので更に過去帳をあやつる寺の住職とある夜懇談してみると、ようやくあら筋が判明したという訳なんです。つまり、早い話が昭和の皿屋敷だったのですワ……。

もうこれから先は、くどくどしく申し上げなくてもお判りでしょうが、その緋縮緬の主が

不如婦の浪子とはほ同名の浪江、矢張り薄名の美女だったそうで。ご奉公に上ったのが二十一才で、折檻の挙句責め殺されて瞑目したのが二十三才のある雪の降る晩だったというのですから、どうしても美人薄命のたとえの通りですワ。

ところが……こんな事件とは別個に、実はこの方がむしろ後日物語の話題になりそうなものが幾つかあるんですから、このお話はやめられませんか……。

それは今度は主役が仲間の一人ということになり、大っぴらにや申上げられませんが、いくら人生の裏道ばかり歩く人間だって矢張りプライバシーはお互いに犯したくありませんから、秘中の秘は残念ながら避けまして、きわめてユーモラスにお伝えしますと、この先生が一種の史実的コレクションマニアでして色々と過去帳を調べて、こうこうしかじかだと判ると千金も惜まず、そこらあたり掻き回して蒐めてはタンスの中にしまい込むという何んとも熱の入れ方……。そのくせつい先んだって一萬何がして買い込んだ婚礼用振袖本絹の長襦袢を頼まれれば五千円位で手放す代りに手垢でしみのついている肌襦袢を、誰が見たって雑布にもならないようなもの

のを曰付きだと見込んだら最後逆に四、五千円——は少しホラでしょうけれども、とに角千円以上即座にはずんで買っちゃまうという正に狂人ぶりなんですから、ご本人はまあよいとして、はたの者がその都度ハラハラする始末……。こういう先生なんですから草の根を採しても、それからというものの浪江さんのおよそ着用したと伝えられるものを十数点蒐めたという訳なんです、これには多少珍談があったようです。というのは高価な衣裳は芝の何んとかいう店先にあったのですが普断着は頗る怪しくて、下町のどこかに屑同様で積んであったというんです、肌襦袢と同様、布地の隅っこに何れもナミと糸文字がしるされてあったとて浪江さんのは限りませんや、しかしまあ半分色魔につかれた亡者みたいな先生故に遮二無二彼なりに史実に照して曲りなりにも生前浪江さんが着用していたものが彼の手に戻った、その中に初めに申上げた夜泣きの長襦袢も一枚当然含まれていたのですけど、この長襦袢をよくよくしらべてみるてェと、因果なことにはこの長襦袢に限って死ぬ直前まで着ていたというので主人が早目に処分したという。道理で肩のところ、胸のところ、脚の包まれるあたりがよれ、何

かで擦ったような跡がある。いわずと知れた縄目らしい、そういえばあのお屋敷には車井戸もあったぜ……。なんて冗談を飛ばした同僚もありましたが、また話を元に戻してご難なのは浪江さんの、否オールナミと印るされてある下着や肌着類なんですワ。それはそうでしょう、今まで縁もゆかりもない他人様に朝な夕なに胸につけ腰に巻かれてはいかなる美女の浪江さんでも浮ばれますまい……。思いきや、いや、いついまでもこんなに可愛がっていただいて有難とうございますって逆に夢枕に立った彼女から礼をいわれたって……。いやはどうも……。

捧げ以て毎日余香を拝すといったのは何も九州の多宰府に流された菅原道真公お一人でもなかったようです。失礼しました。

椿 只今は大変コクのある供養奇談を拝聴して大いに参考になりました。故人のきものをそれだけ生ける屍のごとく愛用していただければ……。どうです、それ以来というもののさしもの長襦袢も夜泣きしなかったでしょう、そうですね……。女冥利につきる話ですよ。

こうした人情話には昔から一切理屈は申上げしない約束ですから、話の焦点を若い女の肌身に合わせた長襦袢や下着に限定なさった

ところに実は色気が大ありですね。私のいささか口はばったい物のいい方で失礼ですが、おおよそ人間の皮膚に最も接近して着られる着物は特別の措置法が講ぜられる以外は本人の匂いが織物の繊維の中に封じ込まれて消え去らないとみてよろしいでしょう。

少々色気のない話ですけど大工さんの羽っぴには櫓の匂いが、昔の兵隊さんには革の匂いといった具合に、恐らく浪江嬢の肌身の匂いは、その何んとかさんが懸命に蒐められた彼女の肌着や下着類にこびりついていつまでも匂っていたのではないのでしょうか。

外国の衣裳には日本の長襦袢に相当するものが幾つかありますが、長襦袢の魅力には遠く及びませんね。覚えていらっしゃるかどうか先頃惜しくも亡くなられた清水三重三さんという挿絵画家は好んであの艶麗無比の長襦袢を画かれたのですが、ご自身の性癖はとも角として花柳遊里の巷で巧みに題材をキャッチしては克明にスケッチされたいわば不出世のその方面の画家でした。

その三重三さんは某雑誌で次のようなことをいっておられます。

「芝居の明烏浦里の雪責めの舞台は板塀の黒に対して雪の白、その白の中に長襦袢の緋と

清楚単純な色調が功を奏して残忍の場面を彩って美しい一幅の錦絵にして居る……」とまた、田村泰次郎の肉体の門の劇中例の責めの場面については「画家の立場からはあの責められる女達をもっと美しく、もっと悩やましく、もっと肉感的に現実を離れて美化し絵画化してほしいと思った。

柱へ縛られた長襦袢の女は乳部をもっと露わに、伊達巻から下も腰部の曲線に奔放な躍動を与え、着付も更に乱させて赤い腰巻から白い内股が見えるくらいまでにし、長襦袢の裾も嘘になろうがいささか長めに地を擦るような絵空事風にしてほしかった。淡紅色の長襦袢には肌色を思いきり白く塗らねば肉体が映えない……」云々。そして長襦袢の魅力と題して「大正の末期頃ある川柳子の作に へ 三重三が画けばやせてる長襦袢……とあったが、その頃の私はやせた女が好きだった。まだ女をよく識らなかつたせいだろう、しかし年をとるにつれて段々と適度に肥った女に魅力を感じるようになった。日本髪の女の美しさは緋縮緬の長襦袢にとどめをさす。開けっ放した裸体よりも時に長襦袢の姿に却ってそれ以上の美しさと色気があり挑発的な魅力がある。乳の隆起と下腹から腰部へかけてのふ

くらみを途中できゅっと締め括った伊達巻の味は理くつなしに美しい。

長襦袢は縮緬がよろしい。紗、絹などの薄物を透す肉体の魅力は卑俗である。縮緬のそれは上品で温たたかでトロリとした重量感と柔らかさと色気がある。長襦袢姿からは閨房へつながる婀娜な連想を起すことはもちろんだが、日本の女の裸形に見る欠点を巧みにカバーし、しかも裡なる肉感美を発露するところに魅力と特徴がある。羽織を脱いで、帯を解いてスリと着物から抜け出た後ろむきの長襦袢姿のなまめかしさ……枕の上からこれを眺める男の魂、これをしてなんぞ幸福ならずとせんや」と結んであります。長々と引用して時間を取りましたけど、要するに同じ日本調でも伊藤晴雨氏のそれは乱れ髪を主体としたきもの、あるいは裸体であるのに対して三重三画伯は美校出身らしく単一的な肉体に長襦袢をからみつかせたところが違ふといえは違っていたようですわ。まあいずれにせよ、おおよそきものと名のつくもので一番肌に近いものは何んといっても長襦袢、洋装ならはシュミーズといったところですから、女を識ろうとするにはまず第一に長襦袢を手中におさめてしっかりと抱きしめ襟のあたりと思

い切り嗅ぐことです。結構、女が立とどころに判りますよ。その中には髪の毛や化粧品、匂いもあるでしょうが、何んといっても夏の踊りに使った長襦袢は匂いますね、だから家内ともよく噂するんですけど、毎年九月の初め頃四国で行われる例の阿波踊りなンかは今

時のきものでどうせ丸洗いはするんだからと、いっても夜の徳島はやっぱり暑いでしょ、とすれば思い切り肩脱ぎしたって裾にまつわりつく蹴出しは恐らくあせでびっしょりになるでしょうからよっぽど好きでなければできない業です。昔、私のところに来た患者さんの



中に田舎回りの女優さんがいたのですが、娘姿の黄八丈、腰元風の矢絰、丸髻姿の大島といったところを揃えておけば大概見た目は一通りの芝居ができるのに、さてその下着となるとそう沢山は揃えられない。旅から旅へ回る行李にも制限があると見えて勢い長襦袢はどんな場面でも赤の一枚きりというお寒さ。普断は決して締めない蹴出しだってほんの二、三枚という有様なものだから、いやらしい程匂うそうです。今でもそうでしょうがその匂いは剣道のお面をかぶった時やコテを嵌める時のそれと多分に共通しているらしい……とまあこういう訳なんですワ。いうなれば女囚が男囚の衣類を奪いあってまで洗濯したのも恐らくこれなんでしょうが……。ところがある時あるところを巡業中、盗難にあったというんです。何んでもその時の出し物が適当に焼直しの「播州皿屋敷」……どうも今晚はよく皿屋敷が登場しますけど、土地の祭礼をあんなこんでの長時間物のお芝居で、例のお菊の責め折檻をめぐって執拗に演じたといいました、舞台が神社の境内といっても仲々の暑さ、元々サジスチックであった青山播磨は割った皿を口実に哀願するお菊の黒帯を解

き紫矢紺のきものを剥ぎとったから堪りません。ワァーという観客の声に役者の方がエキサイトして目も覚めるような緋縮緬……かどうか本当のところは判りませんが、とに角緋紅色な長襦袢一枚にむかれたお菊は狭い舞台を懸命にのがれようとする。放免してしまっ

ては興行価値に影響ありと見た播磨は背後からお菊の襟首を掴み右手でお菊の右腕を後ろに捻じあげて、絹糸をよって作った黄色い繩の端を手首にからませる、続いて左腕をぐつと回わして捻じあげ右手首に重ねるようにして緊縛した。裸電球の照明下の後手縛りは万事明暗のコントラストが強く胸に回わした二重の繩目は可哀そうなくらい深く肉にくい込んで痛々しかったそうです……残念ながら私は見ていませんのでよしなお察し願いますが、その哀れなお菊さんを形式的な車井戸に吊り下げますが、吊る繩だけは小屋の天井から本当にぶらさげてあるのです。さて井戸のそばまで引きずってきた播磨は、下僕に命じてお菊を井戸のつるべの繩にくくりつけ、片方の繩を肩にかけて引っ張るとずるずると、お菊の身体が上へひきずりあげられます。もちろんお菊は豆しほりの手拭で猿轡をかましてありますから声は出ません。この舞

台の効果は皆んなで考案したといっていました。書き割の背景は緑青色、お菊の緋色、黄色い繩目、白かすりの播磨、黒い井戸といった多少原色をアレンジしたのに過ぎない配色が却って引立ってよかったそうです。

ところで、ここで一通りいかにも田舎回りの芝居らしくお菊の折檻が演じられるのですが、もうここまできると文字通り責める方も責められる方も汗びっしょりで、カツラの下から伝わる汗の玉は遠くからは見えませんが、お菊の乱れた長襦袢からこぼれる赤い蹴出しがべっとりと脚にからみつくのがはつきりと見えたそうです。問題の長襦袢だってギョウギウギウがんにがらめに縛りつけられる以上いやが応でもしっとりせざるを得ません……とまあこういう訳で、そのピカ一の女優さんの体臭を吸った長襦袢とお腰が興行の途中にこつ然と消えてしまったんですワ。

もちろん、一種のマニアのでき心からでしょうけど、警察にも届けず、これも人気のある証拠とばかり大急ぎで呉服屋から同じような物を取り寄せる、ある時は村の分限者さんから割愛していただいたりして長襦袢や蹴出しを揃えて一句するとまたまた盗難という有様だったそうです。東京だってありますよ、

家内なんかあまり苦にはしてませんけど……いや、とんだところに話が落ちてしまいました。たが、要するにお互い色と匂いには結構苦労しますね、ましてそこに武智さんの演出のようにサジスチックなものでもあればなおさらで立ちどころに軽犯罪が成立するという訳ですワ、ではこのあたりでどなたかにバトンをお渡しいたしましょう。

牧 どうも有難うございました、ご専門の立場からしかも色々な角度から本日の議題である長襦袢をお話し下さった訳ですが、こうした情景を風俗詩である川柳で一ひねりひねったとすると、巴さん、赤に染まるか青に染まるか一体どうご成敗なさいますか。

巴 さア、どんなモンでしょう？ いや別に手前共は道楽に染物業をやっているンではありませんが……元来川柳って奴はさっきも椿先生がおっしゃいました通り理屈をいっちゃいけません。一種のインスピレーションだと思ふんです。幸いここに岡田甫氏の編集した現代風俗艶句選という本から抜き書きしたものがありませんので、下手な漫談を交えながら一寸ご披露申し上げます。

さっきもお芝居の話が出ましたが、何んだか人ごとでないような気がしました。という

のはご多聞に洩れず実は家内もその昔同じ仲間だったんですから……。で一年に何回かは女剣劇裾を乱してこれでもか……という場面遭遇し、自分が演ったか他人が演んじたか判りませんが、とに角思い切り赤い長襦袢を——必然的に赤い蹴出しも一緒でしょうがひらめかすところに下手な脚本であくびをこらえていた観客が一斉に目覚めて喚いたそうです。だからといって、店頭にきらびやかに飾ってある、または誰もいない客間のへ人形のまくって見ればつまらない……なんて結果になってしまいます。

つまり人形の長襦袢なんてものは寸足らずに脚を巻いているに過ぎないんですから……。

可愛いらしい異常心理といえば例の女装って奴です。整形手術でもして本当の女になるのでしたら話は判るのですが、左程踏み切れず、男でいて女の気持になってみたいという虫のいい先生だからついへ女装症深夜の街

を内股に……なんてことを真剣にレッスンすることになるんですワ。実は店にいらっしゃる某奥様は誠にひょうきんな方で時々奥様のきものを借用しては散歩されるそうですが、完全な外股で勇敢に濶歩されるので、お帰りなさいませとお迎えする時は、すっかり前が

はだけた裸観音で近所に恥かしくて……云々。もっともこの方の長襦袢は水色系統の長襦袢なんですからまず音なしの構えといった無難さ、一寸淋しいですがネ。

しかし何んといっても長襦袢ともなれば赤くそして派手なものが通念でしょうからへ見ちゃあ嫌や声までくねる長襦袢……とありたいですね、また何を一体全体意図するものやらへ長襦袢まあある丸い乳が出る……ともなればいかにも新婚早々のプレイが目につくぶようです。

可愛いがるといったでしょう、ウン、いったよ、いったがどうした、おっしゃったならこれで縛って……へ皺よればよれと今宵の緋縮緬……は決して手前共のプレイではございませぬ。もうこんな年令ともなりますと、どちらが先に亡くなりましょうともへ三度目はもう長襦袢どこえやら……てなことになりますから。

昔からよく縛られた女は多分にあぶな絵的要素を持っているといわれますが、後手に縛られなくともへ妻酔って思わせぶりの膝が割れ……でも、へ色直し裾から紅がこぼれそう……だって立派なあぶ絵となります。

しかしこうした一連の眺めは矢張り人知れ

ず、そつとのぞくところに醍醐味がありそうですね。へ新妻のなまめく裾を寝て眺め……はよっぱどの果報者でしょうし、ふと通りかかった垣根越し、いやいや近頃は高層アパートの連立であの窓この窓のあたり、へ不用意の昼寝そこそこ緋がこぼれ……はそうは云っても最近はとんと見られない風景かも知れません。

昔は手前共でもたまさかの休日はへ本よりも爪切る妻の緋に吸われ……と喜んだものです。ですから春ともなれば、お台場沖で、何もうちの女房ばかりとは限りませんが

へ汐干狩カメラが狙う腰の線……と申しまして、鋭意当時のコダックカメラをふり回わしまして専ら長襦袢に包まれたまああるいお尻を撮らせて貰ったものでした。

こうした長襦袢の最高調の乱れはやっぱり純日本的なへ追羽根へ晴着の裾がちと乱れ……ということではないでしょうか。

最後におまけ話ですが元旦の夜、エクサイトの余り、晴着の帯を解き、緋縮緬の長襦袢一枚むいて、なんと無惨にもささくれた麻縄で後手に縛り上げた数刻をへ縛られて、みみず脹れして絶頂感……は、くれぐれも内緒、内緒にお願い申し上げて手前共のお話を一ま

ず終らせていただきます。

牧 どうもご苦労さまでした。本来なら川柳もさることながら、仲々その方面での達人でいらっしゃるの、こんなことで溜飲が下る訳はないのですが大分遠慮していらっしゃる。先き程のお話の途中に女装の話が出て参りましたが、美よし野さん、あなたのご商売にも大いに関係がありそうにも思えますが、リバイバル・ブームとやらでまたぞろ、和装が流行していますね、昔程にはいかなくとも、何かお話し下さいませんか。

美よし野 そうですね、格別目新しいこともないんですけど、お客様の中には物は相談だと、あるいは訊ねあぐねた挙句かしら：序でに君の店に長襦袢はあるかいといきなり飛び込んでおっしゃるかたもいらっしゃる。まず、一番愉快でまた困るのは外人の観光団の方で、多分お帰りの時のお土産になさるンでしょうけど、一つ一つ根掘り葉掘り訊ねられて万事納得したところでお求めになるのですから、この間も私の方がすっかり裸にされてしまいましたのよ……。

アメリカの方なんですけど、日本のキモノとてもワンダフル、あなたのアンダーウェアもとてもナイス、つまりイカスっていうんで

すわ、何かと思ったら長襦袢のことなんです。

ブリーズ ショウミイ ショウ ミイってきもの前をまわって長襦袢をご覧になる、それはかまわないんですけど、ベリイ ナイス遂にアイ ウイル テイク ジス ワンとか何んとかおっしゃって、すっかり懇願されちゃいました……一越のピンク地に赤い水玉模様の長襦袢でしたが、とうとう差上げてしまいましたの。そのあとがいけません、まさかそのまた下のお裾除やお腰は失礼ですものねえ。

困惑したお話といえば、つい先んだったも身の上相談をされたことがあるんです。そうですね、お年の頃なら五十過ぎの方でしたかしら、実は折入っての話なんですが、若い愛人ができて、喜んだのも束の間、さっぱり色気がないンだよ、いや知らないンだね、おまけに背丈も七頭身程度だからいっそのこと洋服を着こなすと色気も自然と出るだろうと思……どうだろう、一つ一切まかすから指導してくれないかっておっしゃるんですの。処がそれが昨今段々にこうじて、一昨日でしたか、また壊わしたから結び直してくれて高島田のカツラをお届けになるんです。どうしてこんな乱れ髪に……地髪じゃないんです

から、髻を持って振り回したら乱れる前に冠っていたカツラの方が抜けちゃいますものね。いや、一寸、彼女を苛めているンだよ、残酷物語でネ、先ンだって君んところから届けて貰ったお神輿用の綱ね、実はあれ、何んだと思う？誰が見たって綱だよ、綱には間違いないンだけど活用場所が違う、つまり、あれで長襦袢一枚の愛人を……後手に縛るンですって、だから、こうなるともう大変、アクセサリーも私のお店をとうに通り過ぎて、ここにいらっしゃる吉原屋号さんに応援していただかなくっちゃ……おさまりませんでしょうに。まあお二人とも愛し合った仲だから少々残酷さがあってもかまわないんでしょうけど変ったといえはそんなものでしょうか。

牧 いや、いやどうも、もったいないお話とんでもないことをおっしゃいます。ところで今日は皆さまから大変面白いお話を長時間拝聴いたしました、お蔭様で長襦袢にまつわる数々の話題、勿論どれを採りあげても興味深々後日譚が待たれるものばかりであります、能ある鷹は何んとか申します故、このあたりでひとまず閉会することといたします。しょう。

どうも、皆さん有難うございました。

【切腹体験記】

切腹への憧憬

美川多起夫

切腹、ハラキリ、なんと素晴らしい言葉でしょう。美しい女性がこの世の別れとせい一ぱいの化粧をし、振袖白装束を身につけ、深々と左から右へ一文字に我が腹を切り開く。

真赤な鮮血が吹き飛び振袖、白足袋を次第に染めてゆく。傷口からは腸がくねくねと下腹部一面に露出し、緑の黒髪を振り乱して息絶えてゆく、女性切腹の美の極致です。

本誌はこうした女性切腹の口絵やグラビアが、そして貴重な体験記も発表されて来ました。特に藤村陵子、皆川波留子のお二方の告白は切腹ファンの血をわけしました。男性の

こうした体験記は僅かで、しかもお二方の様に流血の有様、傷口の深さ、長さ等のくわしい告白はありません。

藤村さんは深さ七耗、長さは記されておりませんが十文字です。皆川さんは一、三耗、長さは五耗、傷口の開きは一耗となっております。その他、山田久仁子さんの体験手記は七分の深さで二寸七分の長さとなります。更に第二回の体験には深さ六分、長さ五寸、切口の中は一寸五分との事です。出血量はコップに三分の二位であったとか、いずれにしても三人の女性の方が切腹プレーとしては最高

のものを決行されておられるのは全く頭の下る思いです。恐らく死なねばならない時が来たとしたら、この三人の女性は十分に切腹して果てられる勇気をもっておられると存じます。私も一度はこうした体験をしたいと思っておりますが、今度これを実行する機会が来ました。その時の準備にと貯めた相当の金額をほとんど使ってしまったが、別に惜しいとは思っておりません。

私のプレーは女装切腹ですので三女性の方より余分な女装用具が必要でした。高島田のかつら、大阪の松阪屋で質流れ品の処分市が

開かれた時に振袖の白無垢、九寸五分は各質屋を廻り、気に入った品があるまでさがしました。白足袋は福助の五枚コハゼの白羽二重足袋。化粧品は資生堂のもの。その他三宝、ナイロンの防水布と白羽二重の布地と薬品等を準備するのに約一カ月を要しました。一応揃えて機会の来るのを待っておりまして。も



ちろん三人の女性の方より深く長く切るつもりでした。例えこのまま、死んでもよいという気持でした。大阪の鏡工場に大きな鏡も注文して置きました。

別にアパートの一室を契約してありますが、私は執筆家というふれこみで時折此処で数日を過ごす事にしております。切腹する時のカモフラージュのためです。で食糧も十分用意し、誰も入れない様に管理人に申し渡しをしてあり、事実十日位長い間閉め切った部屋で過した事もありましたが誰も来ません。執筆の邪魔になるというのが理由ですが、今では誰もそれを不審がる人もなく、切腹や女装プレーをするのにも心配なく数日間過ごせるのです。

このアパートにすべての私の第二の生活が

あり、必要品も取り揃えてあるわけですが、この様にするには、約二カ年かかっております。最初二日間は花嫁衣裳ですごし、三日目に切腹するつもりで十日程の期間を管理人にいつて部屋に入りました。

大きな鏡の前で化粧をし、緋ぢりめんの腰巻をし五枚コハゼの白羽二重足袋をはき、真赤な長襦袢、駒輪子白下着と次々と着て行き最後に高島田のかつらをする。と鏡の中には振袖の白無垢姿の花嫁が微笑をたたえて恥かしそうに写っております。女装のプレーはこの次にお知らせするとして三日の午後四時に始めた切腹プレーを記して見ましょう。

私の借用しているこのアパートは静かな山裾にありしかも部屋数は四間あるのです。私は三階の西側の端であり、四間のうち六畳の一部屋は何処からものぞけない様になっており、完全防音装置ですから全くプレーには適しております。大きな鏡の前にマットレスを置きます。このマットレスはダブル用のものを半分に切り、並べたものです。マットレスを利用するのは坐った場合そこが低くなるので血液が四散しない限り、他の場所を汚さず、低い所に溜ってしまうので出血量を知るにも都合がよいわけです。血液がマットレス

に泌み込まぬ様、その上にナイロンの布を置きますがナイロンとマトレスの間には白布を敷いております。更にナイロンの上には白羽二重の布地を敷き、布がずれないように様にマトレスの下に折りこんで置きます。前方をのぞく三方は白屏風をたて廻し、白木の三宝の上に半紙半帖を置き、その上に白さやの腹切刀を置いてあります。これで切腹準備はすべて整えられたわけです。

私は一度花嫁衣裳を全部脱ぎ、改めて化粧を致します。この時は首、手は申すに及ばず胸、腹、足と全身を化粧致します。背の方は一人です。出来ません。振袖の白綸子の長襦袢と上着を着て足袋は五枚コハゼの白羽二重足袋をはき、白絹のしごきを締めました。そして睡眠薬を飲み、切腹の場所であるマトレスに坐ったのです。文金高島田の娘が白装束で静かに最期を迎えている姿が正面の鏡に写っております。出来るだけ深く、出来るだけ長く切るつもりです。深さは私の脂肪層からみて最大の線と思われる深さ約二糎、長さは少くとも三〇糎、場所はへそのすぐ下と決めました。

正坐では白足袋が見えませんでしたので、あぐら坐りをし、静かに肌をくつろげました。三宝

の腹切刀を手に執りさやを払えば青白い刃の光が美しく輝きます。切っ先を残し（前もって印をつけて置きました）半紙で巻き、これを右手にしっかりと持ちます。三宝は後方からおしりの下に敷きますと身体がやや前方になりぐっと腰をそらすと美しく化粧された腹部が突き出る様になります。

薬がきいたのか睡くなって来た頃、いよいよ切腹開始です。左手で腹部を撫で、切腹刀を近づけます。左手で左腹部を押さえているその人差指と中指との間に切腹刀の切っ先を当て、じわじわと刀に力を加えます。そしてそのままグッと力を入れると共に右へグッと移動させると「ゾリッ」と肉の切れる無気味な音と共に刃がグサッとささり右手と腹とが接しました。このままの深さで一文字に切ればよいのです。私は自らの腹部をにらみつける様にみつめながらゆっくり右へと引きまわしてゆきます。ゾリゾリと刃が動くにつれて白い脂肪が口をあけ、その奥から真赤な鮮血が吹き出し、滲み出し傷口一ぱいに溢れ溢れて流れ、白綸子を染めてゆきます。刀を握った右手も血に染ってきます。「ウーム」思わずうめきの声が出ます。右手は固くなってしまいへその左まで息を殺して引き廻して来ま

したがそれ以上進みません。切り廻した直後二、三の血はプツと吹き飛び、敷いている白布と右足の白足袋を彩りましたが、そのあとは流れるばかりです。

大きく息を吸い、左手を短刀の柄にそえ、グッと右へ引廻します「ウーム」とうめきながら頭の中を、そして腹の中を焼火箸でかきまわされる様な痛さ、突き上げてくる苦しみ「ウームッ！ ウームッ！」私は苦しみと戦いながら遂に右脇腹まで一文字に切ってしまったのです。終ってから刀を抜き下腹を見ると見事に一文字に三十糎は、ゆうに切れております。血は次から次へと流れて下に溜ってゆきます。正面の鏡を見ると高島田の女装した男性が白衣を染めて切腹した姿が写っています。苦しい、下腹一面どうかなるのではありませんかと思われる程です。傷口は最高二糎以上あるでしょう。このまま死ぬかも知れないと思うとフラフラと眼の前が暗くなり、そしてそのまま前に倒れ、気を失ってしまったのです。

どの位の時間がたったでしょうか。フト正気にかえりました。まだ下腹が痛みズキンズキンします。身体を起こすと傷口が又猛然と痛み「ウームッ」とうなってしまう、暫くは

両手で傷口を押さえてじっとしていました。血はほとんど固まっていたが新しい血が再び傷口の奥から溢れて来ます。

のどがともかわき水をのむため台所へ立って行こうとするのですがフラフラします。振袖をふみつけ、前に倒れてしまい、そのまま這って台所へ行き水を飲みました。自分で

縫って薬をつけ、手当てをしましたが切腹する時より、その後や縫う時の方がやはり痛みは激しく感じました。

白綸子の振袖は腹部からひざにかけて鮮血で染まりそれが流れて坐った下にたまり、その辺りも真赤です。白羽二重足袋も下になった所は白い所は全然なく、白布に相当の血潮

血紅使用腸露出

女体切腹シリーズ

大手札印画紙焼付 十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚啓子 略号(せい12)

左脇腹へぐさりと鋭く光る短刀の刃先を突き刺し、忽ち下腹ににじみ出る血汐のワンカットから初まり、最後に咽喉元をかき切り、左乳房の下を一抉りして絶命するに至るまでの凄惨な女体切腹の過程を、十二枚一組の連続写真として完成。臍下から右脇腹へかけて深々と切つてゆけば、腸が傷口からはみ出て真に迫る女体切腹シーンを展開しています。最近とみに濃艶さを増してきた大塚啓子嬢の手に汗を握る好演技と美しいポーズによって見事な切腹姿態をキャッチしました。何卒、女体切腹写真の最優秀作品としてお手元にて御愛玩下さい。

梨花悠紀子

血紅切腹 絶命ポーズ

大手札印画紙焼付 四枚一組 四〇〇円

モデル 梨花悠紀子 略号(せん)

愁いを帯びた悠紀子が自らの手で下腹を真一文字にかさばけば、傷口から一すじ二すじと、たらたら流れる血汐。苦痛にゆがむ美しい表情。やがて思うさま、きりきりと切り果てた上、下腹を血まみれにして仰向けに倒れる女体。傷口を上、血塗られた短刀を右手にしたまま倒れて、今や自虐の恍惚境の中に全身をゆだねて、静かに絶命してゆく可憐な姿態。切腹と絶命の二様を味える迫力作。

新版血紅切腹フォト (大塚啓子)

祭壇の女体切腹 略号(せぬ)

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

白布をめぐらした背景、白布をひきつめた台の上に、白フンドシ一つの裸女が、いけにえの白い肌を晒して、肉づきのよい下腹を白鞘の短刀で切りさばいてゆく。白一色の中に赤い血が美しく彩り、苦悶に乳房を握りかみ、のどに手を当て、台上面に転々と身をくねらすさまはマニヤの心をゆさぶるでしょう。

が溜っています。気を失ったので量は不明ですが切腹にふさわしい出血量であったと思います。傷口をはかると三十一糎五耗ありました。少しカーブになった一文字でした。切り口ははかっています。見たところ二糎は開いており、今にも血潮の中から灰色の腸がドロドロと流れ出るのではないかと思う程です。

毎日自分で手当てをしましたが約二カ月はかかりました。途中少しうんだ様でびっくりしましたが、そこだけカミソリで切りうみを出し、とにかくやっと全快しました。今のところ再びこの様なプレーをしようとは思っていませんが、切腹する前の準備や切腹する直前のワクワクするスリルはとも私の筆では表現出来ません。結果的には痛いものという事だけが残りました。しかし、女性の方と同様の結果を得、長さや深さにおいてそれをオーバーした事に満足しています。恐らく出血量においても血潮の振袖や白足袋及び白布に溜った量から見て上廻っているのではないかと存じます。

以上、私の一生に只一度の切腹プレーを記して見ましたが、これについての諸先生の御意見を聞かせ下されば幸と存じます。

浣腸によって或る婦人とプレイのチャンスを持ったセールスマンの体験

白 昼 夢

(はくちゅうむ)

滝 次 郎

何んというひどい暑さであろうか。連日の快晴にかわききった道路は、自動車の通るたびにもうれつな砂煙をあげる。

阪急京都線の茨木駅をおりて、徒歩で約二十分。やがて右側に京阪神電鉄のマンモス団地が見える。一本の道をはさんで左側には高級住宅地があり、数えきれないほどの住宅がならんでいる。このあたりはまだ多分に田舎の臭いの残っている所だが、最近開拓されたところだけに、すべて近代的にできている。私の目的は、この住宅地にある一軒の家であ

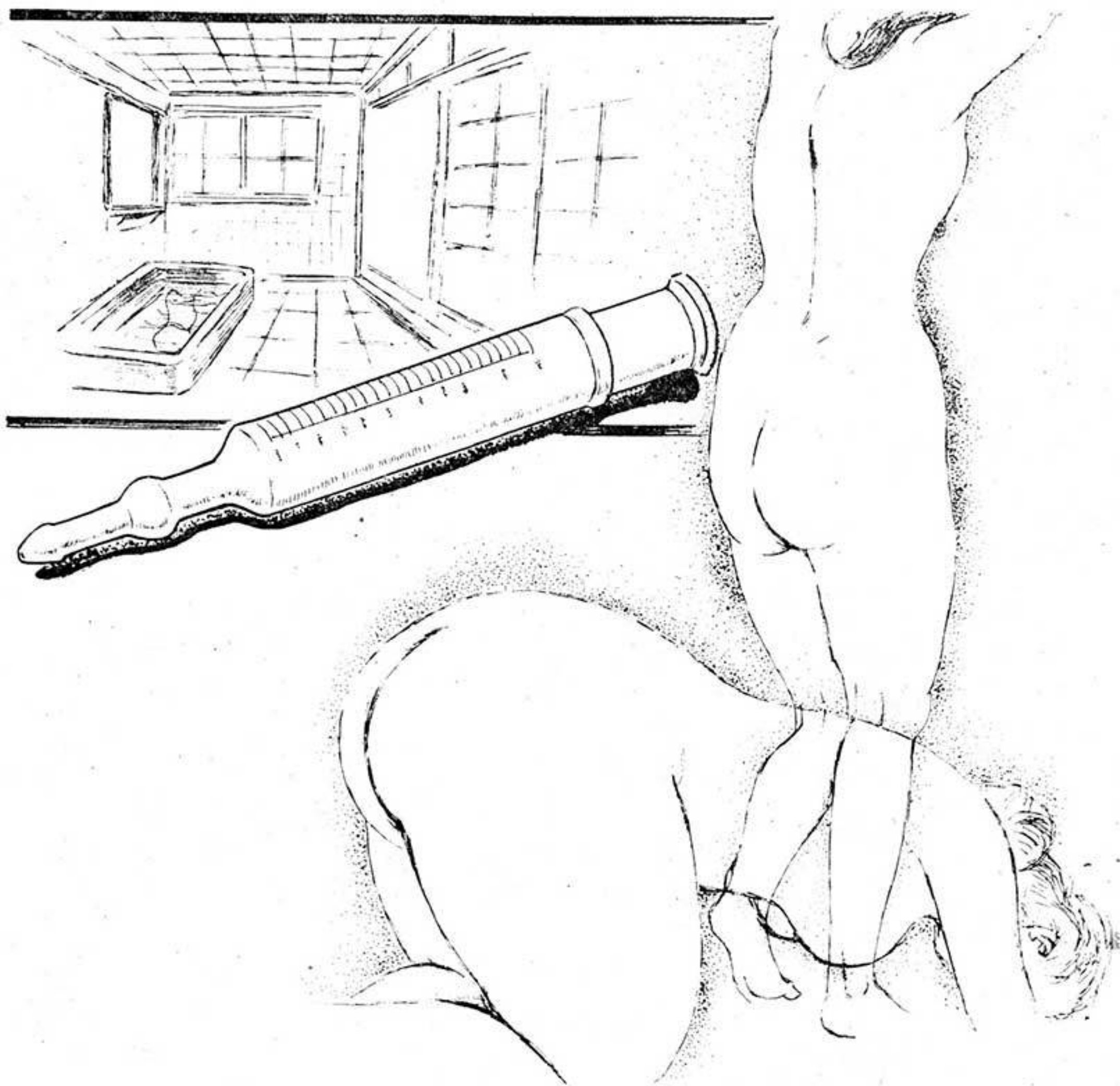
る。過去数回、化粧品を買ってもらっている。お得意先である。

やっこの思いでたどり着いたという言葉そのままに、カラカラにかわいた口を拭いながら、仕切戸を押してドアに近づく。呼びリンを押すと、「ハァーイ」と、よくとおる返事がして、待つ間なくドアが開いて美しい奥さんの顔がのぞく。

「あらー、滝さんなの。いらっしやい、この暑いのに大変だったでしょう。さあお入りになっ……」

天は二物をあたえずというが、この奥さんは顔ばかりでなく、声まで実にいい声をしている。

セールスマンの誰れでもが経験することだが、はじめての家を訪問するとき、ていさいよくことわられるか。木で鼻をつついたようなあつかいをうけるかである。しかしそれが一旦得意先となると、どこへ行っても歓待してくれるが、特にこの奥さんは、来る度にまるで遠来の客を迎えるようにサービスしてくれる。食事を頂戴したことも再度あった。



こうした事がセールスという仕事のすて難いひとつの理由でもあらう。

愛想のいい奥さんの言葉に、まともな挨拶をするひまもなく居間に通された。四坪程の居間は洋風につくられてあり、籐椅子にパイフチェアーなどの調度品が都合よく置かれてある。ゆったりとしたヒジ掛椅子におちついて、やっと平常のペースにもどり、一通りの挨拶がおわると、早速よく冷えたコーラをだしてくれる。

「わたくしいま、一寸やりかけの御用がありますの、二、三分で済ませますから、少しお待ちになってね」

胸あき、袖なしのうすいクリーム色のブラウスを着て、同色のタイトスカートをはいっている肉体は、外観からも実に見事なものであることがわかる。台所にきえる奥さんを見送りながら、こんなすばらしい女性を自由にしている、この主人なる人がうらやましいとおもう。

彼女の話しによると、この御主人はある印刷会社の重役で、年は五十七才、本宅には妻も子供もいる。もうお解りでしょう。私は商売柄、おくさん、とお呼びしているが、二号さんである。年は二十八才、東京の人で名

は美好女子。元は洋装店に勤めていたそうだし。以上が今迄に得たこの家の知識だ。

このような事を思い出しながら、何気なくテーブルの下に手をやると雑誌があった。取り出して見、オヤ！と思った。縛りを主にあつかった雑誌である。

「あら！ いやだわ、その本ウツカリしまうのを忘れていたわー」

何時の間に來たのか、私のうしろに立った彼女は、いたずらっぽい笑を浮べている。

「いやあー、これはどうも、つい手にふれたもんですから……。しかし、おどろきましたね。奥さんがこのような本を読んでいらっしやるとは……」

「それがね。滝さんも御存じのように、わたくし一人の時の方が多いでしょう。だからつい退屈なもんだから……」

退屈のためなら、他にも読む本はいくらも有りそうなものだったと思つたが、べつに深く追求する理由もない。彼女が前の椅子にすわるのを待つて、早速商売にとりかかる。

「さっそくですが奥さん。これが今度新発売されました、洗顔用コールドクリームです。こう暑いと、汗やホコリで皮膚が荒れがちですが……」

じつと、私の顔をニラムように見ていた彼女は、話しの腰を折るように、妙な事をいひだした。

「ねえー、滝さん、わたくしこの頃、なんだか肌が荒れているような気がして、しかたがないの、一度お医者さんにみていただこうかと思つているのよ。貴男の目から見てどうかしら？」

見たところ、全然あれていゝような様子はないが、そこは商売。

「そうですね。そうおっしゃれば、少し目立つようですね。しかし医者にみせる程のことはないでしょう。それではこのクリームは如何がです」

と、品物を取りだしたが、見ようとしなない。どうも態度が変だ。ハテ？ さすがの私も首をかしげざるを得ない。俯向きかげんの彼女の顔色は、おどろくほど赤い。冷房のきいた室内である。暑さのせいとは思えない。

「奥さん、いったいどうなさつたのですか？ 御気分でもお悪いんですか……。それとも、前に持参しました製品になにか……」

そりゃあ、そうだろう。べつに荒れているようには見えないのだから、社の製品が悪いわけではない。それにしても、恥しいとは何んだらう？ 失礼とは思つたが、いろいろきいてみた。少しいい洩つていたが、その原因が秘便のためだと聞いて、なる程、医者にみてもらおうといった意味がわかつた。だが、どうもおかしい。秘便ならたしかに肌も荒れ艶もわるくなるものだが、目の前の彼女は、以前と同じように、美しい肌であり、色艶もよい……。

アッ！ 突然、私は頭の先から、足の先まで電流が走るようなショックを感じた。『浣腸』そうだ、それに違いない！ 物のいい廻しといい、態度といい、彼女はそれをいいたがつてゐるのではなからうか？ としたら、私自身の手で浣腸までもつてゆくには、どうすれば……。頭の中は、もうれつな勢いで回転する。彼女がいくらそれを欲していても、女性の羞恥心をもちに突くことは失敗を意味する。そこ迄は自然に、あたりまえの事のようにつけていかなければ……。私は身内における胸の高鳴りを押えるのに苦勞しながら。如何にもお座りな事務的な口調で、秘便が美貌だけでなく、心臓や肝臓等、内臓機関に

及ぼす害毒を説明した。こんなことは彼女にしても、百も承知であろう。しかし、それはもう問題ではない。要するに必要なのはゼスチュアだ。秘便のための薬など、数種かぞえあげたあと。いちばん簡単でもっとも早く効果のあるのが浣腸であり、一般でも如何に多く使用されているか。いまでは浣腸は常識でさえあると、多少の誇張を混えて、それこそ商売でもやらないほどの熱心さで話し、説き進めていった。

やがて、この家に浣腸器の有ることを聞くに及んで、彼女がマニヤであることに一〇〇%の確信を持った。彼女はソノ経験がないので恐くてそんな事は出来ない。いくら簡単でも、やはり経験のある人でなければ……。

「滝さん、貴男は慣れていらっしゃる？」目の寄るところに玉が寄るというが、彼女も私が同好の志であると睨んでの誘いである。全く動物的な嗅覚といわざるを得ない。淡いピンク色のスポンジを洗場いっばいに敷いた浴室で、上にのばした両腕は手首のところからたく縛られ。ヒジのところ一本、ヒジと腕の付け根の中間のところで一本。両腕が離れないように縛られている。丁度、両腕の上に頭と首があり、腕は顔より前に出すことが出

来ない。口にはしっかりと猿轡をしてある。

二〇〇〇ccのぬるま湯を注入された腹部は妊婦のように張りきり、しかも彼女の膀胱には少なからぬ水が溜り、その機能の極に達しているはずだ。排泄を堪える苦痛に身をくねらし、身も世もあらぬ呻吟のさまは、夢の世界のようであり、張り切った腹部を断ち割ってしまいたいような錯覚すら覚える——。

プレイを始めて、もう二時間近くにもなろうか、彼女はいま、四回目の排泄に堪えているのだ。

はじめ、寝室にある折りたたみ式マットレスの上に、純白のシュミーズ一枚、身に着けただけの姿で彼女は横臥した。微温湯を吸い込んだガラス製の浣腸器を持つ手が少し震える……。

二、三分もすると両手を下腹に当て、体をエビのように曲げ、曲げた腰から背にかけて微妙な旋律が走る。

「あーあー、も、もう駄目よ、お願い、トイレ、トイレへ行かせて」

私は態と黙っていた。たまらなくなった彼女は腰を屈めたまま急いでトイレに消えた。暫くして彼女は出てきた様子だが、正面から見ることはせず、私は背を向けたまま、次の

準備をした。準備を見せることに依って次の行為を容易にする。

「お陰さまで、本当に、お腹が軽くなりましたわ」

「駄目ですねえ、奥さん。もう一寸辛抱しなければ、せっかくの効果がなくなってしまいますよ。軽くなったと思うのは感じだけで、実際には効果はありません。もう一度やり直しましょう」

お腹が軽くなったという彼女も、効果がなという私も、ただ芝居のセリフをいつているようなもので、要するにプレイのためのゼスチュアにすぎない。彼女もまったく心得きったものである。こんどは前回より多く注入する。二分、三分……。

「うっうっ……ムムム……」

両手は自然に下腹に移り、眉を八の字に寄せて身を揉む。仰臥させ、両肩をしっかりとさえている私の手の掌にも、汗がにじみ出ている。いつの間にか、彼女の片手は私の腰のベルトをしっかりと握り、身を揉む度に、痛くなる程引っぱられる。

「あーあー、もう駄目」

すごい力で跳ね起きた彼女は、脱兎の如くトイレに駆け込む。

私の命令に従わない事を咎めると、彼女は室の汚れることが気になって……と弁解する。

それでは浴室でやりましょうと、返事を待たずにタイミングよく床つづきにトイレと並んでいる浴室に器具を運びこむ。室のドアは開けたまま、紐を四、五本もってくるように呼びかけた。紐をもってくる間に、湯と水がでる蛇口から洗面器に適当な温度の湯を一つぱい用意した。洗湯の床には都合よくスポンジの敷物が敷かれてあり、まったくお誂え向きだ。

後手に縛り、胸にかけた二本の紐は乳房をはさむようにしてしめあげる。白い肌に赤と青の紐のコントラストは美しい立体感と共に私の眼になやましく映る。はや恍惚とした表情は彼女が完全なマゾ女性であることを現わしている。

一気に一〇〇〇cc程注入した。さすがにこたえたらしい。続けさまの注入がおわるころは、はや身をくねらし、呻きをあげてもだえる。両脚をおさえている手に、身を揉む律動がつたわり、その感触はサド心理を充分みたくしてくれる。

排泄による解放感から、グッタリとなった彼女を抱き上げ、再び浴室に運び、彼女に休

憩をあたえるあいだに、私は悪魔的なつぎの準備にとりかかった。

水差にコップ五杯ほどの塩水を用意し、一旦解いた両腕を縛りなおす。前記の通り、おもいきり上に伸した両手首を縛り、ヒジと二の腕のところで三カ所固定する。こうすると首の下にある紐のため、腕は顔より前に出せない。

上体をななかば起し、水差を直接口にもってゆき塩水を流し込む。渴きを覚えていた彼女は、ゴクンゴクンと二口ほど吞込んだが、塩水とわかって飲むことを拒む。それを待っていた私は口から口へ、口うつしに飲ますと、彼女はすなおに次々と吞みおろす。水差の水は一滴あまさず、彼女の腹中におさまった。別の紐で足首を縛り、時のくるのを待ったため私は浴室を出た。

寝室にもどった私は、のぼせあがった頭を冷やすため、彼女が愛用のベッドに横たえて現実の不思議をしみじみと味わいつつ次への期待に胸はずませて時間を待った。三十分程すぎた。いくら夏とはいえ、冷めたい床に横たわり腹いっぱい塩水を吞んだ彼女は、もうそろそろ、その必要にせまられているところである……。

再び浴室に入った私を、哀願の眼ざしで迎える彼女を無視して、足首の紐をとり、浣腸器をとりあげた。

「ねエー、貴男おねがい。先にトイレへ行かせて……」

かほそい声で許しを乞うのも聞えぬふりをして、浣腸器いっぱい微温湯を吸引した。窓ごしに強くさしこむ真夏の光の中に、くりひろげられた浣腸プレイの数々は現実なのか夢なのか。幻想的な現実の中に、白昼、夢みる思いの私は、しばし茫然と立ちつくしていた――。

そして、その直後よりマニヤ同志の喜びを知り合った私達は、彼女が主人の仕事の都合で十月の下旬、東京に去るまでの四カ月間、神をも恐れぬ倒錯の世界に耽溺し、目を覆わしめるもろもろのプレイの中に、すべてを投げだし燃えつくすのだった。

彼女との別れに際しては、十代のころのような、ロマンチックな感傷は起らなかったが、はじめての時の、あの白昼夢はいまもなお、生なましい感触とともに、鮮明な映像を描いて私の記憶の中に生きている。

(おわり)

サジスチック・ストーリー・シリーズ

初子のこと

大 中 忠

山の木々はすでに紅葉していた。その美しい輝きを白い肌に受けながら初子は山路を急いでいた。白いセーラー服の襟が木の間を吹く風になびいている。自然の絵具が彩る風景も、しかし初子の目には止らなかった。初子の胸の中は病の床に臥す祖母の事で一杯だった。医者に見せても首をかしげるばかりだ。

もう老齢というものの、初子を一番可愛がってくれた祖母だ。初子はとうてい見捨てることなど出来なかった。医者に薬に、手をつくしたものが、どうにもなくなっていて、薬をもつかむ気持ですがるのが神か迷信かだ。

初子はこの山の上に、祈禱で病を治す老婆

がいる話は大分前から聞いていた。そんなの迷信だと軽く考えていた。しかし今は違う。例え迷信であろうと魔法であろうと、何だって良い、祖母の病気さえ治れば。初子は家から何キロも離れた山の上に、今真剣な表情で向っているのだった。

大きな、年を経た樟樹をまわった所に、その老婆は住んでいた。小さな暗い小屋だが、どっしりとした感じを与えた。まだ十四の少女にとって、その戸を叩くには大きな勇気が必要だった。秋の陽は丁度頭の上にあった。

すすけた室内に祭壇の灯明と小さな窓から

差し込む光だけが流れていた。祭壇の前に座った老婆は、もうこの世での生命は、とっくに使い果してしまったような姿で一心に祈りを続けていた。その老婆から少し離れて初子は正座していた。短いスカートからのぞいた膝と太ももは、きっちりと合わせられ、半袖のセーラー服からむき出しになった腕も行儀よく前に揃えられていた。初子は脚の痛いのをも忘れて夢中だった。老婆の口からは絶えず小さなつぶやくような声が洩れていたが、いっしか聞えなくなると、老婆の姿も動かなくなった。そのまま何分経ったであろうか、室内の空気も全く動かず灯明は真直ぐ上に伸び

ていた。その灯明が急にゆれると老婆は初子と向き合って座っていた。

「むずかしい」

ぼつとこれだけ。

「駄目ですか」

「駄目ではないがむずかしい。七日間激しいお祈りをすれば良いのだが……」

「お願いします」

初子は前に乗り出した。

「誰か身内の者が犠牲にならなければ」

「犠牲って？」

「死にはせぬ。死にはせぬが、死ぬ位の苦しみ耐えねば」

「私がやります」

「耐えられるかな、七日七夜の間、苦しみ抜くのだぞ」

「我慢します。例え死んでも。それに、家の方は、留守の間大丈夫なようにしてきましたから、今からお願ひします」

老婆の目は光っていた。

「それ程の気持なら、やって上げましょう。

良いお孫さんをお持ちじゃなあ。……一寸お待ち、用意をするから」

間もなく祭壇の用意は整い、新しい灯明の用意もされた。もう秋の陽は傾き、日の短い

山の蔭に夕闇が迫っていた。

「さあ娘さん、これから七日間、婆のいうことに逆ってはいけませんぞ、お祖母さんの魔物を貴女に乗り移らせて治すのだから」

初子は息を含んでうなずいた。

「さあ向うを向いて両手を後にまわして」

初子はおとなしく座り直すと、肉付きの良い両腕を後にまわして組んだ。老婆のガサガサした手が少女の水々しい両手首にかかり、荒縄が巻きついた。まだ幼なさの残っている柔肌に荒縄の刺激は強かった。初子は下唇を噛みしめた。両手の自由を奪った縄は二の腕から胸にかけても巻きつけられた。むき出しになった二の腕に縄は深々と窪みを作った。両手の自由が全く奪われると、初子は正面を向かされた。

「お祈りが終るまで、膝をくずしてはなりません」

日頃座りつけない初子にとって、正座はそれだけで苦痛だった。しかも上体はしっかりと縛り上げられている。

老婆の祈りは高く低く何時間にもわたって続いた。初子は覚悟をきめて身じろぎ一つしなかったが、縛り合わされた手首は、血の気が失せているし、両脚はとくに感覚を失っ

ていた。老婆の祈りが終わった時には、もうすっかり闇に包まれていた。時計がないので何時かは判らない。老婆は初子の縄目を解くと自由にしているようにいつて出て行った。初子は身体を投げ出すようにして横になった。目の前のむき出しの腕に縄目の跡がくっきりと赤く残っている。やがて手に脚に、血の気が戻って耐えがたいしびれを憶えた。

その夜、初子は祭壇の前に片足首を柱に繋がれたまま寝た。手足が痛いし、奇妙な雰囲気も初めてなので初子は中々寝つかれなかったが、それでも何時しかうとうとしていた。

夢の中で、初子は海岸の岩に縛りつけられていた。手足は鉄の鎖で留められ、全然身動きが出来ない。波しぶきが、絶えず彼女の顔を濡らし、その度に息が詰るような気持ちになる。その時、波間から醜い怪物が姿をあらわした。初子を目がけて波を分けてくる。初子は小さい身をもがいた。手足に鎖が喰い込んでくる。怪物の鼻息が荒々しく聞える。初子は悲鳴をあげ、その声でびくくりして目を覚ました。足の縄が一杯に張られ、足首に食い込んでくる。少し白みかけた空、室内にしのび込んで来る薄明り、老婆は少し離れた所に横になっているが、まるで肉体がないように

布団も平たくなっていた。初子はそっと室内を見まわして、安心したようにまた目を閉じた。

二日目、祈禱は一日目と同じ調子だったが初子は上半身裸にされていた。人の来ない山奥で、枯れ切った老婆と二人だけという安心感から、初子は気軽に肌をさらした。昼間でも薄暗い室内に初子の縛しめられた裸身が白く光っていた。

祈禱はまる一日続いた。食事の時間だけは縄目を解かれたが、服を着ることは許されなかった。

「七日間、同じ事をするのですか？」

食事の後、白い二の腕にくっきりと残る縄目の跡を撫ぜながら初子は尋ねた。

「いやいや、もっともっときつくなる」

初子はがっかりした。

「五日目からは素っ裸になって、もっと苦しい目に会うよ」

「全部ぬぐのですか」

「勿論、苦しいが、大丈夫かな」

初子は今よりも痛ましい自分の姿を想像して気が遠くなるような気がしたが、祖母のことを考えて、やっとうなずいた。

「そうかそうか、それ程の気持なら、お婆あ

さんの病気は、必ず治るよ。さあ、始めようかね」

老婆は縄を手に立ち上った。むき出しの少女の上体に縄は厳しくからみついて行った。

老婆のいった通り、責めは日毎に激しさを加えて行った。三日目には祈禱のかたわら、初子のすぐ傍で赤々と火がもやされた。白い肌にはほのおがゆれ、初子の体は汗にまみれた。水は度々飲まされたが、たちまち汗になって吹き出すのだ。一日の終りには初子のむき出しになった肌はいつまでも熱く火照っていた。

次の日、四日目には、パンティ一枚にされた上、猿轡も噛まされた。そして夜は必ず昼間のままの姿で片足を縛られたまま寝かされた。老婆の話によると祖母の悪魔を初子の体に移し、それが逃げ出さないように初子の自由を奪っているというのだ。三日目の汗のため、パンティもすっかり汚れてしまっていた。素肌に喰い込む縄目は日々に新たな痛みを加えたが、初子はもうあきらめ切った思いだった。正座もさ程苦にならなくなった。そして五日目の朝が来た。

か細い少女の手首と、ふっくらとした二の腕の柔らかな肌は、荒縄にすれて薄く皮がむ

け、赤い筋が痛々しく残っていた。朝食が済むと、老婆は祭壇の前に巾のせまい机のようなものを置いた。

「さあ、ぬいで」

老婆の言葉は今や絶対だった。初子は、もうすっかり汚れてしまったパンティをぬぐと一糸まとわぬ姿を老婆の前にさらした。小柄ながらもよく発達した肢体だが、幼なさがまだ所々にうかがえた。老婆は少女の裸身を祭壇の前の台にうつ伏せにした。両手は下に垂らして台の脚に縛りつけ、両脚も膝まづいた恰好で台に縛られた。こうして無防備の裸身をさらしていると、初子は今更ながら、熱い涙が湧いて来るのを憶えた。老婆の祈りが始まった。祈りの声が高鳴った時、初子は腰の辺りに痛みを感じて唇を噛みしめた。いつの間にか老婆の右手には、しなやかな鞭が持たれている。皮紐を束ねたようなその鞭が、祈りの声と共に初子の素肌を責めるのだ。その間は不規則だった。一寸気をゆるめた時背を打つ鞭は特に激しかった。鞭跡が重なると、初子も思わずうめき声をもらす。幼い少女の肌はまたたく間に赤くはれ上った。台に押しつけられた胸のふくらみも苦しい。初子は目の前が暗くなって行くようだった。

その日も暮れる頃、この小さな少女の背は一面に赤くはれ、二の腕や、太ももにもみみず腫れになった鞭跡が見られた。初子は全く食欲がなく、僅かに水を飲んだに過ぎなかった。祈りの時は悪鬼のように見える老婆も終ってしまえば、初子の体を気づかい、背中に薬もぬってくれた。変な匂いのする油薬が大分楽になった。その夜は、両手を上に挙げて、座った姿で縛られた。両手首が上から吊られている。初子はこの姿が何だかとても恥しかった。無防備の上わざわざ自分の体を誇示しているような感じなのだ。それでも初子はいつしか手首の縄にぶら下るようにして眠ってしまった。山朝風は、少女の素肌にすがすがしかった。両手首に縄目は喰い込み、指先から血の気は失せてしまっていたが、背中への痛みは消



えていた。しかし、白い背中の中へはまだ赤い筋が残っていた。祈りが始まってから六日目、初子は祭壇の前の床に大の字に縛りつけられた。まだ幼い少女にとっても、こんな姿は余程の事でもなければ我慢出来ない程の恥しさだ。その上、少女の腹と胸の上に一枚の重い金属の板が置かれた。更にその上に小さく割った木片が沢

山置かれ、火がつけられた。護摩である。煙は初子の目に鼻に絶え間なく襲いかかった。せき込みせき込み、少女の可愛い顔はぐしゃぐしゃになってしまった。腹の上の板は熱を伝えないが重さはか細い少女の肋骨を潰してしまいそうだ。胸を圧す息苦しさ、大きく息を吸うと煙が容赦なく入ってくる。その日の責めは初子にとって死ぬ思いだった。永遠に続くかと思われた煙責めも終り、手足の縛しめを解かれた時、初子は自分の恥しい姿も忘れてそのまま、しばらく動かなかった。まだ腹の上に重い板がのっているようだし、手足も括られたままのようだ。初子は思い切り大きく息を吸い込んだ。煙のない山の空気が小さな胸一杯に満たされた。おいしい。初子は今更ながら生きている歓びを感じた。

七日目、最後の日である。両手を上で縛られたまま目を覚めた初子は、そのまま祖母の事を考えた。今日で帰れるのだが、果して良くなっているのだろうか。いや、こんなにしているのだから、きっと良くなっている。良くならないはずはないわ。初子は自分自身を慰めた。

朝食は終わった。

「さあ、いよいよ最後の日だね。よく今迄我慢しなされた。途中で投げ出すかと思ったが……さぞ苦しかったことだろう」

初子は、裸身を恥しそうに縮めてうつむいた。視線を落とすと張りのある白い太ももが、ぴたりと合わさっていた。

「今日は今迄の仕上げだからね。夜迄には家に帰れるよ。さあ始めようかね」

老婆は初子の後にまわって、両手首を取った。少女の肌にくたたび荒縄は喰い込み両手の自由を奪った。全裸にされてから後手に縛られるのはこれが初めてだった。

初子を縛り終った老婆は縄尻をとって彼女を立たせた。

「さあ歩いて」

その指さす所は室外だった。初子は血が逆流するような気がした。

「外へ……外へですか」

裸身を太陽にさらす、それも縄目の姿で、「そうだよ、誰も来ない所だから誰にも見られない」

しかし、私だって来たわ。初子は涙が溢れて来るのをどうしようもなかった。

「最後に体を清めなければならぬのだよ。それには裏手の滝しかないのだからね。さあ歩いて」

もう初子は反抗出来なかった。涙に溢れた目で足元を見ながら、外へ歩を踏み出した。一週間振りであびる太陽の直射はまぶしかった。初子は一時太陽の下で足を留めた。一週間の責めに少女の白い肌の所々には赤い筋が痛々しく残っていたが、若さはすべてを被い隠していた。殆ど熟睡出来なかった毎晩だが彼女の肌は若々しく、処女特有の艶消しの張りを失っていなかった。小柄ながら均整のとれた美しい肢体だ。胸のふくらみ、腰の張りも、殆ど女性として成熟していることを示しているが、矢張り、幼なさは抜けていなかった。初子は素足に地面を感じながら裏に歩を進めた。太陽の下自分の姿が、とても浅ましく感じられた。二、三度路の横の草が鳴って初子の体を締めさせたが、きっとリスか何

かだったのだろう。

後手の縄尻をとられて歩く初子は、すっかり自分が罰を受ける人間であるかのように思ってしまった。そうでもなければ、後手に縛り上げられ白昼歩かされるはずはない。初子はいっしょに縛り合わされた両手の指をしっかりと握りしめていた。

老婆の小屋の裏にある滝は小さなものであった。その水の落ちる岩の上に一本の棒が立てられてあった。老婆は初子を、そこに待たせると滝の上に上って行った。縛られたまま一人自然の中に残されているのは、例えようもなく心細かった。身体が自由が奪われているし、体のすべてが陽光の下に露わになっているのだ。初子は不自由な体を出来るだけ小さくして老婆を待った。と突然滝の水が止った。恐らく老婆が上で何か操作をしたのだろう。

間もなく初子は棒に縛りつけられた姿で水に打たれていた。初子の体は後手にしっかりと棒に縛られている。形の良い脚にも荒縄が巻きついていく。初子は肌を打つ山の水に息を詰めた。冷たい水は少女の体を氷らせた。

水に打たれていたのは一時間位であったろうか、初子は水を吸った荒縄が肌に喰い込み

体の感覚が失なわれて行くのに一生懸命に耐えていた。水から解放された時、初子の肌には血の気が全く無かった。それだけでなく白い肌が半ば透き通るように見えた。初子は老婆に抱かれて小屋に戻った。とても自分の力では立つことも出来なかった。薄暗い小屋の

中に横たえられた少女の白い体は疲れ果てていても美しく、神々しくさえあった。老婆は初子の肌を乾いた布で丹念にこすった。若い体は回復が早い、白い肌に間もなく血の気がよみ返ってきた。

一週間にわたる祈り、その間この少女に加

えられた苦しみも決して彼女の心をくじけさせはしなかった。それどころか、若々しい体を、ふたたびセーラー服に包んだ少女は元気に家路についた。そして、結局、苦しみに耐えた自分が勝ち、祈りが聞き届けられたことを知ったのだった。

〔マニヤ通信〕

願いの叶った百合子嬢へ

中 田 あ き ら

遠藤百合子さん。

貴女の「被虐モデル」としての出発に、心から声援を送ります。モデルを志願した八月号誌上の貴女の声、私は決して見落していた訳ではありません。否、奇ク八月号発売の日を待ち兼ねて入手したその日に、私は貴女へお便りを書いたのです。しかし、私の呼びかけは、奇ク編集部のお便りという難関を経なければ、貴女へのお便りとはならない悲

しさが、辻村氏のいわれる不思議さ……この様な女性を、読者通信で誰一人、言及しないとは、私もヘンに思う……結果となったのだと思います。

今、私の手許にある貴女へのお便りの控には「マゾの真の極地に導いて下さるのは誰、手を引いて下さるのは何処の人。」と絶唱する貴女を、私は『マイ・フェア・レディ』となるように「訓育」したいと考えて、次のような

カルキエラムを案出しています」と、幾つかの被虐願望の貴女の期待に添えるようなテクニクを記述してみたのです。

今年の三月号からファンになったといわれる貴女、その読書歴は浅くても、古い号を探しては買い漁ったといわれる貴女は、おそらく既刊の奇ク誌上、「読者通信」及び「読者通信」で私の名も、書き記した事にも、目がとまっておられたらうと思います。その頃の私は、同じ東京に住んでいるという方へ主に呼びかけていました。しかし、私の希求も空しく、遂に思いが叶われず、今日まで貴女が……たまたまなく人恋しくなり……といわれ……空しいあがきで……といわれるような日々を送って来たのです。

奇ク十月号は、貴女の輝しい記念的な、そして私にとっても再び人生の重圧に似た性の懊悩を解きほぐす希望を見出した記念すべき奇クでありました。

グラビア頁のトップを飾った貴女の容姿はS男性のアイドルになる事は間違いありません。「S・Mプレイ・ガール」と命名された貴女には、多くのファンからプレイの申込みがなされるでしょう。それらは私の競争者には違いありませんが、私にとっての最大のライバルは、既に貴女を緊縛し、鑑賞の機会を誌上に供した辻村氏であり、同じ奇クフォトの撮影家である塚本氏の存在です。

貴女は奇クの秘蔵っ子の資格が充分あります。そしてあらゆる加虐ポーズに耐えられる素質が埋蔵されています。それだけに憧憬をいやが上にもおとりたてる魅力にあふれています。貴女のポーズには、安定した美しさがあり、責められる女の哀しさ、静かな愁いがあり、単なる初ものの物珍しさだけではない魅惑のムードがあります。

先に「訓育」という文字を披露しました。

私の考えている字意は、全く読んで字の如く「訓練し、育てる」ことを指しています。貴女の秘められたるもの、それを思いきり発散させるように調教し、大きく育て上げる事が出来れば、お互いに観念的な恋愛以上に恋も語れ、愛を契る事が出来るのではないかと考えています。

貴女のアイディアである、梨花嬢との共縛り、また緊縛シーソー。それらの実現が一日も早く奇クを飾り、貴女自身の切なる願いと

いわれる「がんじがらめ」の緊縛が、こうして貴女への想いをペンに托している私の手で実現出来る日が訪れる事を切望してやみません。

責めに憑れた貴女が、或る日、突然私をたよって大阪から上京されたとしたら——東京駅のホームから「訓育」の第一歩が始まります。夜の街角、酔客相手に商売している夜店から、大人の玩具である手錠を買って来ておいて、後手にガチャリと冷い音をたてさせるのです。顔の整形手術をしているように、頬いっぱいに拡がるガーゼのマスクの下にはバソウコウの嵌口を施し、両眼にまたがる眼帯で目を塞ぎ、これから何処へ、どうやって行くかも分らないようにして、私のスタジオオへ連れて来るのです。

私のスタジオ——アパートの一室ですが——は貴女の訓育室であり、獄舎、でもありません。

貴女が辻村氏によって施術されたように、柱に括る柱立縛りも、三角木馬の呻吟も心ゆくまで楽しむことが出来るのです。

乳房責め、バンド責め、コルセット責めは貴女の美容に益々優麗さを加え、定期的に与えられる鞭打は、内面的な女性美をたかめつつ、イルリガートルの薬効は整腸、美肌作りを促して、訓育の実をあげる事と思います。

ゼッケンは63。私とのプレイの間は「六十

三号」と呼ばれ、プレイの記録は奇ク、グラビアに提供されて、十万愛読者の鑑賞にゆだねます。

遠藤百合子さん。

バカンスということばも既に流行遅れとなった今日この頃ですが、貴女のお勤めに支障のない時、是非「流刑」（大阪より東京の）の味を試してご覧になりませんか。貴女が幻滅を感じる事のないよう、貴女の心がきずつかぬ様に、私は誠実な紳士的態度で接しながら、強烈な訓育のコースへ誘って上げたいと考えています。そしてそれが「愛の讃歌」となるならば、こうしてお便りする事も、決して恥さらしな駄文で終る事にはならないと思っています。

「一度味をしまったマゾ女性には、必ず再び追及してくるに違いない。やがて緊縛の度を増して行く事だろう」とは、辻村氏が貴女へ期待しての再会を約した時の気持ちをいい表わしたものです。マゾの悦楽を求めて、若し、この通信をご覧になった直後にでも、思い立って上京される気持になられたら、その機を逃さず東京へ来て下さい。大歓迎致します。

本誌発行から二週間は東京駅に「こだま」で午後十一時に着くと考えて、左記の電話をチャーターしてお待ちしています。

（五九一局）三七七八番。

ナルシスの発見

羽村京子

ナルキッソス [Narkissos]、ギリシャ神話の人物。こだまの精エコーを失恋させた美青年。のち水にうつるわが姿に恋して死に、水仙の花に化したという。

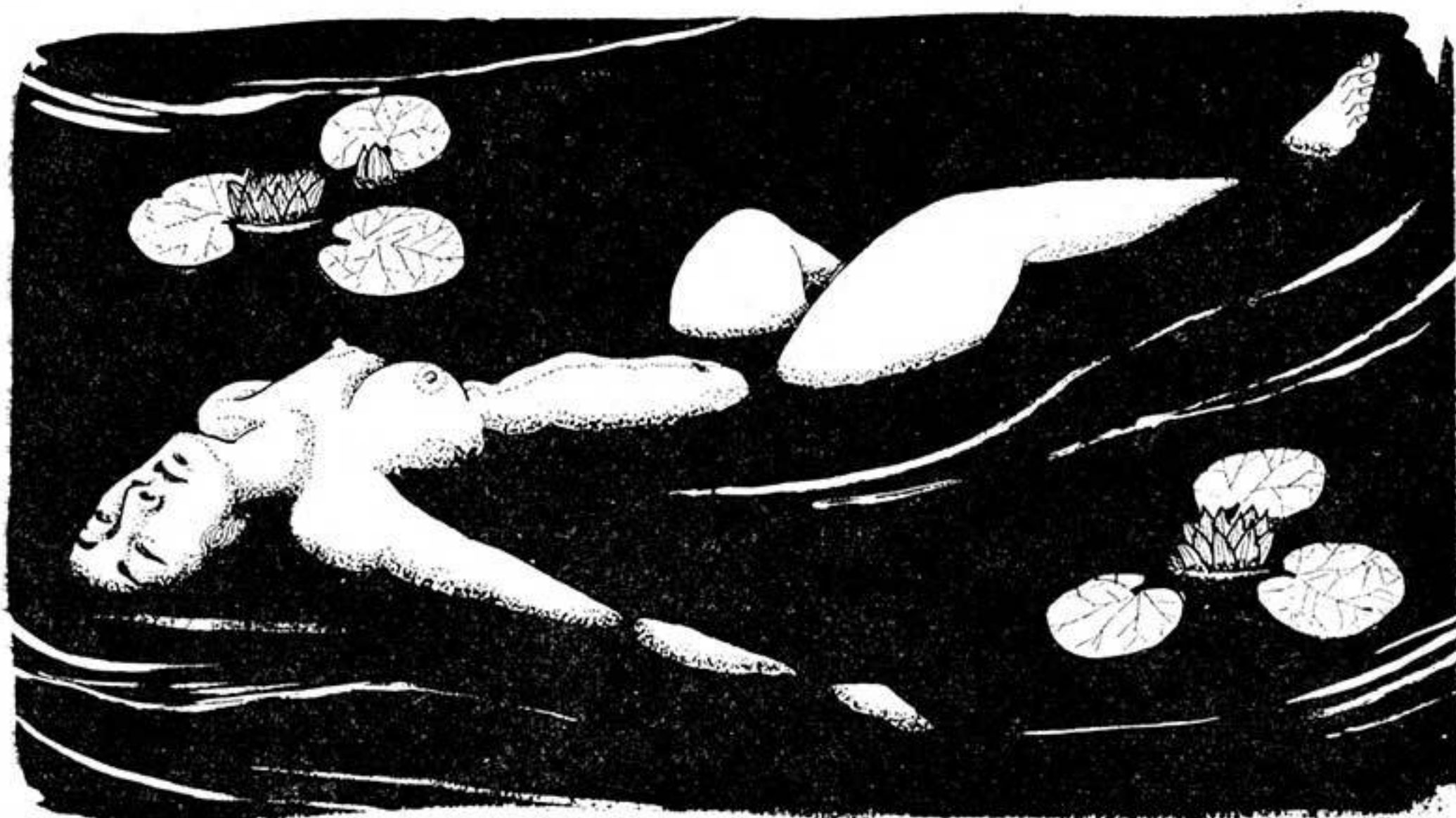
——「広辞苑」——

プロロオグ

十年ひと昔と言います。昭和二十七年九月

号の奇くに、わたしの処女作「狂い咲くカナナ」がのってから、かれこれ十二年近くになります。そのときの興奮を、わたしは一生忘れないでしょう。まさかあのよう、ほとんど全文がそのままのせられようとは予想もせず、恐る恐る書きつづった告白手記が、始めて活字になったのです。そのことがその後わたしの生涯を決定してしまったと言っても、過言ではないくらいです。

「わたしは二十一歳の人妻です」という書き



出して、少女期からのわたしの恥ずかしい悪癖のこと、その後の人にも言えない煩悶と、

それが幸運な——と言ってよいか知りませんが——結婚生活で、夫婦の秘密のプレイの中に返り咲いたことまでを、あれほどあからさまに書くについては、よほど激しい衝動がわたしの内部で促していたのでしょう。それからも忘れてしまうことが出来るならば、スツパリ忘れ去ってしまいたいと、何度思ったことでしょうか。でも、今ではすっかり諦めてしまいました。もうわたしの奇妙な性癖は、死ぬまでわたしから離れないでしょう。それはわたしが死ぬまで、一生つきまとうことでしょう。

わたしは、来年（昭和三十九年）の三月で満三十三歳になります。二十一歳の若妻から三十三歳のうばざくらまで、考えてみれば、女としてのかけがえのない、大切な十二年間をわたしは奇クとともに過したことになります。奇クが現在と同じA5判の大きさに変わって、面目を一新し、特殊誌としての性格をはっきり持ちはじめたのが、同じ二十七年の六月号でしたから、奇クの十二年の歴史は、そのまま奇クとわたしとの十二年でもありました。時折の寄稿をしながら、奇クが成長す

るにつれて、わたしも少しずつ成長して来たような気がします。

奇クと共に歩んで来たこの長い年月の間に、時にはいっそ止めてしまいたいと思うこともありました。のがれられないとは知りながらも、わたしはなやみ、苦しんでいたのです。自分の奇妙な性癖になやみ、苦しんで、そのあとでまた、しびれるような深い惑溺を求めて、夢中で前以上の深みにみずから入りこんで行くのでした。それを繰り返すうちに、苦いあきらめのようなものが徐々に出来上って行きました。人に言えない特異の世界の甘美な味を知るようになりました。

人に言えない秘密の世界に遊ぶことを知ったわたしは、同時に、ノーマルな人びとは閉ざされているこの世界での、目くるめくばかりの陶酔の味を覚えてしまったのでした。神の掟にそむいて、禁断の果を食べ、天国から追放されたイヴのように、わたしは人間性の奥底にある快楽に触れ、そして罪の子となったのでした。

人間の罪——それは、神の子の無邪気さ、無知を失なって、人の子の知恵を得るところに始まります。知ること——これが人間の罪の源です。もともと人間は、ものを知ろうと

する動物であり、知りたがる動物です。ですから、人間存在それ自体が罪を予定していると言えるでしょう。わたしは人間であることによって、あらかじめ罪深い存在であるのです。この原罪に加えて、わたしは、アブノーマルな性癖の持ち主であり、普通の人たちには閉ざされた秘密の世界の快楽を知っていることによって、二重に罪深い存在であるのです。快楽と苦悩をないまぜて織りなされる、神秘的人間存在の宿命に、二重につながれているのです。

知ること自体が罪であるならば、よりよく、より深く知ろうとする人間の宿命こそ、罪の子にとって避けられないものであるのでしょう。わたしは書物を読み、人間を知ろうと思いました。貧しい能力をふりしぼって、知りたいと思いました。こうしてわたしは、自分の知り得たことをここに書こうとするまじけなくなりました。理解できなかったこと、間違っていたこと、知るべくして知り得なかったことも多いと思います。学者ではないわたしにとって、ボオヴォワールの「第二の性」はとてもむずかしかったし、生物学や心理学の簡単な知識でさえ、しろうと向きの入門書から手さぐりで得たものにすぎません。

わたしなりの理解で書いたつもりですが、読者のみなさまのご教示をおねがいいたします。

最後に、本文の用語について——原語をあげた外国語の綴りは、ことわらない限りすべてフランス語です。女のくせに生意気だと思われるかも知れませんが、数年前、「家畜人ヤプー」や「ある夢想家の手帖」などで、沼正三さんが展開された、日本やギリシャの神話から近ごろ流行のS・Fにいたるまでの豊富な知識を自由に駆使した絢爛たるペダンチックなことば遊び (parodie pédante) の見事な面白さに魅了されて以来、わたしは沼さんのように博学ではけっしてないのですが、わたしもあやかうと思うからです。みっともない猿まねだと笑われれば、それまでですけれど。

A 女性——この悲しき性

ギリシャ神話に出て来るナルシス (Narcisse) は、美しいニンフたちのあこがれの的として、愛され、ことにすばらしい美少女であるこだまの精エコー (Echo) に死ぬほど思いつめられながら、自分以外の誰をも愛することの出来ない、冷たい心の持ち主です。

慕い寄るニンフたちの感情に、人間の感情でもって応えることの出来ぬ、生まれつきのカタワと言ってよいかも知れません。人間の心を持たない、カタワの心を持ったすばらしい美青年——それは実にグロテスクな気味の悪い印象を与えるものではないでしょうか。美少女エコーが、神秘的にうら悲しいこだま (echo) になってしまったように、彼は美しいけれど心を持たない植物、水仙 (narcisse) になってしまったのです。

ナルシスム (narcissisme) ということばは、うぬぼれ、自己陶醉、自己愛という意味に用いられます。精神分析の用語として、自己の肉体に性的欲情を感じることを指して用いられるようです。そして大事なことは、この傾向が、女性に特にいちじるしいとされていることです。ボオヴォワールによれば、最初に人形が、そして次に鏡が、女性をナルシストにすると言うのです。男性ではなく女性に一般にナルシストであるということからは、多くの論者が指摘しているところのようです。

ことばが、その由来とはちがって、意味内容が変えられたり、特にせまい意味に限定されて用いられるようになることは、間々ある

ことです。例えば、聖書に出て来る地名、ソドムに由来するソドミーや、同じく人名であるオナンから来たオナニー (ドイツ語?) などはその好例でしょう。ですからナルシスが男であるにもかかわらず、ナルシスムがことに女性のものとして語られることも、止むを得ないのかも知れません。

けれども、ナルシスが女でなければならぬということとは、それほど簡単なことではないように思われます。彼女は神話のナルシスのように、自分の心を異性は勿論、すべての他人にたいして固く閉ざしている心のカタワ者なのでしょうか。他人を愛することの出来ない、自己完結的な、冷たい心の持ち主なのでしょうか。女が鏡を見る、そして美しく化粧したいと望むとき、それは誰のためでもなく、他人に見られたいと願わないのでしょうか。

そうではありません。彼女は他人に見られないのです。すべての異性のために魅力あるようにと、彼女は自分を着かざり、顔を美しく塗りたてるのです。男性にとって美しく見えるときに、彼女は自分自身にたいしても美しく見えるのです。何が美しい女か、ということをや彼女は、恐らく意識せずに、男性から

学んだのです。女性の美については、社会が、つまり男性が判断者なのです。彼女自身はただ、その判断者の判断を、受け入れていくに過ぎません。彼女はけっして、自己完結的に自分に恋しているわけではありません。

何故でしょう。何故女の美の標準をきめるのは男性でなくてはならず、女が男性の美の標準をきめてはいけないのでしょうか。たしかに、ある程度まで、女性は男性の美の標準をきめてはいます。けれどもそれは、男性の相手は女性であり、女性の相手は男性であるという、きわめて当然の自明の理を言うだけであって、男性が女性の美をきめるのと同じやり方で、女性が男性の美をきめているとは言えないでしょう。女性にとって恋愛はすべてであるが、男性にとってはすべてではないという言い方で、言い表わされている通りだと思います。男性には社会がある。男性の値うちはそので決められるのだ、と。

れでは女性は一体何でしょうか。女性もまた能力に従って評価されます。けれども、それは、人間としての全面的な能力に従ってではありません。男性なみの待遇を与えられる一部の優れた女性を除いて、男に気に入るかどうかが、決定的に女の一生を支配するので

す。
理由は簡単です。安田徳太郎先生によれば、大昔に女の全盛時代があったといいますが、歴史はじまって以来の女性の地位は、社会の中で「第二の性」(le deuxième sexe)に甘んじることにあつたのですから。美しい性 (le beau sexe) だとお世辞を言われたり、弱い性 (le faible sexe) としていたわられたりしようとも、このことに変わりはありません。女性は男性に従属する第二の性にすぎませんでした。

ここでわたしは、男性が女性の美の標準をきめるという問題からはなれて、一般に社会における女性の地位ということを問題にしてみたいと思います。

有史以来このかた、女性はまったく男性の陰にかくれて、目立たない存在であることを強いられて来たように思われます。十九世紀以降の女権拡張運動も、まだまだけっして、

女性を男性と平等の地位に引き上げることには成功していないように思われます。例えば、歴史の上で、婦人参政権が与えられたのはどんなに最近かということを知るだけでも、女性が男性にくらべて、いかに無権利の状態におかれていたか分るでしょう。古くは、男性に与えられる地位と財産(この両者はしばしば結びついていました)が、女性のものではなかったことはけっしてありませんでした。女性は男性の妻としてのみ、時には男性の娘としてのみ、これらにあやかるところを許されたのです。

社会の下層をなす、所有者の意のままに売り買いされた奴隷とか、領主の支配下にあつて「生かさぬよう、殺さぬよう」やっと生活を保っていた農民たちのような一般の名もなない人たちはともかく、地位と財産(あるいは両者が一緒になった「身分」)はすべて男性のものであり、高い身分の人たちは、それをゆずり渡すべき直系の男子を必要としました。どうしてそうだったのか、わたしには分りませんけれど、こうして、高貴な人たち——社会の上層階級にとっては、女はただ、子ども(男の子)を産ませるべき手段としてだけ重要であつたように思われます。地位と財

産をまもるために、あらゆる政略結婚が、本人の意志などにはおかまいなく、横行したことは歴史の示すところです。

戦国時代のように身分の秩序が破れた時代でさえも、自分の実力で出世することが出来たのは男だけでした。女は男の陰にあって、いわゆる良妻賢母として、家庭内に閉じこもって、子どもを産み、育てるのがその役目だったことは、天下泰平の時代にこそ強調されましたが、混乱した時代でも変わりはなく、ただ男の争いによって、より悲惨な目に遭うことが多かったにすぎないでしょう。すべて表に出るのは男性だけ、女は政略結婚の犠牲にされても、男とちがって他に対象を求めることも許されなかったのです。

江戸時代の大奥の女たちも、將軍の威光をカサにきてだけ、勢力をふるうことが出来たのでした。女がインケンでありシット深いという非難も、このような立場にあれば当然とも言えるでしょう。

男の社会での女の生き方は、男性のために子どもを産み、育てることに専念して、ひたすら忍徒に生きるか、あるいは、自分の女性としての性的魅力によって男性の心をとらえるか、そのいずれかしかなかった。

前のやり方は、家にいて、堅実に地位と財産とを守り、自己の地位を保全する方法です。けれども、生まれつき、地位もなく財産もない境涯に育った女たちにとっては、あとの方法が唯一の、玉のコシにのって「出世」する道でした。前の場合もあとの場合も、女性がその生物としての機能、いわば「腹」として見られていることに違いはありません。下賤の生まれから玉のコシに乗った女といえども子どもを産まなくては、その地位を長く保つことは出来ないからです。

男性の支配が、このように身分とか地位財産による社会の秩序とからみ合っていることは、否定することが出来ないと思います。血統を維持することが、社会の上層階級では至上命令となったのです。皮肉なことに、社会の上層ほど、女の生物としての機能、彼女の「腹」が重要視されることになったのです。しかも血統の純粋性の要求から、最も高貴な家柄である諸国の王室などでは、血族結婚に頼るより外なくなり、たとえばロマノフ王朝の血友病の遺伝のように、優生学上の問題をひきおこすことさえありました。

身分がなくても財産のある階級があらわれて来ると、財産が血縁、つまり結婚によって

身分と結びつこうとする傾向が出て来ると同時に、財産のあること自体が一つの家の格をつくるようになります。山崎豊子さんの「のれん」などに出て来る、伝統ある商人の家系では、ムコ養子による母系家族によって、有能な才能を確保することが行なわれます。ここでは商人特有の実質主義が、男を立てなければならぬ男性支配の社会で、巧妙に貫徹されているのです。この場合も、家系を再生産するのは女の「腹」そのものだと言えないでしょうか。地位や財産のために人間が存在する社会では、女の「腹」による再生産が本質的なものだと思います。

家、つまり地位と財産の中では、女の生物的な機能——「腹」——が最も重要であり、家の外では、単なる性欲の対象、ときには恋愛の対象としての女が問題になるとすれば、結婚に至る恋愛が不道德とされたのは当然だと思います。家の外で子どもを産ませることも認められていた場合が多かったようですが原則として家の外と内、結婚と恋愛とはハッキリ切りはなされていたと言えましょう。どちらの場合も、女は子どもを産むための、あるいは享楽の対象としての「道具」にすぎず生物としての機能だけが、しかも本来結びつ

いているはずのものが、二つに切りはなされて、問題になっているのです。

けれども人間は高等な動物です。人間においては、性欲という肉体的な本能が、恋愛という精神的操作に媒介されて作用します。また、生殖という生物的な行為が、家庭生活という社会的関係の中で行なわれます。男性が支配する社会では、肉体と精神、生物的なものと社会的なものがこうして分裂し、形式だけの内容空疎な精神、あるいは社会的なものと、むき出しの野獸的な肉体、あるいは生物的なものが、同居してはいないでしょう。男も女も家庭の外ではケダモノのようになり、その風潮が神聖なるべき家庭にも侵入し勝ちであるという昨今の傾向は、もう一つマス・メディアを大量に動員しての商業主義のバツコという要因を考えなければなりません。家庭の権威の失墜と相まって、社会問題にさえなっています。

ここで女性を女としてではなく、人間として回復しようとする女権拡張運動な問題になって来ます。男性の支配をくつがえして、女性の支配を打ちたてようというのではなく、人間として両性が平等になることを目標とすること運動が、正しいということはわたしに

も分るつもりです。けれども理性で正しいと思っても、すでに生物的だけでなく社会的に女性としてかたちづくられ、人間であるより前にすでに女であり、事実また社会の表に出ないで家庭で家事と育児にいそしみ、男性に従属して生きている。また生きて行くより方法を知らないわたしにとっては、他の大多数の女性と同じように、「女」が身についてしまっているのです。事実を事実として肯定しそれに満足している。否、それなしでは生きられなくなっているのです。ですからわたしは、以上の前おきを、わたしの、あるいは女性の、マゾヒズム、ないしナルシズムの根拠として書いたに過ぎません。奇妙なことに思われるかも知れませんが、そうなのです。

B 女体——このフェティッシュ

ところで、男性が女性に従属する性であるということからして、どのような結論がみちびき出されるでしょうか。そこから一般的に言って、男性のサディズムと女性のマゾヒズムということが出て来ます。ちょうど最近はやりの「武士道マゾヒズム」のような。けれども女のナルシズムは出て来ません。それ

を説明するためには、近代の市民社会、そしてことに現代の商業主義 (commercialisme) にふれなくてはなりません。そこで、これまで大分脱線しましたが、本題にかえることにしましょう。

十八世紀末のフランス革命と、それにつづく近代工業の発展は、十九世紀のヨーロッパに新しい社会をもたらししました。それは市民社会と呼ばれます。歴史家は十九世紀を「ブルジョワの世紀」とよんでいます。それは間もなく、何十年かを経て、ヨーロッパ以外の国々にももちこまれ、二十世紀のさらに新しい科学技術文明の下に、現在までつづいています。この社会の特徴は何でしょうか。

新しく興った工業では、人びとの日用品が工場で機械によって大量に生産されます。いわゆるマス・プロダクション。人びとは都会に住み、画一的な生活をあわただしく送るようになります。すべてのものはオカネで買えるようになります。すべてのものがオカネを目当てにつくられ、流通し、消費されます。勿論オカネで買えないものがないわけではありませんが、そういうものを別にすれば、すべてはオカネ、オカネです。オカネを沢山持っている者は、何でも手に入れることが出来る、

そういう金権の支配する時代です。あらゆるものがオカネに変えられて行き、オカネを得るためには何でもする人たちが出て来ます。勿論それ以前にもオカネはあり、売春などは人類の歴史とともに古い、最古の職業だと言われているが、社会がこんなに大規模に、オカネをめぐるって動くことは、これまでになかったことでした。

マス・プロダクション、都会での騒々しい生活。貧乏な人たちは、オカネを得るためには何でも提供しなければなりません。金持ちにとっても、オカネがもうかることなら、どんなことでもすることが至上命令です。オカネのある者は、彼のもつオカネの額に比例して、欲望を満足させることも出来るのです。そこに、もう一つの新しい手段がつけ加わります。マス・コミュニケーションです。十九世紀から二十世紀にかけて発達した、このおそろべき魔物は、全世界に網の目をはりめぐらして、すべての人びとの心を一定の方向に、自分の欲する方向に向けてしまう力をもっています。新聞、ラジオ、映画、テレビの発達、こうして、マス（大衆）の社会をつくり出しました。けれども必ずしも大衆の支配する社会ではなく。

ある意味においては、大衆もまた支配します。マス・メディアは、大衆の好みを利用することによって、大衆に受け入れられ、大衆の需要をつくり出すからです。マス・プロダクションによってつくり出される商品は、同時に大衆の側に、それにたいする需要をつくり出さねばならず、大衆の好みに媚びなければならぬからです。そこでセックスが、人間のあらゆる欲望のうち最も根源的なものである性的欲望が、様々に利用されることになるのです。

欲望はできるだけ大きく、はげしくかきたてられなくてはなりません。しかもけっして満足されつくしてはならない、欲望は満足させてはならないのです。絶え間ない飢餓が、ますます大きくなる飢餓が、計画的につくり出されなければならぬのです。人間の動物的な本能がますます動物的になるために。

性的魅力——あるいは「セックス・アピール」は、現在ではもう立派に、それ自身が商品なのです。第一次大戦後の時期に、映画というマス・メディアの発達によって、ハリウッドは、セックス・アピールが十分に商品としての価値をもちうることを証明しました。そして現在ではテレビです。コマーシャル・

メセジにおいて、セックス・アピールが重要視されること、言うまでもありません。

目で見える、声が聞こえる、人間の感覚に直接うったえかける方法が進歩したために、セックスは一つのイメージになりました。夜暗いところでこっそりと、個人的に楽しむべきものではなくて、電灯は煌々と点いており多くの人たちのざわめきの中で、私事としてのセックスではなく、それとは別に、性的刺激が一つの大衆的な楽しみ、社会の中で通用する公的なサービス、一つの商品となるのです。勿論、中世においても、田舎のお祭りのワイザツな楽しみはありました。けれども今はそれは、比較にならぬほど大規模に、上から画一的につくり出されて、大衆に与えられるのです。

そこで、目に見えるものとして、人間の精神のからくりを利用して、ヴェールをかけることによっていっそう美化され、同時にいかって男性たちの想像力をかきたてるためにいっそう挑発的になった「女体」のイメージがあらわれることになります。「男性たちの」と言ったのは男性支配の社会であるからで、女性たちは自分の美しさ、あるいは性的魅力、自分たちの目でたしかめることが出来ず

男性のメガネを通して自分たちの美しさ、魅力を判断するからです。

こうして「女体」はフェティシュ(Fetische)になる、しかも男性にとってのフェティシュにとどまらず、男性に従属する第二の性である女性をもふくめての、社会のフェティシュになるのです。フェティシュとしての女体が女性自身の(男性からの借りものである)眼を通じて見られる場合、女性のナルシズムが生じます。すべての男にとって例外なくフェティシュである女体が、その変化型として、男性のフェティシズム、場合によっては男性のマゾヒズムを生み出すのです。

つまり、フェティシュは、ものであり、道具であり、目標であり、動物、ことに家畜であり、奴隷であって、言いかえれば、人間以外のものでさえあればそれこそ何でもよいわけです。フェティシュは女神であってもよいし、男——人間が逆に奴隷という仮の名称を好むならば、ドミナ(女主人)であってもよい、ということになります。フェティシュは、例外がないとは言えませんが、一方的に「女」体であり、それにたいする男の側が様々に変化するに過ぎないのだ、とも言えましよう。例外の場合も、スポーツ選手や力士な

ど、同じマス・コミのスターでも、女の場合とはかなり違った性質が選ばれるようです。

けれども、フェティシュのさまざまなあらわれ方を問題にすることは、ここでの主題ではありません。ここではただ「女体」がフェティシュであること、女がナルシシストだというのは、自分の肉体へのフェティシズムからであり、女体がフェティシュであり得るのは、それがものであるからであり、女性自身もまた自分を、人間としてでなく、社会に教えられて、ものとして見ているからこそ、女はナルシシストになり得るのだ、という結論をひき出すことで十分です。女は男に、時には愛され、時には子どもを産まされるだけのためにあること、女は見られるためにあり、鑑賞されるためにあるので、他人に評価してもらわなければ、自分で自分を評価することは出来ないのだ、自分で自分を見る方法をもたず、つまり眼があっても見る事が出来ないのだ、ということなのです。このことをまず最初に認めておいて、わたしは次に進むことにいたしましょう。

× × × × ×

わたしはここでは総論を述べるつもりでしたから、各論については来月からのつづきを

見ていただかねばなりません。大分強引だと自分でも思われる論法で、ここまで一気に書いて来ましたが、頭の弱いわたしには、大変な苦勞でした。各論の中で、わたしは、微に入り細をうがって、わたしの理論(?)を展開するつもりです。前にも書きましたように、わたしは沼さんのように博学でも頭がよくありませんが、「ある夢想家の手帖」からは、倒錯のさまざまな形態について、実に多くのヒントを得たことを告白しなければなりません。そういうものをわたしも書いてみたい、という気持ちが、わたしに気が進まぬながら、この生硬な議論の筆をとらせたのです。こういう理くつを述べることは、わたしの本意でもなく、わたしの得意でもありません。けれども、これだけのことは、わたしの各論を読んでいただくための前提として、たとえ不完全な、舌足らずな形ででも、どうしてもまとめておかなければならない、そういった気持ちから、それこそ、女だてらに、生意気なことを書くことになりました。

今後、どういうことになるか、どういうものが出来上がるかわかりませんが、皆様のご批判はもとより、お教えをお待ちしております。

(つづく)

続・風の町から

——山辺まゆみの告白——

山 辺 ま ゆ み

体の中のしこりを解き放すように手記を書いてから一年近く。一度は自分の不ざまな秘事と何故暴露する必要があるのかと自問自答してペンを放したものの、これが身についた悲しい性（さが）とでも言うのだろうか、又ぞろ私は机に向っている。昨年の冬、見知らぬ異性の強引な誘いに乗って千駄ヶ谷の旅館で過した激しい一夜——はじめての自分の勇気を試すような眼をつぶりたいような経験。今思えば、軽い責めだったのかも知れないが、裸にむかれた私にとっては消え入りたいような長い時間だった。浣腸の終わった後の白

けた時間と、その後に続いた黒い背信——もう忘れたかと思いつながら、私の心には奇妙な傷あとが残ってしまった。それが時々甘美な感覚とすりかわって、フツと胸をよこぎることがあるのを、私は何となく怖れた。私は亡夫から愛され、責められた記憶と、妙な交友から、とうとう私のパートナーの座にいつわってしまったSさんの存在だけで、充分満足しなければいけないのではないか。そんな気持ちで私は、しばらく沈黙を守ることにした。然し、結果的には益々Sさんの訓練を受け、性癖がとぎすまされ、半ばあこがれ、半ばお

それていた道へ暴走することになってしまったようだ。たった一人の男性に、週一度責めを受けて奇妙な悦楽にひたっている女——そんな女が、この世の片すみに今もこうして生きていこう。黒いものがいっぱい詰っている胸の内を、せめて解放して、私と同じ生き方をしている人々の息をそっとうかがおう。そんなつもりで又手記のペンをとった。以下は、まゆみの経験や空想やひそやかなため息をのせた、いつわらない告白なのです。



先ずSさんの事から書かねばならない。

Sさんは、私が若い男性と異いがないプレイの時間を持ったことを知ると毎晩のように私の処に押しかけて来た。しまいには主人然として私の室におさまり、それが原因で私は会社勤めを止めることになってしまった。

手首にホウタイを巻いたり、首すじを赤くはれあがらせたりしている回数が多くなるにつれ、同僚や上役の眼が私にあつまり、何となくいたたまれなくなってしまうからだ。

現在、私はSさんに援助される形になって

いるが、もち論Sさんを夫とは思わないし、私自身を二号とも思っていない。それは言葉ではあらわせない微妙なきずなで結ばれた友人なのだ。今は週一回、大い土曜の夜にSさんは私の前にドッカとあぐらをかく。

「奥さん、今夜は革バンドですよ」

「奥さん、お風呂場にいらっしゃい。貴女の好きなことをしてあげます」

「奥さん、ホラ今夜はこれでしめてあげます

よ」

はじめの頃は、訪問する度に小道具が違っていた。「してあげる」と恩着せがましく言われても、私にはそれを打消す何ものも持ち合わせていない。はじめは恥ずかしさで赤くなっていた私も、いつの間にか心待ちにそれを持つ女に変わっていたからだ。眼の前に示される紐や縄や、おむつや下着を見て、ひそかに期待で胸をはずませる奇妙な感覚——私は動物になり下がってしまったのだろうか？いや、それでもいいから、もっと打って！もっと縛って！

ある晩私はSさんを亡夫とすりかえて夢中で昂奮状態の中にあつた。多分それは、さそわれて柄にもなく飲んジンフイズのせい、或いはSさんがたずねて来る前に見ていた、テレビのメロドラマのせいであつたかも知れない。

私はいつになくSさんの手をさそっている自分に愕然とした。Sさんは、いきなり私の着物の襟をひろげた。その時、私の眼にはSさんが、亡くなった筈の夫に見えた。

「まゆみは何をされてもいい。お願い、私をクタクタになるまで責めて！」

うわ言のようという、私の着物をはぎとる

と、下着だけの私の足をひざから背中折り曲げ、高手小手に縛った手首と結んで弓なりに室のまん中に転がした。

「ホラ、お望み通りだよ、奥さん。何をしてもいいんだね」

私はすでに半ば陶醉していて、黙ってコックリした。

「途中で嫌だは駄目ですよ。今夜は貴女が望んだのだから」

うなずかなくても、すでにSさんも陶醉状態にあるようだったから、この暴走は止めるすべはなかった。

身動きできないでいる私の両の乳房をわしづかみにし、ねじり上げ、台所から持ってきたプラスチックのお椀を乳房にかぶせて、私が悲鳴をあげるまでグイグイと押しつけた。

足を自由にしてくれてからも、高々と逆につきさげられた。その時のSさんの言葉は今でも忘れない。

「君は赤の他人に責めを許したのだろう。だったら僕の責めには、どんなことにも耐えていい筈だ。御主人の代りのようなもんなんだからね。奥さん、貴女はもう、この道から抜け出せないよ。僕といっしょに、トコトンまでおちなければね」

私はその時、地獄におちても悔いはないと思った。苦痛の中に、しびれるような悦楽があった。そのままの姿で浣腸を受けながら、私は平然をよそおうと歯を喰いしばった。

——こうして一人になると、そのノーマルでない狂態に、たまらないおぞましさを覚えるのだけれど、その時の私には理性がなくなってしまうのだ。一体、ふだんこうして、おとなしくひかえているのが私か、Sさんの前に全部を投げ出してゆだねてしまう私が私なのか、自分でも分らなくなってしまう。

Sさんは私の魂を操縦するエンジニアになり下ってしまった。夫が死んだあと、私はとうとう人間を失格してしまったのかも知れない。

日記より

×月×日

モシ、私を救ってクレル天使ガイタラ、私ハソノ膝下ニヒザマツイテ、命ジラレタコトヲ何デモシヨウ。

「私ハ貴方ノモノデス。私ノスベテハ貴方ノモノデス」ト何回モクリ返ソウ。白イ裸身ヲサラシテ、ドンナ望ミニモ応ジヨウ。ケレド……ソナナ神ハイナイ。ソナナ人ハイナイノ

ダ。キョウモ曇リ。

×月×日

どう言うわけか今夜は眠れない。過去のできごと——殊に夫と過した激しい夜の思い出が私の脳中枢を刺激して、平和な眠りを妨げるのだ。そこで勝手にあれこれ妄想し、順序不同に書きなぐって不眠に対抗することにした。

K誌に投稿してから間もなく、読者通信欄に五六人の読者から反応の返事があった。いずれも約束の期日に間に合わなかったり、とても私には果たせそうもない提案だったが、中に私の心を捉えた手紙が一つあった。まゆみを山にさそい、誰も知らない木立の中で、思いきりプレイをしようと言う趣旨だった。私は山に興味はないし、そこに行くまでに、タイミングわるく寂莫とした心理状態になったら、とてもおつき合いできないと思い、返事を出さなかった。けれど提案の内容には胸がドキドキする程の興味を持った。今でも、私の空想はムクムクとひろがって、見ず知らずのその異性から、嫌と言う程責められる場面を想像するのだ。

「貴女が山辺さんですね。はじめまして」

初対面の青年は思っていたよりやせ型で、生真面目そうなタイプ。約束した日時にあらわれた彼は、すっかり山の重装備で身を固めている。私はセーターにスラックスだけの軽装——山の中腹の雑木林の中で、彼の思う通りに動かされる受難の小鳥にはふさわしい服装だ。私は伏目がちに彼の後に従う。彼のリュックでゆれているロープが、私の心を微妙にゆさぶるに違いない。やがて恰好の場所に到着して、彼は眼で合図し、私を登山道から外れた林の中にさそう。人っ子一人いない清澄な山の中。静かな陽光。私は観念して手を後ろに廻す。下着だけの私を、彼はロープでグルグル巻きにし、一本の立木に縛りつけてしまう。それから猿ぐつわ。もう、どうもがいても駄目だ。それを承知でついて来たのだし、第一ここは人里はなれているから、どう叫んでも誰も来てはくれない。

「ほら、山の空気がおいしいでしょう。この景色が一生忘れられないように、二人だけの時を過しましょう」

彼はおいしそうに煙草を吸い、それを私の肩でもみ消す。「ううッ」とうめく私の下着

を押しさげて、白日の下に乳房をさらし、次に立木の小枝で両の乳房をピシピシと叩く。

そして次には悲鳴をあげるのもかまわず、そのたくましい大きな両手で私の胸をモミクチャにもみ上げる。グッタリとなった私は、気の遠くなりそうな苦痛の中で、永久にそうしたいよう強烈なよろこびに、しびれているかも知れない。そんな空気が現実になったら……。

でも、やっぱりおそろしいのは、私が女だからだろうか？ 私よ、自分自身に早く正直になれ！

×月×日

まゆみを妻にめとってくれる人はいないだろうか。夫に先立たれ、今はその友人に自由にされている異常な女。家事のきりもりに自信はあるけれど、もう普通の夜の生活には耐えられそうもない女。こんな私を、よし！と受止めてくれる男性はいないだろうか。このままズルズル、あの人の世話になっていると駄目になってしまいそうだ。

一度結婚の経歴があり、もう中年と言われる年齢になってしまった私を、無条件で妻の座に据えてくれる物好きで親切で、お人好

しで残酷な人——本当は広告でも出したい心境だ。

毎晩、マユミハ、貴方ノ言イナリニナリマス。ムチデ打タレテモ我慢シマス。オ腹ノ中ガ空ッポニナル程、浣腸サレテモカマイマセソ。デモ私ノ乳房ダケハ可愛ガッテ。私ノ言ウ通りニ責メテ。マダ、コンナニ肌モナメラカダシ、形モ崩レテハイナイ。今ノウチニ……今ノウチニ……。

×月×日

Sさんと連れ立って、久し振りに新宿へ出る。相変らずの雑沓——ふと人ごみの中を強引に引き立てられて行く私を想像する。Sさんが刑事で、私がスリか何かで……。腰縄を打たれ、両手錠で——。「何？ 神妙な顔をして」とSさんにささやかれ、はじめてハッとする。気がついたら約束の映画館の前だった。今日は封切の「武士道残酷物語」を二人で見ようと言う約束だった。併映は「無法松の一生」——でも私には、無法松のおさえられた愛より「武士道残酷物語」に展開されるSMの世界の暗い、きびしい異相の愛に魅せられて来たのだ。特に岸田今日子の側室が乳房の上部にあざやかな歯型を見せて、もだえ

るスチールは異常な迫力で私を捉えていた。Sさんの誘いにすぐ応じたのも、街で見かけたこのスチールが、私の心のヒダに、しっかりと喰いこんでしまっていたからだ。觀賞し終ってから、やはり何話かの物語の内、岸田今日子の側室と錦之助の小姓がからみ合う第二話が一番印象に残った。外に出ると同じ映画館の建物の地下にある喫茶店Aに入った。

「どうだった？」とSさんに聞かれて「私が、あの人だったらと考えたわ」と答えると

「僕も同じさ。僕があの小姓だったら？」と微笑んでいる。コーヒーをすすりながら急に話がはずんだ。

「ラギリにされたら、どうなるんだろう。一度経験したいな」

「経験したら、それでおしまいでしょ」

「もち論、まね事さ。プレイをするんだよ。」

僕はラギリの刑を君から受ける。君は僕から乳房責めの刑を受ける」

はじめ冗談だったのが、ひょうたんから駒が出て、その夜それは本当になった。映画の刺激が私たちを大胆にさせた。Sさんは、それからN劇場に本当に肌を打たせ、容赦なく縛られすトリップパーが、Mを売りものに出

演しているから見に行かないかと、さそったのだが、これはさすがに入場する勇気がなかった。

「舞台を裸のまま縛られて、引きずられるんだよ。両足持って引きずられると、肌が床にあたってゴリゴリ言うんだ。ホッペタをなぐられても齒を喰いしばって我慢してるんだ」と説明されても、なる程そんな女優もいるんだな、と興味は持つものの、男性ばかりが入場者と言うトリップ小屋では遂に二の足をふんで、帰って来てしまった。

その代わり——と、言うのはおかしいけれど、それからのプレイは、いっになく昂奮して、Sさんと別れてからも、私は眠れなかった。私はSさんから乞われるままに、彼の着衣を全部はぎとり、室の柱に後手縛りに結びつけた。

「これからラギリよ。覚悟は良くって？」

Sさんは眼をつぶってコックリした。いつもMの立場の私がSの方に廻った訳だった。すると不思議なことに、Sさんの躰全部を、ほしいままにすることの快感が、私の五感を急激にしびれさせた。私は油汗のふき出る彼の顔を冷ややかに眺めた。何でもしてやれと言う気になった。悲鳴をあげたら彼を馬にし

思い切って鞭を当ててやろうとさえ思った。Sさんは二十分ばかりで屈伏し、私の希望を何でも叶えることになった。そして、私は——

今、ちょうど夜半二時。もう眠らなければならぬ。そっと乳房をのぞくと、Sさんのつけた齒型が黒ずんで残っている。ヒリヒリと痛む胸をそっとおさえた。かわいそうな私。呪われた女！ 誰か助けに來ないと、私は地獄におちそうだ！

○

以上は日記の抜き書き。日記は今日まで続いているけれど、いずれは又発表の機会があるだろう。私だけの胸にたたんでおかなければならないことも、たくさん書いてあるから……。

まゆみを買ってくれる人があるかしら。

女奴隷のようにクサリでつながれ

パンパンと肌を叩かれて

いのちの切り売り。

何の条件もなく

望まれるのはただ夜毎の奉仕。

うめきの涙は

私の宝石

五体のくねりは愛のあかし

そして信頼のきずなは

一本の革ムチー

まゆみを生命として

抱きとめてくれる人がいたら

私は貴方に

空の星をそっととってポケットに贈ろう

私はSさんと話し合って、このごろ私たちだけのクラブを作り上げようと夢みている。

Sさんの知り合いをさそえばできないことはないし、事実ある程度具体化して来ている。

私の提案はこうだ。

一、お互いに住所氏名は明かさなくてよい。

二、この道に関心を寄せ、SMいずれかに美と陶醉を感じるものなら男女、年齢を問わない。

三、会費はとらず、互いの連絡がとれたら、費用は折半。

四、決して相手を傷つけたり、センサクしたりせず、後日路上であっても言葉をかけないこと。

五、クラブ員の資格を得るためには、会員による前後二回のテストに合格すること。

Sさんに腹案を示したら、最後は奥さんの秘密主義だと笑われた。でもプライバシーを

しっかり守るためには、この位の戒律が必要なのではないかしら。

「僕の仲間にテストはいらないよ。もっともこの前のようなことがあるから、新入会員には僕がテスターになってあげる」

とSさんは言う。

会員になりたかったら毎月の第一、第三日曜日、新宿二幸前に週刊誌を丸めて小脇に持って、六時から七時までの間立っていると。

不安の認められない人だったら、こちらから声をかける———とすることにしたい。(もし

東京在住の方で御希望の方があったら御実行ください。まだ試案中ですが、案外このまま実行にうつして、まゆみかSさんが、その場におもむくことになるかも知れません。)

さて、私は大分ダラダラと書きすぎたよう

だ。私は、私の求めている新らしいお友だちとのひそかなプレイを夢みて、今回の手記を終りましょう。それは、次のようなことだ。

○

私は約束の時間、お互いにとりきめた指定の喫茶店に行く。仮りにPとしておこう。Pの二階窓ぎわのボックスに、新らしいお友だちのAさんがいる。Aさんは週刊誌を丸めてテーブルの上においている。それが合図だか

ら、私は難なくその座席を見つけることができる。すでにAさんはSさんによるテストを

二回受けて、O・Kの確認を受けている。A

さんはM志願で、まゆみを女王は見たて、一晩どんな奉仕でもしたいと申し出たのだ。S

さんの報告によると、決してセックスの危険

はなく、やや色白だが、おとなしそうな紳士的な男性だと言う。Sさんのテストは、猿ぐ

つわ、股縛り、浣腸責めだったが、そのどれ

にも耐えたと言う。私はSさんの訓練で、Mばかりでなく、この頃Sにも目覚めたから、

ドキドキするような期待でPの扉を押したのだ。初対面のAさんは思ったより若々しい男

性。いくらか赤くなりながら挨拶をかわす。

「今晚からお仲間ですわ。おつき合いはじめ

として、貴方の御望みに応じます」

「どうぞ、よろしく……。僕は山辺さんに思

い切りいじめられて見たいのです。ちょっと

恥ずかしいのだけれど、犬のようにこき使っ

て下さい」

「ハイ」

これで契約成立。私たちはコマ劇裏の旅館街に移動する。二時間二千円ぐらいの部屋な

らスチームはきいているし、バス・トイレ付きだからプレイに不自由はしない。

部屋の鍵をかけると、まゆみもAさんも演技で態度がガラリとかわる。まゆみは我まま御免の女王。Aさんは女王にかわっている一匹の犬畜生にすぎない。私はAさんを素裸にし、その男性失格の姿を冷笑する。首に縄をつけ、膝元にひざまづかせ、足の裏で全身を踏みつけてやろう。それから四つん這いで部屋中を歩かせ、部屋のスリッパでその背中を

ぶってやろう。ベッドに仰向けにくくりつけあわれみを乞うまで、全身をなぶってやろう。バス・ルームに引ッ張って行き、まゆみからだを隅から隅まで洗うように命令してやろう。

それからひょっとしたら、トイレについて来させ跡始末をさせてやろう。

最後にこれはまゆみの好みとして、手足を動けなくさせたAさんに、まゆみの胸を充分に愛撫してもらおう。

空想には限らないが、どうだろうか。このAさんに進んでなり切れる読者がいるだろうか。又やがて木枯らしの季節。憂うつな黄塵が空の一角をおおう風の町からまゆみの手記を再びK誌に投稿した。

山辺まゆみは、そんな街角から今日も、灰色の空を望んでいるのです。

ひっそりと、激しく——この五体を燃えたぎらせるお友だちのあらわれのを信じて、今も、ここに、こうして——。

(終)

告白

肥満体婦人に憧れる

戸井隆三(京都)

熱心な奇クの愛読者の二十八才になる小柄な青年です。

人並の常識みも知性も弁えている筈の私ですのに、時として自制する事も出来ない程、肥満婦人の量感美に激しく燃え上る情熱をどうすることも出来ません。

遅ましく肥え太った硬ぶとり肉体の持主に對して、常識をはずれた情熱を抱く自分は一体、どうしたたっているのでしょうか。

小柄で美しいスレンダー・スタイルの女性があまはやされる今日の美人の型には、あまりにもかけはなれた肥満婦人に恋うとは、常軌を逸したことと思われるでしょうが、私に

とっては、その飽くまで豊かな重量感には、無限の創造力と未来性とが秘められていて、離れることが出来ないのです。

単に肉づきがよいという程度ではなく、即ち一般にいわれるグラマー美人といった程度の肥り具合ではなく、体重八〇キロ以上は保証されるような、鈍重な迄に肥えふとった婦人こそ、私自身にとっては信仰にまで高められた女神そのもののなのです。

勿論、年令等は問題ではありません。そこから一般の男性達だったら肩を並べて歩くのさえ嫌がるほど、遅ましく肥え太って脂ぎっている様な方こそ、私にとっては、精神的にも日常面でも、又経済的にも、全身全霊を捧げて奉仕させて頂きたい、生きた女神ともいえるでしょう。

爽秋の街に、そんな御方の姿を認めたときは、思わず、その後を追いかけてついてゆきたいという衝動を抑えつけることの、何と焦立たしくも苦しいことでしょう。

話しかけるきっかけの言葉を出すことさえ理性とプライドの前にはしぼんでしまつて、努めて冷静にあらぬ方へ視線をやり、やっとやりすごしてから、後姿を胸躍らせながら見送るという情ない私です。

先日、箕面の郊外へドライブした折、ゴルフ帰りらしい奥様の車がパンクして困っているのを直してあげたことがあります。

その中年の婦人のしやがみ込まれたズボン姿の、今にもはちきれそうに、破れんばかりになったお尻のあたりの豊満さに度を失った私でした。

平静な心を失った私は、ボールドをゆるめようとしてスパナで自分の左手の甲を傷けてしまいました。然し、憧れの肥満体婦人に奉仕しているという快感に、したたり落ちる血の色の何と心地良かった事か。そしてスベヤタイヤの交換が済んだ時、まゆ毛が薄く見える程、脂ぎった御顔（細い一重マブタでした）を、にっこりとほころばせて、何回もていねいに温かいねぎらいの言葉をかけて下さいました。

車に乗り込まれるとき、片足がステップにかかる、その巨大な体重に、スマートな欧州車をグッと右に大きく傾かせて、一度にこりと微笑んでふりむいて、会釈すると、宝塚の方向へ去ってゆきました。私はいついまでも、その浅い水色の車体の車が、見えなくなるまで見送っていました。

私の眼底に焼きついて残っているのは、そ

の御婦人のズボン姿。見れば見る程大きなはちきれそうなヒップ。巨大なまでに豊かな逞ましい臀部の露骨なまでのポリウムはいつでも見送った私の脳裡に鮮やかに焼きついてイメージの度に一層、堂々と力強く私に迫ってくるのです。

こんな私の便りでは、単なる好色漢としか理解されないかも知れませんが、私としては信仰にまで高められた、この世の理想像といっているのです。決して単なる物好きや好奇心で言っているものではありません。あらゆる意味を含めた完全な奉仕者の立場を望んでおります。

若し私のこの拙い告白を読んで、御気持の動いた肥満体婦人の方がおられましたら、編集部回送で御手紙頂きたく御待ちしております。私はその肥満したヒップの下敷きになれるのだったら、窒息してもいいとさえ思っております。いや、巨大なるヒップの下で窒息死することこそ、私の生甲斐であるかもしれません。

こんなに思っている私を哀れと思召されたら、どうか一通の御恵みを賜わりますよう伏してお願ひしておきます。

ふたたび悦虐の旅へ

火

の

国

幌 泉 里 子

君にちかふ阿蘇のけむりの絶ゆるとも

万葉集の歌ほろぶとも

まだ若かった吉井勇が実際に阿蘇に立ったのか、単に想像しただけかは知りません。けれども二十三才の青年の心意気が躍如としてある歌です。この歌を収めた「酒はがひ」は明治四十三年に刊行されました。九条武子夫人が十和田で詠んだものと、この歌の二首を私はとりわけよく口誦します。

先日もなんとなく買ってきたマジック・イ

ンキが、あまり細かい字がスラスラと書けますので、御機嫌になってノートのほしにこの二首を書き並べて見ました。それを見つけた夫は、じっとその二首を眺めておりましたが

「今度は阿蘇へつれて行って上げる」

といって、ワンピースでミシンをふんでいた私のからだのすみずみまで視線を走らせました。私はハッとしました。

「十和田であんなに責められたのだから、火の国、九州ではどんなお仕置きにかけられるのだろう……」

その戦慄と期待は何にたとえたらよいでし

よう。二百メートルを全力で泳いでヘトヘトになった女子水泳選手が、コーチから好記録を告げられ

「さあ明日は八百だよ」

と命じられたときの気持ち、とでもいったらよいでしょうか。私は緊張にこわばった表情でうなずきました。それから一月足らずの間、私はふうふうのお食事の上に、毎日牛乳二本とヨーグルト一本を加えました。夫は庭で長さ一メートル半くらいの人間の腕より大分太い四本の棒を、コツコツとけずったり穴をあけたりしていました。

「野営のときのテントの柱だよ」

私の問いにさりげなく答えた夫は、秋の口ざしの中へタバコのけむりをはきました。私はそれを聞いてホッとした気持ちと軽い失望を感じながら、それでも野営の川原で釣れた鮎を焼いている、子供のようににはしゃいだ自分を思い浮かべたりしたものでした。

× × ×

その私を乗せた汽車は今、九州路を西へ西へと走っています。

「ここで一カ所見てUターンする」

といって渡された切ふには長崎行きとありました。阿蘇で責める前に、長崎の町を一目見せる……そんな気持ちに漠然と想像されました。秋の空は降ったり晴れたり、佐賀の野は赤いハゼの葉で美しく彩られています。

処刑者とむかい合わせに坐って二十四時間、刻々と処刑場に近づくときの女の気持ち、理解して頂けるでしょうか。かたい剛体となつて作用する処刑者の視線は、私のからだを戦慄にこわばらせ、次の瞬間には何ともいえぬエクスタシーに溶かし、またこわばらせる……そんな一昼夜でした。二人ともあまり睡りませんでした。視線という責め道具が私のからだの上をくまなく跳梁しつづけ、私は

何度か目をとじてそっと悶えました。

左の車窓にひろがった有明海が去り、右の車窓に大村湾が雨にけぶって見えてきます。広い広い湾の出口はせまい早瀬で西海橋がかかっている湾ですから、湾とは名ばかり、湖といった方がよいでしょう。でも流れ込む川がないせいで水は塩からいのでしよう、真珠を養殖するいかだが白い水面に整列しているのが眺められます。

大分前東京の「ラドン」という空想映画が話題をふりまきました。放射能でよみ返った空を飛ぶ竜の一種で、福岡市をあとという間に荒廃させ、一はばたきでこの西海橋をくずし、ラストでは二尾の夫婦のラドンが阿蘇の却火で焼かれて死ぬというスジでした。空想映画の中ではひどく格調の高いもので、空想映画の好きな私も一番思い出に残しているものです。体内を流れる不思議な血の呼び声に耳を傾け、私は今こうして夫の手によって阿蘇の却火にその血を焼かれるために、九州の野辺というよりは空想の野辺をはるばるとひきまわされているのです。汽車が停まりました。夕方近い長崎の町は、先刻の雨でしっとりとぬれています。

「一カ所見て」というのは浦上の天守堂のこ

とでした。それよりもずっと名高い大浦の天守堂をはぶいて浦上の天守堂を見せる夫の気持ちはいぶかりながら、私は両側を石垣にはさまれた石だたみの急な坂道を歩いてのぼりました。石垣の上にはコンクリートでつくったエンゼルの彫刻が一メートルあまりの間隔で、ズラリと並んでいます。その可愛いエンゼルたちも、「愛」と呼ぶにはあまりにもつまじい私たち二人の営なみに対して、どんな矢を放ったものかと、とまどっているように見えました。

天守堂の入口の鉄のとびらには木札がかかり

「本日は参観をお断りします」

とありました。その昔異端者として火にあぶられたキリスト教が、今度は私を異端の魔女として火にあぶる用意をしているように受け取れました。

ねずみ色をしたコンクリートの建物は、再建されてからの何年かの歴史と、先刻の雨に洗われてくすんだ味を出しています。西空の方を眺めますと、山なみの直ぐ上空は朱色の夕空で、その上をむらさきの雲が南方へ飛んでいます。それはやがて急速にねずみ空にあせ、朱色の空は黄色にかかります。雨に洗わ

れたアスファルトの道は自動車が忙しく行き来していますが、東京の喧騒とは比較にならぬ情緒を、近々と見える山頂や町中の森の茂み、やなぎの並木が漂わせています。

「里子、この天守堂の建物を、よく見てごらん」

夫の手が私の肩にかかります。正面にはキリストのはりつけの像がかかっています。私はその建物の姿をまじまじと眺めました。そのとき私は電流のようなものがからだを貫ぬいたように思い、軽い目まいを感じました。夫のせびろのえりを両手でつかみ、あえぐように夫に聞きました。

「私は阿蘇でさかさにはりつけられるのね」

夫の顔が静かにうなずくのを見て、私は思わず石だたみの上にうずくまりました。花壇に咲いた赤い血の色をした炎のような花が、あざやかに目にうつりました。私がどうして浦上の天守堂の建物を見て、さかさにはりつけられることを知ったか、宗教に対するエチケットとして申しますまい。無神論者であるはずの私が、良一に対して抱いている感情が宗教からそんなに遠いものでないことを、私自身がよく知っているからなのです。

帰り途にズラリと並んだ土産物店で、良一

は十字架のキリストのペンダントの中で一番立派なものを買ってくれました。ありふれた土産物店のことですから、むろん貴金属ではなく、ステンレスの十字架をくり抜いてその中に一まわり細い木の十字架がはめこんであります。そしてブロンズのキリストの両のてのひらは実際に釘で、その十字架に打ちこんであるものでした。

× × ×

熊本を早朝たった汽車は、やがてひろびろとした阿蘇のカルデラの中へはいりました。下り坂にかかった汽車の車輪の音は何にたとえたらよいでしょう。八百屋お七を終日江戸中ひき廻した裸馬が最後のコースにかかり、視野にはいった刑場の竹矢来めざして早める駒足のように、それは一回転ごとに私の全身にひびくのでした。

山間の駅に私たちはおり立ちました。チッキで送っておいだテントの柱とその布はもうとどいていました。それらを積んで私たちは大型のタクシーに乗り、漱石で名高い内牧温泉へ参りました。十和田と同じく道ばたの質素な宿に旅装をといた私たちは、すぐ処刑場の下検分に行くことに意見が一致しました。十和田と同じで、阿蘇の火口は避けました。

それをとり巻く広い広い盆地をめぐる外輪山の中でも一番高い大観峯（だいかんぼう）というところですよ。ノン・ストップの急行バスは坂道を登り続け、二〇分で私たちを大観峯入口におろします。ここから更に三〇分くらい歩きます。

山々は逆光の中に淡い青色に見え、その一つから灰色の陰影をつけた白煙がのどかに昇っています。それが中岳の噴煙です。反対側の左手の山々は、褐色とあい色の二色染めです。大観峯へ行くその道は広く、赤土と黒土が交互にあらわれ、昨日までの雨でところどころぬかるんでいます。三〇分の間歩いて、私たちは七、八人の団体客が帰るのとすれ違っただけでした。道連れになったのは母娘の三人連れだけでした。その母親に道を聞き出すと

「広か道が頂上まであります」

と答えてくれましたが、彼女等は途中どこかの脇道へ折れてしまい、私たちが大観峯についたときは、そこは阿蘇の火口のラッシュとはうらはらな無人の世界でした。灌木もない草原で、一軒の木小屋があるばかりです。下を見下ろすと先刻の内牧温泉が小さく見えます。ひろびろとした田んぼのいなむらはさ

ながらゴマ粒をまいたようです。大観峯の頂
きで、昼間女がヌードになっても下からは決
してそれとわからないでしょう。阿蘇登山口
の坊中の町より私たちが宿をとった内牧の方
が町としては大きいようです。

それにしても何という日本放れのした雄大
さでしょう。右手はアメリカのグランド・キ
ャニオンのようで、絶壁は褐色で、黒とあい
色の中間の色の陰影から浮き出ています。そ
の上につかみ程のむらさきの雲が流れ、あ
とは日本晴れです。左手は右手に似ていま
が、ところどころ黒岩が露出しています。広
い盆地には白川の支流がうねっています。こ
の大観峯はいわば海に突き出た巨大な岬とい
ったらいでしょう。その足下には緑の森
ひだが波濤のように打ち寄せています。向こ
うに横たわる阿蘇五岳は、正に対岸の島々で
す。

十一月の始め、その海底からは脱殻のモー
ターの音が風の具合で高く聞こえたり低く聞
こえたりしてきます。自動車の警笛、汽車の
走るらしい音もときおりとどいて参ります。
後は風に吹かれる草原の葉ずれの音ばかりで
す。チチチチチチというのは、近くで鳴く
虫の音か、遠くで鳴く鳥の声かよくわかりま

せん。私たちは処刑に猿ぐつわは要らないと
いうことに意見が一致しました。
「今夜こそ、君の泣き声が思い切り聞ける
な」

私はじっと阿蘇五岳の方を見やりました。
仏様の寝姿といわれますが、東に見える頭部
が根子岳、胸部は高岳、腹部はけむりを噴く
中岳、すねにあたるのは杵島、烏帽子の峯々
です。私は思わず手を合わせました。

「あみだ様、貴方様をおがむ随一のこの祭壇
で、夜もすがら責められる女は、多分私は
じめてでございます。どうか心ゆくまでごら
ん遊ばせ」

帰り道で良一は目のさめるようになりんどう
の花をつんで、私の胸にさしてくれました。
「有難う」

思わず笑顔で礼をかえしながら、私は聞か
ずにはいられませんでした。

「でも、どこではりつけになさるの？ 大観
峯にそれらしい樹はなかったわ」

良一は微笑をふくんで答えませんでした。
そしてこんなことを説明してくれました。

「大観峯というのはね、明治の文人たちが見
つけたんだよ。大観峯の名づけ親はたしか徳
富蘇峯だったと思う。よくよく阿蘇の峯が好

きだったんだね。：だから歴史は古くない。
君は間違いないくいけにえ第一号だ。今夜は夜
通し、ヒーッいわせてやるからね」
秋の陽ざしの中で、ながい接吻がかわされ
ました。

× × ×

由緒深い温泉の町は、トッピーと暮れまし
た。宿の玄関には迎えのトヨペット・クラウ
ンがエンジンの音を立てています。

「覚悟はできてるね」

テントの柱や布、ボストン・バッグをよく
点検しながら、良一は私の方を向いて念を押
しました。柱だけを受けとって私は良一に続
いてそのタクシーに乗りしました。

「大観峯の、入口でいい」

自動車は快適にスタートしました。山道に
そってぐんぐん登ります。そしてその一つを
ぐいと曲ったとき、タクシーのヘッド・ライ
トが前方の大きい松の樹を照らし出します。
頂上はもう近いし

「あの樹かな？」

その疑問は、忽ちくらやみの中に消えま
す。次のタクシーのヘッド・ライトが私のは
りつけ姿を照らし出したら、どういうこと
なるか――



私たちをおろしたクラウンの後尾灯が闇の中に消えたとき、良一が私の耳元で

「里子、これはテントの柱じゃなくてはりつけ柱なんだよ。×字型に組んで、交点をかすがいでがっちりとめるんだ」

とささやいたとき、そして私の両の手首に手錠がカチャリとはめられたとき、この明治の文人が愛したあたりの夜景は、私のまわり

で三度音を立てて変容いたしました。三段階目のその姿は、くまなく注ぐ月光を浴びて、荒涼とした処刑場の眺めでした。私は思わず身ぶるいいました。

二十分以上も歩いたでしょうか。手錠のために足の運びもおそく、やっと半分くらい歩いたところだったと思います。良一が「少し休もう」

「もうこんなに傷一つない肌はこれが最後だわ」

とそんなことを考えました。

ふたたび引き廻しが始まります。手錠がジャリ、ジャリと鳴り、ときおり月光にピカリと光ります。歩くのがおそい。よそ見をした。その度に鞭が背中中に鳴ります。

「ウツ」

と、まず荷物を草むらの中へおろしました。坐った私と向かい合いになり、良一は私の衣類をはぎ、私の上半身は裸にむかれました。ボストン・バッグから皮の鞭をとり出しながら

「十和田でも、東京でも、どうしても鞭打てなかったね。さあもうここらなら、鞭音も悲鳴も聞く人はいない」

彼はそう言って、空中でその鞭にビュンビュンとすぶりをくれました。私は両手の指をにぎりしめ、自分自身の上半身にくだける月光をいつくしんでおりました。

と、一瞬とまる息が、ふたたびのどを通過するまで私は立ちどまりました。四分の三くらいきたときでしたでしょうか。鞭が突然前からとんできて、乳房にさく裂しました。

「ヒューッ」

どうっと草むらに倒れた私の姿態が、彼に油をそそいだのでしようか。鞭は息もつかせず、あらわになった太ももを追ってきます。次は横腹、尻、首、間断なく鳴る鞭の下で、私は必死に「許しは乞わない」という誓いを守り抜きました。十和田でも東京でもふるえなかった鞭が、そのぶんだけの怒りをこめて、のたうちまわり悲鳴をあげる私を打ちのめしました。

やっと許され、一面にみみずばれになり血のにじんだ上半身を眺めながら私は

「三十は打たれたらどうか」

くらしいのこしか考えられませんでした。

夢遊病者のような最後の行進が始まりました。大観峯の遠かったこと——その私の足をはげましてくれたのは、背中に尻にさく裂する鞭でした。木小屋の中に、荷物のようにドサリと倒れこんだ私は、内面上では一時間あまり前にタクシーをおりたときと同じ女奴隷でかわりはありませんでしたが、少くとも外

観ではタクシーの運転手が賞めてくれた「お美しい奥さん」とは似ても似つかぬ、血のにじんだ肉塊にしか過ぎませんでした。そこで改めて全裸にされます。あえぐような呼吸を続ける私の前で、×字型のはりつけ柱が要領よく組み立てられます。

「阿蘇の山の方へ向けて立てて上げようね」

「……」

ジーンと熱くなってくる目で私は答えました。

小さいシャベルとはりつけ柱をかついで良一は小屋から出て行きました。ザクザクと土を掘る音、ギーッと木のきしむ音が聞こえます。やがて良一が小屋へもどる足音がし、入口に黒い影となって現われました。

「里子、歩けるか？」

私はうなずいて立ち上りました。その両肩を支えるように良一ははりつけ柱へ案内してくれます。柱はまっすぐ阿蘇の中岳を向いています。手錠が外され、いよいよ私は処刑されるのです。胸の動悸をこらえて、私は柱の前に連れて行かれ、ふみ台の石の上に立ちました。

意外なことに、私は覚悟していたさかさはりつけにされず、普通のはりつけにされました。

た。右手首、左手首、右足首が済み、左足首を縛りつけながら良一は

「明日一日は温泉で休養し、明後日の夜、もう一度くるんだ」

といました。そして×字の交点に、胴のくびれを鎖でギリギリと締めつけました。はりつけが完了したのです。私は頭をのけぞらしたり、うつむけたりして見ました。全裸のからだで動かせるのはここだけです。

「里子、嬉しいか？」

私は素直にうなずきました。

「明後日の夜はもっとひどい目に、さかさはりつけにされるんだわ」

胸をふくらませるその期待、良一の愛情に比例して自分のからだをしめつける縄と鎖の感触……私はふとこんなことをいいました。

「私の服のポケットに小さい桐の箱があるわ。長崎で買ったキリストのペンダントよ。私の首にかけて下さる？」

良一はうなずいてすぐその通りにしてくれました。女の心理の凌辱は、これで一つの極限に達しました。私はそれらのものを全て、むこうの阿蘇のお山の仏様にお見せしたかったのです。

目の下の盆地には、薄い霧が立ちこめ始め

ます。

× × ×

私はブルブルッとふるえました。手首、足首はもう完全に感触を失なっています。良一はもうずいぶん長く小屋の中で、テントの布にくるまっていびきを立てています。……

それは歯の根も合わね寒さです。

「寒い！」

私は自分のからだを少しでもあたためようと声を出して見たのです。テントの中のいびきがピタリとやみました。やがて良一がやってきました。手にしている鞭を見て私は口走ります。

「寒い。寒い。ムチ、ムチを頂だい」

一撃が横なぐりに脇腹にあたります。

「ウッ」

顔をのけぞらせた私が正面を向くのを助けて良一はいいいます。

「今夜君は風邪をひく。でも風邪は二昼夜くらいは潜伏するから、明後日の処刑にはさしつかえないと思う」

二撃目は首を襲ってきました。顔をひきつらせながら、私はその爽快なひびきを聞きました。打撃は次第にテンポを早めてきます。悲鳴を高めながら、私はうつむいて自分のか

らだを見ました。みみずばれはもういたるところで破れ、血がしたたり落ちています。鞭がゆるみましたが、私のからだはカーッと燃えるように熱しています。やっと意識がはっきりしてきました。

「熱いわ」

良一は始めてはほ笑みました。

「冷えてきたら遠慮なく呼ぶんだよ」

そういつてスタスタと小屋の方へ歩み去りました。そこからはまた気持ちの好きそうないびきが聞こえてきます。

二度、三度、四度とおこして、私は鞭打って貰いました。

五度目にきて貰ったとき、私は鞭を受けながらとぎれとぎれにいいました。

「毎年、ウッ……あの阿蘇の火口には百万も人が、アアッ……やってきて観光バスに乗るわ。ヒイッ……そしてバス・ガールは必ず、ヒイッ……いうわ。あの大観峯は外輪山、ウッ……の中でも一番高く、眺めも、ヒイッ……一番すぐれています。でも、アアッ……あそこで一人の女が夜もすがら、痛いッ……はりつけにされて責め抜かれた、ヒイッ……なんて知りもしないし、説明も、アアッ……しないわ」

良一はうなずき、鞭を少しゆるめながら

「日本三景の中で、女が女であることを知るためには、ふりそでを着て立って見ればよい。谷間の露天温泉でさえ裸になって入浴するだけでよい。でもこの大阿蘇の大観峯では阿蘇はあのように噴煙を上げて、火山であることの詩を絶唱している。それに対して女は女であることの詩を絶唱するには、このようにむごたらしくはりつけにされて鞭打ちに血を流さなければならぬのだ。男の詩の絶唱は、吉井勇のように文字を三十あまり並べるか、僕のようにテント布にくるまって、ときどき君にこのように鞭をふるえばよい」

私は悲鳴をこらえ、けん命にこの言葉を聞きました。言葉がおわるとまた鞭が激しさを加えました。霧が濃く下界をつつみ、あたりが少し白んできました。打ちおわった彼は柱に近づいて、鎖を、そして縄をといてくれました。私の血まみれのからだはドサリと草原にころげ落ちました。手も足も完全に他人のものとなり、残る胴体も無重力の世界を漂っています。

草原は一面、三十センチ位の高さの笹です。すすきが混っており、ハギは大分枯れて褐色に見えるのが、うすあかりの中でわかり

ました。片手を動かして、辛うじて一本のすすきをつかんだ私の目から、とめどもなく涙がしたたりおちます。女が女であることの詩を絶唱するには、このようにはりつけられ、虐殺に等しい責め苦を受けて瀕死にならないければならない。男は三十字あまりを並べるか鞭をふるえばよい——その良一の言葉に、男

と女の距離の遠さを思つて胸をしめつけられ、たから泣くので、苦しかったからでもなく、悲しいからでもありませんというのは偽善でしようか？ 文学を専攻したはずの私の理性もここらが限界だったのです。でも同じ足が二本あり、腕も二本ある、その手足には五本ずつの指がついている。目も

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。
○御注文品は注文書到着と同時に発送申し上げます。
○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局が売っています）小為替、定額小為替（振替（用紙は郵便局にあります）切手代用（十円、二十円、三十円、四十円などの切手で、絶対紙にはりつけないでお送り下さい）等を御利用願います。
○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号の

み、お書き願います。
○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。
○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りに不都合な郵便局名（特定局でも結構）とお名前（仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備した方がよい）とを当方へ御連絡下さい。その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありません。局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。
○御注文の宛先は大阪阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。私書函番号を明記するよう依頼されましたので右の通りおきます。
○尚、御注文の際、もし代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一分譲中止、品切などのとき迅速に処理できて助かります。
○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で「新版案内」として発表しております。又、古くなりましたものは漸次打ち切りにします。
○御注文の宛先は必ず楷書で、はっきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それも忘れなくお書き添え願います。
○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません。故御安心下さい。
○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は金額に応じて優秀フォトのサ―ビス品を贈呈させていただきます。

二つ、鼻も一つ、同じ形をした一つ心臓が胸でうっている。その男と女がどうしてこうも違うのか？——私は流れる血のことも考えないで、このことを追求して行きました。なぞです。全てはなぞです。そして明後日は今日よりもっとひどい目に合わなければなりません。そうして私は阿蘇のけむりが絶えても、その責め苦に堪えなければならぬのです。「おとこ」というよみに「男」をあてはめ、「おんな」というよみに「女」をあてはめた最初の人は、このことに思いあたったからこそ、「男」と「女」、こんなにも形も感じも違った字をあてはめたのでしよう。その人は詩人であつたに違いありません。詩人でない私も、明後日の恐ろしいさかさはりつけを受けてこのなぞを解くかも知れません。そう思うと、自由のきかないからだから、ちようどなぎさからとび立つ蝶のように女の情念だけが抜け出て明後日の処刑を待ち望み、夜明けの阿蘇の山あいを飛び廻るのでした。

私を責めた後、私のからだは動けなくなっていればいる程、それを求める良一の足音が後ろから聞こえます。

当代女武勇列伝

御子柴マリの場合

諸 岡 豎 雄

一

夫婦間の相剋というものは、煎じ詰めれば結局上になるか、下にされるかということになるのではないだろうか。といっても夫婦のことだから、柔道やレスリングのように肉体的に押え込めば済むという単純なものではありません。精神分析学者コリン・スコットは、「それは美化されたデリケートな闘争である」といい、またかのハヴロック・エリスは「筋肉を締めつけるばかりでなく精神的に束縛すること」といっています。けだし敬服

に値いする名言です。

この上になるか、下にされるかの争いは、私たち夫婦のように二、三年も経たぬうちに結着をつけるものもありますし、一生涯かかって勝負のつかない夫婦もあります。何はともあれ、上になったものは強く、偉く、優れており、命令する地位にあり、ときには威嚇することができるとに反し、下にされたものは弱く、低級で、劣っており、命令に服従し、威嚇におびえなければなりません。

そしてこの場合、上に位置するものが女で

あって一向に差支えありません。古代ローマの詩人オヴィディウスは、濃厚な官能性と豊かな詩藻と麗しい韻律で、女上位をうたい上げているし、またギリシャ古典喜劇の完成者アリストファネスは、仰臥した男の上へ美女が騎座の姿勢をとるドラマを幾編も書いています。古代ローマ、古代ギリシャの絢爛たる文化が女上位をもたらしたのだとすれば、将来の文化の向上は女性に有利に展開するといってもよいでしょう。

もちろん、女が上になろうとすることに対

し男は既存権益を浸されまいとして必死の防戦を試みるだろうし、げんに試みています。しかし私たち先兵が次ぎ次ぎにかねらの堡壘を陥れていることは、この武勇伝シリーズをよくむだけでよくわかると思います。

二

現在の夫、謙との結婚話が進められていた当時、私はよくかつての学友たちから

「まあ、あなたがお見合いだなんて！」

「マリは案外古いところがあるじゃない？」

「マリのことだから雄大な恋愛をするかと思ったら、見合結婚だなんて呆れた」

などと言われたものでした。そうかと思うと――

「あんた貞淑な妻として夫に仕える自信あんの？ 面倒臭くなったら柔道三段、合気道二段の腕前でギュッと締め上げちゃうんじゃない？」

「それも悪くないわよ。マリみたいな美人に虐められたい男って、案外多いらしいわよ」
「でも、男としてそれじゃあんまりみじめじゃない？ それにマリの腕前で本気でいじめられたら、ご亭主の身体バラバラになっちゃうわよ」と、うるさいことでした。

結婚話は大学在学中からうんざりするほど

ありました。暴れ娘にほとほと手をやいた両親は、お嫁にいけば少しは女らしくなるだろうという考えから結婚をせっついたのですが、れど、「あたしより強い人でなきゃイヤ。お見合のときに試合させてくれたらお話に乗ってもいいわ」などと言って、両親を呆れさせたものです。

むろんこれは私のじょう談。本心は結婚なんかするより、多くの男性にかしづかれ、かれらをアゴで使って遊びまわることがおもしろく、この自由な青春謳歌を一日も長くつづけていたかったのです。ドライブ、乗馬、ダンス、そして夏はキャンプ、冬はスキーとほんとうに毎日々々が楽しく、結婚なんか文字どおり人生の墓場のように思えたのです。

ところが大学を出て家庭でお茶、お花、お料理に明け暮れるようになってから、気持ちの中にぽっかり空洞のようなものができ、なんとやるせない気持ち、いいようもない寂寥感におそわれるようになりました。遊び過ぎの反動がここへきて出たのかも知れませんがこのうつろな気持ちを満たしてくれる異性の出現を待ちのぞむようになりました。といってボーイ・フレンドではもう満足できなくなったのです。かれらもそれぞれ学窓から社会へ

巣立ちましたが、機会あるごとに私を誘い旧に変らぬ奉仕をつづけてくれました。KとSからは熱烈な愛情の告白をうけましたが、私の恋愛の対象とするにはあまりにもインフェリア（劣等）だったのです。

「あたしのように勝気で気位が高く、いささか気紛れで、その上贅沢な女を奥さんにしたら大へんよ。第一あんたの生活力じゃどうにもならないわ」

「ぼくはおやじの財産がもらえるんだ。マリちゃんに不自由なんかさせるもんか」

「でもあたし、あんたなんかたちまちお尻に敷いちゃうわよ」

「いいよ。マリちゃんのお尻に敷かれるのは本望さ」

「あたしお尻に敷いちゃうの大好きだけど、お尻に敷かれっぱなしで喜んでいような男は大嫌い。そんなの男の風上にもおけない意地なしよ」

「じゃ、オレがマリちゃんを尻に敷けばいいのかい」

「まっ平。だれがあんたのお尻になんか敷かれるもんか。もしそんな大それたことをしたら、それこそあんた、あたしのお尻の下で潰されちゃうわよ。あたしがどんなに強いのか、

あんた知ってるじゃないの」

「じゃ、どうすればいいんだ」

ほんとうにどうすればいいのか。それはこっちで聞きたいことなのでした。お尻には敷きたい。といって尻に敷かれてヤニ下がっているような頼りない男に愛情など持てそうにもない。ずいぶん矛盾した考え方だけれど、事実私の気持はそうでした。いくら考えてもこの矛盾は解決できず、そこで鬱ぎ込んだりいらいらしたり、周囲の人に当り散らしたり、落ち着きのない日が毎日つづくのでした。もっともそんなときは道場へ出かけ、柔道や合気道で汗でぐっしょり濡れるまで力と技を思い切り出し切り、もやもやした気持ちを発散させることにつとめました。こうしたときに持込まれたのが現在の夫、謙との結婚話だったのです。

三

彼は私よりも十も年上でした。三十三の今日まで結婚が遅れたのは、勤務先のM商事のハンブルグ支店に五年も在勤したためで、課長次席となって帰国するまででチャンスがなかったようです。写真を見ると池部良そっくり。一七〇センチ、六三キロという体格も男としてはまずまずだし、趣味は読書、水泳、

スキー、乗馬とあり、スポーツにも理解があると思われたのでお見合いを承諾しました。

お見合いではじめてみた彼、さすが外国帰りだけあって洗練された物腰、巧みな会話の運び、それが少しもキザではなくびったりなのです。それに壮年期にある男性特有の魅力がすっかり私をひきつけてしまいました。若いボーイ・フレンドを見馴れていた私だけになおさらでした。

女が武道をたしなむというと、大抵の男は妙にコンプレックスを感じるか、変に敵愾心をもつものですが、彼にはそういった気持はまったくなかったのです。

「マリさんは健康ではちきれそうにお見受けしますが、やはり柔道や合気道に励んでられるためでしょうね」

「ええ、おかげさまで、ごらんの通り身体だけはいたって丈夫ですの。風邪ひとつひいたことございません」

「それこそすばらしい財産ですよ」

「結婚後もつづけたいと思ってますのよ」

「大いにやって下さい。なんなら僕も教えていただきますよ」

「柔道は学校でおやりになったでしょ？」

「僕の中学時代はちょうど戦時中でね、やっ

たといえはやったかも知れないが、上級生時代はもっぱら竹やり訓練と勤労奉仕でした。

しかし柔道も受身ぐらいはできるからマリさんのお弟子になれると思いますよ。はっはっは……」

「まあ、お弟子だなんて……はっはっは。お望みならお教えしてもいいわ」

「これこれ、何を言うの」

母が横から私を制し、

「これだから困るんでございますのよ。それやもう、普通のお転婆さんじゃございませんの」

「いや結構ですよ。亭主が女房に柔道を習うというのも、ひとつの行き方だと思います。ひとつ僕たちで新しい夫婦の型を創造していきますから……ねえマリさん。そうしましうね」

四

謙のお父さまは財界の戦前派で、いまでは老夫妻に不用になった大磯の宏壮な別邸を私たち夫婦に提供して下さいました。ガレージ付きで、そこには謙がドイツから持って帰ったベンツを格納しました。邸が広くてお掃除が大へんなので、先代から御子柴家に仕えているじいや夫婦のはかに、通いのお手伝いさ

んもつけて下さいました。何不自由のない生活、幸福の絶頂感を味いながらの毎日がつづきました。

「マリはスーパー・レディだよ。ドイツ語でいえばフォアチュークリッヘ・フラウだよ」

「おやおや、また褒めて下さるの」

「日本娘のお転婆といえは大体がさつな人が多いが、お客が見えたときの君のホステスぶりは大したものだよ。とくにきょう朝、お手伝いをたしなめていた君の態度は立派だったなあ」

と、さも感にたえぬといった風情です。

お手伝いをたしなめたというのは、なんでもない電話の応待の文句なのです。自宅の電話というものは厄介なもので、さて、ちょっと昼寝をしようかなと思つてるとき、お風呂に入つてるとき、おトイレにるとき、そんなときに限つてかかつてゐるのです。そういうとき、じいや夫婦はうまく応待してくれますが、若いお手伝いさんは何度教えても「いまお風呂に入つてゐる」とか、「いまお手洗にいます」とか言つてしまふのです。お風呂はまだしも、お手洗に入つてゐるなどは迷惑千万ですので、「そういうときは、奥さまはいまお手放しできない御用事をなすつて

いますとか、よんどころない御用事で電話口に出られませんので、のちほどこちらからお掛け申しますといつて、先方のお名前と電話番号をきいておくのですよ」とたしなめたわけです。それがばかに謙に氣に入つてしまつたらしいのです。

「便所で用を足してるとき、お手放しできない御用事とか、よんどころない御用事とか表現する奥ゆかしさが氣に入つた。日本語というものが意外に語い（ボキャブラリー）の豊富なことも君から教えられたよ」

たしかに最近の現代娘はこういうとき平気で、「いまあたしおトイレよ」と申します。

それにつけても思ひ出すのはフランス文学の渡辺一夫さん（東大教授）のお嬢さまのことです。その随筆集「うらなり抄」七三頁を見ますと、渡辺教授のお嬢さまは結婚適令期だといふのに、毎朝おトイレから出てくると、

「水洗便器に放出した大便の形状、色彩などについてこまごまと報告」なさつたとあります。

「叱りつつ笑う以外に手がなかった」と渡辺さんは書いていられますが、こんなこと現代娘にはそれほど珍しいことではありません。女同士では「ゆうべビールを飲み過ぎたせいか、きょうはお腹の中は特急よ」「ああ

ら、あたしのはお水の中でデンとどろろを巻いちちゃった」「あたしのはね、お水の中へズボンと快音たてたわよ」ぐらいなことは平気でいいます。もっと露骨にいうものもありますが、ここで申上げるのは遠慮しましょう。

私なんかも、ボーイ・フレンド相手のときは、まったくむき出しの言葉を平気で使いました。たしか信州の戸隠山でキャンプしたときでした。夜半仮設便所——蔭になつたところに穴を掘り板木を二本渡しただけのもの——で用を足していますと、前方の繁みの中でガサゴソ音がするではありませんか。瞬間はッとなりましたが、すばやく懐中電灯で音のする方を照らし出すと、そこにはKがいるのです。卒業後私に結婚を申込んだあのKです。発見されたKの狼狽ぶりはなんとも形容できないほど哀れなものでした。かれが夜中なんの目的であとをつけてきたか、私にはよくそれが分つていたので意地悪くこういつてやりました。

「匂を嗅ぎたければもっとこっちへ来ればいいじゃないの。あたしのは特別製の健康便だから食べたって美味しいわよ」

こんな私ではありませんが家庭でのしつけはきびしく、人さまの前で「おしも」の話は

厳禁されていました。母はよくこう申しました。「ご不浄から出てすぐお座敷へ戻ってはなりません。しばらくは縁側で着物にしみこんだ臭いを落してから戻るのですよ。お水洗の場合は、その都度水で流してしまうんですよ。よくおしまいまで水を流さない人がいるけど、いくらお水洗だって臭いはあるんだから、あれはいけません」こういうしつけが結婚後大いに生かされたわけです。

五

こうして幸福な日々のくり返しがつづいていったのですが、ある日かれは突然「ねえ君、当分道場に通うことを止めてくれないか」といったのです。

結婚後も週に二、三度は東京へ出かけてお稽古に励んでいましたが、謙もそれを喜んでいたはずなのに急に止める



とはどういう意味なのか。

「あら、どうしていけないの？」

「みんなが冷かすんだよ。君も強い女房持って大変だなあって……」

「いまどきちっとも珍しくないわ」

「ところがだね。連中がいうには、ぼくが毎晩天井のフシ穴を数えてるんじゃないのかってわけだ」

「それなんのこと？」

「江戸川柳に『天井を男の見るはふがいなし』というのがあるんだそう。つまりマリのような強い女は毎晩亭主を組敷いて、天井のフシ穴を数えさせてるんじゃないかとカンぐってるのさ」

「まあ、お下劣もいいとこね」

「下になりなとマリは謙を好きな事

——なんていう奴もいてね」

私は、呆れて物が言えませんでした。

「それはプライバシー侵害よ」

「これが日本の精神的風土なんだから妥協するよりほかはないだろう。先輩のHさんまでが『君、フラウを絶対にオーベンにしたらだめだぞ。』

女というものは一度上位の味をおぼえたら最後仕末におえんからね”なんていうんだよ”

諸岡堅雄さんも恵子夫人が柔道三段だったということだけで、お若い頃はずいぶん友人たちの酒の肴にされたそうですが、謙もいま堅雄おじさまと同じいやがらせに精神的に参ってしまったているのです。

「やめてもいいけどさ……でもね、急にやめると肥っちゃうのが心配なのよ」

一六四センチ、五二キロというキリッと締った肉体は、私のもっとも自慢できる財産でした。肥ればこの財産に傷がつくのです。

「ゴルフでもやらないか」

「そうね」

「乗馬はどうだ？　こんどの日曜日の遠乗会には会社の女子部のものも参加することになっているし、会社ではレディ同伴大歓迎なんだ」

「いくわ。連れてって。みなさんお上手？」

「ううん。大したことはない。ドイツ仕込の乗馬術を一つマリちゃんに披露するかな」

「ぜひ見せて……あたしのは我流で、軽井沢や山中湖の貸馬相手の乗馬だけど、みなさんについていけると思うわ。あたしったら落馬したって怪我ひとつしないのよ」

「ほほう。それや大したものじゃないか」

「これも柔道や合気道を知ってるおかげね。投げ出されても、くるツと起き上っちゃうのよ」

「それはすばらしい。こんどの日曜日にはマリちゃんの美事な落馬ぶりを拝見するとしょうかな」

乗馬もゴルフも大変楽しいものです。ことに戸外できれいな大気を胸いっぱい吸い込んでのスポーツですから爽快さもまた格別です。しかし私には柔道の投げる、投げられる押え込む、跳ね返すといった攻防の秘術を尽し、力のありったけを出し切るあの快感がどうしても忘れられませんでした。それに困ったことには、案の定少しずつではあるが肥りはじめてきたのです。それまでは無駄な脂肪ひとつなく、雪の精のようにさらっとした真白な肉体が、だんだん心持ち脂肪でガラガラ光りはじめてきたのでした。

「じゃまた、ぼくが稽古台になろうか」

私の訴えに謙はこう言ってくれましたが、かれの稽古台はすでに試験済みだったので。結婚後しばらくの間は二人ともが柔道着に身を固め、八畳の間で乱取りの真似事をやっただけでしたが、部屋が狭いので思い切っ

た投げ技は使えず、といって寝技で肌と肌が触れ合い、身体が搦み合いますと、二人ともお稽古よりも自然の欲情に負けてしまうのでした。

「あなたじゃだめ。ほかの方へ脱線しちゃうから……」

「脱線するのはいつも君の方じゃないか。こっちは押え込まれて苦しんでるんだから、それどころじゃないよ」

「どっちにしてもだめ。真剣に取組んでぐっしり汗をかきたいのよ。そうすれや身体の脂肪もだんだんとれると思うわ」

六

ちょうどこの頃のことです。M商事の重役で現業の部長をも兼ねていた山路克人氏から「ひとつ奥さんの腕前を拝見したい」と申込まれたのは――。

山路さんとは結婚式のときはじめてお目にかかり、その後当方からも数度お邸にご機嫌伺いに参り、ご家族ともお目にかかりましたし、ゴルフ場ではしょっちゅうご一緒だったから、もうよく存じ上げていました。お年は六十とかきいていましたが、赫ら顔で恰福がよく、いつもお元気で、その姿からはとてもお年を想像することができませんでした。並

ぶと私の方が少し背が高いのですが、パパさんといって甘ったれたことも二、三度ありました。謙の学校の大先輩で、かれが外国勤務できたのも同氏のおかげだそうで、謙の出世街道は同氏によって保証されているのです。しかし謙から

「山路さんが君と試合をしたいといってるんだ。もし負けたら奥さんのお弟子になるというんだよ」

といわれたときには内心困ってしまいました。山路さんは大学時代は柔道の選手で三役だったとか書いていますが、もうその頃から三十五年も経っているのに、現役同様の私が負けるはずがありません。しかし私のお弟子になるとはどういう意味なのか。

「物好きな人もいるものね」

といったきり黙りこくってしまいました。謙には即座に返事しないことが、もどかしかったのか――

「心配ないよ。山路さんはむかしとった杵柄だなんて言ってるけど、要するに年寄りの冷水さ。負けっこないよ。やってごらん」

「あたし負けることをこわがってるんじゃないのよ。何のために試合したいのか知ら？」
「それは、あの人の道楽だと思えばいいだろ

う」

「あたしが勝てばまた会社で評判が立ってあな困るんじゃない？」

「その点は絶対大丈夫。三人きりの秘密なんだ」

「負けたら奥さんのお弟子にしてみらうってどういう意味？」

「おそらく君を先生にして稽古をつづけるということじゃないのかな」

「でもあたし、何かが起るような感じがして気が進まないわ」

「何かが起るとすればいいことが起るよ。君が山路さんの首根っこを押えちまったら、このぼくがどんなに助かるか分らない。ねえ頼む。頼むから引受けてくれ」

こうして不承不承引受けてしまいました。

そこで次の日曜日の午後、指定された場所つまり山路氏の箱根の別荘へベンツを駆り、柔道着持参で出掛けました。人妻が独り住いの男を単身で訪ねるなど社会常識に反していますが、事は三人だけの秘密。しかも勝負は第三者の審判を待たず当事者のみにゆだねるというのですから、これも仕方がなかったのです。

七

別荘は御殿風の素晴らしい住まいでした。

ひろびろとした庭伝いの廊下を通って案内された奥座敷は、むかしお大名が宴会場にでも使ったかと思われるほど広いお部屋です。数えてみますと四十畳敷の大広間です。

「やあ」待つ間ほどなく、山路氏がくつろいだ部屋着で出て参りました。

「立派なお部屋ですこと。びっくり致しましたわ」

「いやあ。終戦直後没落華族の手放したのを安く手に入れましたね。妻の趣味で、東京の家は万事洋式だが、ここはぐっと日本趣味だね。奥さんが見えになってもお通しする応接間がない。そこでやむなくこの大広間へご案内させたわけですよ」

「あたし、こんな大広間はじめて。気に入りましたわ」

「やあ、これや光栄だ。それよりも何よりも奥さんが入って来られたことで、この殺風景な大広間が一面に花が咲いたように明るくなった」

「まあ、お口のお上手なこと」

「お世辞じゃない。本当だ。いつ見てもおきれいだ。それにしても單身堂々と乗込んでくるところ、さすが勇婦ですな」

「あら。勇婦だなんて、いやですわ」

「いや、いや。わたしは、そこに惚れたんです」

「部長さんと試合するというお話、あたし極力お断わりしたんですのよ。でも謙がぜひにというんで、厚かましくもお伺いしたようなわけでした……ごめんなさい」

「いや、謝るのはこっちの方だ。弟子のわたしは先生のあなたをお呼び立てしたりして……」

「まだ勝負もしてみないさきに、どうして部長さんが、あたしのお弟子なんですか？」

「実は勝負はとくについている」

「あら？ それどういう意味？」

山路の語るには、かれの夢の中で何回もあたしと勝負したのですが、まだ一度も勝ったことがないというのです。

「ゆうべなんかひどいもんですよ。背負投、大外刈、肩車と散々に投げつけられた上に、こんどは寝技で痛めつけられたな。こっちはもう虫の息。それなのに奥さんはまだ許してくれない……」

「まあ。部長さんにはあたし、そんなひどい女に見えますの？」

結婚後はすっかりおとなしくなり、課長次

席夫人としてしとやかに振舞っている心算なのに、まだ娘時代のお転婆が言動の端ばしに現われるのか、それが心配でした。

「とんでもない。どこからみてもスーパー・レディだ。しかしわたしと対戦するときの奥さんはとても凶暴になるんですよ」

「おやおや。それはまたどうしてでしょう。」

「おっほっほ」思わず笑ってしまいました。

「御子柴君がいつもわたしに油を絞られていたので、きっと奥さんは夫の仇を討つ心算でいるんだな」

「あら。そんなこと……」

思ってもみないことでしたが、かれの夫の仇という古風な想像は、私をはしゃがらせるに充分でした。

「愉快なご想像ね。たしかに昔だったらあたし、腕にモノをいわせ夫の仇は討ったでしょうね」

「うれしいことを仰有る。こんなきれいな奥さんになら喜んで討たれたいものだ」

「止めを刺してもいいこと？」

かれの巧みな会話の運びにこっちはすっかりペースに巻き込まれた恰好です。言葉使いまでだんだん運つ葉になっていくのが、じぶんでもよく分つたのですが、かれはかえって

それを喜んでいる風なのです。

「その止めを刺されたこともあるんですよ」

「あら、あら」

「あのときの奥さんは朱の具足に身を固め、朱鞘の太刀を佩いていられた」

「さっそうたる女武者ね」

「その姿の凛々しかったこと。この美しい女武者に討たれるのかと思うと戦う前から興奮しちゃってね」

「だめじゃないの。はじめから負けるとあきらめちゃったりしたら……。それでも掛ってきたの？」

「もちろん。あわよくば御首級頂戴せんものと猛然組付いていったですよ」

「ところが女武者の方が強かった」

「お察しの通り」

「妾を何と心得おる。妾こそは武蔵の住人御子柴謙の妻マリなるぞ。下司の分際で妾が首級を狙うとは天を怖れざる不屈者。その素っ首引きちぎってくれるわ——といわなかった？」

「巧い。名調子、名調子。奥さんなかなかやるじゃないの」

「これでも戦国時代の女武者に、あこがれたことがあるのよ」

「道理で……近頃の若い奥さんとは、やはり違ったところがある」

「それであたしが部長さんを組敷き、鎧通しで首を刎ねようとしたわけね」

「馬乗になつてぐつとわたしを見すえた奥さんは神々しいほど美しかったが、その眼は鷹が餌物を取り押えたときのようにすぐく残忍に見えた」

「そう。あたしときどき嗜虐的になることがあんのよ。そのときもそうだったかも知れないわ」

私はこうしていつの間にも山路の夢と幻想の中に誘い込まれ、知らず知らずのうちにその女主人公になり切っていました。

「切先を咽喉元へ突きつけられたときは痛かったでしょ？」

「うん。でもこんな美しい人の手にかかって果てるのは倅せだと思つたね。見上げると奥さんの白い咽喉元からこまかい汗が吹き出して真珠のように光っている。いまわのきわにその美しい汗をこの舌でふきとらせてほしいと願つたが、だめだった」

「夢の中のあたしって随分無情なのね。現実のあたしだったら、部長さんの願いは快く聞き入れて上げるのに……」

「それ、ほんとうか、奥さん。嬉しいことを仰有る」

「お話ししてるうちに身体がむずむずしてきたわ。この広いお部屋で思う存分暴れてみたい。さあ部長さんも稽古着を召してらっしゃい。あたしも着換えるわ」

八

こうして私と山路との奇妙な交渉がはじまりました。彼は巧みに私から野性をひき出したのでした。その晩帰って、謙から

「どうだった？」ときかれたとき

「試合はやっぱりあたしが勝つて部長さんをお弟子にしちゃつたの。その代りこれから毎週土曜から日曜にかけて箱根へ出稽古にいかなくちゃいけないの。辛いわ」と、さも困つたように返事しました。

山路との交渉の内容は謙にも内緒にする必要があつたからです。

「そうか。それはよかった。部長がマリちゃんのお弟子になってくれたら、こっちは大助かりだよ」

「あなた、部長さんに油絞ばられたら、逐一あたしに報告するのよ。きっと仇を討って上げるから」

「夫の仇とはうれしいね。頼むよ」

何も知らない謙は、もう天下をとつたような喜びようです。

「あなた、あたしみたいな強い奥さま持つて倅せとは思わない？」

「マリちゃんはよくにとって太陽だよ。まぶしいほどの存在だよ」

「太陽はドイツ語ではディ・ゾンネ。つまり女性ね」

「そうだ」

「そしていつも上にあるわけね」

「そういうことだ」

「だからあたしこれからは何時も上に位置するわよ。覚悟なさい」

昼間山路を存分に投げ、存分に絞め上げた興奮がまだ身体中に残っていたのか、言葉使ひも上ずり勝ちです。

「これからはときどき暴れたり、駄々をこねたりするかも知れないけど、あたしに従わなきゃだめよ。あなたのボスがあたしのお弟子なんだから」

「はい、はい。何でも言うことをきくよ」

「馬になれって言ったら馬になるのよ」

「うわあ。馬にされちゃうのか」

「いやだと言っても、押えつけて無理にも跨ってやるから。いいこと？」

「うむ。仕方がない。腕力じゃマリちゃんに敵わんのだから」

「それもこれも大事な奥さまを山路さんなんかへ差し出した罰よ」

「うん。申し訳ない」

「申し訳ないと思ったらそこへ四つ這いになるの。いまから初乗りを試みるわ」

情けなそうな顔をして四つ這いになりましたが、わざと無慈悲に振舞い、タオルをとると口にくわえさせ、どっかとその背中に跨りました。そしてそこら中を這せながら――

「馬にされてどんな気持？ 情けない？」

「それよりもマリちゃんの顔が見えないからつまらないよ」

「その代り脚を拝ませて上げる」

私は上体を心持ち反らし、肩越しに牝鹿のようにすくっと伸びた恰好のいい脚を思い切り伸ばしました。彼は首を曲げてそこへ唇を当てました。くすぐったい快感が脚から背筋に伝わって参ります。

「この世の三楽とは男上、馬上、厠上とはよくいったものね」

「なんなの？ その“し上”というのは？」

「厠のことよ。男を下にしたとき、馬に跨ったとき、厠で用を足すとき、これがこの世の

三楽なの」

「さすが国文科出身だけあって、えらいことを知ってるね」

「あたし何んでも知ってるわよ」

「偉いんだなあ」

「偉いからこそ、こうやってあなたを馬にしちゃったのよ」

「うむ」

「この馬は背が低く、のろのろして乗心地は悪いけど、将来は課長、部長という出世馬らしいから我慢したげる」

九

こうして謙を肉体的にも精神的にも征服してしまった私ですが、じいや夫婦には昔どおりの優しい若奥さまとしていろいろ気を遣ってやりましたし、通いのお手伝いさんにも従来通り適当な威厳を示し、また夫婦仲のよいところを見せつけてやりました。この種の人たちはスキを見せると何を言い触らすか分つたものではないので……。しかしお手伝いさんが帰り、ぢいや夫婦が別棟に退き、私たち二人きりになると、とたんに女王さまになつてしまう私でした。

「箱根へいってから君はすっかり変わっちゃったね」

「あたりまえよ。あんな風変りで物好きなおじいさんのところへ行ってるんだもの」

「山路さん、それほど風変わりなのか？」

「風変りじゃないの。じぶんの娘みたいなものに柔道の試合を申込んだり、負けたら弟子になるなんて……」

「それもそうだな。しかし君、いやになったらご辞退してもいいんだぜ」

箱根へ行くようになってから、私のご乱行が募る一方なので、さいきんは彼もいささか持てあまし気味になっているようでした。

「はじめからイヤなのよ。だからはじめに言ったじゃない？ 何かが起るような感じがするって……」

「そうだったね。ぼくがこんなこと気軽に引受けたのがよくなかった。ただ君が部長に気に入られれば、こっちにもプラスになると思ってたからなんだ」

「つまり女房をダシにしたわけね」

「そ、そ、そんなつもりじゃない」

「何よ。そのあわて方！ 卑怯よ。じぶんの本心を偽るなんて……あたしがこんなに我儘になつたのもあのじいさんのおかげなのよ。じいさんがあたしの野性をひき出しちゃったの。はじめ行くときはイヤでイヤで仕方がな

かったけど、これもすべてあなたのためと思って出掛けたわけよ。しかしあのじいさんを投げつけ、絞め上げているうちに、正直いって、あたしとってもいい気持になっちゃった。激しく動くので、ほれこの通り、身体の方もまた元通りキリッと締まってきたわ。だから今となっては美容のためにも止めるわけにはいかないの」

「でも先方は年寄りだし、そのうちイヤだといいい出すかも知れないね」

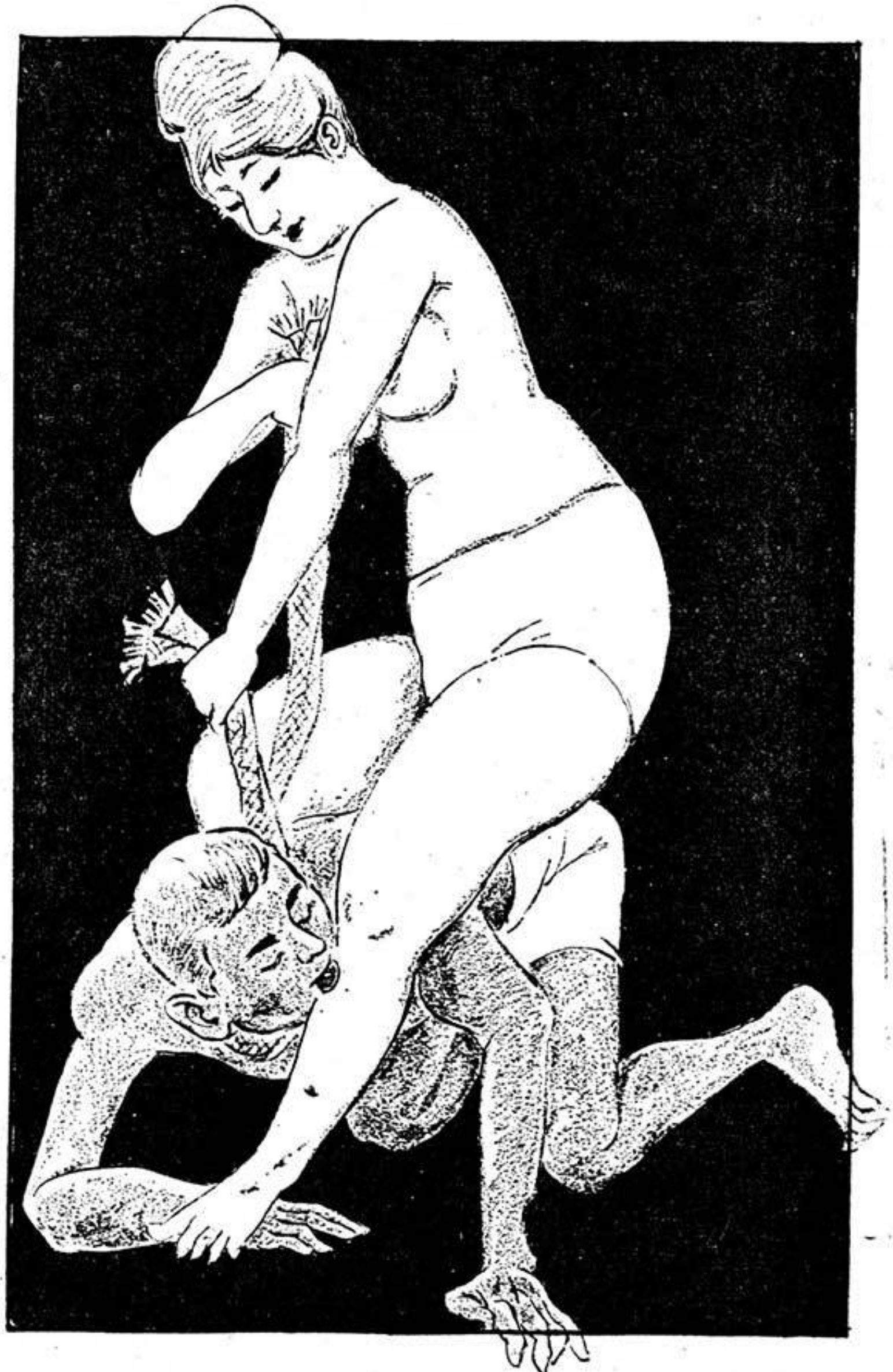
「イヤだなんていうもんですか。ますます熱を上げるにちがいないわ。そのわけは言えないけど……」

「どうして、そのわけがいえないんだ？」

「あなたに関係ないことよ。心配しないで委しておきなさい」

「いえないといわれると余計ききたくなる」

「しつっこいわね。あんまりうるさく言うとな馬にしちゃうわよ」



とたんに彼はいかにも情けなそうな顔をして黙ってしまいました。馬にされるのがとてもイヤなのです。それは乗手がいったん跨ると冷酷無情に乗り回わし、乗り潰すまでは止めないということもあったでしょうが、何よりも屈辱的に感じ、あまりにもじぶんがみじ

めになるからだだったらしいのです。

「おっほっほ。何よ、哀れっぽそうなその顔……」

「馬だけは勘弁してくれ」

「じゃ、箱根へ行くことについてぐずぐず言わないか！」

「言わない」

「たまには二晩か三晩泊るけど文句はいわないか」

「二晩も三晩も？」

「不服か」

「どうして、そんなに泊る必要があるんだい？」

「また余計なことをきく」

「夫としてこれはとうぜんじゃないか」

「うるさい！」

「何がうるさいんだ」

「こいつめ、馬にしてやる」

私が立ち上ると、彼はあわてて両手で腰にしがみつき、訴えるような眼差しで見上げながら哀願しました。

「マリちゃん、僕が悪かった。許してくれ」

「馬にされるのが、そんなに辛いのか」

「うん」

「じゃ馬だけは許してやる。その代り今後いっさい無用の差出口は許さないわよ」

勝ち誇った私は断然とこう言い渡してやりました。

一〇

もうこの頃ではだれが何んといっても私の箱根行きを止めることはできなかったでしょ

う。酸いも甘いも知り尽した山路は女をもつ

とも欣ばす方法を知っていましたし、私もまた彼と対するときは野性をむき出しにしてぶっかかり、嗜虐趣味を充分に満足させることができました。それにもう一つ彼のプレーの発想の素晴らしさ、加えてお金はたんまりあるので衣裳、舞台装置とも満点なのです。たとえば私が「女武者になりたいわ」といえば、すぐ出入の商人に命じて小道具を取り寄せますし、「女武者はやっぱり馬上で悠然と構えなくては貫禄が出ないわね」といえば、さっそく芝居の道具方に注文して実物大——といってもロバより少し大きい位のものでした——の馬を布でつくらせました。仕掛けがないので動きませんが、しかし布製の馬は乗心地は上々です。鞍を置き、鐙（あぶみ）をつけて、その背にどっかと跨れば、もうそれで絵に画いたような女武者の出現となります。

着装は普通足の方からはじめます。まず馬乗袴を穿き、草鞋掛をつけ、それから脛当てをつけます。これは野球の捕手のレガーズと同じもので、材料は皮でも金属でもいいのですが、私の場合は馬革をなめした素晴らしく光沢のある脛当てでした。

これで腰から下の武装は終わりましたが、腰から上の武装が大変です。これは源平時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代と戦闘の形式がちがうにつれていろいろと変化しているので、完全武装の仕方がそれぞれちがいます。こういうことにうるさい山路は考証家にいろいろ専門的な意見をきいて、きょうは源平時代、来週は戦国時代という風に注文します。私は彼の説明をわくわくしながらきき、まるで子どもみたいに歓声を挙げながら身仕度をするのが常でした。

時代別の着装をここでくわしく書いていたらキリがありませんので、ここではごく簡単に申し上げます。胴着は乗馬に適するように裾は開いています。逆に胸はぐんと狭く、その代り脇は弓を引いたり、組打ちに便利なようにうんと楽になっています。胴着の下には草摺を垂らし腰から下を保護します。これも時代によってちがいますが、大鐙の場合は一

の板、二の板、三の板、四の板、菱縫の板の五股から成り、前と後と左脇に三枚、右方脇に一枚垂らすのです。材料はもちろん鉄金具で、槍を使うときはこの草摺をはね上げるようにして突かないと敵に致命傷を負わすことはできません。胸部は鳩尾板と桟壇板とで保護するのですが、私はここは略して剣道で使う竹製の朱塗の胴で代用しました。そこで、大袖もやはり朱塗の竹でつくってもらいました。佩く陣太刀もやはり朱鞘にしてもらいましたので、目の醒めるような美しい女武者ができ上り、大鏡の前にたつとわれながら惚れ惚れと見とれてしまうほどでした。籠手はふつうは鎖か、鉄金具で仕立てるのですが、山路の注文で脛当と同じ馬皮のなめした光沢のあるものにしました。

太刀は竹光にしないで真鍮にしました。竹光では軽すぎて実感が出ませんし、といって本物では危険です。ただし敵を組敷いて止めを刺すときに使う鎧通しは、真剣をえらびました。長さ七寸、反りのない重厚に鍛えた短刀です。これによって、首を刎ねられるときの山路の恐怖の表情は真に迫るものとなりました。完全武装した女武者に馬乗に組敷かれしかも咽喉元数センチのところに白刃が擬せ

られているのですから、身動きどころか、首を動かすこともできません。もしそんなことをしたら本当に大怪我をしてしまいます。

「どうじゃ。観念するがよい」

勝ち誇った私は傲然とこう言い放ちます。

山路は恐怖におののきながら必死になって助命を嘆願いたします。「お情けを……。お許しを……。どうか命ばかりはお助けを……」

「見苦しいぞ。世が世なら妾の傍近くにも参れぬ汝ごとき軽輩を、マリ姫がじきじきに成敗するのじゃ。有難く思うがよい」

「天下の美女マリ姫さまの尊き御手にかかって相果てるそれがしは思えば天下の果報者でござりまする」

「その通りじゃ。何かこの世に言い遺すことあらば特別の慈悲をもって叶えてやろう。さあ、何なりとも申すがよい」

征服者の言葉というものは使っていてまことに気持のよいもので、ことに私のように嗜虐趣味をもつものには、じぶんの言葉に酔ってしまい、気分はますます高まってまいります。

「有難き幸せにござりまする。この上は思いませんが、ただ気になりま

(おんかんばせ)」

「妾の顔がどうしたと申すのじゃ」

「姫のおんかんばせを斯くじきじきに拝しておりましますうちに、この世に未練が出て参りました。幸いご助命いただければ一生姫の奴隷としてお仕え申上げる覚悟でございます」

「左様か。さらば命は助けてやるほどに一生妾に仕えるのじゃ。よいか」

「はッ。馬同然にコキ使って下されませ」

「たわけめ！」私のこの一喝に山路は震え上がったようでした。「戦場で馬は命の次ぎに大事なものの。汝ごときは、馬の足許にも及ばぬ」

「恐入りましたござりまする。ならば如何致せばよろしゅうござりまするか」

「妾の厠の後始末でもするがよい！」

「姫のお厠の？」

「そうじゃ。不服か？」

「勿体ない。恐れ多い極みでござりまする」

それまで恐怖におののいていた山路の顔面にはみるみる喜色が溢れて参りました。会社では、部課長の人たちをアゴで使っている彼が、いまやあわれにも清掃人夫以下に下落してしまっただけです。しかしそうした哀れな境遇に突き落したのは「若くて強くて凄女」

の罪でしょうか。それとも「老いて弱くて哀れな男」が自ら蒔いた種でしょうか。

もともと、女武者劇の結末がいつもこうなるとは限りません。馬上の女武者が深傷を負い、下賤なるこの老武者の下敷にされることもございます。彼が使用するたんぼ槍（槍先きを綿で被い布でくるんだもの）には墨汁がしみ込ませてあり、私が受け損じると具足のどこかに黒々と墨の跡がつきます。ですからたとえば私の右なら右の太腿に墨の跡がつきますと、格闘の際右脚を使うことができないことになります。こういうルールをきめましたので、いざ組打となってもかならず私が勝つとは限りません。また馬のどこかに墨の跡がつきますと、私は落馬しなければならぬルールになっていますので、家庭で謙を押えつけるように簡単には参りません。しかしまたそれだけに張合いもあり、力や技を出し切りますので、柔道の乱取とはちがった味合いがございます。組打の詳細なルールや経過など書けばご参考になると思いますが、それは紙幅を不当に割いていただくことになり、他の執筆者にご迷惑をかけますので、今回は省略いたします。ただしもし読者のご希望があれば稿をあらためて、詳細をご報告するこ

とにしましょう。

一

凝り性の山路は私を女武者のほかに奥方や姫君、あるいは大奥の物凄く腕の利く御女中に仕立て、勝負を挑んで参ります。このときの衣裳や小道具もまた凝りに凝ったもので金にあかせて準備するのです。お部屋は厚い褥に木枕、それに雪洞といった時代物。衣裳も出入商人から歌舞伎風のものを取寄せ、私には房々とした長い黒髪の髷をかぶせるのです。ただし、お歯黒だけは頑強に拒絶しました。歯を黒く染めるなどいまの若い女性にはとてもできません。

劇の構成はこれも女武者と同じにいろいろで、とても長くなりそうですので省略することに致しますが、はじめ一番困ったのは寢殿に忍び込まれたときの組打でした。素肌に長襦袢だけの寝姿で格闘するのですから馴れるまでは大変な苦勞でした。私の体臭がバタ臭いといって身体全体に香をたき込むほど凝り性の山路のことですから、ブラジャーやパンティの使用を認めるはずがありません。それでは時代的气氛が出ないというわけです。たしか時代の気分はでないかも知れませんが、素肌にお寝巻だけでは思い切った技もかけら

れないと思い――

「困るわ。もしも、帯が解けたらどうするの？」

「それを逆にとって曲者を叩きつけてこそ女豪なんですよ。第一、むかしはみんなそうだった。だから現代の女豪マリさんにそれができないはずがない」

「それもそうねえ。じゃ、あたしもよく研究してみるわ。素っ裸にされちゃたまんないから……」

「マリさんの素っ裸も、また素晴らしいだろうな」

「あら、失礼！」

もうこの頃はこの程度の露骨な言葉に腹も立ちませんでしたし、もしまたかりに山路が劣情をおこしても叩き伏せるだけの自信もできていましたが、かりにも人妻にたいし素裸とは失礼なのでちょっと怒った素振りをみせてやりました。男というものは甘い顔をするとうすぐ図に乗るから困ります。

「帯をしっかり締めていても、組打になったら胸ははだけるし、裾も乱れるし、やっぱり困るわ」

「しかし奥方だろうと姫君だろうと、また御殿のお女中衆であろうと、曲者を取抑えると

きはそんなことに構っていなかった。そういう時代だったんですよ」

「難しいのねえ、でもやって見るわ。姫御前あられないという言葉も、きつとそんなところから出たわけね」

「そうなんですよ。そのあられない恰好を見せていただきたいわけだ」

「部長さんの物好きにもほとほと呆れた」

一二

彼のかいた劇の一つに「妖婦マリお部屋様の巻」というのがありますが、このときの私はもつともあられない恰好で、彼を責めねばならないのです。寝所に黒覆面の武士が忍んで参り、矢庭に馬乗に跨りお部屋様を刺そうとしますが、むざむざ刺されるようなお部屋様ではありません。

「無礼者！」大喝一声、その左手が伸びたと見るや、太刀を持った相手の右手首を捻じ上げながら、合気道の極意で横倒しにしています。

「さっしたり！」曲者は口惜しそうにそう言っただけで身体を起そうとしますが、もうそのときはお部屋様の逞しい脚が身体にかかり、半身の姿勢で上から押えにかかっているのになかなか起き上げません。しかし手にした太刀だ

けは離すまいと必死です。

「えい、面倒！」そう叫びざま、お部屋様は裾の乱れも構わず、のしかかりざま柔術（やわら）の腕がらみの要領で、相手の右腕を両脚に挟んで逆にとります。

ぼろりと落ちる太刀。しかし腕によほどの自信があるのでしょう。お部屋様はそんなものには目もくれず、こんどは馬乗に組敷いて

「何者じゃ？ 名を名乗れ！」

「ム、む念、残念。汝ごときに……」

「何？ 妾のことを汝とな？」

「……………」

「さては家中にても定めし名のあるものであらう」

そういってお部屋様は曲者の覆面をとろうとし、片方はとられまいとし、ここでもう一度格闘がおこなわれますが、結局はまっとうから馬乗にのしかかられて、とられてしまします。

「やッ！ 其方は家老の山路ではないか」

「いかにも山路だ。お家横領をたくらむ淫婦に天誅を加えるために参上した」

「おっほっほ。武芸にかけては家中随一といわれた横山武太夫でさえ、妾にかかれば大人

と子供じゃ。其方ごとき老いばれが、この妾に何ができると申すのじゃ」

「じゃによって、卑怯とは存じたれども夜中に乗じ寝所を窺ったまで……………」

「それがこのざまか！ あっはっはっは」

お部屋様は上半身を大きく後ろへそらせての高笑い。

「笑えば笑え」

「これがおかしゅうのうて何んとする。あっはっはっは……………なれど山路、これも腕の相違とあれば致し方あるまい。どうじゃ、今後は心を入れ替えて妾に忠義を尽さぬか。其方が妾の味方となれば百人力、嬉しう思うが、どうじゃな？」

「ええいッ。うるさい、聞く耳もたぬわ」

「妾が頼んでも厭じゃと申すのか」

「うるさいわ。斬れ。早く斬れ」

「うっふっふ。老いばれだけに頑固じゃな」

こういうながらお部屋様は上体を前にずらし、あらわな恰好で山路の咽喉と首とお尻で圧倒しようとしています。

「ええいッ！ けがらわしい！ 退け、退け！」

山路は両腕に必死の力をこめて顔面を圧している重石をついにふりのけますが、それがかえって悪く、お部屋様の嗜虐性をかえって

かきたててしまいます。

「何をやるのじゃ。無礼であろう！」

このとき山路は再び起ち上り、勝負を挑みますが、もうスタミナはすっかりなくなっているのでお部屋様の一人相撲みたいなもの。

こんどはうつぶせに組敷き、みずから帯を解いて、山路の両腕を縛り上げてしまうのです。そして次ぎは足で蹴返して仰向けにし、その上にずしりと跨ります。跨っている方は相手が無抵抗なので楽チンですが、組敷かれています方は腕がはずれる思いで大変な苦しみです。五分か、十分この姿勢でいると、さすがの山路も悲鳴を挙げはじめます。自分でもこんな風に仕組んでおきながら……。しかし

私の一番あられもない恰好を見るのですから、この位の苦しみはとうぜんだと、いつも言っています。

「うむ。うむ。うッ。苦しい」

「少しは思い知ったか」

「思い知りました。お許し下され」

「だが許さぬぞ」

お部屋様の眼は残忍に輝き、口許には冷い

笑みが浮んでいます。

「えッ？ 何と仰せられる？」

「妾をこのような恥しい姿にさせて、それで

済むと思うか」

「勿体のうござります」

これから先きのことはちょっと紙上での公開をはかります。お部屋の一隅にはお部屋様専用の朱塗りの御虎子があり、この御虎子をめぐって山路は人間以下に散々に辱められます。

あとで考えると、われながら恥しくなり、顔をあからめることも多いのですが、昂奮するとわれを忘れてしまうのです。でも箱根で散々あばれたあと、大磯へ帰ると謙には逆にならざる大サービスして上げる気になります。そしてとっても優しく親切にもなるのです。

(完)

本誌最近号在庫案内

○本誌最近号は左記の通り在庫しております。送料は当方にて負担いたします。

○昭和35年5月号以前の号は全部売切れとなり在庫ありません。

○各月号の総目次は、漸次誌上に掲載いたします。

昭和35年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和35年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和35年8月号 (定価三〇〇〇円)

昭和35年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和35年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和35年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和35年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和36年12月号 (定価三〇〇〇円)

昭和36年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和37年12月号 (定価三〇〇〇円)

昭和37年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和38年12月号 (定価三〇〇〇円)

昭和38年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和39年12月号 (定価三〇〇〇円)

昭和39年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和40年12月号 (定価三〇〇〇円)

昭和40年12月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年1月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年2月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年3月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年4月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年5月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年6月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年7月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年8月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年9月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年10月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年11月号 (定価三〇〇〇円)
昭和41年12月号 (定価三〇〇〇円)

☆

★

臨時
増刊

写真と絵画

文献——特集号

好評！ 目下発売中

定価一部五百円 (送共)

略号「文献」

【第一グラビヤ】

自己愛の女神を写す……………塚本鉄三・構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリ子さんと共に……………由岐敏夫・構成
棒責め愉悦……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子

【巻頭口絵】

△絵物語▽白ターバンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲▽……………第五図章△美容▽
第二図章△飼育命令▽……………第六図章△洗腸▽
第三図章△調教▽……………第七図章△矯正▽
第四図章△訓練▽……………第八図章△仕上げ▽

【第二グラビヤ】

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマーの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

【第二口絵】

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞らい……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟の目ざなし……………五月亜紀子
鼻腔測定……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子
憧れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使 (トカゲグループ)……………由岐 敏夫
1、「みんな剥いじまない」
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……………絹川 文代
悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
厳重な本縄掛け……………梨花悠紀子

【写真版アルバム】

裸女争闘場面……………絹川・大塚
浣腸部屋の悦楽ムード……………大塚 啓子
浣腸器を握って……………大塚 啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り……………松本アサ子
 エビ縛り二種類……………松本アサ子
 血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
 サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
 縛り過程の構成……………大塚 啓子
 鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

【本文・解説】

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐、
 絵物語「白ターバンの女」……………辻村 隆
 新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
 (告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
 (告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
 自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

【第三グラビヤ】

台所のめしうど……………新井マリ子
 飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
 椅子に呻のく……………新井マリ子
 長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
 豊満への擦過……………遠藤百合子
 美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
 ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
 床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子

煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
 姐上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
 ニツ折り縛り……………大塚 啓子
 鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
 上からと横からと……………梨花悠紀子

【第一オフセット写真】

神さまへの人身御供……………絹川 文代
 腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
 足首の縄を解く……………大塚 啓子
 緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子
 光と影の表と裏……………梨花悠紀子
 縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
 女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
 女相撲「吊り合い」……………A氏提供
 爪切りと白足袋……………浜 千代子
 高手小手腰縄……………梨花悠紀子
 庭園の塑像……………絹川 文代

【第四グラビヤ】

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
 ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
 バンド着用後手縛り……………東浦ひかる
 荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子

下着の散乱する中にて……………新井マリ子
 用意周到なる馴致……………新井マリ子
 白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
 浣腸器の恐怖と幻想……………大塚 啓子
 厳しき亀甲縛りの美しさ……………梨花悠紀子
 くさり、くさり、くさり……………長野 良子
 団子鼻をいためる……………長野 良子

【第二オフセット写真】

美しき乳房……………長野 良子
 愛らしき羞らい……………長野 良子
 仰角のたずら……………長野 良子
 顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
 森の中のニンフ……………絹川 文代
 緊迫の演技(斬られる女)……………愛川・田中
 ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
 SMの魅力プレイ……………三木・浜本
 前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
 黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
 Mフォト陳列——長靴にもだゆ。
 鉄鎖と手枷の下で。
 凌辱される男ドレイ。
 煙草とローソクで——
 愉悦ポーズ二景……………絹川 文代



最近めっきり同好者が多くなり先日拝見した貴誌十月号には十五頁にわたり、通信が出ておりました。貴誌が如何に発展されているかがよくわかります。また女性の方も多くありましたね。貴誌の記事の中、辻村氏のモデル女性緊縛レポートを毎回のしく読んでおりますので、どうぞよいレポートを掲載して下さいませよう辻村氏に特別にお願いします。モデル女性の手記も見逃すことはありません

ん。先月は大塚様でしたね。これだけ得がたいモデルさんは少いでしょう。絹川様など貴誌のモデルの写真は他に見られぬほどよく出来た写真が多いことで私達にとっては、嬉しく存じます。よいモデルでポリウムのある、そしてバラエティにとんだ写真を多く掲載して下さいませようお願いします。貴誌の中で特に次の記事が興味ありましたので、これからも多く載せて下さい。奇譚三十九夜物語（辻村氏）、モデル女性緊縛レポート（辻村氏）△SMプレイ・ガール△モデル嬢の手記、体験談。なお、SMマニア同志で交際出来る機会を与えていただきたく存じます。ぜひよろしく。貴誌の益々の発展を祈ります。（大阪△長田生△）

九月も半ば、朝夕めっきり涼しくなってきました今日この頃、編集部皆様にはおわかりありませんか。小生奇ク十数年来愛読させていたでおります。奇クが一時発禁となり少し気がかりでしたが、見事カムバック現在の発展ぶり真に編集部ご一同様の並々ならぬご努力の結果と唯々敬服せざるを得ません。昭和二十五年いやそれ以前からの愛読者ですが投稿は始めてです。今後ともどうぞよろしく。ところで小生ゴムマニアの一人ですが、ゴムマニアの皆様是非交歓しましょう。東京の津沢様、佐田様、是非文通したいですね。それから泉佐野市にお住いの阪本和子様、小生不用の奇ク（旧号）昭和二十九年一月号から十二月号、昭和三十年一月号から五月号、ご希望ならおゆずりします。また他に大阪在住の読者の方でご希望ならお分けします。ゴムマニアとしていろいろ書きたいこともありすが、あまり長くなりますので今日はこの辺で、いずれまたゴムマニアの皆様よろしく。また近い内お便りします。（西淀川△T・Y生△）

野中様、そして私と同じ心境の皆様、十一月号の健全な発展を心よりよろこびましょう。貴男様のネル布に関する告白、とてもうれしく拝見出来ました。私も以前ネルについての告白を致した事のある淋しい者でございます。女性、そして好みの女の生活への羨望に胸をいためている毎日でございます故に、やはり着物姿そして下着

特にオコシはネル地へ強いマゾ感を感じております。誌上名も強い「いとえ」とさせてもらった気持だけは女でありたいのです。あなた様と同様に、今ではほとんど見られない布耳に淡青色のついたトキネルや赤ネルが好きです。今つまらない文をまとめておりますが採用になりましたら、その中にいろいろな事を記しますのでよんで下さいませ。直接の文通は内気な私ですのでこまります。誌上でお話申上げるのがやはりお互いのため一ばんよいと思いますのでよろしくお願い致します。古い本誌中にはネルのオコシに関するものは、私のもの（旧特大号一月）しかないと思います。私は好みの記事のみ綴っておりますので旧号のお貸し出来ない事お許し下さい。人にはわからないよろこびを持つ私達は、かえって幸だと思っております。そして世の男女の人達の中でもきつとこんなマゾ感を理解して下さいる人がおられる事と存じます。（△里乃糸枝△）

十月号の口絵「打首のプレイ」は、楽しいものでした。黒覆面、ふんどし一つ的首切り男のスタイルもいかしますが、いけにえの女

の生首の擬態フォトも美事なものでした。ただ血糊を使っていないので、少し迫真力は欠いていました。が、略、生首マニアにとっては楽しい図柄になっていました。今後は首斬り人も女性で、しかもふんどし一本の姿のものを望みます。それに日本髪的女性ならば、なおさら結構です。裸女血斗、女のふんどし姿に魅せられている私は日本髪の女のそれを特に望んでおります。久方ぶりの雪崎氏提供の女相撲の図も嬉しい贈り物でした。力一杯の組み打つ豊満な美女の相撲図絵としては今までの中でも最も力の溢れた作品です。長く私のアルバムに残ることになるでしょう。豊満な身体にきりりとしめこまれたふんどしによって、さらに引き立ち臀部の双丘を割ってこいこむふんどし、また豊艶極まりない美女の内股にしっかりとしめられたふんどしの魅力が溢れた秀作だと思います。私の好みからいえば二人の美女が日本髪でないのが残念ですがこれは今は言いません。とにかくふんどしの一本の肉体美溢れる女相撲図絵でした。来月号から増頁の由、今後とも女斗美、女相撲、それにふんどし一本の裸女決闘図も是非お願いします。久

方ぶりの女のふんどし姿に感激のあまりこれを認めました。前川様室井様の通信が今度みられませんでしたが残念に思います。次号の通信を待っています。(女斗彦)

○

大阪の高田章子君、読者通信面白く拝読いたしました。貴女は現在趣味を同じくする方と交際しており幸福です。私も同じ会社のBと交際しておりますが、貴女と相違するのは私がSで彼女はノルマルだという事です。勿論彼女は私に協力的であり緊縛に耐えてくれます。(奇巧の写真よりは勿論もっと強烈です)が、Mでないのてただそれだけに終わってしまうことです。然し私は少くともMでないにしても協力的な女性を得て幸福ですが、彼女は何時結婚してしまいか解らず不安もあります。私のような筆不精な者が何故投書する気になったかといえ文中文露癖が強いと書いてあった事です。私の好む女性はMであるだけでなく露出性という事です。勿論会社のBGにもこれを強いるのですがどうしてもこれだけは駄目です。それで貴女をみこんでたのみたい事は、次の事項につき、次の読者通信に返事してもらいたい。一、

どの程度の露出癖があるか。二、服装、年間を通じて書いてもらいたい。三、どの程度の緊縛が好きか。四、どんな緊縛が一番好きか。五、好きな責めについて。六、緊縛あるいは責めの時、裸が好きか着衣か。七、緊縛または責めは屋外が好きか屋内か。八、例えば私の好きな一例は、全裸緊縛の上、特殊なレインコートを着せ、映画館へつれて行ったり、公園を歩いたりする事です。九、このようなことは好きかどうか。九、緊縛に使用する縄はどのようなのが好きか。十、貴女の身長、体重及び身体の柔軟性、例えば自分の手を後へ回せば、どの程度まで上へ上るか。以上十項目に付、是非読者通信で返事して下さい。私も今までの経験などお知らせしたいと思ひますのでたのしみに待っております。(神戸市三宮八山田道夫)

○

待望の十一月号を手にとってみて、喜びを禁じ得ませんでした。久しぶりの増頁で、特に読者サロンの復活、その他女斗美マニア、血斗マニア、生首、無惨絵マニアの私にとって久方ぶりによみごたえのある内容でした。特に前川様の生首絵、女斗彦様の裸女血斗の

イメージ、雪崎氏提供の娘相撲の図といい大に堪能いたしました。前川様の生首絵の中では、打ち取った相手の女の生首の切口からしたたりおちる血汐を呑んでいる女武者(御守殿と思ひますが)の図が秀れていました。もう少し誌面に大きく出しておればなお一層よかったですと思います。私の好みからいえば、上半身の図よりも全身図の方に好むと思います。そして足下に首のない女の屍をふみつけていればなお結構なものとなりましょう。勿論これを一步すすめてふんどし一つの裸の女達のそれであれば何もういふことはありませんが、女達の演ずる血みどろな無惨絵模様にあこがれている私にとってはこの二枚の絵がこの上ない贈り物です。今後ともお手持の力作の中からどんどん誌上に発表されるようお願いします。女斗彦様のイメージもこれまた素晴らしいものです。東西を代表する美女がふんどし一つのあられぬ姿で血みどろな闘いの末、遂には双方とも血汐の海の中は死に果てるという図は想像するだけでも美事でしょう。女斗彦様の文面からも、美女の流す血汐の香が漂ってくるように思います。ただ下に添えられ

ていた絵だけはいただけませんでした。せめて取組み合っている女がふんどし一つの姿であればと思います。切角のふんいきがこれではぶちこわしです。雪崎氏の娘達の相撲の図も、うれしいものでした。はつらつとしたふんどし一つの裸の娘達のむんむんとするばかりの色香が体臭とともに匂ってくるようでした。今度は一つ日本髪のお古風な娘達の相撲を描いて下さるよう切望します。女斗彦様、前川様とも今後大いにマニアのためにがんばって下さい(室井英山)

○ 錦秋の候読者の皆様お元気ですか。さて十月号で会津若松では白虎隊を偲んで若い女性たちで結成されている「ハラキリ会」がある。とこの欄で紹介されたという某記事を見ました。この記事を最初に紹介されたお方本号を見られまして、正確な場所、その他詳細をお知らせ願いたいと存じます。なお古く発刊されました「女体切腹特集号」をお持ちの方お譲り願えまして幸です。(福岡市八上崎健太郎)

○ 奇クを約三年愛読している大阪市民です。S的な私ゆえこの本

は、私の夢を十分かなえてくれます。S的といってもあまり極度に激しいものは好みません。やさしくあるいは強く責めてみたい。自分のこの手で女性を縛ってその美しさに見とれていたい。それが私の長い間の夢です。どなたか、この夢を現実にしていただませんか。当年二十二才身体は健康そのものです。もしそのような女性がおられましたら費用は一切私が持ちます。(失礼ですが)秘密は必ず守ります。一日も早くそんなM的な女性に逢いたい。そしてお互いに健康なプレイでたんのうしてみたいのです。M的な女性の方ぜひお便り下さい。(大阪市八中河生)

○ 読者のみなさんお元気ですか。ぼくは今年二十一才になる学生です。灰色の受験時代から読者になりました。全く灰色の中の一沫の光としてK誌は害になるどころか適当な息抜きの役目をしてくれました。おかげで大学にはストレートでパスすることも出来ました。K誌は生涯のはん侶となりそうです。十九才の時からですからかれこれ二年にもなります。いろんな人の手記・告白を読むにつけ、ま

たグラビア写真をみるにつけ、今まで自分をその中の加害者として想像することで満足していましたが、最近では直接に自分でプレイをしてみたくてたまらなくなりました。まだ青二才の癖にと、思われるでしょうが、Mの女性の方でパートナーになっただけの人はいらっしゃいませんか。ぼくはまだ学生ですから、経済的にはあまりお役に立てませんが、誠意と真剣さだけは他の誰にも負けないつもりです。またお互いの名誉を傷つけるような事も絶対いたしません。Mの女性の方(年令は問いません)誌上にて通信下さい。よろしく願います。(神戸八大山孝一)

○ 先日書店にて立読みをしている内に貴誌を見つけて思わず胸がドキドキしてくるのを覚えました。私は女性の下着、ことにパンティに異様な興味を持っているのです。小さい時、私の家には若い芸者(私の家は芸者置屋なのです)が洗濯をして干してあった黒い月経帯をはきそのゴムのヒンヤリとした感触が何んともいえないかったのが私を今日に到らしめる原因だったようです。それから

芸者がお座敷へ出かけた後、彼女等の部屋へしのび込んで押入をかきまわしてはパンティを引っ張り出してそれをながめては興奮していたものでした。現在では普通のパンティばかりでなく、メンス・バンドに大変興味を持っています。メンス・バンドも一昔しの前開き(黒色が主)からピンクのナイロンメンス・バンドへ、そして現在ではストリップパーのはくツンパのようなパンネットと変わってまいりました。貴誌でその月経バンドを着用したフォトがあるのを知り、是非拝見したいと思い筆を取った次第です。これから貴誌を愛読して行くつもりであります。グラビアにも是非メンス・バンドを着用したものを載せて下さるようお願いいたします。(新潟M・T生)

○ おなつかしい奇クのお姉さま方益々発展していってほしいやうな様子で本当に結構ですわ。あたしもお仲間に入れて頂いた女装愛好の一人なの。日本全国に数万と想像されるお姉さま方皆さんで協力して一人で三人以上の仲間をつくりましょうよ。本当の女性と気持の上で少しも変わらないと思われぬあた

し達の生活のある時間を自由に女
装して思い切り女性的に振舞って
何が悪いのよ、ね。あたし達が生
活にある張合を持てる女性への転
換した時間こそ最も楽しく有意義
だとあたしは思うの。あたしは田
舎に住む公務員ですの、周囲がう
るさいから女装は近くの町に出か
けて行くの。それは五十近い芝居
道具貸しをやっている方のお宅の
一部を借りているの。その方は以
前は女形をやった事もあるとか。

今は歩き方や身体をねちってふと
ふり返ったりする時にその面影を
見せるけど服装などはあまり変り
はない様子ですの。でも女装した
いってあたしがお話したときは喜
んで承知して下さったのよ。初め
のうちはそこでいろいろな道具を
借りたの。はじめて丸髷に結った
カヅラで芸者になった時の感激は
今も忘れられないわ。あたしは思
い切って素裸になり自分で用意し
て行ったトキ色のモスのお腰だけ

になって鏡台の前に座ると腕から
首、顔のあたり一面にピンツケを
一面にのばして塗り込みその上に
固練の白粉をとかして刷毛にふく
ませて、あたり一面に塗りひろげ
ましたの。何とグロテスクだと驚
きましたけど海綿でおさえ紅をたた
いたり、粉白粉をパフでつけてい
くうちに間違えるほど明るさと美
しさを増してくるじやないの。茶
色の眉墨で三か月に形をととのえ
口紅をさすほどに、あたし顔は本

当に優しい女のそれに変って行く
じやないの、素晴らしい。鏡台から
瞬間も目をはなさなかったわ。幾
枚かの写真をいろいろなポーズで
撮りましたけど、それ以後も何べ
んも繰り返しているうちに数百枚
もになったもとはこの時のもので
したわ。田舎の店では買いくい
のでデパートやマーケットに出か
けてズロース、シミーズ、長襦袢
帯、タイトスカートそれに化粧用
品など買いあさりましたわ。時に

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)	一組一枚	一〇〇〇円
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)	五組五枚	四〇〇〇円
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)	十組十枚	七五〇〇円
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)	二十組二十枚	一四〇〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め(竹野)	B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剥いだバタフライ(関谷)	B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)	B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)	B 12	糸纏わぬ股間縛(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛(関谷)	B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)	B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突出てエビ責め(水本)	B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)	B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)	B 22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)	B 24	強制鼻挟水香ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)	B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)	B 28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)	B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)	B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)		

B 34	すべてをさらけて(関谷)	B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)	B 37	台上のマゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)	B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)	B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	灸責めに悶える(梨花)	B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)	B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)	B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)	B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)		

は変な目付をされた事もありましたけど、昨今はかえってその方が楽しみなの。お白粉にしてもあれこれと撰んでいる間に、夜自分の部屋に一人きり私の顔に真白に美顔術を施していく自分自身を想像しひどく興奮する事があるのよ。かもち屋を歩き回って髪のを探した時など「奥さんは日本髪を結われることがあるのですか、今頃は支那からくる位で長い髪はほとんどございせんよ。ご承知のうちに、日本は皆さん髪が短いからね」ということでした。「ええちよっと……ネ」などとごまかして買いましたけど、「ずいぶん変な方」とお店の方は思ったことと存じます。女装は拙いのですけど時折はそのままで映画などに出かける事もあるのよ。多くは冬なの。襟巻のようなものが都合よくカムフラージュしてくれるものね。奇クが写真のをせて下さるなら幾枚かお送りして是非のせてほしいんだけど、ネ皆さま。思わず長くなっちゃった大勢のお仲間写真や情報を交換しながら別世界の天国を楽しみましょう。今十二時近くなの、今夜は九時頃に入念にお化粧してそれからずっと長襦袢でいるんですけど髪油や白粉、香水

の臭などあたしは本望なの。今夜はこの姿のまま寝みますの、では皆様、おなつかしいお姉さま方、よろしくね、グッドバイ。(香川 八田岡順子)

虫の音とともに静かに秋がしのび寄って参りましたが、編集部の方々益々活躍の由お喜び申し上げます。度々本誌お送り下され、また私のつたない投稿、通信掲載していただきありがとうございます。貴誌十月号グラビア掲載「新宮明夫様」の夫婦の斬首、さらし首の写真ほんとうにおそれ入りました。グラビアをパラパラとめくって、すぐあの写真が私の目に飛び込んできました。アッ、自分のコレクション写真が載っているかと目をうたがいましたが、どうしてどうして私の写真など足許へも寄れない立派な作品に驚き、奥様の生首を目かくしもしないでズバリと大たんアップで写された作品にはんとうに敬服しました。私も勇気を得て大たん作画して世のマニアの方たちにご批判願いたいと思っております。編集部へ注文しますが、新宮さんでもあれだけの作品をものにしておられるのですから、貴誌専属モデルさんに

原画そのままの鮮烈なニアンス

四馬孝画 “凄絶、妊婦の切腹”

A5判感光紙極鮮明焼付 四枚一組 五〇〇円、略号「せつ4」

“妊婦と切腹” 全く濃艶きわまりないエロチシズムと凄絶なサジズムとが、渾然一体となって迫ってくる素晴らしい重量感。原画そのままの迫力が、ぐっと胸にくる得難い傑作。発表以来申込殺到！この機会を逃すと、千載に悔を残します。分譲中どうぞ！

ご出馬願って何かストーリー物でも手掛けて下されば大変に嬉しいですが……。一番オーソドックスなものでしょうが次のようなものでもいかがでしょう。①ロング囚衣一枚の美女を刑場へ引きたててゆく……。②ミジアム首の座に坐る後ろに首切り役人が刀に打ち水を……。③アップ女の伸ばしきった細首の横に刀がピタリ……。④ミジアム首の座の女首を。前に伸ばす役人、刀を上段に……。⑤アップ女の生首がさらし台に、台上に血のりがあり、横に罪状を書いた立て札野外撮影ならきつとより以上すばらしいでしょう。(水野弘)

奇クを知ってから十年になります。始めて手にしてより魅せられたように毎号買求めています。まず見るのはグラビアです。モデル

嬢の数々のポーズを眺めているとなんだか胸がドキドキしてきます。M傾向の私は自分をモデル嬢に置きかえてマゾの興味をあげわっています。小生以前から女性の方にきびしくいましめられ、折檻をされてみたいという思いを持ちながら、ただ想像するだけにとどまっています。どなたか小生をドレイとして使用して下さる女性の方はありませんか、もしおいでしたらぜひお呼びかけ下さい。人間犬、人間馬として調教されたり縛られてお仕置をうけたり人間便器としてご使用下さい。次に個人的な事で編集部の方にお願ひしたいのですが、まだいつとは分っていませんが近い内に大阪方面へ出かけますので、その際出来ましたら写真の特写をお願いしたいと思ひますがご都合はいかがでしょう

か、特写をお願いするのは私のM傾向を満足させるという点もあります。パートナーの方はどなたでも結構です。くわしいお願いは事前（だいたい一カ月ぐらい前）にお願いするとして、ご承だくだけただけかどうか、誌上にてお返事願います。（名古屋市八服部生）

私は奇ク創刊当時よりの愛読者で現在三十七才になります。少年の頃よりMの傾向が強く、雑誌の縛り絵など見ては自分もあのように縛られたらと興奮を覚えたものでした。それがここ数年来さらに強くなり、最近では年若い美しい女性を見るたびに、一度でもよいからあのような人の手で全裸にされ、身動きも出来ない位手足を緊縛された上、鞭打ち、海老責、肛門責、鼻責、ローソク責、浣腸などされたり、馬になって尻を鞭打たれながら乗りまわされたらどんなにすばらしいかと空想しております。今までもたびたび自ら縛ってみましたが、どうも充分な緊縛感が得られません。徳島附近、阪神方面の女性の方ならBG、未亡人、バーのホステスどなたでも結構です。この哀れな性向を持つ男

を一度使ってみては頂けないでしょうか。ご希望の方がございましたらおたより下さい。ご指定の場所に直ちに参りたいと思います。なおご参考までに私は身長一六二センチ、体重五八キロです。条件といたしましてはお互いの秘密は絶対に守ること、身体に傷をつけないことの二つです。絶対に迷惑はかけませんから勇気を出しておたより下さい。（徳島H・I生）

泉井恭子様、十一月号でのお使い拝見しました。私も遠藤百合子さんの手記や辻村先生のプレイの文に大いに惹きつけられました。貴女も同じ様なプレイを望んでおられる由、しかも真面目で淑やかな方のように思われます。私は東区に勤めている極く温厚なサラリーマンですが一度貴女のような方とは是非真面目で紳士的なプレイをしてみたいとかねがね希んでいたのですが、仲々機会に恵まれず現在に至っております。どうぞこの機会に貴女も私と共にその希望が実現出来るよう、念願致す次第です。つきましてはこの便りをご覧になり次第、すぐに連絡の方法などお書きの上局留にてご投函下さ

い。一日も早くお会い出来る日を楽しみにお待ちしております。（南区心斎橋一ノ一一心斎橋筋郵便局留置、伊藤三郎）

遠藤百合子様、八月号で貴女の通信文を拝読した瞬間長らく求めていた理想の女性にやっとめぐり逢えた思いで、暫らくは胸の高鳴りを抑えることが出来ませんでした。早速お便りをしてお会いしたい思いに駆られながらも、何分初めてのこととて仲々筆を執る勇気も出ない儘悶々の日を送る内に十月号で貴女に関する記事を拝見して益々貴女の良さに心惹かれ遂に勇を鼓して茲にお便りする次第です。小生は市内に勤める極く真面目なサラリーマンにてもう数年来の奇クファンですが一度良心的な同好の女性とプレイをしたいと秘かに願っております。内気故に今日まで延々になっておりましてが是非お会いして色々お話ししたいと思っておりますのでご連絡下さい。宛先は南区心斎橋一ノ一一、心斎橋筋郵便局止にて簡単に結構です。奇ク発売日より三、四日位の間に出して貰えれば結構です。（伊達三郎）

「奇ク」毎号拝見。10月号の新宮氏の斬首とさらし首は、生首マニアの小生を喜ばせてくれました。全裸の女身に僅かに前に垂れた小布のみの姿は迫真力があります。終戦時、ハルピンでソ連兵や満人によって見世物的に斬首された日本若い女性達は全裸か、この写真よりも小さな紙片を張つけられただけだったと聞いております。さらし首は、鼻と唇の端から血を出した方が良いと思います。次に斬り落される瞬間の首の支えにはもう一工夫あるとよかったです。あれでは斬口に無理が出て、スパッとした凄絶な女性の生首を想像できません。斬首は趣向によって、ずいぶん面白い写真が出来ると思います。野外の荒むしろ、浅く掘った穴、その穴には既に血潮が染みつき、二つ位生首がころがっており、（これはトリックで可能のはず）荒むしろの上に長い黒髪の女性が目かくしで首を差しのべ、刀を振り上げています。この場合、女性を全裸にして青竜刀にするのもよいでしょう。ハルピンでは、生首を竹の先に指し、地面に突き立て、首のない胴体の両股を大きく開いたままでさらしものにしたたり、通州事件の時は逆大

字に吊して、股間に棒を突きさし生首を棒の先に据えてあった死体もあつたそうですが、これはとても再現できません。三宝にのせた姫君の生首、大皿にのせた美女の生首、いずれも、血にまみれた生々しいのを撮っていただけませんか。それから梨花嬢をモデルにして中国の清朝末期、あるいは戦争中の女スパイ、特務機関に勤務した女の死刑である乳房斬りを願います。構想は処刑台の前にシュミーズ一枚で縛られて引出される。次に全裸にされて大字に立てた台に縛る。(手首、二ノ腕、足首、膝の四カ所)次に片方の耳を支那の肉切包丁で切落す。(これはアップで包丁にトリックをし、髪をつかんで顔を引起す)次に両方の耳を削ぎ落され、ぐったりした全形(これはやや遠くから全身を撮った方が効果的)次に肉切包丁でザックリと乳房の半分程削ぐ、顔をのけぞらせ失神寸前の効果を出す。乳房の斬口からベツトリと血を噴き出させる。これは残酷調であるが梨花嬢ならばきつとムードが出せるのではないのでしょうか。首棚に並べられた女の生首。三つ位、長い黒髪の時代調のものも欲しいところです。それから落城の

中で捕えられた女性の生胴様し斬りも企画して下さい。(1)先ず着衣の捕えられた数人の女達。(2)全裸にされて土壇の上に大の字(仰向き)の場合は目かくし)にすえられた一人の女。側の立木に同じく半裸で縛られた女。手首を縛られて枝から吊下げられた全裸の女の乳房に鎗が突きさされて息絶えている場面。(これは鎗のトリックをつかい、腹にも一突きされた跡をつける。足の膝を地に近く垂れさがった感じを出す)(3)生胴に刀が振りおろされる瞬間。(4)地面に切り落された首。これは大写真。(これは、地面に穴を掘って身体を入れ、首の部分を切りぬいた板をあてがい、その上に砂をまけば可能。そして別人の身体の一部を入れて迫真力を出す)数人の女性モデルを使うので難しいと思います。が、実現して下さい。(市川市八MT生V)

誌友の皆様お元気でいらっしやいますか。女だてらについてこのようなお便りを差上げてよろしいかしら。KK誌を拝見させて頂き女の角力についてのご意見が度々のせられておりますので、一筆走らせます。わたくしは本当に紺や黒

のまわしを五本ほど作りまして週一、二度締め込みます。以前の欄に二、三の女のかたから、そのような事をお寄せになっておりますが、真実でございました。わたくしは数年まえから、ふとしたことで男の方の六尺をパンティ代りに締めた事がございます。よく緊迫感に魅惑されてといわれますが、男性の方の想像からそのようにおっしゃるのではないのでしょうか。わたくしのは性錯倒から生れたものの様でございます。わたくし達女性自身の中には、自分を男性として現そうとする気持が働かせることがございます。この場合男性の中心的なものを六尺を締めて満足するのでございます。勿論緊迫感もございます。それから男性のたくましさをも兼ね備えたいと思うようになりました。こんな気持から角力のまわしに移ったのでございます。まわしを締め込み四股をふんだり仕切りの真似をいたしますと、わたくし自身大鵬や柏戸になった様な気持になります。わたくしはこの様な真似をする時でもブラジャーを付けております。胸が出てゐる事はお角力さんの格好ではないからでございます。まわしを締め込んだ時はど

なたか、お相手していただけたらと思ひますが、実際にはとても望めそうにありません。ではこの辺で失礼させていただきます。(栗原直子)

「風の町から」という手記をのせて戴いたことのある山辺まゆみでございませう。全国の読者の皆様、お元気でいらっしやいますか。現在、まゆみは失職中。あの手記を発表してから三カ月ばかりで、B G生活にさような致しました。その後まゆみの特異な性癖はできるだけおさえ、お友だちとの交渉もひかえておりましたが、またぞろお便りしたくなつて通信いたしました。昨年の通信欄に山へさそつて、まゆみを立木に縛りつけるとおっしゃった方、如何お暮らしてでしょうか。さぞ素晴らしいことと空想いたしました。が、お病なまゆみには、その実行の勇氣が出ませんでした。また高田の馬場で待合わせ下さるはずだった同性の方、まゆみは出向きましたが、それらしい方は見えず、がっかりいたしました。その後、私と秘かなプレイを楽しんで下さる同性の方を求めております。まゆみは決して乱暴いたしません。優雅なS

〔新版〕女体悦虐フオト七十選

Z組七十集

大手札印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z Z

逆手足吊り
おへソケなぶり
ハリツケなぶり
無茶な猿ぐつわ
裸身の字の足指
くしの喰込む白縄
肌烈荒縄むし白縄
強縄高縄むし白縄
黒髪いじめ態
足吊りの媚態
黒髪いじめ態
豊満な肌の被虐
全裸後手縛り
引き回し縛り
ザリガニ縛り
淫らな責め
豊臀への責め
ローソクゼメ

(竹野)(大塚)(梨花)(前本)(桜井)(東浦)(四花)(絹川)(大塚)(加茂)(東浦)(梨花)(愛川)(絹川)(東浦)

Z Z

苦悶に喘ぐ柔肌
鏡に映す裸像
浣腸責め拷問
荒縄竹棒拷問
ワ女好き物ゴム
彼女の好むゴム
厳立エビ責め
尻立エビ責め
巻煙草の味
首縄柱の妙イ
猿ぐつわの味
寝室でのプレイ
手枷足枷の状況
悦虐責め状態
鼻孔加虐しめ
首絞め責め
閨縛の女体飾り
足の裏の痴態
ベッ裸の老責め
全裸の痴責め
火箸の老責め
恐怖の房責め
仰向きの瞬間
美肌の鼻いじめ

(大山)(大塚)(梨花)(花本)(竹野)(東浦)(桜井)(大塚)(絹川)(四花)(梨花)(若原)(大塚)(竹野)(大塚)(絹川)(熱海)(梨花)(若原)(加茂)(絹川)

Z Z

恥しさに耐えて
亀甲縛り
強要する乳房
強要する乳房
白肌露出全裸
女大恥態全裸
縄の形責め全裸
ゴムの重さ感責め
胴の逆エビ責め
オの股間縛り
全裸の緊縛像
檻の緊縛像
セの緊縛像
鏡の中の裸身
痛めつけられ
被虐の果て
庭園の酷置景
荒縄逆吊り縛り
全裸逆吊り縛り
欄間の逆吊り縛り
全裸逆吊り縛り
逆十字の逆吊り縛り
酔後の緊縛

(愛川)(梨花)(愛川)(絹川)(田中)(梨花)(竹野)(桜井)(田中)(絹川)(愛川)(梨花)(愛川)(大塚)(大塚)(館)(梨花)(絹川)(東浦)(大塚)(絹川)

Mとでもいう言葉があったら、多分それに合致するようなプレイができるかと存じます。まゆみは乳房ならどう責められても我慢いたします。どうぞ誌上を通じて、お呼びかけ下さいませ。男性の方とのプレイは、手記に書きましました通り恥ずかしさを感じて敬遠しておりますが、もし今度実行するとしたら、Sに廻りいじめ抜く方に廻りたいと存じます。ただ秘密主義を

守って慎重にお友だちを選びたいと存じますが……。その内また、手記を発表したいと思っております。二、三の同好の人たちと会を作りたい意向を持っておりますがご希望の同性の方はいらっしゃいません。目下女性はまだ一人のみです。お便りをお待ちします。(東京都北多摩郡八山辺まゆみ)

はじめはお便り致します。私は二十才になる主婦ですが、結婚してまだ一年となりませんが、結婚まもなく主人がどこからともなく「奇ク」を買って来ました。私は恐る恐る写真を見た時でした。私は体中がカッと頭が芯まで血が昇り、私は「奇ク」にすがり付いて一生懸命次から次へ、またくりかえしくりかえし読みました。主人は私が読んでいる間中、じっ

と私を見つめていました。主人はその時より私のマゾ性を見ぬいたのです。私は「奇ク」をあます所なく読みました。それ以来私は「奇ク」のとりこになってしまいました。毎週金曜日が主人に仕える日なのです。この日の事を、私達(「奇クの日」と呼んでいます。主人はとても良い人なので私は幸福でたまりません。この幸福をどなたかに味わって上げたいと

思います。自分一人ではとてもとでももったいない位なのです。私と同年配の女性の方ならどなたでもかまいません、きつと良い友達になれると思います。若い主人と思う存分プレイしましょうね。勝手な事ばかり書きましたが、もしその気のおありの方は「奇ク」発売日から、毎週土曜日に、新宿コマ劇場前へ左手に黄色のハンカチを持っておいで下さい。私か主人が四時から十五分位待っています。「コマ劇場ですか」と声をかけ致しますから、「いいえちがいます」とお答え下されば良くわかるのではないかと思います。つたない文章ですが、きつと読者通信にのせて下さいませ、そうでないと私は主人より大変きついおしかりをうけるのです。なぜならばこれが主人の命令なのですから。(東京京八マゾの女より)

私は二十一才になるBGでございます。町の古書店でふと昨年の一月号をみかけ、本当におどろいてしまいました。わたしの心の中のものやもとしたもの、それを見たあなたにふつとんでしまったかのように思えました。とくに竹野ひろ子さんの「カパーガールひ

ろ子」「ビニールの機密室」の終態にはわたし、しばしみとれていました。男性にもてあそばれてるひろ子さん。ビニールの袋に入られ、持ちあげられているひろ子さん。ふとんの上に放置されているひろ子さん。それでいてうっとりとして恍惚としていらっしゃるひろ子さん。ほんとうにすばらしいわ。わたしの求めていたのも、やはりひろ子さんのようにもてあそばれたらいいことでしたのね。そういえば、わたし子供の頃から映画の中のヒロインが悪者にとらえられて監禁されているが、最後には救出されるなんていう筋の映画に心ひかれ、うっとりとしてみていたことがよくありました。ああわたしもあのヒロインのようになりたいって、でもその頃にはまだ縛られてモテあそばれたいなんてはつきり思いませんでした。一月号を拝見しましてはつきりとそう感じました。すてきな男性にアパートの一室に閉じ込められて、しばられたあげくさんさんもてあそばれたいと思います。お乳を、背中を、お尻をマッサージされたり、足の裏をくすぐられたいと思います。それからお顔の中のとんとすましたお鼻をもみく

新版A組二十集

大手札印画紙(9×13種) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円

- A 1 フミツケ縛り(新井マリ子)
- A 2 手吊り乳房責(五月亜紀子)
- A 3 ハリツケ猿轡(新井マリ子)
- A 4 全裸柱しばり(遠藤百合子)
- A 5 亀甲乳房緊縛(遠藤百合子)
- A 6 全裸手吊り像(遠藤百合子)
- A 7 豊満乳房虐め(遠藤百合子)

- A 8 乳房股間縛り(遠藤百合子)
- A 9 鼻梁いたぶり(遠藤百合子)
- A 10 全裸後手縛り(遠藤百合子)
- A 11 膨隆臀部さらし(長野良子)
- A 12 全裸正面緊縛(長野良子)
- A 13 うねる緊縛裸身(長野良子)
- A 14 色禪開股しばり(長野良子)
- A 15 正面蛙股ひらき(長野良子)
- A 16 裸自慢縛り姿体(長野良子)
- A 17 正面アグラ縛り(長野良子)
- A 18 正面大の午開股(長野良子)
- A 19 遅ましき裸緊縛(長野良子)
- A 20 荒縄豆絞リ猿轡(大塚啓子)

ちゃにされたり、耳を引かれたり口の中に指を入れられたりしたい。そのあげくに、いやがるわたしに浣腸をしてしばって放っておかれたいなんて思います。被虐の思はつるばかりですが、父母もあり、兄妹もありますし、とても悩んでいます。どなたか本当にまじめる方で、私をなぐさめてくださる方はいらっしゃいませんか。本当に誠実な方とまじめる交際をして、プレイをしていただきたいと思ひます。よろしくお願い致します。(明石市八伊東恵子)

前略いろいろお世話になっていながらお礼の便りも出さず、編集

部お一同様にはお変わりありませんか、遅ればせながらご挨拶申し上げます。貴誌を愛読して三年内容も流れと共に大変楽しい本になってきた事を心から嬉しく思います。また貴誌を通じてファンの方々もお接いして話も進み、私も非常に感謝しております。女相撲ファンの多くを数えた事でも今後が楽しみです。今、お便りしたのは、外の物が数多く分譲発売されているのに、女相撲の取組のないのは残念です。僅かに相撲締込みのみで、(十月号の雪崎先生の写真は嬉しく二冊買いました)女相撲ファンの求めるものは取組にあり紺または黒の褌をキリリと締め

「サガリ」をつけて、本格的に迫力ある取組を求めているんじゃないでしょうか。それも自由に取組んだところを写してみたら、見た眼に迫力があると思います。それが本誌ファンに求めている女相撲の良さだと私は申し上げます。もう一つグラビア頁ですが、墨絵の線は特に輝の部分には「ハッキリ」と表現して戴きたいと思います。今月号（十一月号）ややその感がうすれてます。勝手ながら我儘をおゆるし下さい。より以上に貴誌の毎月号を楽しみに作者の方々編集の皆様のご健康を祈りペンを置きます。（間和志男）

○ いつも読者通信にゴム同好者、特にメンスバンド・マニヤの記事が掲載され楽しく読んでいます。特に最近の大西良子様のお便りには女性にも同好の方がおられる由嬉しく存じました。私も現在、毎日十枚ほどのバンドを取替えながら着用しています。はじめは極くありきたりの黒メリヤスの生ゴムの替ゴムのものでしたが、このころではビクトリヤ月経帯の総ゴムコルセット型や、フレンド生理帯のカトレヤ号（ビキニ型）、ブルースバンドのスキヤンティ型など

あるいは時々にはパンネットにアンテナプキンなど軽快なものも使っています。新型が発売されるとすぐ薬局で買求めます。そのときは胸がドキドキしますが、なるべく気立てのよさそうな奥さんが店番をしている店で買います。特に買物のときには、脱脂綿を分厚く、バンドもピッタリしたものをはき私自身がメンス中になった積りて店にはいり、「メンスバンドっていうものありますか」とききます。すると大抵一寸びっくりした風に「え、バンドですね、どなたがお使いになるのですか、奥様ですか」などいいながら「生地はナイロン、メリヤスなどいろいろありますが」などと、四、五枚箱から出して広げてくれます。私は「さあ、何でも出来るだけ可愛いのがいいとかいってました。ワイフは今やすんでいるのですが、明日婦人科の病院に行くので、見られてもいいようなのが欲しいのです」「そんならこれは如何ですか」と、レースパンティのグレース・スパークリング・バンドを薬局の女主人は白衣の上から自身の前にあてがって見せてくれます。私は赤くなりながら、「出血が多い方なので、当てゴムがしっかり

しているのがほしい」といってましたが大丈夫でしょうか」というと「そうですね、それはお困りですね、パットを二枚使っていたらどうかさばりますからね。またお寝みのかきなどは、バンドの上におしめカバーをなさると宜しいですよ」とニシキゴムのおしめカバーまで見せてくれました。私は勇気を出して、バンドを裏返して替ゴムの構造を質問したり、いろいろ特長をきいたり、少しでも長く会話をたのしみ、グレースバンドとおしめカバーと、新発売のグレース・アンネを買いました。すると「これはサービスです。お大事にでもこんなお使いは大変ですね」など一寸どきりとするようなことをいいながら、メンスパットを無料くれました。そのときなど冷汗びっしょりで、バンドの中は汗でベトベトになってしまいました。こんな風にして時々買物を楽しんだり、婦人便所のカンの中の経血のついたカット綿を鑑賞したりして、毎日「生理日」を送っています。分譲フォトにはバンド着用がいろいろあるようですが、入手にくいので一枚でもいいですから梨花さんの着用グラビヤをお願いします。一度大西様とお会い

してバンドの交換をしていただけたら幸福です（東京八長島生）

○

十一月号は全く嬉しく、楽しくよませていただきました。前川様には早速ながら生首絵を寄せられ楽しい限りでした。前川様ご自身でも自信あり気な生首の生血を啜る女武者の図には全くグッとくるものがありました。討ち取った相手の女の生首の斬り口に朱唇をあてて生血を吸う女の図は私も久しい以前からのあこがれでした。断末魔の苦悶の表情そのままの女の生首の髪を引擱んで、それも一つではなく二つもぶらさげている若い娘（多分姫君と私は思います）の勝ち誇った表情の絵も全く嬉しい限りで、優雅な女性がいざというときになす無惨無常さ、倒錯的な美しさを表わしてあまりありません。私も絵心があればよいのですがそれが残念至極です。この次は出来ませうばやはり私の好みであるふんどし一つの女のそれをお願いいたします。それも全身像で相手の首のない屍も是非足下に描いておいて下さい。私も何か物語り風なものをまとめたたいのですが、前にも申し上げた事情故一寸目途がつきませんことをおわび

します。しかし通信欄を通して思いつくままのイメージ、アイデアは提供したく存じます。本月号はその他にも佐出様の「十三人の女死刑囚」にも全く喝采を贈りたく思います。京洛生の「大奥裸女血斗」以来の美女の血汐でつづられた無惨絵模様の秀作と感じました。後半の八人の美女血斗で次々と美女が血祭りにあげられ、身首を異にする情景は血汐の香りが誌面から漂ってくる思いです。是非これらの情景を組絵にでもしてほしいものです。中屋敷様の「女が斬られる時」も嬉しいものでした。躍動する女性が斬られ、断末の悲鳴と共にのけぞる瞬間こと切れて冷い屍となって地上に横たわるまでの動きの美は私も同様にある。これが対象の一つです。それも時代物のそれにあてがれていることは私とても同じですが、ただ一つ変っていることは何度か申しますように、ふんどしをしめただけの裸体のそれに異常にあてがれているのです。これは室井様とても同様のことと存じます。それから私のあてがれとしては、これらのふんどし一つの女達の屍が累々と横たわっている中に更に血斗が続けられているという風な絵です。

その点からいえば、「大奥裸女血斗」の本格的な絵画化を切望しております。血斗数刻、美を極めた大奥の庭園はふんどし一つの奥女中達の血みどろな争いで、すでに血の海となり裸女の屍は庭のほとんどを埋め、ところどころにはふんどし一つの裸女の屍の山が築かれ、泉水にもこと切れた裸女が黒髪を水藻のごとく漂わせて、唐紅に変じた水の中に屍を浮べ、上半身は水の中へ突込んで逆立ちになり岸辺にこと切れているものなどそれらの屍を踏みこえてなお生き残った裸女は血に狂ったようにわたり合っています。血飛沫と共にのけぞるもの、斬り取った生首から生血を啜る者（和風サロメ）双方共に力つきて果てんとするもの累々たる屍の中には首を斬られているもの、またそれらの生首がごろごろとところがつているものも数個見受けられます。また斬り取った生首を、その黒髪で己のふんどしからぶらさげて新たな相手とわたり合っているものなど、考えられ得る裸女血斗のあらゆる姿を一枚の絵にもりこんでいただけばこれほど楽しいものはないでしょう。公開出来なければ、分譲品の中へ加えて下さればよいでしょう。

（今月の新版分譲品）

自己愛の女神、長野良子

臨時増刊号のグラビヤにて初めて登場して、満天下ファンの絶讃を博した美人モデル長野良子嬢のとおきおきの緊縛ポーズを特にマニヤの方にごらんにいます。

全裸脚拳姿態

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 長野良子
略号 (てい)

可愛い容顔と初々しい肢体の持主でありながら、齡に似合わない大胆さで自己愛を満足させる露出癖の長野良子嬢が肉づきのよい脚を挙げて緊縛の肢体をくねらし、自慢の全身をレンズの前にさらけ出したとおきおきの三葉。

全裸アグラ縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 長野良子
略号 (てへ)

これこそ露出癖の長野良子ならではの大胆きわまりないポーズ。後手高手小手で両手の自由のきかぬ彼女が、自ら逞ましい両足をアグラにしてポーズをとった他のモデル嬢では見られないフォト。

全裸屈伸縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 長野良子
略号 (てほ)

巨大な乳房、逞ましきヒップ、膨満した腹部、白い脂肪のかたまりのような長野良子の美しい縛りめが全身が、その裸身が異性の前に誇るように投げだされた涎の垂れるような素晴らしい迫力に満ち満ちたポリウム自慢のフォト。

六尺禪の変形姿態

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 長野良子
略号 (てに)

きりりと締め込んだ白晒フンドシのよく似合う豊満な肉体が、フンドシこそ、露出癖を満足させるのには、恰好の小道具だとばかり脚を伸ばし身体をそらし、さまざまの姿態をくりひろげる長野良子の六尺フンドシ変形ポーズ。

蹲踞と拍手

大手札 二枚一組 二〇〇円
モデル 長野良子
略号 (てり)

六尺禪を締めた良子が、相撲の仕切りの時にするように蹲踞の姿勢で両股を真一文字に開いて正面

う。「大奥裸女血斗の果て」が発表された一昨年の十一月号といい、また今年の十一月号といい、全く近來になく異様な興奮を久しぶりに味わいました。他にもマニアの方々も多くおられること故、この種の分野の開拓がすすめられることを望んでやみません。芳年の無惨絵に劣らぬ血肉の香り高い作品の出現を待っています。その中に私も何かの形でイメージをまとめてみたいと思います。前川様、室井様、佐出様、中屋敷様へその後のお便りを待ちます。(女斗彦)

妾の不格好な妊娠ヌードを奇くの愛読者の皆様にお目にかけはすかしさと、こうふんに身も染まる想いです。夫に嫁いで六年、ノーマルだった妾は今日では完全にアブノーマルな飼いなされたため犬同様な生活を送っております。夫のいう事にいいわけは出来ません。いいえ、いう事すら考えない服従の心にならされてしまいました。家の反対を押して同棲した時から、夏はシュミーズとワンピースだけ、冬はセーターとスカートだけ、その他の物は一切禁じられました。冬なぞ腰が冷えますので、何かつけさせてと頼んだ事も

ありましたが、あとの仕置がこわいので、そのままの生活が五年続きました。冷えたためか子供に恵まれずにおりましたが、六年目に初めて身ごもって皆様にヌードをお目にかけられた次第です。夫の私に求めるのは露出とムチ打ですが、初めの内肌にアワ立つ程だった妾も今は毎日の様な夫のせめを心待ちにするほどになりました。この記をしるす二日前に温泉でよく売られてるマタタビ漬のビンの中の水を身体全体にぬられて庭にさらされました。猫が寄ってきてなめたりかんだりしましたので、恐れに気を失ってしまいました。皆様私の妊娠ヌードをぜひごらん下さい。そして私をさげすんで下さい。ヌードに使用したパンティも普通は使用出来ません(夫との約束で)のでどなたか欲しい方にお分けいたしてもと思っております。色はみどりです。同性の方でヌードとむち打にきようみのある方同好の会なぞ作りたく思います。編集部を通じてお便り下さい。(安原さゆり)

砂、黒、塩、気、帯一つ一つの物体が直ぐメトミを連想するに至った私の境地はメトミ一辺倒だ。

を向いたところと、同じ姿でカシワ手を打っているところの二態。

鬼面と接吻する

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 長野良子
略号(てち)

鬼の面にキッスする全裸の美女の立像。妖奇と裸美のかもしれない出するあやしい雰囲気の写真面いっぱいひろがった、アブ好みと自称する長野良子が、自らすすんで演じたアイデア。正面向いたあどけない顔と、異様なばかりに美しい起伏を見せた正面裸身が素晴らしい。

強烈エビ責め

大手札 三組一組 三〇〇円

モデル 松本アサ子
略号(まと)

「臨時増刊号」に初めて登場した愛読者のモデル志願者が自己のマゾ性を満足させるために、すすんで最も強烈な縛りを要求したカメラの前に晒した全裸エビ責めのポーズ。両足先が顎近くまで折り曲ったこのエビ縛りは、時間が経つに従って、苦痛が増してくる。全身脂汗を流して耐えるシーン。

裸身に羞らう

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 松本アサ子
略号(まつ)

誌面のグラビヤでは、あからさまに顔を出すことをためらっていた松本アサ子嬢も分譲写真となれば、そのためらいもかなぐりすて、大胆なポーズで顔を正面むけて、マニヤの方たちを凝視してやまないマゾ性の発揮の一場面。

女賊捕縛

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子
略号(へい)

白晒のフンドシ、胸高にしめた腹巻、白鞆の短刀を落ち差しに、頬かむりをした女賊が、捕えられてきりきりと後手高手小手に縛られ、柱に括りつけられて逃げようともがく有様。

女賊処刑

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子
略号(へは)

捕えられた女賊は、逃れんとし、でも、その術なく観念してうなだれ処刑の辞をきく。自ら持った短刀は男の手に抜きはなたれ、ドキドキとする抜身が女の首筋に当たられ、今まさに振り下されようとする緊迫した一瞬。

この素晴らしい躍動的、斗争的、心美的、行動がすべての人間に開門されれば世の中は花園と化す事だろう。私は日夜この幻想の実現を宿願しこの契機となるものにKK誌を挙げるのに躊躇しない者だ。KK誌はメトミが一種の邪道のごとく取扱われるのに遺憾とするがSMもこの真髓に到達するためにはメトミ以外にないと断言してもよい。KK誌の正統派諸氏に一言すればSの裏面はMでありMはまたSに通ずるが、両者は最初からSMを仮定として設定し行動化する事自体この前提に誤りを犯している。SMの決定は斗争から生まれ力と力の関係から発生する所に最大の根拠があるのであってこれを度外視する事は本末顛倒だ。斗争による動的变化、強烈な肉体的試練から精神的動向SMの心境に導入されるのだ。そしてこの形式が日本の歴史的過程から洞察すれば砂、塩、水、黒の綜合所作としてのメトミとしてのクローズアップされるのだ。現代社会は如何なる行動もルールなしに許容されずSM的表現が社会的妥当性を樹立し得る根拠とみてよい。すべからずSMを正道とする諸代の開明と協力を要請しメトミの大衆化への

指針としたい。(東京都八松本文彦)

○ この頃の奇譚クラブは毎月号に女相撲の記事が出してくるのでありがたい。僕は二年前高校を卒業してから就職して東京に出たが群馬の高校時代には秋と春に女相撲舞踊団というのが劇場にかかって、土俵入りや取り組や踊があった。女が相撲をとるというので見に行ったらが僕の趣味と合っていたので何時も見に行った。東京に出れば都会だから何時も見れると思ったが一度もそんな一団にぶつかった事がなかったので残念に思っていたら奇譚クラブに女相撲が出ているので愛読者になった。僕が思うのは女相撲の記事は何時も昔の話ばかりで最近の女相撲の事が出ていないのがっかりするし、買っても二、三頁だから二百円出すのもおしいんだがついファンだから買ってしまふんです。女をしばったり切腹の絵やわけの解らない物ばかりでいやだが女相撲がほかの雑誌にないから買うのです。読者通信でも特集号の発行や写真のせてくれという投書がたくさんあるから編集の人もどんととり入れて下さい。僕は女相撲なら

別に取締りも受ける雑誌にもならないと思うし、健康なスポーツとして本当に楽しい雑誌にしてほしい。また僕が見た女相撲舞踊団も輝ではなくってブラジャーとパンティの上になまわしをしていたがそれでもいいと思った。ストリップとちがうんだから六月号の女相撲雑感には賛成だ。いろいろ書いたがよろしく願います。(東京都墨田区八内海秀明)

○ 女相撲ファンの皆様ご元気のことと存じます。女相撲ファンにとって「奇ク」の一篇の読物、一片の画を求めるために二百五十円という金額は高いといえは高いものと思いますし、発刊物の中でこのような特殊記事や画を掲載しているものがない現在、容易に手に入ることを考えればこれまた安いものといえましょう。通信欄を拝見し女斗美特集号などの希望の多いのは当然だと思えます。また特殊な趣向だけにその発刊が困難であることもよく判ります。しかし既に誰か通信欄でも指摘されたように分譲フォトなどの発売によることを希望するのはそれほど一方的お願いでもないと思えます。編集部各位のご覧察を願いたいものと

切望致します。津谷正春氏、室生英山氏、一度お便り下さい。同好の者としてお役に立つこともあると存じます。今年はじめの頃、通信欄に同好の方々と文通をお願いしたところ、数多くの友を得て大変楽しく思いますが、同好の方の増えることはこの上もなく喜ばしく存じます。女相撲ファンの方是非お便り下さい。住所は「奇ク」三十八年二月号の通信欄の通りです。ではよろしくお願い致します。(東京八岡平吉夫)

○ 岡山県下のS同好者諸君のご健在を祝福します。われわれS同好の者の最も楽しい奇クが毎月発展して行く有様は、ご同慶の至りです。ただ私は何時も考えるのがわれわれは想像の中でのみ楽しんでいる事で満足しなければならぬ現実には不満を感じています。本当のSプレイ同好者が連絡し合い相手を何処までも紳士的に取扱って行くならば必ずや相手になっ

ている四十三才の者です。もしSの相手になって頂ける女性がおられましたら一度ご面談させて頂き充分納得し合って一度プレイを楽しんでみたいと思います。決して他人に解るような方法はとりません。もし、ご希望の女性がおられましたら必ずご連絡をお願いいたします。また職業的にこうしたSの相手になりたいといわれる方でもお会いしたいものです。住所、氏名は編集部にあります。心からご連絡をお待ちしております。(岡山市内八早川敏男)

私はKK誌を愛読している三十才の内気なM男性です。今回勇気を得てはじめてお便り致します。一度でもいいから中年までの女性の方にいじめてもらいたいです。私は中学生の頃より女性の和服及び下着類にあこがれをもっており、それを私が着用して身体を身動きが出来ないくらいに強く縛られて貴女の汚れたパンティなどで猿ぐつわをされて顔の上に馬乗りされたり鞭で打たれたり、または私の身体を便器の代りにされ

て貴女の思うままにして貴女の満足のゆくように責めて下さい。お互のため秘密は厳守致します。S女性の方のお便りをお待ち致しております。住所、氏名は編集部の方へお聞き下されば教えて下さると思います。お便りは編集部より回送をお願い致しておきます。(愛知AMS生)

新米のKKファンです。現在T・Bのため入院中、毎月のKK発売日を楽しみにしております。以前「Mut su」なる名前にて、

下手な絵を送った者といえは編集部の方、あるいはご記憶にあるかと思ひます。貴誌の感想としましては、写真は大変素晴らしく、小生の最も楽しみにしている頁です。モデルの方では第一に関谷富佐子氏の大ファンです。写真に比して絵の方はもう少し何とかならないものでしょうか？あまりにも貧弱極まると思ひます。記事としては「宇宙のどこかで」大変面白く、また書き方がリアルでドキドキしてきます。特に十月号一四一ページ下、一四三頁下、十三行目以後

四馬孝画 大好評！ 注文殺到の傑作責画

美処女羞恥責「悦虐絵巻」

△美しき嗜虐の生贄▽

A5判感光紙極鮮明焼付 五枚一組 五〇〇円 略号(えつ5)

【第一図】——淫辱全裸の仕置にされる捕われの令嬢

豊麗花を欺く深窓の令嬢雪絵は嗜虐的な秘密ショウの手先であるズベ公の一味に捕えられ、地下の拷問部屋で全裸にむかれて、三角木馬にまたがせられようとする。クラブのボス香蘭は、雪絵をショ

ーのスターとして仕込もうと決心する。

【第二図】——排泄強要の飽くな

き淫婦の奸計 絶世の美処女雪絵は、ズベ公達によってヤカンから無理矢理、多量の塩水を飲まされ、奇妙なおむつカバーを穿かされて地下室の拷

問椅子に見るもむざんな開股のポーズで縛りつけられる。雪絵の真白なお腹が、ぶっくり膨らんでいる。

【第三図】——羞辱排泄の哀願に苦悶する生贄令嬢

妊婦のように膨らんだ雪絵のお腹、激しい尿意と戦い必死になつて耐え忍ぶ雪絵。トイレへ行かせて欲しいと、只それだけを願う雪絵は羞恥の余り、遂にペロという一匹の牝犬となつて仕えることを誓わせられ泣きじやくりながら屈伏させられる雪絵。

【第四図】——牝犬ペロの誕生とその調教

哀れなペロにさせられた雪絵は四つ這いのままで部屋中を廻らさ

れ、首輪をつけられ砂の入った小箱の中へ排尿させられる両手両足を大きく開け、高々と持ち上げられた円いお尻の上に水の入ったコップを乗せ口にはおむつカバーをくわえさせられて首輪から太い鎖をひきずりながら這い廻る雪絵。

【第五図】——華々しい羞恥地獄の饗宴

秘密ショウの舞台の中央、まぶしいばかりに成熟した雪白の太ももを左右に開けさせられ、天井から下つている鉄のパイプに両足の首をくくりつけられて雪絵、巨大なイルリガールから尿管が、いまや一滴も余さず浣腸液が注入されている。果してどのような光景が展開するだろうか。

今後のご活躍を、お祈り致しております。入院中のたいくつきを持てあまして、小生は、目下自分だけの時間、絵を書いて過しております。今のところ「宇宙のどこかで」の名場面集といったところ。小生大変な小心者のため決心がつくまでの匿名をおゆるし下さい。なお、また読者の方（または編集部の方でも可）に小生の疑問に解答を与えて下さる方が現れるのをお待ちしております。一、嵌口具をはめたら本当に声（うめき声）のどから出る悲鳴）が防がれるものでしょうか？、二、小説などに（KK以外のも含）逆吊にして何時間、などあるが血行が止ってしまわないか、せいぜい十分位と聞いた事があるが？、三、浣腸などで二千CCなどあるが本当か？人体に危険ではないでしょうか？、四、人体、特に女性で電撃ショックなどは何ボルトまでか？また電流量は？、以上解答は読者通信の頁にて。同封の絵について、一枚は「……調教のため集団訓練所へ行けるコンテナに積込む図」一人の女だけ逃れようとしてもがいている。他の一枚、妊娠した女を標的にしてボーリングと洋弓を

している。女は足と腰でボールや矢を避けなければならない。ではまた読者諸兄のご健闘を……関谷富佐子氏、また素晴らしいポーズをお願い致します。（青森県八六吾朗）

夏も過ぎくらし良い気候となりました。僕も読者の一人として五年ほど奇クを読んでおります。読者の皆さんよろしく、今度初めて？お便り致します。（実は前にも二度ばかりボツになって誌上にのりません。今度もボツかな）僕は三河地方に住んでおりますMS両刀です。名古屋周辺及び西、東三河の人お友達になつて下さい。男女、年令を問いません。十月号「SMプレイガール」の遠藤百合子さんのような女性に会える編集者の人々がうらやましい。僕は思うことはほとんど実行して行くたちですが、プレイにかんしてはお手上げです。これだけはどうにもしかたありません。僕は思うのです「奇ク」及びA誌、B誌（類似誌）などで十五、二十万部ほど？発行されていると見て、二十万近い人が同好の人々と仮定し、本を知らないでいる同好者が五倍、十倍はいるものと思う。そうかぞ

えてくると莫大な仲間が全国にいることになる。それぞれ人により趣向は違っても我々の仲間です。この中から一人のプレイ相手も見つけ出すことが出来ないとは、あなさけないことです。誰れか僕のプレイ相手になつて下さい。僕は多趣味ですから、どのようなプレイにも応じられると思います。切腹、浣腸、ゴム、女性下着、吊り、責め、汚物、奴隷等々どんな奇想天外のことでもOK呼かけて下さい。（愛知八南利明）

貴誌のフォトは本当に素晴らしい。今度の遠藤百合子嬢もいいですね。分譲フォトは買いたくても買えませんので、なるべく広く本誌にのせて下さい。妊婦フォトを堂々とのせて下さい。また貴誌を読んでいる人は不真面目な人は少ないと思います。大胆な写真をのせて下さい。女の人の禪姿にしても、アグラ姿をしたり、開脚上体を前にかがめて後からその尻にくいこむ禪を鮮明に写してほしい。勝手なお願ひしてすみません。今後の発展を祈ります。（荒川文一）

先日代理部から女体浣腸羞恥場

面図絵決定版（かん1、かん2）を、購入し拝見致しました感想をちよっぴり述べさせて頂きます。第一集、第二集共、どの絵も表情はよく出ていて絵は生きております。特に「お友達にされる浣腸」「オシメカバーと浣腸」「若妻エネマの浣腸」など、秀逸で充分に楽しませて頂きました。ただ惜しむらくはエネマシリンジのゴム管が実物より大分長すぎたり、ガラス製浣腸器、我々浣腸マニアの一番魅力のある先太りの嘴管の部分が棒状であつたり。（これは十月号の口絵、女体浣腸「浣腸された若妻」にもいえます）まことに残念です。四馬孝先生も浣腸だけではなく他の数多くの分野も手がけねばならず無理からぬ事とは思いますが、もう一寸浣腸器あるいは便器などを、リアルに描いて下さればマニアは歓喜する事と思えます。昔から貴誌の浣腸絵画はいろいろと拝見致しましたが、今もって忘れなれない名画に、昭和三十三年十二月号、岩村美智子様の「ナースと浣腸」の挿画。あれはどなたが描かれた物かは分かりませんが、施術者のY先生の真剣なまなざしと被施術者のミッチャんの表情といい全く他の浣腸絵画

の追隨を許しません。あの画を大きく引きのばすとか、あの『表情』を女学生と保健婦さんとかにとり入れる事は出来ないでしょう。あれはケッサク中のケッサクでした。アンコールを望みます。

(大阪市V町田茂雄V)

○ 奇ク御愛読の皆様、お元気でしょうか。私は二十才のBGです。私は時々奇クを拝見しているのですが、生理バンドに興味をおもちの男の人が多いのにおどろいています。私達女性がそれを使用しているのを出来るだけ知られまいとするからでしょうか。

実は私も学生時代にあのゴムの感触にひかれて、ふだんでもバンドをして学校へ行ったこともたびたびありました。近頃はゴムの当たらないバンドもたくさんでておりますが、私はやはりゴムのある方を愛用しています。ゴムのむきだしになっていゝものや、前開きのもの、パンティ型のものなど五枚を交互に使っています。私の好きなのは、前開きになっていゝもので、今でも気がむいたら下着のかわりにすることもございます。学生時代に使っていたものをあわせますと、もう十枚以上になると

思います。捨てるのも忘れて、いたんでいたり、少し汚れていたりしたまま、大事にしまっているのです。もしバンドに興味をおもちの男性が近くにいらっしゃるようでしたら、おゆずりしてもいいと思います。お教えいただきたいと思っています。おかしき事です、思いついてペンをとりましたが、男性の方々のバンドについての御感想などお聞かせいただければ幸甚に存じます。

(兵庫県相生市八岡田京子V)

○ 白川晴夫様、フエチ通信で「私は赤ちゃんになりたい」のお便り楽しく拝見致しました。いろいろ苦心されてオシメ及びオムツカバーを手に入れた心境は十分に理解出来ます。数年前までは全く大人用なんて全然見当らず、薬局で

いても「大人用のオムツカバーですか、ありませんね」とか「大人のオムツカバーですか、そんなのありませんか」なんて、かえって逆襲されたものです。それが今では殆んど薬局で扱っているか、又はとりついでくれるのです。私も始めは或る洋品店でキズ物の子供用のオムツカバーを三十円から百

円程度で投げ売りされたことがありました。それを二枚つぎ合せて使ったことがあります。それから奇クで同好者を知り交換し合ったりして手に入れたり、オムツカバーのメーカーから取り寄せたりして、今では結構楽しめるだけあつめました。然しやはり夢は無限です。同好者といふいろいろと経験した事、コレクション等を語り合ったりしております。本当に楽しい事です。こうした事がイメージのみでなく現実に病院のベッドの上で公然と身にまといて経験しようとは考えておりませんでした。実際面では大いに病気の回復にも役立ったという、皮肉な事実もあつたのです。貴兄にもいろいろと楽しい経験があらうものと存じます。又同好の諸兄姉からのたのしいお便りを心から待っております。

(静岡県清水局止八赤井芝V)

○ 京都市の倉間博様。奇ク37年8月併号の読者通信頁のP一八四にいろいろと男性切腹擬態のプレイ実演をかいとおられました。私も四十二才になる男性で切腹を熱望しています。私の初演は未だ戦前で16才位の中学四年のと

き、丁度白虎隊の映画を見てからでした。当時は戦前ですので教練も徒手体操もパンツ一枚で真冬も春も秋も夏も、男児は全裸でこのような科目をしたのでした。当然のこととして同性愛は盛んに流行し上級生が下級生を相手にしていました。そして男性切腹心中へと発展するのです。同級生とこの白虎隊の映画を見てから、山の中で小刀で臍下を切腹したのが始まりでした。その時は皮切りの割腹でしたので血が少しにじみ出ただけでした。そして十六才の秋の立ち腹でした。一度倉間博様とお互に二十文字切腹のプレイを試してみたいと思います。倉間様は私の臍下を私は倉間様の臍下を介添え割腹したく思います。私も肥満体で体色は女のように全く色白です。両乳も十五、六才位の処女の乳と同じく大で豊満です。臍下も大で妊婦の下腹のようです。ですから私も脂肪質といえるでしょう。昔の小姓を愛した織田信長の如く、高校一年か二年生の美少年と同性愛したく思っております。タタミ二帖を裏がえしにして白布をおおい、タタミの四囲に襦をたて倉間様に見届けてもらって二十文字腹がしてみたいです。この美少年が切腹して

代理部分護品総目録 第六号完成

長らくお待ちいたしましたでしたが、目録の第六号が出来上りましたので、すでにお申込み頂いておりました方へは発送いたしました。この切手封入の上お申込み下さい。

倒れた背中に馬のりになって私も切腹したい。倉間様一度このプレイを共にしてみませんか。もし同好の士があれば、奇巧の読者欄に岡山、西大寺のC・Sという名宛でお返事下さい。(岡山市西大寺△C・S△)

秋冷の候となりました。如何ですか。私共マニアも寄稿やら通信やらで、少しでも斯界の発展を願っている次第であります。こんな折から山梨の「悪書放棄運動」が発生し朝日新聞でも、当誌の名前が他のいかにわしい即セックス誌と同一に指し見られていることがわかりました。不幸にも当誌はその内容上、女の裸体、切腹、責め等が中心のため、あやまって連想されたものと思います。他の読者諸氏も驚かれた事と存じます。これで屈折することなく発表に以前と変らぬ自信とプライドをもつ

てがんばって下さい。(福岡市八神崎生△)

十一月号のグラビヤの写真、特に前川氏の血汐を云々の絵、十三人の女……の内容、正に圧巻でした。扱て願わくば、十二月号の女武者の討死と……の各種にわたる種々相をTLとサインしてある絵かきさんには是非とも書いていただきたく、十三人の……場面とか、女武者の……を書いて頂くことを期待して、毎月毎月書店へ出向く予定です。「生首」の問題でなければ全く興味がありません。くれぐれもお願ひします。(東京八吉原堤住人より△)

最近の貴誌の発展、殊に読者通信欄の充実、愛読者の一人として誠に喜びに堪えません。扱て今日は久方ぶりに読者通信に拙文を載せて貰います。何卒よろしく。

先ず編集部へのお願ひから、最近号に会館建設の御意見が見られましたが、誠に結構なプランでむしろ遅きに失したるうらみがある程です。ゴルフの正会員並みの入会金でも結構ですから、ゆとりのある者が集って是非会館建設を実行に移して頂きたいと思ひます。というのも、最近世間一般の状況からして吾々マニヤの真に欲するようないささか不安を感じる次第です。又、次に会館完成の暁には真にこの道一途に求める真面目な愛読者同志がお互いに身分の保証や良心的な態度等の心配なく、お互いの意見や写真其の他の発表研究も出来且つ又場合によっては、お互いにオープンでプレイができた

りするのではないのでしょうか。又そこから新しいアイデア乃至はグラビヤ写真の発展が出来る可能もあると信じます。よろしく会館建設の第一歩を踏み出されんことを。さて次は、読者通信の中のゴムカバーの好きな大西良子さんに。御寄稿の文拝読、早速大阪より車を飛ばし今迄入手し得なかった大人用ゴムオムツカバー入手いたしました。これも御寄稿のお陰と感謝いたしております。又、八月号の大阪の雨奇男様の御投稿誠に楽しく拝見致しました。小生も又全く貴殿と同じ嗜好のもので、殊に好んでゴムによるサルグツワを家内に致しております。と申しましたも家内は積極的なマゾではありませんが、それが却って小生の刺戟となっており。それでも次第にマンネリに陥り、又自然のなりゆきと同じ傾向の方と夫婦共にプレイ出来たらと、そんな事も望むように相なりました。(然しこれは家内が中々承知しないと思ひますので実現には可成り困難があると存じます)せめて写真でもとってお互いに提供し合うような工合に参りませんか。尚小生は結婚後七年になる四十才(家内は三十才)の男性、世間では所謂真面目と言われる職業のものでございます。最後に八月号の布施の門田様御夫妻様、なんとかお互いに安心して良心的な方法でお仲間に入れて頂く方法はございませんでしょうか。門田様の御寄稿誠に嬉しく且つうらやましく拝見致しました。では後日又投稿させていただきます。(大阪△安立生△)

御誌を読み始めて以来、半年を経過いたしました。号を重ねる

毎に益々感動を覚え毎号を期待を以って迎えています。物の本に依りますと、「履物崇拜癖」という習癖がございしますが、私はそれに該当いたします。然し私の場合は同様女性の履物ならばなんでも好いという事ではなく、例えば下駄靴などには全然関心はございませぬ。私が望むのは、裏がゴムのスリッパか草履に限りますが、最も渴望いたします対象は、昔ながらの「畳表のついた赤い鼻緒のゴムの裏草履」です。このように言いますと、皆様にもご納得を頂ける事と思いますが、殊に昔の学校病院等で上草履によくはかれていたあの薄っぺらなゴム裏草履の事です。(確か今の価格で、百二、三十円位だと思います)以上若い女性に素足にゴム裏草履をはいた姿は私には大なる魅力がございします。殊に私の好む条件をあげますと、一、素足にキッチリとゴム裏草履をはくこと。二、勿論美しい女の人がよろしいが、余り太っていないこと。三、鼻緒とゴム裏とははつきり見えていること。即ち

次号(新年号)は十一月二十五日発売いたします

片方の足は鼻緒に足の指のかかったところが見え、片方の足はゴム裏を見せているといった趣向。但し最近流行している総ゴム製の草履には魅力を感じません。(神奈川県八都原生)

○ 最近の奇譚クラブを読んで私の感じた事を書いてみたいと思います。最近の奇クをみますと相当苦心して作っていることはわかるのですが、なんだか、ネタ切れで行きつく所まで行ってしまった様な感じがします。こういう本は法的にも相当制限されますし、あとからあとから新しいアイデアがあるわけではなく、なかなか大変だと思います。東京では奇クはほかの同系雑誌にくらべ比較的売れている方だと思っています。私も奇クを見るとほかのは見る気がしません。私は奇クの他の雑誌にくらべ一番良い所は「猿轡」が口も鼻もすっぽりおおっていて、その表情がすばらしくよい事、この一言につきると思います。ほかの本もしばってはありますが、こんなすてきな猿轡

はつけていません。初めて奇クを見たときなど、この猿轡のところをパッとひらいて、ハッとおどろき、すぐ買ったことをおぼえています。奇クが一番読者をひきつけているのは、縛りより猿轡だと思います。編集者の方も、たかが猿轡ぐらいと思わないで、もっともいと轡について研究し、すばらしいものを作っていただいたいの思っています。ただ着物をとって縛るだけでは、いつか見なれてつまらなくなります。読者はどんなしほり方か？を見るのではなく、しほられた女が猿轡の下でどんな表情をしているかに一番趣味があるのです。それから私は不思議に思うのですが、これまでずっと奇クを見て来て、いまだにしほられた女の人々がマスクを掛けているのは見た事がありません。マスクだと猿轡の役目は十分しますし、かえって猿轡よりやわらかいムードがあって大変良いと思うのですが、それともマスクはいけないと法的な制限でもあるのでしょうか。それから、これは私の夢ですが、こんな本が出来たらと思います。それは「しほられた女の人々が全部マスクか猿轡をしていること、即ち本一冊が全部マスクか猿轡でうまる

事です。しほられたままの写真が一枚もあってはいけません。」でも、どうやら夢に終りそうです。(東京八田花行夫)

○ 御誌の愛読者で二年來毎月購入しています。私は二十五才の未婚女性です。小さい洋服店で元気に働いております。去年の夏、お友達と海水浴へ行った時です。私はあまり泳げないのに深みに入り相当の海水をザブザブ飲んでおぼれかけ、やっと一人で岸までたどりつき死ぬような苦しい思いをしました。この時他の人達は私がおぼれかかったのを誰も知らず私も恥しいので話さずに一人で松林の方へフラフラ歩いてゆき人影のない所に休みに行きました。私は自分のお腹を見てびっくりしました。相当海水を飲んだのでしょう。普通でも大きめのお腹が水着をはちきれんばかりにせり出ているではありませんか。私は自分の大きなお腹がとてうれしく身ぶるいするほど楽しくなりました。それ以來、御誌に出ている妊婦のことも理解できてきました。自分の大きなお腹を他の方に見て頂きたいと思うのですが、こんな私は普通ではないでしょうか。(佐藤啓子)

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」

○自分はこのような人に言えぬ変った趣向を持つてゐるという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのような奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」

○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御自分の生活のこと、社会一

三、体験

「私はこんな変った体験をしました」

○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄く体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変った体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。

○以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の『特集号』に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思ひ出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分（1冊）二五〇円△送共△
三月分（3冊）七〇〇円△送共△
半年分（6冊）一三〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二五〇円

十二月号

（第十七巻第十三号）
（通刊第一八四号）

昭和三十八年十一月二十日 印刷
昭和三十八年十二月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月二日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。只今、目録作成中ですの出来次第、誌上で広告いたします。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。